
ルスターズ×仮面ライダーディケイド×ウルトラ8兄弟second the final episode

ターザン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プリキュアオールスターズ×仮面ライダーディケイド×ウルトラ8兄弟 second the final episode

【Nコード】

N6306R

【作者名】

ターザン

【あらすじ】

希望、破壊、光・・・この3つの力が世界を救った、その力が再び出会う時、新たな戦いの幕が開く。

プロローグ(前書き)

さて、ついに始まりました、応援よろしくお願いします。

プロローグ

かつて、世界を救った勇者達がいた、希望、破壊、光、その3つの力は離れ離れになった・・・しかし

.....

「.....!？」

桃色を象徴する衣装を身にまとった少女、彼女は夢原のぞみまたの名を伝説の戦士プリキュア・キュアドリーム、彼女の目の前にはなんと仲間であるはずのプリキュア達が仲間同士で戦っていた。

ドリーム「ちよっ・・・みんな!？」

「プリキュア・ツインストリーム!!スプラッシュユ!!」

パイン、サンシャイン「きゃああああ・・・」

ドリーム「そんな・・・みんな止めて!!」

するとローズが言い出した。

ローズ「何言ってるのよ!？」

.....

ある青年がいた、彼は門矢士、またの名を世界の破壊者仮面ライダーディケイド、目の前ではライダー達がライダー同士死闘を繰り広げていた、士はいつの間にか変身していた。

ディケイド「ライダー大戦の世界・・・いや、まさか・・・」

彼は様々な世界を巡っていたせいか、意外と冷静だった。

龍騎「何でライダー同士が戦わなくちゃいけないんだよ!？」

カブト「それが宿命だ、ライダーキック。」

「R i d e r ・ k i c k ! !」

龍騎「ぐわあああああ!？」

クウガ「ディケイド覚悟しろ!！」

仮面ライダークウガがディケイドに攻撃を仕掛けた、ディケイドはそれをかわす。

ディケイド「一体何が起きている?」

クウガは攻撃しながら答えた。

クウガ「忘れたのか!？」

.....

ある男がいた、彼はマドカ・ダイゴ、またの名を古代の光の巨人・ウルトラマンティガ、ダイゴは変身していた。

ティガ（なっ!?!）

目の前にはあらゆる巨人達が争いを繰り広げていた。

タロウ（ストリーム光線！！）

ゼアス（うわああああ・・・）

ティガ（何で・・・何で仲間同士で！？）

するとウルトラマンがティガを後ろから羽交い締めにして答えた。

ウルトラマン（我々の使命を忘れたか！？）

ティガ（ぐっ！！使命！？）

・・・

ローズ「世界を救うために最後の1人まで戦う・・・それがこのプリキュア大戦じゃない！！」

ドリーム「プリキュア・・・大戦！？」

・・・

クウガ「自分達の世界を救うために戦う・・・ライダー大戦を忘れたか！？」

ディケイド「やはりライダー大戦か・・・（だがもうそれは終わつたはずだが、何故？）」

・・・

ウルトラマン（最後に勝ち残った者は光となり世界を救う！！そうしなければ世界は滅ぶ！！それがこのウルトラ大戦だったろ！！）

ティガ（そんな・・・ウルトラ大戦だなんて・・・）

・・・

ローズ「ドリーム、死になさい！！」

クウガ「くらえディケイド！！」

ウルトラマン（とどめだ！！！！）

ドリーム、ディケイド、ティガ（！？）

希望、破壊、光・・・再び3つの力が出会いを果たす。

プリキュアオールスターズ×仮面ライダーディケイド×ウルトラ8
兄弟second the final episode

第1話 希望と破壊と光（前書き）

希望、破壊、光は再会を果たす。

第1話 希望と破壊と光

のぞみ「きゃああ!?!」

のぞみは汗だくになり起き上がった、気づけばパジャマで自分の部屋のベッドにいた。

のぞみ「はあ・・・はあ・・・夢だよな。」

すると外から聞き覚えのある声が響いた。

???「のぞみー!!」

のぞみ「この声、りんちゃん?」

のぞみは時計を見ると時刻は午前9時を回っていた。

のぞみ「今日は土曜日、遊びに行くんだった(汗)！」

のぞみは急いで準備をして外に出た、そこには既に馴染みあるメンバーが揃っていた。

のぞみ「ごめんみんな!!シャワーもしてたから!!」

りん「まったく、いつもこれなんだから!!」

つらら「まあまありんさん。」

こまち「許してあげましょっ?」

かれん「ていうかあなたも寝坊して今来た所じゃない？」

りん「ちよっ！？かれんさん！！」

くるみ「人の事言えないでしょ。」

のぞみ「ひどいよりんちゃん（涙）。」

りん「ああもう！！さつさとナッツハウス行くよ！！」

6人はナッツハウスに向かった。

のぞみ「ねえ、みんな？」

のぞみは一同に問いだした。

のぞみ「私達同士が戦うなんて事・・・無いよね？」

一同は「はあ？」という顔をし笑い出した。

りん「何言ってるの！？そんなの天と地がひっくり返っても無いよ
！！！！」

くるみ「変な夢でも見たんじゃない！？」

のぞみは少し戸惑ったがすぐに笑みを浮かべた。

のぞみ「だよね・・・有り得ないよね！？あはは！！！！ごめんね突
然、じゃあ行こう。」

.....

しばらくしてのぞみ達は途中でコンビニに寄った、そこには人間に擬態したココ、ナッツ、シロップがいた。

うらら「あれ？3人共どうしてここに？」

コージ「ああみんな、いや食事を買いに来たんだ。」

かれん「コンビニで？」

夏「悪いか？」

くるみ「悪くは無いですよ。」

シロー「もうすんだろ？帰ろうぜ。」

のぞみ「私達もナッツハウスに行くからね!!」

コージ「わかってるわかってる。」

.....

その頃、ナッツハウスであるはずの場所に異変が起きていた。

????「何だ、この湖が目の前に広がる別荘みたいな所は、夏海わかるか？」

夏海「わかるわけじゃないですか土君。」

門矢士、光夏海がある世界に来ていた。

夏海「士君、さっき言った夢ってまさか現実に？」

士「さあな？まあ有り得なくはないな。」

すると外から沢山の声が聞こえてきた。

夏海「誰でしょうか？」

士「見てくる。」

.....

一方、ある男2人がナッツハウスの近くまで来ていた。

????「いやあ、またミライに会えるなんて思わなかったよ!!！」

ミライ「僕もですダイゴさん!!！」

ミライがダイゴのいる世界に来ていた、宇宙警備隊の命令を受けたというのだ。。

ダイゴ「その命令って一体？（まさかあの夢に関係が？）」

ミライ「そこまでは伝えられていません、でも・・・あれ？誰かいます。」

ダイゴ「え？誰だろうこんな所に、見てくるよ。」

.....

のぞみ「よおし!! ナッツハウスに一番乗りけっぺい!!」

のぞみはナッツハウスに向かって走り出す。

りん「あっ、こらのぞみ!!」

すると

士「何だうるさい.....」

のぞみ「えっ.....」

ダイゴ「あっ.....」

希望、破壊、光..... 再びの再会は新たな戦いの幕開けとなった。

士「ダイゴ.....」

ダイゴ「のぞみちゃん.....」

のぞみ「士先生.....」

UJU

第2話 会議

士「ダイゴ……」

のぞみ「土先生……」

ダイゴ「のぞみちゃん……」

かつての戦友である3人は再び出会ってしまった。

のぞみ「な、なんで2人が……それにここは……」

ダイゴ「また世界が融合したのか？」

士「さあな、だがこうしてまた……ん？、どうしたのぞみ？」

のぞみはうつむいて震えていた。

のぞみ「つ……つ……」

ダイゴ「どうしたの？」

のぞみ「土せんせええい!!」

のぞみは泣きながら土に抱きついてきた。

士「なっ、何すんだよいきなり!？」

ダイゴ「嬉しいんだよ、またこうして出会えたのが。」

するとナッツハウスからは夏海が出てきた、向こうからはりん達、その反対側からはミライがこちらに向かってきた。

りん「えっ！？なっ、なんで先生が！？」

ミライ「みなさん！？何故ここに！？」

夏海「土君！どっいうことですか！？」

土「知らん！！とりあえず誰かこいつを引き離せ！！」

ダイゴ「はははは！！」

.....

一同は混乱を落ち着かせるためにナッツハウスに入ってしまった、しかしナッツハウスは光写真館に変わっている。

夏「店が無くなったな。」

コージ「困ったなあ。」

すると

「お客さんかい？夏海。」

夏海「おじいちゃん！！実は・・・」

夏海は祖父の栄次郎に事情を説明した。

栄次郎「それは迷惑をかけたね（汗）」

コージ「あつ、いえ。」

夏「しかし、住む場所はどつする?」

栄次郎「土君の部屋を借りて良いよ。」

その言葉に土は大反発した。

土「ちよつと待て!!俺はどうなる!?!」

栄次郎「夏海と一緒に構わないかい?」

夏海「えっ!?!?////」

土「なんで夏ミカンと同じ部屋なんだよ!?!」

夏海「土君・・・（怒）」

夏海は親指を突き立てる。

夏海「光家秘伝、笑いのツボ!!」

土「みきつた!」

土は夏海の技をかわすとそれはのぞみに直撃した。

夏海「あつ!?!」

のぞみ「にゃははははははは！？わ、笑いが止まらなにゃははは！？」

士「ふふん。」

ダイゴ（これはまた・・・）

ミライ（あれならゼロに勝てるかも！！）

そんなこんなで話し合いを始める事にした一同。

夏海「また世界が融合したという事でしょうか？」

士「恐らくな。」

ミライ「まさかまた新たな敵が！？」

かれん「有り得ない話ではないわね。」

ダイゴ「全て終わったわけじゃなかったんだ。」

くるみ「また面倒な事になりそうね。」

こまち「とりあえず調査しましょう。」

士「またライダーを集める必要があるかもな。」

????「うふふ、そうかもね。」

突如白いコウモリが現れた。

りん「うわぁ！？コウモリ！？」

夏海「大丈夫ですよ、私達の仲間のキバーラです。」

キバーラ「よろしくねえ」

うらら「でもどうやって調査しますか？」

士「簡単な方法がある。」

士の言葉に一同は引きつけられた。

士「来た怪人を叩きのめして吐かせる。」

一同は「やっぱりね、あんたらしいよ。」な感じですっこけた。

シロー「まあそれが一番手っ取り早いからな、というわけで世話になるよ。」

夏海「あっ、はい。」

.....

その頃、ある店では4人の少女達が食事に来ていた。

????「咲、大会お疲れ様。」

咲「ありがとう舞、結果はだめだったけどね。」

舞「そんな事ないよ、ねえ？満、薫？」

満「だめってわけではなかったわよ？」

薫「惜しかったわよ、次は大丈夫。」

咲「舞、満、薫・・・ありがとう、ぐす。」

舞「ほら、泣かないの。」

すると一人の少女が料理を持ってきた。

????「お待たせしました。」

薫「凄い豪勢ね。」

満「咲ナイフとフォーク構えるの早いって(汗)」

舞「食べる気満々ね。」

咲「もう良いでしょ！？良いでしょ！？いったただきまゝす！！！！」

満達「はぁ・・・」

.....

レストランの厨房

????「お客さん美味しそうに食べてるよっ。」

「????」当たり前だよ、たんせい込めてるからね、でも真魚ちゃん手伝いに来てくれてありがとうね。」

レストランの少女は真魚という名前らしい。

真魚「ううん、翔一君の手伝いならいくらでもするよ、学校も休みだし。」

翔一「ありがとう!!!」

「翔一く、無駄話するなよ。」

翔一「ああ、ごめんなさい!!!」

.....

その時、外では

「????」.....プリキュア.....倒す.....」

謎の影が迫っていた。

.....

翔一「く.....!?!?」

翔一は何かの気配を感じとった。

真魚「翔一君、まさか!?!?」

「どした？翔一？」

翔一「あっ・・・え〜と、お、お腹が急に!?!?トイレ行ってきます!?!」

真魚「あ、後は私が何とかやりますから!?!」

「わ、わかった(汗)」

翔一は厨房を出た際に客である咲達を見た。

翔一(あれ?どっかで・・・ってそれどころじゃない!?!?)

翔一は一瞬舞と目があったが気配の正体を調べるためにレストランを出た。

舞(あれ?どこかで見たような・・・)

咲「どうしたんだろう?慌ててたみたいけど・・・」

満「とりあえず食事はすんだしそろそろ出ましよう?」

薫「そうね。」

咲達は会計をすませて外に出た、すると目の前に翔一と謎の怪人がいた。

咲「なっ、何あれ!?!」

満「あの人が危ないわ!?!」

すると翔一は両手を左の腰のあたりに構え右手を突き出した途端に引く、翔一から光に包まれてベルト・オルタリングが現れた。

満「なっ、何!？」

舞「!!!、思い出したわ!!!」

翔一は引いた手をゆっくりと前に出す。

翔一「変身!!!」

そして翔一はベルトの両端のスイッチを同時に押すと光に包まれた。

つづく

第2話 会議（後書き）

次回、目覚めろ！！その魂！！

第3話 金龍

咲「何!？」

満「眩しい!？」

光がおさまると翔一は黒い体に金の装甲、赤い複眼に二本の角、金の龍のような姿、これが津上翔一が変身する戦士・仮面ライダーアギトだ。

舞「やっぱり・・・仮面ライダーアギト!！」

満「何なのあれ?」

咲「満と薫は知らないんだっただね、あれは仮面ライダーって言って私達の住んでる世界とは違う世界を守ってる人なの。」

薫「じゃあなんで別世界の戦士がここに?」

咲「・・・あれ!?!なんで!?!」

舞「遅い。(汗)」

アギトは身構えて怪人と向き合う。

アギト「お前はアンノウンか!？」

怪人「アンノウン・・・俺!!アンノウン!!」

アギト（様子が変だな・・・まだ未熟なアンノウンか？）

アンノウンはアギトに襲いかかってきた。

アンノウン「キシヤア！！」

アギト「！！！！、はっ！！」

アギトは飛びかかってきた怪人を殴り倒す。

アンノウン「アギト！！倒す！！」

アギト「望むところだ！！」

アンノウンはアギトに殴りかかる、アギトはそれを受け流し回し蹴りを叩き込む。

アギト「はあ！！」

アンノウン「ぐあっ！！」

満「強い・・・あれが仮面ライダー？」

するとアンノウンは咲達に向かって攻撃を仕掛けてきた。

咲達「！！！！」

アギト「あっ！？危ない！！」

すると咲達は膨大な光に包まれた。

アギト「!?!」

アンノウン「なんだ・・・」

咲達は髪型、衣装が変わっていた。

ブルーム「輝く金の花!! キュアブルーム!!」

イーグレット「煌めく銀の翼!! キュアイーグレット!!」

満「行くよ薫!」

薫「ええ!! 満!!」

アギト「そうだ、たしかプリキュア!!」

アンノウン「プリキュア・・・倒す!!」

するとアンノウンの体から謎のエネルギーが発せられ巨大なウザイナーに変わった。

ブルーム「ウザイナー!?!」

満「厄介なやつを!!」

アギトはブルーム達に言った。

アギト「アンノウンは俺に任せて怪物を!!」

い鳥のような生物が現れブルーム達を襲つ。

ブルーム「うわあ！？何これ！？」

イーグレット「きゃあ！？」

満「まずいわ！？」

薫「みんなよけて！！」

ウザイナーは4人を叩き飛ばした。

ブルーム達「きゃああああ！？」

ウザイナーは再び黒い鳥を放つ。

アギト「させない！！」

アギトは右のスイッチを押すとオルタリングから赤い刀が出現し金の装甲は赤い装甲に変わった、これは刀を得意とするアギト・フレームフォームだ。

アギト「たあ！！」

アギトは刀で鳥達を切り捨てていく。

イーグレット「す、凄い・・・」

アギト「さあ、今のうちに！！」

ブルーム「よし！！みんな行くよ！！」

イーグレット「わかったわ！！」

満「うん！！」

薫「ええ！！」

ブルーム達は必殺技の体勢に入りアギトはそれまで何とか持ちこたえる。

イーグレット「精霊の光よ！！」

薫「命の輝きよ！！」

満「希望へ導け！！」

ブルーム「全ての心！！」

「プリキュア！！スパイラル・ハート・スプラッシュスター！！」

聖なる光がウザイナーを包み込み消滅させた。

.....

咲「あの・・・あなたは？」

翔「俺は津上翔一です！！」

満「はじめまして、私は霧生満です。」

薫「霧生薫です。」

翔一「満ちゃんに薫ちゃんか、よろしく!!それに咲ちゃんに舞ちゃんだね!!」

咲「覚えててくれたんですね!!」

舞「咲、そんな事より・・・」

咲「え?ああ、あの一つ聞かせてください。」

咲は翔一に事情を説明した。

翔一「うん、渡や土に聞けばわかるかもね。」

薫「その人達がどこにいるかわかりますか?」

翔一「いやあ、そこまではわかんないなあ。」

すると満の携帯電話が鳴りだした。

満「?、もしもし。」

電話の主はココだった。

ココ『満がココ?今すぐナッツハウスに来てほしいココ!!』

満「ナッツハウスに?わかったわ。」

薫「何かあったのかしら？」

咲「とりあえずナッツハウスに行こう!!」

舞「そうね、翔一さんも来ます？」

翔一「わかった、その前にレストランの人達に伝えてくるから。」

.....

その頃

ザンケンナー「ザンケンナー!!」

コワイナー「コワイナー!!」

ザンケンナーとコワイナーがある街を襲っていた、そこにラブ、美希、祈里、せつなが駆けつける。

美希「あれはザンケンナーにコワイナー!？」

祈里「このままじゃクローバータウンストリートが!？」

美希「ラブ!!」

ラブ「みんな、変身よ!!」

しかしその時、2つの光がザンケンナーとコワイナーを押し倒した。

せつな「えっ!？」

その光は2人の巨人の姿になった、赤い体に鋭い目つき、頭部にはブーメランがついている巨人、そして赤、銀、青の体に額にはクリスタルのついている巨人だ。

祈里「あれって・・・」

美希「ウルトラセブンにウルトラマンダイナ!？」

ラブ「なっ、何で!？」

セブン（アスカ、行くぞ!）

ダイナ（やってやるぜ!）

つづく

第4話 巨人と戦士

ダイナはザンケンナーにつかみかかり投げ飛ばす、そしてダイナミツクな戦法でザンケンナーをおしていく。

セブンはコワイナーをアイスラッガーで斬りつけエメリウム光線で吹き飛ばす。

ダイナ（モロボシさん！！こいつら確かプリキュアの！？）

セブン（ああ、また世界が融合したのかもしれない、だがとりあえずこいつらを倒すぞ！！）

しかし上空からはなんとバードンが現れ2人を襲う。

ダイナ、セブン（うわあああああ！？）

せつな「ラブ！！このままじゃ2人が危ないわ！！」

ラブ「うん！！助けよう！！」

美希「準備完璧よ！！」

祈里「うん！！」

「チェインジ！！プリキュア・ビートアップ！！」

ラブ達は光に包まれ姿を変えた。

ピーチ「ピンクのハートは愛あるしるし！！もぎたてフレッシュ！

！キュアピーチ！！」

ベリー「ブルーのハートは希望のしるし！！摘みたてフレッシュ！
！キュアベリー！！」

パイン「イエローハートは祈りのしるし！！とれたてフレッシュ！
！キュアパイン！！」

パッション「真っ赤なハートは幸せの証！！熟れたてフレッシュ！
！キュアパッション！！」

ピーチ「レッツ！！」

「プリキュア！！」

4人はバードンを蹴り倒した。

ピーチ「アスカさん！！モロボシさん！！」

ダイナ（ラブ！！本当にいたよ！！）

セブン（すまない、バードンを頼む！！）

パッション「頼まりました！！！！」

ピーチ、パッションはバードンの羽にしがみついた。

ピーチ「だあ！！動くなあ！！」

パッション「ベリー！！パイン！！」

ベリーとパインは同時に高く飛び上がった。

ベリー、パイン「ダブル・プリキュアキック!!」

2人の蹴りはバードンの懐を直撃、見事に押し倒した、しかしバードンは羽を広げクチバシでピーチをつかみ高く飛んだ。

ピーチ「ええ!?!」

ベリー、パイン、パッション「ピーチ!!」

バードンは3人が追いつけない程高く飛んでいた、そしてピーチをクチバシから放して落下させる。

ピーチ「クチバシ放すなあ!?!」

さらにバードンは炎を吐き出しピーチを苦しめた。

ピーチ「きゃあああ!?!」

ベリーがピーチを受け止める。

ベリー「ピーチ!!しっかりして!!」

ピーチ「くっ……大丈夫……」

パイン「よくもピーチを!!」

パッション「許さない!!」

ベリー「いくわよ!!」

ベリーはベリーソード、パインはパインフルート、パッションはパッションハーブを取り出した。

ベリー「プリキュア!! エスパワールシャワー!! フレッシュユ!!」

パイン「プリキュア!! ヒーリングプレア!! フレッシュユ!!」

パッション「プリキュア!! ハピネスハリケーン!!」

3人の必殺技を受け苦しめられるバードン、さらに後ろから

ピーチ「よくも焼いてくれたわね!？」

ピーチが後ろでピーチロッドを構えていた。

ピーチ「プリキュア!! ラブサンシャイン!! フレッシュユ!!」

ピーチの必殺技を受けたバードンは静かに倒れ爆散した。

ダイナ（助かったぜ!!）

セブン（俺達も行くぞ!!）

ダイナはザンケンナーに向かって腕を十字に組み鮮やかな青色の光線・ソルジェント光線を放ち、セブンはコワイナーに向かってL字に組み白色の光線・ワイドショットを放つ、光線は見事直撃しザンケンナーとコワイナーは消滅した。

.....

ダイナ、セブンは光に包まれアスカ、ダンの姿に戻った。

ラブ「アスカさん！！お久しぶりです！！」

アスカ「やあ、元気だった？」

美希「はい、でも何でプリキュアの世界に？」

ダン「俺達にもわからない、アスカと麻雀をしようと思ってたらこんな所に来ていてね。」

祈里（麻雀！？ウルトラマンが麻雀して良いの！？）

祈里は心の中で突っ込んだ。

アスカ「麻雀なんて冗談やめてくださいよ、ゴルフでしょ？ゴルフ。」

せつな（意外とシユールね。）

.....

その頃ナッツハウスもとい光写真館では

ナッツ「ダメナツ、ラブ達にも繋がらないナツ。」

かれん「繋がったのは咲達に、つぼみ達だけね。」

くるみ「困ったわね。」

士「まあ何とかなるだろ。」

シロー「んな適当な(汗)」

いかにも土らしい返答だった、すると栄次郎が人数分のお菓子と紅茶を持ってきた。

夏海「おじいちゃん!!」

栄次郎「難しいお話しをしているようだね、まあ落ち着いてティータイムにしないかい？」

キバーラ「ねえ、のぞみ？少し付き合ってくれない？」

のぞみ「え？う、うん。」

のぞみとキバーラが外に出た。

.....

のぞみ「どうしたの、キバーラ？」

キバーラ「あなた・・・土やダイゴに会えて嬉しい？」

のぞみ「もちろん!!ずっと再会を夢に見てたから!!」

のぞみは笑顔でそう答えた。

キバーラ「でも、もしもよ？この再会が原因でまた世界が破滅向かってるとして、世界を救うとまた士とはお別れよ？」

のぞみ「大丈夫だよ。」

キバーラ「？」

のぞみ「住む世界が違ってても、私達は互いを絶対に忘れないから。」

キバーラ「・・・あなたって本当に前向きね。」

すると2人は湖から何やら鋭い視線を感じた。

第4話 巨人と戦士（後書き）

次回は主人公組の戦いが復活!!

第5話 視線

のぞみとキバーラは湖から視線を感じ湖を覗きこんだ。

キバーラ「何々？」

のぞみ「凄い何かの視線が・・・」

すると湖から巨大な怪獣・ツインテール、ホシイナー、そしてショッカー戦闘員が現れた。

のぞみ「うわぁ!？」

写真館から全員が出てきた。

士「怪獣にショッカー戦闘員、ホシイナーだと？」

ダイゴ「仕方ない、みんな!!行こう!!」

夏海「士君、私もやります!!」

士「勝手にしろ、行くぞ!」

士はベルトを装着しライドブッカーからカードを取り出した。

士「変身!!」

士はベルトにカードを差し込みバツクルを閉じた。

「カモンライド・・・デイケイド!!」

士は仮面ライダーデイケイドに変身した、のぞみ、りん、つばら、こまち、かれんはキュアモを構え、くるみはミルクィパレットを構える。

「プリキュア!!メタモルフォーゼ!!」

「スカイローズ!!トランスレイト!!」

のぞみ達は光に包まれてプリキュアに変身した。

ドリーム「大いなる希望の力!!キュアドリーム!!」

ルージュ「情熱の赤い炎!!キュアルージュ!!」

レモネード「はじけるレモンの光!!キュアレモネード!!」

ミント「安らぎの緑の大地、キュアミント!!」

アクア「知性の青き泉!!キュアアクア!!」

「希望の力と未来の光!!華麗に羽ばたく5つの心!!YES!!
プリキュア5!!」

ローズ「青い薔薇は秘密のしるし!!ミルクィローズ!!」

ダイゴは変身アイテム・スパークレンスを取り出した。

ダイゴ「ツインテールは僕がやるよ!!ティガアアア!!」

スパークレンスが開くと同時にダイゴは光に包まれてウルトラマン
ティガに変身した。

ドリーム「夏海さん！！今の内に逃げ・・・」

夏海「キバーラ！！」

キバーラ「うふふ、行くわよ」

夏海はキバーラを指で掴み構えた。

夏海「変身。」

すると夏海は花びらのような光に包まれてキバに類似した姿になっ
た、これがキバーラの力によって光夏海が変身した仮面ライダーキ
バーラだ。

ルージュ「ええ！？」

ティガ（な、夏海ちゃんも・・・）

レモネード「仮面ライダーだったんですか！？」

キバーラ「さあみなさん！！戦闘開始ですよ！！」

キバーラはディケイドと共に剣を構える。

ディケイド「行くぞ、夏みかん。」

キバーラ「夏海です!!」

ディケイドとキバーラはショットカー戦闘員を斬りつけていく。

ディケイド「おい!!お前達、ショットカーが復活したのか!?答える!!」

戦闘員「イイ!!我々はメガショットカー!!世界は我々メガショットカーの物だ!!」

ミント「メガショットカー!?!」

アクア「それは一体何なの!?!」

するとホシイナーが2人に向かって攻撃を仕掛けるがローズがホシイナーの懐に蹴りを入れる。

ローズ「不意打ちなんて卑怯よ!!」

ミント「ありがとうローズ!!」

ルージュ「みんな!!今のうちに攻撃を!!」

「うん!!」

レモネードは腕をクロスし大きく広げた。

レモネード「プリキュア!!プリズムチェーン!!」

レモネードは光の鎖でホシイナーを拘束する。

ルージュ「プリキュア！！ファイヤーストライク！！」

ルージュは火球を生み出しホシイナーに3発連続で蹴り出した。

ホシイナー「ホシイナー！！」

しかしホシイナーはプリズムチェーンを引きちぎりファイヤーストライクを弾き返した。

ルージュ「普通のホシイナーより強い！？」

アクア「プリキュア！！サファイアアロー！！」

ミント「プリキュア！！エメラルドソーサー！！」

水の矢と緑の円盤はホシイナーを襲うがホシイナーはそれをすべて避けきる。

ミント「速い！？」

そこにローズが上空から

ローズ「邪悪な力を包み込む！！薔薇の吹雪を咲かせましょう！！
ミルキイローズ・ブリザード！！」

ローズは生み出した巨大な青い薔薇を砕き吹雪をおこす、ホシイナーは一瞬凍りついたがすぐに氷を砕き自由を取り戻した。

ローズ「そんな！？」

ドリーム「はあ！！プリキュア・シューティングスター！！」

ドリームは桃色の流星になりホシイナーに突っ込むがホシイナーに簡単に受け止められてしまい投げ飛ばされた。

ドリーム「きゃあ！？」

一方、ディケイドとキバーラは戦闘員の大群に嫌気をさしていた。

キバーラ「多すぎますよ！！」

ディケイド「だな、さすがにイライラしてきた・・・こんな時は、これだな。」

ディケイドは2色に分けられたライダーの絵が書いてあるカードをバツクルに差し込んだ。

「カメンライド！！ダブル！！」

するとサウンドと共にディケイドは仮面ライダーダブルへと姿を変えもう一枚カードを差し込んだ。

「フォームライド！！ダブル！！ルナトリガー！！」

ダブルディケイドは緑と黒の色から黄色と青の色に変わった。

キバーラ「はあああああ！！」

キバーラは剣に力を込めると光の翼がはえ剣を輝きだした。

「ファイナルアタックライド！！ダダダダブル！！」

ダブルディケイドはライドブツカーをガンモードに変形させ追尾性を持つ黄色と青の弾丸を大量に打ち出す必殺技・トリガーフルバーストを放ち戦闘員を一気に片付け元の姿に戻った、キバーラも翼で飛行し戦闘員を剣で斬りつけて全滅させた。

キバーラ「やった・・・って土君！のぞみちゃん達が！？」

「きゃああああ！？」

ホシイナールの予想外の強さに苦戦するドリーム達。

ディケイド「メガシヨッカーに強化改造されたのか？・・・まったく世話のやける奴らだ。」

ディケイドはある一枚のカードを取り出した、そうそれはディケイドとドリームの思い出のカード、それをバツクルに差し込んだ。

「ファイナルフォームライド！！ドドドドリーム！！」

ディケイドはドリームのもとに駆けつけて起きあがらせた。

ドリーム「ご、ごめん士先・・・ディケイド「ちょっとくすぐったいぞ。」 えっ！？」

ディケイドはドリームの背中を叩いた、するとドリームは七色に輝きだし美しい翼がはえた。

ドリーム「うわあ！？懐かしくて嬉しいけどいきなりはダメだった
！！」

ルージユ「久しぶりに見たわ、あれ。」

ディケイド「うるさい、行くぞ。」

「ファイナルアタックライド！！ディディディディケイド！！ドド
ドドリーム！！」

ディケイドとドリームは高く飛び上がった。

ディケイド「はああああ！！」

ドリーム「プリキュア！！ディメンションスター！！」

2人のディメンションコンボでホシイナーは消滅した。

一方ティガはツインタールを掴んで飛行し場所を変えていた。

ティガ（ここなら！！）

ティガはツインタールを投げ落とした。

ツインタール「グギャアアアア！！」

ツインタールは怒りだしティガの足を二本の尻尾で掴み叩きつけた。

ティガ（ぐあ！？）

ティガはすぐに体勢を整える、尻尾を掴み蹴りを入れる。

ティガ（はあ！！）

そして空高く投げ飛ばした、ティガは腕をクロスに突き出し大きく横に開きし字に組みゼペリオン光線を放ちツインテールを倒した。

.....

変身を解いた一同は写真館に戻った。

夏海「メガシヨッカーでしたっけ？」

かれん「はい、恐らく世界融合の根源かと。」

士「また面倒な事になったなあ。」

ダイゴ「でも僕達で何とかしないと。」

のぞみ「うん。」

すると

????「のぞみ！！」

のぞみ「あっ！！咲ちゃん！！」

士「お前、翔一か？」

翔一「久しぶりだね士。」

咲達が光写真館に到着した。

.....

「きゃあ!？」

「ブロッサム!？」

ハートキャッチプリキュアのメンバーが何者かに苦戦していた。

ブロッサム「私は大丈夫です・・・でもあの敵、強い。」

サンシャイン「強いなんてものじゃない、まるで戦いを楽しんでいるようだわ。」

マリリン「このままじゃやられちゃう・・・」

ムーンライト「ひとまず4人でフォルテツシモを使って逃げるわよ!！」

4人はそれぞれブロッサムタクト、マリインタクト、シャイニータンバリン、ムーンタクトを構える、その何者かは何も計画せず両手を広げ4人に迫る。

????「それでもっと楽しませてくれるのか?最初はお前達の事イライラしていたが戦ってるうちにイライラがおさまってくぜ・・・さあ、祭を始めよう・・・。」

UJU

第6話 王蛇

ハートキャッチプリキュアのメンバーはそれぞれ武器を構える。

ブロッサム「あなたは一体何者なんですか!？」

ブロッサムは何者かに問いだした、紫色の体に奇妙な模様、額には3つの三角形、それは戦いを生きがいとし様々な凶悪犯罪を行ってきた男・浅倉威が変身する仮面ライダー王蛇だった。

王蛇「俺は仮面ライダー王蛇、さあ祭を始めよう。」

マリン「何なのよあいつ、気持ち悪い……」

サンシャイン「もう人間みたいな思考はしてないわね。」

ムーンライト「一気に決めるわよ!!」

「プリキュア!!! フローラルパワーフォルテツシモオオオ!!!」

ブロッサム、マリン、サンシャイン、ムーンライトは4人同時にフローラルパワーフォルテツシモを繰り出した、しかし

王蛇「ほう、厄介だなあ。」

王蛇はベルトの紫色のバツクルからカードを抜き出し蛇の形をした杖に入れた。

「コンファイン・ベント」

すると突然4人のフローラルパワーフォルテツシモは力を失ってしまった。

ムーンライト「なっ、何が起こったの!？」

マリリン「何で・・・フォルテツシモが!？」

王蛇「こいつのせいさ。」

王蛇は一枚のカードを取り出した。

サンシャイン「まさかそのカードが原因!？」

王蛇「やはりライダーは良いなあ、色んな状況を作り出せて色んなイライラを解消できる。」

王蛇は一枚のカードを杖に入れた。

「ファイナル・ベント」

すると王蛇の後ろから巨大な紫色のコブラ・ベノスネーカーが現れた、王蛇は高くばく宙する。

ブロッサム「みなさん!!逃げて!!」

そして王蛇はベノスネーカーの吐き出した黄色い毒液の勢いに乗り連続蹴りを放った。

王蛇「はあああああ!!」

サンシャイン「くっ！サンフラワー・イーグス！」

サンシャインはひまわり型の盾、サンフラワー・イーグスを使い王蛇の必殺技・ベノクラッシュを防ぐ。

サンシャイン「くう！！うううううう！！」

王蛇「はははは！はあああ！！」

王蛇のベノクラッシュはついにサンフラワー・イーグスを砕きサンシャインはベノクラッシュの餌食となった。

サンシャイン「ぐっ！？がはっ！？きゃあああああ！？」

サンシャインは遠くに蹴り飛ばされ見えなくなった。

マリン「サンシャイン！？」

王蛇はマリンの首を締め上げた。

マリン「がっ！？」

王蛇「はっはっはっ・・・楽しいなあ。」

ブロッサム「マリン！？」

ムーンライト「マリンを放しなさい！！」

2人は王蛇に向かって攻撃を仕掛ける、しかし

王蛇「ふん。」

王蛇は杖で2人を殴りつけて蹴り飛ばした。

ブロッサム、ムーンライト「きゃあああ!?!」

マリリン「ブロッサム……ムーンライト……」

王蛇はマリリンを投げ飛ばした、そしてカードを杖に差し込んだ。

「ファイナル・ベント」

王蛇のもとにサイ型のモンスター・メタルガラスが現れた。王蛇はメタルガラスの肩に足を乗せ剣を構えメタルガラスはマリリンに向かって突進する。

ブロッサム「ダメエエ!?!」

王蛇「はあ!?!」

マリリン「きゃあああ!?!」

そしてマリリンは王蛇の第2の必殺技・ヘビープレッシャーにより吹き飛ばされサンシャイン同様見えなくなった。

ムーンライト「マリリンまで……」

王蛇は2人に近づき攻撃をしようとする。

王蛇「さあ、祭の終盤だ。」

しかし、その時金色の光が空から舞い降りブロッサムとムーンライトを包み込み遠くへ飛んでいった。

王蛇「ちっ!」

.....

光写真館

夏海「あれ？ダイゴさん、ミライさんは？」

ダイゴ「何か危険を感じたから外に出るって言ってたよ？」

のぞみ「大丈夫かな？」

翔一「心配だなあ。」

士「.....」

.....

金色の光は洞窟の中に入っていき人の姿になった、それはミライだった。

ミライ「大丈夫ですか？」

ムーンライト「あなたは？」

ムーンライトは前回の戦いに参加しておらずミライの事を知らなかった。

ミライ「ヒビノ・ミライです、つぼみさんならよく知ってると思います。」

ムーンライト「ブロッサムの知り合いね、助けてくれてありがとう。」

ミライ「いえ、ってつぼみさん気を失ってますね。」

ムーンライト「仲間を失ったのが相当ショックだったのね。」

ミライ「一体何があったんですか？」

.....

その頃サンシャインはとあるジャングルに、マリンはある施設の前に倒れていた。

つづく

第6話 王蛇（後書き）

次回、ハートキャッチプリキュアと王蛇との遭遇の経緯！！

メガシヨッカーの幹部を過去の作品の中から選ばうと思っています、何かご要望をお待ちします。

予定ではカイザーベリアル、シャドウ、ダークディケイドを考えます、1人1つまで受け付けます。

第7話 遭遇

ムーンライト「私達は仲間に呼ばれてナッツハウス、今あなたが言
つてたのが本当なら光写真館に行くという事になるわね。」

ミライはナッツハウスが光写真館になっている事を話したのだ。

.....

4人が写真館に向かう途中いきなり謎の男が現れて鉄パイプを振り
回してきた。

つぼみ「なっ、何ですかいきなり!？」

いつき「つぼみ!! 気をつけて!!」

いつきは得意の格闘技を駆使し何とか男から鉄パイプを奪った。

えりか「ちよつとあんた何よいきなり!？」

ゆり「あなたは何者？」

????「ふん、俺は浅倉だ・・・お前達を見てるとイライラするん
だよお。」

すると浅倉はいきなり紫色のカードケースを前に突き出すとどこか
らかベルトが現れた、そして右腕をゆっくりと顔あたりまで持って
いき

浅倉「変身!!」

右腕を素早く前に突き出し胸のあたりまで引きカードケースをベルトに装着すると浅倉は仮面ライダー王蛇へと変身した。

いつき「なっ!?!変身した!!」

えりか「しかも仮面ライダーじゃん!？」

つぼみ「でも私達を襲う気満々です!？」

ゆり「みんな落ち着いて、戦うわよ!!」

3人「あっ、はい!!」

「プリキュア!!オープンマイハート!!」

ブロッサム「大地に咲く一輪の花!!キュアブロッサム!!」

マリン「海風に揺れる一輪の花!!キュアマリン!!」

サンシャイン「陽の光浴びる一輪の花!!キュアサンシャイン!!」

ムーンライト「月光に冴える一輪の花、キュアムーンライト!!」

4人はプリキュアになり王蛇に立ち向かうが・・・

.....

ムーンライト「全く歯がたたなかったわ、おかげで仲間もどこかに

飛ばされてしまった。」

ミライ「仮面ライダー王蛇・・・なんて奴なんだ。」

するとブロッサムが目を覚ました。

ブロッサム「う・・・ん？」

ムーンライト「ブロッサム!!」

ミライ「良かった。」

するとブロッサムとムーンライトはもとの姿に戻った。

つぼみ「ゆ、ゆりさん!! えりかといつきは!?!」

ゆり「わからないわ、ミライさんが助けに来てくれたけど。」

つぼみ「ミライさん!?!」

ミライ「お久しぶりです、つぼみさん。」

ゆりはつぼみの肩に手をそえた。

ゆり「つぼみ、今は光写真館に行くのが先決よ、いつきとえりかなら大丈夫よ。」

つぼみ「で、でも・・・」

ゆり「それともあの2人を信じてないの?」

つぼみ「！・・・いえ、行きましょう。」

するとミライが

ミライ「僕が送ります、またあいつに会ったらまずいですし。」

つぼみ「お願いします!」

3人は洞窟の外に出た、ミライは腕のブレスにもう片方の手をかざしブレスを空に掲げた。

ミライ「メビウウウウス!!!」

ミライはウルトラマンメビウスになり手につぼみとゆりを乗せて光写真館に向かって飛んだ。

・・・

その頃、ジャングルではマックスハート組のなぎさ、ほのか、ひかりがさまよっていた。

なぎさ「ぶつちやけありえなあああい!!」

ほのか「本当にこの状況は何とも言えないわね。」

ひかり「そうですね。」

何故3人がジャングルにいるかというところから前日の出来事になる。

なぎさ「3泊4日のニューヨーク旅行チケット当たったあああ!!」

ほのか「何でそんないきなり!？」

ひかり「なんでも福引きが当たったとか。」

なんだかありがちのようなそうでないような展開が起こっていた、
そしてこの3人で行く事になり船に乗ったが・・・

「うわあああ!？」

「何だ!？船が宙に浮いてるぞ!？」

「うわあ!？ひっくり返った!？転覆するぞ!？」

なぎさ、ほのか、ひかり「ええええええええええ!？」

・・・

なぎさ「何で船が宙に浮くわけ!？」

ほのか「でも良かったじゃない、脱出用のボートでここにこれたんだし。」

ひかり「そういうえば、船が転覆した時赤と青の巨大な物が見えましたよ?」

なぎさ「何それ?」

ひかりの発言をさっぱり理解できないなぎさ、そこにほのかがか

を見つけた。

ほのか「なぎさー!! ひかりー!! あれって・・・」

なぎさ「えっ? ああ! ! !」

ひかり「いつきさん! ?」

そこには既に変身が解けたいつきが倒れていた。

ほのか「いつきー! ! いつきー! !」

いつき「・・・?」

いつきは目を覚ました。

ひかり「良かった、目を覚ましました。」

いつき「みんな、ここは?」

なぎさ「少し落ち着いてからで良いから事情を話して。」

いつきは事情を話すとなぎさ達は驚愕した。

なぎさ「また世界が融合した! ?」

いつき「うん、現にナッツハウスには土さんやダイゴさんがいるって。」

ほのか「一体何が起こってるの?」

するとひかりは何やら糸のような物に巻きつけられた。

ひかり「きゃあ!？」

なぎさ「ひかり!？」

そして木から巨大なクモが現れた。

いつき「あれは!？」

ほのか「ひかり!!早く助けないと!？」

しかし変身している暇はない、3人で何とかひかりをささえるが、ついに3人もクモの糸に巻きつけられた、そのクモは人間を主食とするミラーモンスターだった、ミラーモンスターはミラーワールドでしか存在できないはずだが何故かミラーワールド外で存在できていた。

ほのか「きゃあ!？」

いつき「口開けてるし絶対食べる気だよ!？」

ひかり「何とかしないと・・・きゃあ!？」

するとひかりは体勢を崩し一番早くクモに引き寄せられる。

なぎさ「ひかり!？」

ひかり「いや!?!いやああああ!?!」

ひかりがミラーモンスターに食べられそうになったその時

「イイイイ……」

ミラーモンスターが突如動きを止める。

なぎさ「なっ、何今の声?」

いつき「まさか新しい敵!?!」

しかしミラーモンスターは震えているように見えた。

ほのか「モンスターが……震えている?」

「……イイイイ……」

徐々にその声は大きくなっていく。

ほのか「一体何!?!」

そして

「キキイイイイ!?!」

深い木々の中から何かが飛び出した。

いつき「なっ!?!トカゲ!?!」

「大い
い
い
い
い
切
だ
あ
あ
あ
ん
！
！
！
！
！
！
！」

う
ぐ
う

第8話 大トカゲ

いきなり現れた何者かはミラーモンスターを真つ二つに切り裂き爆散させた。

ひかり「あ……」

あまりに突然の事で驚きを隠せない4人、何者かは4人のクモの糸を切り裂き解放させた。

???「怪我は無いか？」

ひかり「あ、はい……ありがとうございます。」

なぎさ「あの……あなたは？」

その何者かはトカゲのような姿をした赤い複眼の野生戦士・仮面ライダーアマゾンだった、アマゾンは変身を解いた。

アマゾン「俺はアマゾン、本名は山本大介だが……じっくりこないからな、アマゾンって呼んでくれ。」

アマゾンはいかにも野生人と言った姿だった、ベルトに茶色の毛皮のようなシャツ?を着ていた。

ほのか「あなたは……仮面ライダー？」

アマゾン「ああ、仮面ライダーアマゾン、このギギの腕輪が俺の命

の源だ。」

アマゾンの左腕には銀色の動物の顔の形をした腕輪をつけていた。

なぎさ「あ……ここはどこなんですか？」

アマゾン「何だ知らないのか、ここは南米だよ。」

「南米いいいい!?!」

4人は驚愕した、自分が南米の見知らぬジャングルに来ていたからだ。

なぎさ「どっしょう……これから……」

するといつきが

「いつき」とりあえず、ナッツハウスに行けば大丈夫だと思うけど……」

アマゾン「日本にあるのか？」

ほのか「はい、でも私達今お金もパスポートも無くて……」

ひかり「どうすれば良いでしょう?」

「一同は悩む、とアマゾンがひらめいた。

アマゾン「仕方ない、俺について来てくれ。」

4人「？」

4人は言われるがままにアマゾンについていく。

.....

ほのか「犯罪よね？」（小声）

いつき「完璧に犯罪だよ。」

アマゾン「良いか？俺が合図を出したら海に飛び込むんだぞ？」

ひかり「でも.....」

なぎさ「勝手に船に乗るなんて.....ありえない.....」

そう、アマゾンは自分が初めて日本に来た時、無断乗船した方法でなぎさ達と日本に向かっていた。

アマゾン「よし、着いたぞ.....せーの!」

5人はアマゾンと共に海に飛び込んだ。

「誰かが飛び降りたぞお!？」

「何だ!？あんな奴ら乗せた覚えはないぞ!？」

アマゾン「はい、退散退散。」

5人は顔を見られないために顔を船から盗んだバケツをかぶって泳

いで逃げ出した。

.....

なぎさ「ぷはあ!？」

ほのか「何とか陸に上がったわね。」

アマゾン「結果オーライだな。」

ひかり「どこがですか!？」

いつき「と、とりあえずナッツハウスに行こう。」

5人はナッツハウスに向かうが途中何か落ちてきて地面を転がる。

なぎさ「ん?何だろうあれ?」

ほのか「ってなぎさあれ!？」

しかしその何かは道に偶然落ちていた傘にくっ付き何とホシイナーに変わった、さらにどこからか怪人が現れた。

ひかり「何ですか!？」

アマゾン「お前はハサミジャガー!？」

そう、その怪人は赤い色をしハサミを持った怪人・ハサミジャガーだった。

ハサミジャガー「ははは！！死んでもらう！！」

いつき「負けないよ！！みんな！！」

「うん！！」

するとアマゾンには全身に力を込め腕を目の前でクロスに閉じ大きく開いた。

アマゾン「アアアアアアアアアアゾオオオン！！」

アマゾンの目は赤くなりみるみるうちに姿を変えて仮面ライダーアマゾンへと変身を遂げた。

なぎさ、ほのか「デュアル・オーロラウェーブ！！」

ひかり「ルミナス！！シャイニングストリーム！！」

いつき「プリキュア！！オープンマイハート！！」

なぎさ達はプリキュアに変身した。

ブラック「光の使者！！キュアブラック！！」

ホワイト「光の使者！！キュアホワイト！！」

「2人はプリキュア！！」

ホワイト「邪悪な力の僕達よ！！」

ブラック「とつととお家に帰りなさい!！」

ルミナス「輝く命!! シャイニールミナス!! 光の心と光の意志!
!すべてを一つにするために!！」

サンシャイン「陽の光浴びる一輪の花!! キュアサンシャイン!」
プリキュアはホシイナーに攻撃を仕掛け、アマゾンハサミジャガ
ーに飛びかかる。

ブラック「はあ!！」

ホワイト「やあ!！」

ブラック、ホワイトはホシイナーの顔面に蹴りを入れ、ふらついた
ところをサンシャインが背後から狙う。

サンシャイン「サンフラワー・イージス・インパクト!！」

サンフラワー・イージス・インパクトで背後から衝撃を受けたホシ
イナーは勢いよく倒れ込む、しかし負けじとブラックとホワイトを
掴みだした。

ブラック「うわあ!？」

ホワイト「きゃあ!？」

そして2人を握りつぶそうとする。

ブラック、ホワイト「きゃああああああ!？」

するとルミナスが

ルミナス「ルミナス!!!ハーティエル・アンクシオン!!!」

ホシイナ―は虹色の光に包まれて動きを止められた。

ホシイナ―「ホシ!?!」

ブラック「うりゃあ!?!」

ホワイト「はああ!?!」

2人はホシイナ―の腕から脱出する、そして腹を蹴りホシイナ―を押し倒した、サンシャインはシャイニータンバリンを構える。

サンシャイン「花よ舞い踊れ!!!プリキュア!!!ゴールド・フォルテ・バースト!!!」

ひまわり型のエネルギーがホシイナ―に直撃し包み込んだ。

サンシャイン「はああああああ!!!」

そしてホシイナ―を消滅させ、傘だけが残った。

アマゾン「キキイイ!!!」

一方ハサミジャガーはアマゾンにおされていた。

ハサミジャガー「お、おのねえ仮面ライダーアマゾン!!!」

アマゾン はハサミジャガーにしがみついた。

アマゾン 「ジャガーシヨック!!」

アマゾン はハサミジャガーの腕に噛みついた。

ハサミジャガー 「ぐあ!?!このお!!」

ハサミジャガー はアマゾンを斬りつけ引き離す。

アマゾン 「ぐっ!!キキイ!!」

アマゾンは負けじとハサミジャガーに飛びかかる。

ハサミジャガー 「真つ二つにしてくれる!!」

ハサミジャガー は自慢のハサミを構える。

アマゾン 「モンキーアタック!!」

しかしハサミジャガーのハサミはアマゾンに払いのけられ体当たりをくらう、そしてアマゾンは空高く飛び上がり一回転し腕を構える。

ハサミジャガー 「!?!」

アマゾン 「大いいいい切だああああん!!」

アマゾンはハサミジャガーを切り裂いた。

ハサミジャガー「ぎゃあああああ!？」

ハサミジャガーは爆散した、一同は変身を解いた。

いつき「アマゾン!!大丈夫!？」

アマゾン「ああ、何とかな・・・よし、行こう。」

一同は光写真館に向かった。

.....

その頃マリンは既に変身が解け、眠っていた。

えりか「ん・・・?」

目を覚ますと何やらえりかは施設の中にいた、1人の男がパソコンを使っていた。

えりか「あの・・・」

????「ん?あつ、えりかちゃん起きたんだね。」

その男を見てえりかは驚愕した。

えりか「わっ!?!我夢じゃん!？」

我夢「久しぶり。」

そう、その男はウルトラマンガイアの高山我夢だった。

UNU

第8話 大トカゲ（後書き）

次回、ガイア登場！！

第9話 大地と海風

えりか「何で我夢が!？」

我夢「それはこっちの台詞、ダイゴから連絡はあったから一度施設の外に出たら倒れてるんだもん、びっくりしたよ。」

えりかは一旦落ち着くために我夢が入れてくれた紅茶を飲んだ。

えりか「わっ、美味しい。」

我夢「驚いた?それで話に戻るけど、まず事情を説明してくれないか?」

えりかは王蛇との戦いの事を話した。

我夢「なるほど、それならナッツハウスにみんな向かってるかもね。」

えりか「何でわかるの?」

我夢「簡単さ、君達はまずナッツハウスに向かうはずが予想外の出来事で離れ離れになってしまった、でも離れ離れになっても目的は変わらない、合流するにはナッツハウスに行けば良い。」

えりか「ほえ、頭良い。」

我夢「普通だよ、普通。」

しかし肝心なナッツハウスに行く方法が無い。

我夢「どう行けば……って何で僕をじっと見てるの？」(汗)

えりかは我夢の事をじっと見ていた。

えりか「空が飛べたら簡単だよね？」

我夢「……………ようするに送ってけど？」

えりか「ご名答!!」

我夢は深くため息をつく。

我夢「わかったよ、仕方ないなあ。」

えりか「よっ!太っ腹!!」

2人は施設の外にでると突然辺りが暗くなった。

えりか「なんだなんだ？」

我夢「ってえりかちゃん!!上!!」

えりか「う……ええええ!!?」

いきなり何か巨大な球体のような物が落ちてきた。

我夢、えりか「わあああ!!?」

2人は何とか球体を避けた。

えりか「なんだあの凸凹した丸っこいの!?!」

我夢「ブルトン!?!」

そう、赤と青の色をし凸凹しているその球体は怪獣ブルトンだった。

我夢「行く前にまずはこっちだね、行くよえりかちゃん!?!」

えりか「やるっしゅ!?!」

我夢は変身アイテム・エスプレンダーを空に掲げる。

我夢「ガイアアアアア!?!」

エスプレンダーは赤と青に輝き我夢はウルトラマンガイアに変身した。

えりか「プリキュア!?!オープンマイハート!?!」

えりかはパフュームを使いキュアマリンに変身した。

マリ「海風に揺れる一輪の花!?!キュアマリン!?!」

ガイアはまずブルトンを掴みだし投げ飛ばして施設から遠ざける。

ガイア（はあ!?!）

マリ「よっしゃあ!?!コフレ!?!出番よ!?!」

マリンは青いマントに変身したコフレを装着した。

コフレ「えりか!! 頑張るですう!!」

マリン「マリインパクト!!」

マリンは飛行しながらブルトンにマリインパクトを繰り出した。

ガイア（飛べるじゃん。）

マリン「あ、忘れてた（汗）」

するとブルトンは何やら凸凹からアンテナのようなものをだした。

マリン「ん? 何あ・・・わあ!？」

その時マリンは奇妙なポーズをとった。

ガイア（何やってんの?）

マリン「違うよ!？勝手に動いちゃうの!？」

ガイア（・・・わあ!？僕も!？）

2人は体がひとりでクネクネと動き宙に浮き何かに吹き飛ばされた。

マリン「きゃあ!？」

ガイア（うわあ！？）

そう、ブルトンはまたの名を四次元怪獣ブルトンといい、様々な四次元現象を起こす事のできる怪獣なのだ。

マリリン「痛たたた！！よくもやったわね！！プリキュア・ブルーフォルテウェーブ！！」

青い花の力がブルトンに向かって放たれるが突如ブルトンの周りが歪みはじめブルーフォルテウェーブはありえない方向に飛んでいった。

マリリン「ああもう！！何だよ！！？」

ガイア（ディアアアアアア！！）

ガイアは腕を十字に組みクアンタム・ストリームを放つがそれもありえない方向に飛んでいった。

ガイア（ブルトンの周りの次元が歪んで攻撃が当たらないんだ。）

マリリン「だああ！！めんどくさい！！こうなったら打撃よ打撃！！うりゃあ！！」

マリリンはブルトンに蹴りかかるがいつの間にか後ろを向いていた、いやマリリンにとって後ろを振り向かされたという感覚だった。

ガイア（打撃もダメだ！！）

マリリン「じゃあどうすんのよ！！？」

するとガイアはブルトンに向かって走り出しつかみかかる。

ガイア（打撃や光線がダメなら！！）

ガイアはブルトンを持ち上げ投げ飛ばした。

ガイア（投げ技だ！！）

ブルトンは地面に叩きつけられる。

そしてブルトンの次元の歪みが消えた。

マリリン「おお！？」

ガイア（今だ！！）

マリリンはマリインタクトを構える。

ガイアは身をかがめ頭部にムチ状のエネルギーを作り出した。

マリリン「プリキュア！！ブルーフォルテウェーブ！！」

ガイア（ダアアアア！！）

ガイアはフォトンエッジ、マリリンはブルーフォルテウェーブを放ちブルトンを倒した。

マリリン「はああ、終わった〜。」

ガイア（じゃあナッツハウスに案内してよ。）

マリィ「了解!!」

2つは空を飛びナッツハウスに向かった。

.....

その頃ナッツハウスもとい写真館では

のぞみ「ん？何だろうあの光？」

ダイゴ「あれは・・・ミライだ!!」

士「つぼみもいるな。」

ミライ、つぼみ、ゆりが写真館に到着した。

つぼみ「みなさん、お待たせしました。」

ミライ「あれ？その人は？」

ミライは翔一を見て疑問に思った。

翔一「初めまして!!津上翔一、仮面ライダーアギトです!!」

ミライ「そうですか、よろしくお願いします!!」

ゆり「ここでははじめましてね、私は月影ゆり、キュアムーンライトです。」

ダイゴ「君もプリキュアなんだ。」

士「また増えたか、まあ良いが・・・まだいなかったか？」

士はえりかがいない事に疑問を抱いた。

つぼみ「実は・・・」

・・・

ナッツ「そんな事がナツ。」

士「王蛇か、また厄介な奴が現れたな。」

かれん「用心が必要ね。」

すると

「みんな!!!」

夏海「？」

つぼみ「いつき!? それになぎさんにほのかさん、ひかりさんまで!?」

士「なつ、アマゾン!？」

アマゾン「久しぶりだな、士。」

いつき達が写真館に到着した、直後

「意外と近かったね。」

ゆり「えりか!!」

ダイゴ「我夢!？」

我夢「やっぱりダイゴもいたんだね。」

えりか達も写真館に到着した。

こまち「段々と集まってきたわね。」

なぎさ「いやあ、みんなに会えて嬉しいなあ。」

ほのか「久しぶりだもんね。」

すると咲が

咲「ん? ねえ土さん?」

土「なんだ?」

咲「あそこから何か声が聞こえるんだけど・・・」

咲は扉を指差した。

栄次郎「あそこは写真の保管庫だけだれもないはずだよ?」

夏海「まさか、お化け!？」

そしてドアノブが回る、一同は身構えた、ついに扉が開いた。

「????」奏！今日はどんなケーキ作るの？」

「????」響はいつも食べる事ばかりねえ。」

「????」響らしくて良い事ニヤ！！」

一同「え？」

「????達」……あれ?(ニヤ?)」

つづく

第9話 大地と海風（後書き）

次回、全員集合

第10話 全員集合

突如写真保管庫から女2人と妖精が現れた。

????「えっ・・・あれ？つぼみだよね？」

つぼみ「響さん!？」

夏海「いつから写真館に!？」

突如現れたのはキュアメロディの北条響、キュアリズムの南野奏に妖精のハミイだった。

奏「わ、私は家の扉を開けただけで(汗)」

士「世界の融合が原因か・・・まさかこいつらもプリキュアか？」

うらら「あっ、はい。」

奏「新任プリキュアの南野奏です。」

響「北条響です。」

ハミイ「ハミイだニヤ!」

士「プリキュアの数もライダーと並んだか。」

するとダイゴの携帯が鳴りだした。

ダイゴ「はい・・・ハヤタさん!？」

電話の主はハヤタだった。

ハヤタ『ダイゴが、ダンとアスカから聞いたよ、また世界が融合したんだってね。』

ダイゴは驚愕した。

ダイゴ「何でそれを!？」

ハヤタ『既にダンとアスカがラブちゃん達と合流してたらしくてね、今私もダン達と一緒にいるんだ。』

ダイゴ「そうなんですか・・・じゃあ今迎えに・・・」

しかし

ハヤタ『その必要はない、もう着いたから。』

ダイゴ「えっ!？」

ダイゴは外に出た、するとそれに続いて一同も外に出た、そこにはフレッシュプリキュアメンバーにアスカ、ダン、ハヤタがたっていた。

ダイゴ「ハヤタさん!？どうしてここが!？」

ハヤタ「ラブちゃんから聞いたんだよ。」

ラブ・リンクルンを見たら着信ありになって、戦ってたから気づかなかったんだ。」

士「集まってきたな、あとは・・・」

アスカ「北斗さんと郷さんだな。」

ハヤタ「連絡してみるか。」

すると再び写真保管庫から声が聞こえた。

翔「なっ、何だ!?!」

夏海「今度こそお化け!?!」

そして扉が開いた。

???「おい、ダン・・・あれ?」

???「ここは?」

士はまたかとばかりに頭を抱えた。

我夢「郷さんに北斗さん!?!」

それはウルトラマンジャックの郷秀樹にウルトラマンエースの北斗星司だった。

郷「あれ?ここダンの店じゃ?」

北斗「しかもこのメンバーって事はまさかまた世界が!？」

士「ああああ!!面倒くせえ!!一回しか言わないからな!!よおおく聞けよ!!!!」

事情説明中・・・

我夢「メガシヨッカーか・・・」

奏「厄介ね。」

ラブ「大丈夫だよ!!みんな集まったし!!」

のぞみ「そうだよ!!大丈夫大丈夫!!」

士「呑気な奴らだ。」

夏海「良いじゃないですか。」

ダイゴ「とりあえず今日は解散にしないか?事情はみんなわかったし。」

翔「そうですね、レストランの手伝いもあるし。」

アマゾン「俺はおやっさんの所にも行くか。」

そんなわけで一同はそれぞれ解散したがプリキュアの妖精達はココの呼びかけで写真館に一晚泊まる事になった。

・・・・・・

その夜

フラッピ「ココ、どうしたラピ？」

ミップル「話って何ミポ？」

ココ「実はココ達妖精がメガシヨッカーにさらわれる可能性がある
ココ。」

妖精達は驚愕した。

シプレ「それはどういう事ですう！？」

ナッツ「ナッツ達妖精はプリキュアに力を与える存在ナツ、だから
いずれかはこつちを狙ってくるかもしれないナツ。」

ハミイ「あり得るニヤ、でもどうするニヤ？」

するとナッツがある物を取り出した。

ナッツ「そんな時のために邪悪な力を持つものが苦手とする奇跡の
光を放つグリッター・ミラクルライトを配るナツ。」

シプレ「グリッターって確か・・・ティガの光の事ですう？」

ナッツ「そうナツ、グリッターティガの光を研究して本物よりは劣
るけど何とかミラクルライトに組み込めたナツ。」

チヨッピ「凄いチヨッピー！！」

ムーブ「人数分はあるムブ？」

ナッツ「ちゃんと作ったナツ。」

フープ「準備が良いププ。」

ナッツ「でもこれは3回までしか使えないナツ。」

ポルン「何でポポ？」

ココ「ティガの光はかなり強力だからミラクルライト自体が保たないココ。」

ルルン「じゃあ使えるのは本当にピンチな時だけルル？」

シロップ「そうなるロプ。」

するとシフォンがグリッター・ミラクルライトを宙に浮き上がらせた。

シフォン「キュアキュア」

タルト「シフォン！！あかんがな！！これは大切な物なんやで、おとなしく寝ときや。」

タルトはクローバーボックスの音楽をかなでシフォンは眠りについた。

ポプリ「ポプリも眠くなってきたでしゅ。」

ココ「今日はこれで終わりココ、みんなゆっくり休むココ。」

妖精達は眠りについた。

.....

????「何故再びこの世界を融合させたのよ？」

邪悪な力を持つ戦士が話していた、ここはメガシヨツカー本部だ。

王蛇「俺が頼んだんだよ、強い奴と戦えると聞いたからなあ、なあ
ダークデイケイド？」

話相手にはかつてシャドームーンに殺されたはずのダークデイケイドがいた。

ダークデイケイド「この世界は俺達の物にするためにだ、わかるだ
るシャドウ。」

シャドウ、かつて鏡の国を支配したプリキュア5の宿敵だ。

シャドウ「まあ確かに悪くはないわね、そうそう、新しい幹部となる
奴がこっちに向かってるって話よ？」

ダークデイケイド「ほう、楽しみだな。」

すると

????「この世界を支配すれば全異世界も我々の物になったような

が迫っていた。

つづく

第10話 全員集合（後書き）

かなり無理やりになりましたがとりあえずあええず全員集合です（汗）

第11話 Nの被害/探偵と切り札

夏海「それにしても昨夜の文章何だったんでしょっか？」

詳しくは感想欄のGASHさん参照

士「さあな、まあ夢のような事にならないよう祈るとしよう。」

すると妖精達が寝室から出てきた。

ココ「おはようココ、ふわぁ〜。」

ナッツ「ココはだらしのないナツ。」

シロップ「仕方ないロプ。」

ミルク「眠そうなココ様も素敵ミル。」

すると突然なぎさが写真館に入ってきた。

なぎさ「メップル!!」

メップル「なぎさ!?!どうしたメポ!?!」

そこにほのか、ひかりも入ってきた。

ほのか「大変なの!!」

ひかり「なぎささんの家に泥棒が!?!」

一同はそれを聞いて驚愕した。

夏海「大変！！警察には連絡を！？」

なぎさ「まだしてない！！ていうか窓も玄関もしっかり閉じたのに泥棒なんてありえない！！」

キバーラ「ふうん、不思議ねえ。」

ミップル「感心してる場合じゃないミポ！！」

ポルン「けーさつ！！けーさつポポ！！」

ルルン「たんてー！！たんてールル！！！！」

すると士はある事を思いついた。

ほのか「なぎさ！！とりあえず警察に・・・」

士「いや、待て。」

ひかり「士さん？」

士「なぎさ、確かに戸締まりはしたんだな？」

なぎさ「したよ！！夜中トイレ行きたくて途中で起きたし！！」

夏海「ますます不思議です。」

キバーラ「そうねえ。」

士「これは警察なんかあてにはならないかもな、良い探偵を知ってるから特別に紹介してやる。」

ほか「探偵ですか？」

なぎさ「ありがとうございます!!」

なぎさ達は土の案内でどこかに向かった。

.....

心地よい風が吹き抜ける町、大きな風車がついたタワー、そこは風の町・風都、そこにある事務所があった。

鳴海探偵事務所

今日も風都に心地よい風が吹き抜ける、それは俺にとって風都タワーや風緬よりも上をいくある意味風都の名物と言っても良いだろう、おやつさん・・・あなたが守ってきた町の素晴らしさを改めて知ったよ、どんな事にも自分の信念を貫く鋼鉄のような男・・・ハードボイルド、それが俺・・・

???「左翔太郎。」

すると左翔太郎と名乗る男の頭に痛みが走った。

翔太郎「痛っ!?!?って亜樹子お!!」

鳴海亜樹子、亡き父で事務所の所長・鳴海壮吉(翔太郎曰わくおや

っさん)の娘、今は彼女が鳴海探偵事務所の所長(自称)をしている、よく翔太郎の頭を緑色のスリッパで叩きつける。

亜樹子「なぐにがハードボイルド・左翔太郎キッシュつよ!!!半熟男のハーフボイルドのくせにい!!!」

翔太郎「んだとおコラア!?ていうかキリッなんてしてねえよ!!!」
すると事務所の扉が開いた。

亜樹子「はい、鳴海探偵事務所の所長・鳴海亜樹子です、依頼は何ですかあ?」

翔太郎「変わり身早っ!・・・ってああ!?!」

士「久しぶりだな、左翔太郎。」

士はなぎさ達と共に鳴海探偵事務所に来たのだ、翔太郎に事情を説明する。

亜樹子「世界が融合!?!」

なぎさ「そうなんです、でも今はそうじゃなくて私の家の泥棒を探してほしいんです。」

するとほのかが

ほのか「そもそも何を盗まれたの?」

ひかり「私も気になってました。」

なぎさ「写真……」

一同「えっ!?!」

なぎさ「藤村先輩とのツーショット写真!!私の家宝だったのぉ!!」

士はため息をついた。

士「はぁ、下らん。」

なぎさ「下らないとは何よぉ!!」

ほのか「なぎさ、写真ならまた撮ってもらえば良いじゃない。」

ひかり「私も同感です。」

亜樹子「賛成い!!」

なぎさ「そんな……みんな……ガクッ。」

しかし

翔太郎「いや、この依頼引き受けたぜ。」

一同「えっ!?!」

なぎさ「翔太郎さん!!」

士「おいおい、マジで言ってるのか?」

翔太郎「当たり前だ、大切な人との時間や思い出はその時にしか存在しない・・・大切な人との思い出を汚す奴を・・・俺は許さない！！」

亜樹子「こっ、ここで名台詞・・・」

なぎさ「翔太郎さん！！」

翔太郎「なぎさ！！」

2人は手をお互いにガシツと掴んだ。

士「・・・下らん。」

・・・

翔太郎「というわけだフィリップ、検索を頼む。」

フィリップ、「地球の本棚」というこの世に関係する全ての事が書かれていた本が置かれている空間に行き様々な知識を得る事ができる少年である、しかし一つの事にはまるとやめられない。

フィリップ「悪いが今は即席ラーメンについて検索中なんだ。」

翔太郎「ああ、そうか。」

なぎさ「ダメなんですか？」

亜樹子「弱ったねえ。」

士（まったく仕方ない。）

士はフィリップに話しかけた。

士「フィリップ、実は俺の住んでいる町で空を飛ぶテレビが流行ってるんだが。」

ほのか「日本語になってないですよ士さ・・・」

するとフィリップは持っている本を落とした。

フィリップ「空を飛ぶテレビ!? 一体なんだそれは!? 詳しく聞かせてくれ!! 地球の本棚でも見つけた事がない!!」

ひかり「ええ!?!」

翔太郎（ははあ、考えたな。）

士「今から言う事を検索してくれたら教えてやる。」

フィリップ「空を飛ぶテレビ、興味深い・・・何でも言ってくれ!」

フィリップは地球の本棚に入った。

フィリップ「検索を始めよう、キーワードは『美墨なぎさの盗まれた写真の行方』。」

地球の本棚の本が減り始める。

フィリップ「絞りきれないか・・・他にキーワードは無いかい？」

翔太郎「そうだな、なぎさ、何か無いか？」

なぎさ「え」と、『藤村先輩との思い出の写真』!!!」

すると本は一冊だけとなった。

フィリップ「なるほど・・・犯人の居場所が特定出来たよ、風都公園だ。」

なぎさ「本当に!？」

フィリップ「というわけで空を飛ぶテレビの事を!！」

士「あれはウソだ、ずらかれ!！」

士達はその場から逃げ出した。

フィリップ「ええ!？ウソ!？ちょっと!！」

.....

風都公園

男「幸せそうな奴らだ、こんなもの・・・」

「無くなれば良い、か？」

男「!?!、誰だ!?!」

男と目の前にいたのは翔太郎だった、その隙に土が後ろから男の持つ写真を取り上げてなぎさに渡した。

男「あつ!?!」

土「おれは写真を破られるのが好きじゃなくなてな。」

ほのか「良かったねなぎさ。」

ひかり「一安心です。」

なぎさ「ありがとうみんな。」

しかし

男「全然良くねえよ!?!このやろつ・・・こうなったらただじゃすません!?!」

と男はメモリを取り出した。

翔太郎「ガイアメモリ!?!」

土「何!?!」

「スパイ!?!」

男はスパイのガイアメモリを手の平に差し込み忍者のような黒いド
ーパントになった。

士「ちつ。」

なぎさ「かつ、怪物!？」

ほのか「なぎさ!?!」

ひかり「変身です!?!」

しかし

翔太郎「いや!?!ここは俺たちがやる、士!」

士「ああ!?!」

すると翔太郎の携帯電話がなった、亜樹子だ。

翔太郎「んだよ亜樹子!?!今は話してる場合じゃあ!?!」

しかしどうやら亜樹子は慌ててるような声をしていた。

亜樹子「大変だよ翔太郎君!?!フィリップ君が空を飛ぶテレビが
ウソって聞いて倒れちゃったのお!?!」

翔太郎「なあにい!?!」

士「おい!?!どうすんだよ!?!フィリップいないと変身出来ないん
だろ!?!」

なぎさ「やっぱり私達も 翔太郎「大丈夫だ!!」？」

翔太郎は帽子を押さえながら言った。

翔太郎「こんな事は想定内だ安心しろ。」

ひかり（その割にはあわててたような？）

すると翔太郎はジョーカーメモリを左手に持ち右手にスロットが一つしかないドライバーを構えた。

士「なるほど、準備は万端らしいな・・・変身。」

『カメンライド!! デイケイド!!』

士はデイケイドドライバーでデイケイドに変身、一方翔太郎はドライバーを付けジョーカーメモリをスロットに入れると同時に左手で拳を作り腰のあたりで構え右手でも拳を作り腕を曲げて斜めに構える。

翔太郎「変身。」

そして左手でスロットを開くと同時に右手の拳をJの形に変えた。

『ジョーカー!!』

UJU

第12話 Fの落ち込み/2人で2人のライダー

『ジョーカー!!』

翔太郎はなんと仮面ライダーWに類似している真っ黒な仮面ライダー・ジョーカーに変身したのだ。

ドーパント「なっ、仮面ライダー!?!」

なぎさ「そうだ!!翔太郎さん仮面ライダーだったんだ!!」

ほのか「でも前回の時と姿が・・・」

ひかり「違いますね。」

ジョーカーは手首をひねりながら言った。

ジョーカー「俺は仮面ライダー・・・ジョーカー。」

ディケイド「ハードボイルドのつもりか?」

ジョーカー「うるせえなあ、行くぞ。」

ディケイドはライドブッカーをソードモードにしてドーパントを斬りつける。

ドーパント「ぎゃあ!?!このやろっ!?!」

しかしジョーカーがドーパントを殴り飛ばした。

ドーパント「まっ、まずい!!」

ドーパントは何やら忍者のようなポーズをとった。

デイケイド「何だ?」

ジョーカー「何でも良い、勝負だ。」

ジョーカーはメモリをマキシマムスロットに入れた。

『ジョーカー!!マキシマムドライブ!!』

ジョーカーの右手に力がたまる。

ジョーカー「ライダーパンチ!!」

ジョーカーは走り出しドーパントに殴りかかった。

ジョーカー「おらあ!!」

ドーパント「ぎゃあ!!」

しかしジョーカーが殴ったドーパントはなんとただの人形だった。

ジョーカー「何!？」

すると声が響いた。

「変わり身の術だ!!おのれ仮面ライダー!!覚えてろ!!」

ディケイド「悪人がよく言う言葉だな。」

.....

一同はとりあえず事務所に戻ったが

翔太郎「フィリップ、検索・・・出来ないな。」

フィリップは寝込んでいた。

亜樹子「翔太郎君どうしよう!？」

士「おい、俺達はどうすんだ?」

するとなぎさは

なぎさ「翔太郎さんを手伝うよ、助けてくれたお礼にね。」

ほのか「そうね。」

ひかり「良いですね。」

士「仕方ない。」

だがフィリップは空を飛ぶテレビ事件で作動不能である。

翔太郎「おい、フィリップー。」

フィリップ「空・・・飛ぶ・・・テレビ・・・」

翔太郎「あゝ、どうすんだよ土、お前がまいた種だぞ？」

土は少し頭を抱え考え込む、そして

土「フィリップ、スーパー戦隊シリーズについては調べたか？」

フィリップ「ゴレンジャーからゴーカイジャーまで検索済みだ。」

土「ゴレンジャーやカラーレンジャーについては？」

するとフィリップは飛び上がった。

フィリップ「ウソでは無いね？」

土「これに関してはウソじゃない。」

フィリップ「翔太郎！！キーワードを！！」

翔太郎「土・・・お前すげえよ。」

フィリップは地球の本棚に入った。

フィリップ「検索を始めよう、キーワードは『スパイダーパント』。

」

本棚が消えていく、そしてフィリップはもう一つのキーワードを入れた。

フィリップ「『目的』。」

すると本が一冊だけとなりフィリップが読み上げる。

フィリップ「なるほど、どうやら彼は数日前に女性にふられてその腹いせに幸せの証を壊す事で自分が他人の幸せの壊したような架空の快感を得ているようだ。」

なぎさ「タチ悪いわねそれ。」

士「それでガイアメモリの能力は？」

士の問いにフィリップは答えた。

フィリップ「スパイのガイアメモリは忍者のように気配を消す事が出来るようだ。」

翔太郎「気配を消すか・・・ならこつそり家に忍び込んで犯行を行うのも可能だな。」

フィリップ「あともう一つ、忍術を使えるんだ。」

ひかり「そういえばさっき変わり身の術を使っていましたね。」

なぎさ「じゃあ忍術で家に忍び込んで気配を消して写真を？」

士「そういう事になるな。」

フィリップ「今彼は風都港の第1倉庫にいるみたいだ。」

翔太郎「よし、行くぜ。」

一同は風都港の第1倉庫に向かった。

.....

風都港第1倉庫

男「くそお、仮面ライダーめ・・・次こそは!!」

「見つけたぜ!!」

男「なっ!?!」

翔太郎達はついに男を追い詰めた、翔太郎はダブルドライバーを装着しジョーカーメモリを構える。

翔太郎「フィリップ!!」

フィリップ「準備は出来ている。」

フィリップはサイクロンメモリを構える。

『サイクロン!!』

『ジョーカー!!』

翔太郎、フィリップ「変身!!」

フィリップはメモリをダブルドライバーに差し込むと意識が翔太郎に移り倒れ込む、亜樹子はそれを受け止める。

翔太郎は2本のメモリをダブルライダーに差し込み開く。

『サイクロン!!!ジョーカー!!!』

サウンドと共に翔太郎は仮面ライダーWに変身した。

W「さあ、お前の罪を数えろ（さあ、お前の罪を数えろ!!!）!!!」

士「変身!!!」

『カメンライド!!!ディケイド!!!』

士はディケイドライダーでディケイドに変身した。

なぎさ、ほのか「デュアル・オーロラウェーブ!!!」

ひかり「ルミナス!!!シャイニングストリーム!!!」

なぎさ、ほのか、ひかりは光に包まれてプリキュアに変身した。

ホワイト「邪悪な力の僕達よ!!!」

ブラック「とつととお家に帰りなさい!!!」

ルミナス「光の心と光の意思、全てを一つにするために!!!」

『スパイ!!!』

男「さっきの仕返しだあ!!」

男はスパイダーパントになり襲いかかる。

デイケイド「はあ!!」

デイケイドはライドブツカーをソードモードにしドーパントを斬りつける。

スパイ「ぐあ!？」

W「おりゃあ!!」

Wは回し蹴りをドーパントに叩き込む。

スパイ「ぎゃあ!？」

ブラック「いくよ!! ホワイト!!」

ホワイト「うん!!」

ルミナス「ルミナス!! ハーティエルアクション!!」

ルミナスはハーティエルアクションでドーパントの動きをとめる。

スパイ「う、動けない!？」

ブラック、ホワイト「たああ!!」

ブラックとホワイトはドーパントを殴り飛ばした。

スパイ「うわあ!?!」

W「こりたか? さつさとメモリを渡せ。」

しかしドーパントは立ち上がった。

スパイ「誰が渡すか!?! 影とりの術!?!」

ドーパントは忍術でブラック、ホワイト、ルミナス、ディケイド、Wの影を取り出し操りはじめた。

ディケイド「俺達の影を使ってるのか!?!」

ブラック「影!?!」

スパイ「はあ!?!」

ドーパントは影を操り一同を苦戦させる。

W「くそ!?! 力は同等か!?!」

ブラック「きりがなし!?!」

ルミナス「どうすれば!?!」

しかしブラックとホワイトの影達はマーブルスクリーンを放ち一同を吹き飛ばした。

デイケイド、W「うわあああ！？」

ブラック、ホワイト、ルミナス「きゃあああ！？」

スパイ「ははは！！お前達の幸せを奪ってやる！！」

するとデイケイドは一枚のカードを取り出した。

デイケイド「翔太郎、フィリップ、ちょっとくすぐりたいぞ。」

『ファイナルフォームライド！！ダダダダブル！！』

そしてデイケイドはWの背中に両手を当て横に開くとなんとWは緑と黒の2人のライダーとなった。

ブラック「ダッ、ダブルが割れたあ！？」

ホワイト「しかも！？」

ルミナス「2人に！？」

ドーパントは影を操ろうとしたが

スパイ「何！？影が無い！？」

W・C「君はさつき僕達の影を取り出した、だから君は僕や翔太郎の影を取り出す事が出来ない。」

W・J「しかもその影は仮面ライダーWの物、影が無いこの仮面ライダーWジョーカージョーカーにサイクロンサイクロンの影を操る事は出来ない。」

デイケイド「つてさつき俺が考えた。」

スパイ「おのれえ!!!やれ!!!影達!!!」

影達はデイケイド達に襲いかかるがデイケイド、ジョーカージョーカー、サイクロンサイクロンは同時に高く飛び上がった。

『ファイナルアタックライド!!!デイデイデイケイド!!!』

3人「トリプルエクストリーム!!!」

トリプルエクストリームにより影達は消滅、デイケイド達のもとに戻った。

スパイ「そつ、そんな・・・俺の最強の技が・・・!?!」

ドーパントが気づいた時にはもう遅かった、ブラック、ホワイト、ルミナスが必殺技の体勢に入っていたのだ。

ブラック「漲る勇氣!!!」

ホワイト「溢れる希望!!!」

ルミナス「光輝く絆と共に!!!」

ブラック、ホワイト「エクストリーム!!!」

ルミナス「ルミナリオ!!!」

ハート型の光線がドーパントを襲い男を体からスパイガイアメモリ

が出た。

Wはもとの姿に戻った。

デイケイド「一件落着だな。」

ブラック「だね!!」

ホワイト「やっと事件解決か。」

しかしWはガイアメモリを拾い疑問に思った。

W「おいフィリップ……このメモリ……（間違いない……だが何故!?!）」

そのガイアメモリは先端が青かった。

……

メガシヨツカー本部

シャドウ「あなた達が新しい幹部?」

目の前にはおぞましい姿の者達がいた。

ベリアル「俺様はカイザーベリアルだ、よろしくな。」

???「私はブラッディ、ナイトメアの元幹部。」

???「俺は不死身のグローザム様だ。」

ダークデイケイド「大分役者は揃ったな。」

しかしそこに

????「俺を忘れるな。」

そこにある男が現れた。

王蛇「なんだあ？お前はあ？」

男「俺はこの組織の救世主、大道克己……またの名を……」

男は白いガイアメモリを取り出し巻いてあるベルトに差し込んだ。

『エターナル!!』

シャドウ「なっ、何!？」

ダークデイケイド「ほう。」

王蛇「お〜。」

グローザム「なるほどな。」

ブラッディ「……」

ベリアル「ははあ!!」

そして首領の声が響いた。

首領「ほう、名を名乗ってもらおうか？」

????「俺の名は仮面ライダー・・・エターナル!!」

首領は甲高く笑った。

首領「はははは!! 役者は揃った、メガショットカーの幹部完成だ!!」

ついにメガショットカーの幹部、ダークデイケイド、王蛇、シャドウ、グローザム、カイザーベリアル、ブラッディ、そして仮面ライダーエターナルが揃った、果たしてどうなるのか？

つづく

第13話 黒い巨人

メガシヨツカー本部

ダークデイケイド「シャドウ、カオスロイド計画はどうだ？」

シャドウ「4体は完成したわ、カオスロイドU、カオスロイドS、カオスロイドJ、そしてカオスロイドA。」

カオスロイド、かつてウルトラマンの故郷であるM78星雲を滅ぼそうとしたウルトラマンをもとに作られた闇の巨人、本来はU、S、Tの3体だけだがメガシヨツカーは新たにカオスロイドを作り出したのだ。

ダークデイケイド「他はどうなる？」

シャドウ「Mは何かなるは、だけど他は神秘の光、研究には時間が・・・ん？」

シャドウは何かを聞いた、どうやら王蛇が暴れているようだ。

王蛇「あああああああー！」

シャドウ「だ、大丈夫なの？」

ダークデイケイド「今はシュミレーションシステムでイライラをおさえてるが奴は本当に危険だ、既にシュミレーションシステムの用意した敵は全滅しかけてる。」

シャドウ「あいつ本当に恐ろしいわ。」

.....

その頃咲、舞、満、薫はハヤタ、ダン、郷、北斗と写真館で話していた、前回同様写真館は集会所のようだ。

咲「その後アンヌさんとはどうなったんですか？」

ダン「俺がウルトラセブンである事を自ら明かし故郷に帰ったよ。」

舞「うう、せつない。」

北斗「せつない話なら俺も夕子と別れた辛い過去があるぞ。」

郷「俺はMATのみんなに迷惑かけたなあ。」

薫「そうなんですか？」

満「へえ。」

ハヤタ「みんなそれぞれ色々な過去があるという事だな。」

舞「そうですね。」

夏海「楽しそうですね。」

士「いつからここは集会所になったんだ？」

キバーラ「良いじゃない別にい。」

するとハヤタ達が

ハヤタ「おっともうこんな時間か、じゃあ失礼するよ。」

ダン「俺も行くとする。」

咲「ありがとうございます。」

ハヤタ達は帰って行った。

士「まったく、何でここが集会所に……」

「笑いのツボ……！」

ドスっ……！！

士「ぐあ……！」

夏海「の、のぞみちゃん！？いつの間に……！」

のぞみはいつの間にか写真館に来ていた。

のぞみ「どうだ士先生……！」

しかし

士「……なんで……お前は……いつもいつも……」

のぞみ「あれ？士先生……！」

夏海「のぞみちゃん、ネガティブのツボを押しちゃいましたね。」

キバーラ「きゃはははは！！ネガティブな土もいつける！！」

咲「じゃあ、おじゃましました。」

何気のない空気の中咲達は写真館を出た。

夏海「笑いのツボはここですよ？」

ドスッ

土「はははは！！やめはははは！！」

のぞみ「えい！！」

ドスッ

土「なんで・・・お前達は・・・」

のぞみ「あれえ？」

キバーラ「きゃはははは！！のぞみの新しい技ねえ？」

・・・

ハヤタ「しかし世界が融合か。」

ダン「嫌な事が起きなければ良いが。」

しかしその願いむなしくいきなり空が暗雲に包まれた。

郷「なんだ!？」

北斗「メガシヨツカーか!？」

その暗雲からはなんとカオスロイドが現れた。

ダン「あれは、カオスロイド!？」

ハヤタ「しかも新しい奴もいる!？」

カオスロイドU、S、J、Aは街を破壊し始めた。

郷「兄さん達が言っていたウルトラマンのコピー!？」

北斗「まさか俺達まで!？」

ハヤタ「仕方ない、行くぞ!」

ハヤタはベータカプセル

ダンはウルトラアイ

郷は手を高く掲げ

北斗は両手のウルトラリングを合わせウルトラマンに変身した。

カオスロイド達「……」

カオスロイド達は戦闘体勢に入る。

ウルトラマン（相変わらず不気味な奴らだ。）

ジャック（行きましよう！！）

ウルトラマン達はカオスロイド達に立ち向かう。

.....

その頃

咲「どうしたのフラッピ?」

舞「チョッピ?」

満「ムーブにフープまで、どうしたのよ?」

フラッピ、チョッピ、ムーブ、フープは震えていた。

フラッピ「邪悪な気配を感じるラピ!!」

チョッピ「光の気配も感じるチョピ!!」

満「まさかハヤタさん達?」

フープ「ここから近いフープ!!」

ムーブ「急ぐムーブ!!」

薫「わかったわ!!」

4人はフラッピ達案内でウルトラマン達のもとに向かった。

く
く
く

第14話 カオスロイド

ウルトラマンはカオスロイドUに跳び蹴りを叩き込む倒れ込んだところを両足をつかみ回転投げで投げ飛ばした、しかしUは受け身をとって体勢を整える。

ウルトラマン（先手必勝だ！！）

ウルトラマンは八つ裂き光輪を放つがUはそれをかわす。

セブンはSの攻撃を受け止めるが至近距離からエメリウム光線を放たれ吹き飛ばされた。

セブン（ぐあ！？）

セブンはなんとか受け身をとって体勢を整えエメリウム光線を放ちSを吹き飛ばした。

ジャックはJを殴りつけ腹に蹴りを叩き込むがJに足を掴まれ投げ飛ばされた、そのままジャックはウルトラブレスレットでウルトラスパークを放ちJを苦しめる。

ジャック（くっ、互角か。）

一方エースとAは互いにメタリウム光線を打ち合っていた。

エース（く・・・）

しかしAはパンチレーザーも同時に放ちエースは吹き飛ばされた。

エース（うわあ！？）

ウルトラマン（前より強くなっている!!）

セブン（このままではやられてしまう!!）

ジャック（みんな、合体光線だ!!）

エース（よし!!）

4人のウルトラマンは同時に光線を放つ、カオスロイドも対抗し合体光線を放つ。

セブン（長くは保たない!?!）

エース（くそお!!）

そこに

「プリキュア!!!スパイラル・ハートスプラッシュスター!!!」

鮮やかな光線がカオスロイドを襲う。

ウルトラマン（おお!!）

ジャック（来てくれたのか!!）

そこにはキュアブルーム、キュアイーグレット、満、薫がいた。

イーグレット、薫「聖なる泉を汚す者よ!!」

ブルーム、満「阿漕な真似は、お止めなさい!」

カオスロイドはゆっくりと立ち上がった。

ブルーム「うわぁ・・・そっくり。」

満「しかも不気味ね。」

イーグレット「ウルトラマンを援護しましょう!」

薫「了解!」

ブルームはウルトラマンの肩に乗った。

ブルーム「どうしますか?」

ウルトラマン（私が奴の動きを止める、その際にカラータイマーを狙ってくれ。）

ブルーム「はい!」

ウルトラマンは手を十字に組み回転しウルトラリングを放ちUは拘束された。

ブルーム「はぁ!」

そしてブルームがUのカラータイマーを殴りつけた、しかし

ブルーム「いったぁぁい!?こんなにかたいの!」

Uはついにリングを壊しブルームを殴り地面に叩きつけた。

ブルーム「きゃあ!?!」

ウルトラマン（ブルーム!?!）

ウルトラマンはウルトラアタック光線を放ちUを吹き飛ばした。

セブン（ディア!?!）

セブンはアイスラッガーでSが放つエメリウム光線を真っ二つにし満の蹴りを腹にくらい倒れ込んだ。

満「絶対に倒す!?!」

一方、AとJが協力しエース、ジャック、薫、イーグレットを襲う。

イーグレット「はあ!?!」

薫「たあ!?!」

イーグレットと薫はバリアをはり攻撃を防ぐ。

イーグレット「北斗さん!?!郷さん!?!」

薫「今のうちに!?!」

エースはパンチレーザースペースシャル、ジャックはスペシウム光線を放ちAとJを吹き飛ばした。

ウルトラマン（こうなったら連携切断技だ！！）

セブン（わかった！！）

ジャック（行くぞ！）

エース（よおし！！）

まずジャックがウルトラスパークを放つ、ウルトラスパークはカオスロイド達をかくらんさせる。

セブン（はぁ！！）

そしてセブンはアイスラッガーを放つ、カオスロイド達はそれを避けるがウルトラマンの八つ裂き光輪がカオスロイド達を襲う、たまたま空を飛ぶカオスロイド達だが上空で待ち伏せしていたエースのバーチカルギロチンの餌食になり地面にたたき落とされた。

ブルーム「みんな！！行くよ！！」

イーグレット、満、薫「うん！！」

プリキュアの4人は手を掲げた。

イーグレット「精霊の光よ！！」

薫「命の輝きよ！！」

満「希望へ導け！！」

ブルーム「全ての心!!」

4人は手を突き出した。

「プリキュア!!スパイラル・ハートスプラッシュスター!!」

プリキュアから眩い光のエネルギーが放たれた、カオスロイド達は慌てて空を飛び逃げ去った。

ブルーム「あっ!?!逃げた!!」

イーグレット「追いかけないと!!」

しかし

ウルトラマン（いや待て!!今はこの事をみんなに伝えるべきだ。）

セブン（そうすればみんな慌てずにすむだろう。）

薫「そうですね。」

満「写真館に行こう!!」

8人はもとの姿に戻り写真館に向かった。

.....

シャドウ「カオスロイドが逃げた!?!」

エターナル「思わぬ事にプリキュアが乱入したらしい。」

ダークデイケイド「大丈夫だ、残りのカオスロイドも完成間近だ。」
すると首領の声が響いた。

首領「それは楽しみだ、それよりエターナルよ、王蛇はどうだ？」
エターナル「グローザムと戦っている、奴は死なないから相当たま
ったイライラを解消してるだろう。」

ブラッディ「愚かな・・・」

ダークデイケイド「そう言うな、それよりこんな奴を連れてきたぞ。」

ダークデイケイドはある青年を呼び出した。

シャドウ「あんたは？」

????「いやゝ素晴らしい！！あなた方の力になれるなんて光栄だ
！！！」

ダークデイケイド「前ふりは良い、さっさと変身しろ。」

????「はい。」

そう言うと青年はカードデッキを持ち両手をクロスにして突き出す
とベルトが巻かれる、そして横に大きく開いた。

????「変身！！！」

片手を回すと同時にカードデッキをベルトに装着すると青年の姿が変わった。

エターナル「ほう、仮面ライダーだったか。」

首領の声が響いた。

首領「名はなんだ？」

????は軽くステップを踏み名を言った。

????「僕は佐野満、仮面ライダーインペラー!!必ずあなた方のお役にたってみせますよ!!」

ダークデイケイド「活躍を楽しみにしてるぞ、蜘蛛男とソレワターセに戦闘員を従えていけ。」

インペラー「わかりました、必ずお役に立ちます!!!!」

しかしインペラーの心は違った。

インペラー（今度こそ・・・幸せに・・・なってる!!）

そしてインペラーとある女の悲しい物語が始まるうとしていた。

UJU

第14話 カオスロイド（後書き）

次回、仮面ライダーインペラーの物語

第15話 幸せを求める男

4月1日、光写真館

ラブ「こんにちは〜。」

祈里「あれ？士さんは？」

ラブ達フレッシュメンバーは光写真館に訪れ士がいない事に気づいた。

夏海「ああ、士君ですか？黄昏てくるって外に出ました。」

美希「ええ！？」

せつな「何が何があったんですか！？」

.....

それは2日前に遡る。

夏海「良いですかのぞみちゃん？」

ドスー！！

士「はははは！？もつやめはははは！？」

のぞみ「おりゃあー！！」

ドス!!

士「良い加減に・・・してくれ・・・」

夏海「うくん、押す所は間違っていないはずなのに何故でしょう?」

まだ笑いのツボを探していた。

.....

夏海「それからのぞみちゃんいきなり罪悪感に襲われて寝こんでしまつて。」

ラブ「ええ!!?大変!!!ブツキー、治療に!!!」

祈里「あたし獣医よラブちゃん、しかも見習い。」

一同はため息をついた、すると

????「すみませくん。」

夏海「?、はい何でしょう?」

ある青年が写真館に入ってきた。

????「僕佐野満つて言います、あなた方がプリキュアって事も知ってます。」

「ええええええええええ!!?」

一同は驚愕、とりあえず話を聞く事にした。

佐野「実は僕仮面ライダーでして、戦いの後家に向かっていたら偶然あなた方を見つけまして、いやゝ・・・」

と佐野は机を叩く。

佐野「お強い！！あなた方と協力すれば絶対世界を救えます！！ぜひ協力を！！」

美希「ラブ、なんか怪しいわよ、口車にはのらない方が・・・」
（小声）

ラブ「本当ですかあ！？」

祈里「ええ！？ラブちゃん！？」

せつな「ちよつとラブ！？」

ラブは佐野の褒め言葉に乗ってしまった。

佐野「ぜひ協力を！！」

ラブ「もちろん！！」

夏海（なんだか引つかかるな、土君に相談しましょう。）

・・・

その頃ある会社では

「???」ちよつと編集長!!金の狸なんて根も葉もない事調べられないですよ!?!」

編集長「それを調べるのが俺達の仕事だ、さつさと行け城戸。」

「???」はあく、わかりましたわかりましたよ!?!」

城戸真司、一見普通の会社の平社員だが実はミラーモンスターから人々を守ろうと戦う仮面ライダー龍騎だ。

真司はバイクを走らせる。

真司「何が金の狸だよ、つたくどう探せって・・・」

すると歩道を歩いていた土が真司に気づきカメラのシャッターを押した。

真司「あれ?今のつて!?!」

真司はバイクを止める。

土「よう真司。」

真司「やっぱり土!?!」

.....

真司「世界が融合か・・・ってまた!?!」

土「まただ、それでさっき夏海から連絡があつたんだがカードデッ

キを持った仮面ライダーの男がラブ達に仲間にしてくれって来てるんだがお前知ってるか？」

真司「仲間にしてくれ？・・・まさかあいつか！？」

真司の頭にはまっさきに佐野が思い浮かんだ。

2人は写真館に向かった。

写真館

夏海「土君！真司さんまで！？」

真司「佐野は！？」

祈里「それがラブちゃんと出掛けてしまっただ。」

土「丸め込まれたか。」

・・・

カオルちゃんのドーナツ屋

ラブ「カオルちゃん！！ドーナツお願い！！」

カオル「おっ、元気だねお嬢ちゃん。」

ラブは佐野を誘いドーナツ屋にきていた。

佐野「美味しい！！さすがラブさん！！」

ラブ「いや〜、それほどでも〜。」

するとカオルが

カオル「ほい、お二人ともアイスコーヒー。」

ラブ「ありがとうカオルちゃん!!」

ラブはストローでコーヒーを飲んだ、そして

ラブ、佐野「熱っ!?!」

コーヒーはアイスコーヒーではなくホットコーヒーだった。

ラブ「カオルちゃんアイスコーヒーって言ったじゃん!?!」

カオル「お嬢ちゃん忘れたのかい?今日はエイプルフルだよ、グハツ!!」

ラブ「もう〜。」

佐野「あはははははは!!」

ラブ「佐野さん笑わないでください〜・・・ぷっ、あはははははは!!」

2人は幸せそうに笑ったしかし、忘れてはいけない佐野満はメガシヨツカーのスパイである事を。

佐野(?!、なんだこの気持ち・・・感じた事ない・・・)

ラブ「佐野さん？」

佐野「あっ、何？」

ラブ「これからどうしますか？」

佐野「これから・・・もう帰ろう、ほら遅くなったらいけないし！」

ラブ「そうですね、じゃあ帰りますか！！」

2人は別れ帰って行った、ラブは一度写真館に寄った。

夏海「ラブちゃん！！」

ラブ「？、どうしたのみんな。」

真司「佐野は！？」

ラブ「あっ、佐野さんのお友達ですか？」

士「ラブ、よく聞け・・・」

ラブ「？」

.....

佐野「あの気持ちは何だったんだ？・・・一体・・・どんなに強い奴につけ込んでも得られた事がない・・・一体何だったんだ・・・」

.....

ラブ「.....ウソよ。」

真司「ウソじゃない、強い奴につけ込んで必要が無くなれば切り捨てる、それがあいつのやり方なんだ!!」

ラブ「ウソだよ!! 今日エイプフルだからみんなを騙そうとしてるんでしょう!?! あんなに優しい人が悪い人はずない!!」

美希「ラブ!! ウソじゃないわ!!」

祈里「この人の言っている事は本当よ。」

せつな「実際真司さんはその被害にあってるの!!」

夏海「ラブちゃん信じてください!!」

士「.....」

ラブはうつむき震えはじめた。

ラブ「ウソだよ!!」

ラブは写真館を飛び出した、外は大雨になっていた。

美希「ラブ!!」

夏海「ひどい雨が.....ラブかなり薄着でしたよね!?!」

せつな「私かなんとかするわ!!」

士「真司、今日は泊まっていけ、色々聞きたい事がある。」

真司「わかった。」

現実を受け入れられないラブ、自分に疑問を抱く佐野満、そしてとても残酷な結末が待っていた。

つづく

第16話 幸せ

翌日、ラブの家

せつな「ラブ、昨日体ちゃん拭いた？風邪ひいてない？」

せつなは昨日雨の中傘もささず出て行ったラブを心配するが

ラブ「ほつといて!!」

ラブは部屋にこもってしまった。

せつな「ラブ・・・」

・・・

メガシヨッカー本部

ダークディケイド「おい、インペラー聞ってるのか？」

インペラー「はい!?!い、いやだな〜聞いてますよ〜。」

エターナル「・・・」

インペラーはラブの事を何故か忘れる事が出来ないらしい。

インペラー（もう一度会えば・・・もしかしたら・・・）

インペラーは変身を解きラブに会いに行く。

.....

ラブ「わかんないなら・・・佐野さんに直接!!」

ラブは家を飛び出した。

せつな「ラブ!? みんなに知らせないと・・・」

せつなはリンクルンで土達に連絡をした。

.....

ラブと佐野は走っているところを偶然はちあわせになった。

ラブ「さ、佐野さん・・・」

すると佐野は

佐野「いや〜ラブさん、また会いましたね〜、今日も遊びに行きますか?」

ラブ「あっ・・・はい!! (そうだよ、佐野さんが悪い人なはずない。)」

佐野とラブは近くの公園に行った。

佐野「いや〜ラブさんと話していると楽しいなあ。」

ラブ「・・・あの、佐野さん。」

佐野「はい？」

ラブ「私の友達が佐野さんが悪い人だって言うんだけど・・・」

佐野「!？」

その場にしばらく沈黙が続いた。

佐野「そ、そんなわけないじゃないですか、嫌だなあもう。」

ラブ「・・・ですよね、ですよね!?!」

ラブは安心した、すると佐野はカードを一枚ラブに差し出した。

佐野「受け取ってください、歓迎してくれたお礼です。」

ラブ「ええ!?!?そんなお礼なんて・・・」

佐野「遠慮しないでください。」

ラブ「・・・じゃあお言葉に甘えて。」

ラブは佐野からカードを受け取った。

「きゃああああ!?!?」

ラブ、佐野「!?!?!」

突如悲鳴が響いた、2人が悲鳴の聞こえた方向を見ると蜘蛛男とシ

ヨッカー戦闘員が市民を襲っていた。

ラブ「なんの罪もない人達を!!!許せない!!!」

ラブはリンクルンを取り出しキュアピーチに変身した、そしてそこにベリー、パイン、パッション、士、真司が駆けつける。

ベリー「ピーチ!!!」

ピーチ「みんな・・・」

真司「佐野!!!」

佐野「あっ・・・」

佐野は真司がいる事に驚いた。

士「ラブ、どうしても佐野をかばうか？」

ピーチ「当たり前だよ!!!佐野さんは悪い人なんかじゃない!!!」

士はドライバーを装着した。

士「なら力づくでもなんとかするしかないな、真司。」

真司「・・・わかった。」

士はカードをバツクルに差し込み、真司は龍の紋章が書かれたカードデッキを前に突き出しベルトを装着、右手を斜めに突き出しカードデッキをバツクルにはめ込んだ。

真司、士「変身!..!」

「カメンライド!ディケイド!..!」

士は仮面ライダーディケイド、真司は仮面ライダー龍騎に変身した。

ベリー「ピーチと・・・戦わなくちゃいけないの?」

パイン「そうなるよね。」

パッション「でも・・・」

ピーチ「私は佐野さんを守る、佐野さんは怪人達を・・・」

するとピーチの体に衝撃が走り、ピーチは吹き飛ばされた。

一同「!?!?」

インペラーだった、仮面ライダーインペラーに変身した佐野がピーチを襲ったのだ。

ピーチ「さ、佐野さん?・・・何で・・・」

龍騎「佐野!!お前やつぱり!..!」

インペラー「当たり前でしょ?これが僕のやり方、気づかないなんて本当に馬鹿だね」ラブさんは。「」

ピーチ「そ・・・そんな・・・」

ディケイド「ラブ、目を覚ませ・・・今は落ち込んでる場合じゃない！！行くぞ！」

ピーチ以外の全員は怪人達に立ち向かった。

「ソードベント」

龍騎はソードベントで剣を取り出し怪人達を斬りつけていきディケイドはライドブツカーをガンモードにし怪人達を撃ち抜いていく。

ディケイド「はあ！！・・・おいラブ！！早く来い！！」

しかしピーチは佐野に裏切られた事にショックを受け放心状態だった。

ベリー「ピーチ！！」

パイン「ちょっと邪魔しないで！！」

パッション「はあ！！」

ベリー、パイン、パッションは怪人達を殴り倒していくがさすがにピーチがいなければラチがあかないらしい。

蜘蛛男「終わったな。」

インペラー「さあ〜て蜘蛛男さん、ソレワターセを呼び出して。」

蜘蛛男はソレワターセを呼び出して一同を襲撃、吹き飛ばした。

デイケイド、龍騎「うわあああ!?!」

ベリー、パイン、パッション「きゃあああ!?!」

一同は地面に叩きつけられた。

ピーチ「……!?!」

ピーチは一同に駆け寄る。

ピーチ「そんな……助けて……助けてよ!!佐野さん!!」

インペラー「だから……今までの全部ウソなんだよお!!」

インペラーはピーチを蹴り倒し、首を掴む。

ピーチ「ぐっ……あっ……」

インペラー「何なんだよ!?!あんな何なんだよ!?!何で俺を信じてるんだよ!?!裏切ったんだぞ!?!」

インペラーはピーチを投げ飛ばした、ピーチは何とか立ち上がり言った。

ピーチ「私……佐野さんは悪い人じゃないって……思ってるから。」

インペラー「何で……何で!?!」

するこ

蜘蛛男「ええいつつとうしい!!」

蜘蛛男はインペラーを押しつけて戦闘員の持つ剣を持ちピーチに近づいた。

インペラー「何の真似だ!？」

蜘蛛男「いつまでもごちゃごちゃ話してるなら・・・最初からこうすれば良いだろう!？」

蜘蛛男はピーチに剣を振り上げた。

ピーチ「!?!」

龍騎「まずい!？」

ディケイド「くそっ!！」

ベリー「駄目!！」

パイン「ピーチ!！」

パッション「やめてえ!！」

ピーチは目をつぶった、しかし痛みが感じられない、ピーチはそつと目をあけるとなんと目の前にインペラーが立っており蜘蛛男に斬られていた。

インペラー「ああ・・・」

ピーチ「佐野さん!？」

蜘蛛男「なっ!？」

インペラーは変身が解け倒れ込んだ。

蜘蛛男「予想外だ・・・一旦ひくぞ!!！」

龍騎「あっ!!させるかあ!!！」

龍騎はカードを使った。

「ファイナルベント」

龍騎は契約モンスター・ドラグレッターを呼び出して高く飛び上がりドラグレッターの吐いた炎にのって必殺技ドラゴンライダーキックを放った。

龍騎「だあああ!!！」

蜘蛛男「ぎゃあああ!!？」

蜘蛛男は爆散した、龍騎は佐野に駆け寄り身を起こさせた。

龍騎「佐野!!お前何で!？」

佐野は意識が薄れていく中口を開いた。

佐野「わからない・・・ただ・・・俺は・・・」

他のメンバーも駆け寄り話を聞いた。

佐野「幸せになりたかった・・・本当の幸せになる方法を・・・知らなかった・・・あの時だって幸せになれたのに・・・結局全部失った・・・」

佐野は手をゆっくり伸ばした、佐野の体は砂のように消えはじめた。

佐野「ラブさん・・・あなたといると・・・変な気持ちになるんだ・・・」

ピーチ「変な・・・気持ち？」

佐野「あなたといると・・・心がおどつたり・・・一緒にドーナツを食べに行った時も・・・何故か自然と・・・笑顔になれた・・・何なんだろう・・・」

ピーチは佐野の手を握る。

ピーチ「それが・・・幸せです。」

佐野「幸せ・・・俺は・・・本当の幸せに・・・なれたのかな？」

ピーチ「はい・・・佐野さんは・・・幸せをゲットしましたよ。」

佐野「そうか・・・これが・・・」

そして佐野は笑みを浮かべて消滅した。

ピーチ「佐野さん!？」

龍騎「佐野・・・お前・・・自分の幸せのために死ぬなんて・・・馬鹿だよ。」

ピーチは立ち上がり戦闘員、ソレワターセを睨みつける。

ピーチ「あなた達だけは・・・絶対に許さない!!！」

すると佐野から受け取ったカードが輝きだした。

つづく

第16話 幸せ（後書き）

まさかの3話完結になってしまいました

第17話 インペラーの力(前書き)

つづきと次回のお話をちょっとだけ。

第17話 インペラーの力

ピーチ「なっ、何!?!」

佐野のカードはディケイドの手に渡った。

ディケイド「これは・・・インペラーのファイナルベント?」

そのカードはディケイドのライドカードへと変わった。

ディケイド「よし!?!」

ディケイドはカードをバックルに差し込んだ。

「アタックライド!?!インペラー!?!」

するとピーチの足にインペラーの武装が装着された、その武装は桃色に変わっていた。

ベリー「あれはインペラーの武装?」

パイン「でもちゃんとピーチの色になってるわ!?!」

パッション「どういう事?」

龍騎「佐野がラブちゃんに力を貸したって事か!?!」

ピーチ「力が・・・佐野さんの力!?!」

戦闘員「イイイイイ!!」

戦闘員はピーチに襲いかかってきた。

パッション「ピーチ!!」

ピーチ「はあ!!」

ピーチはなんと驚くほど速いスピードで走り出した。

ベリー「速い!?!」

ピーチ「やああ!!」

ピーチはステップを踏みながら戦闘員を蹴り倒していく。

ディケイド「なるほど、足が強化されたのか。」

ピーチ「だあああ!!」

ピーチは回し蹴りで戦闘員を一掃した。

龍騎「すげえ!」

するとソレワターセがピーチに襲いかかる。

ピーチ「きゃあ!?!」

ベリー「ピーチが危ないわ!?!」

ディケイド「援護だな。」

ディケイドはカードを差し込んだ。

「ファイナルフォームライド!!!リユリユリユ龍騎!!!」

ディケイド「ちょっとくすぐったいぞ。」

龍騎「よっしゃ!!!」

龍騎はファイナルフォームライドによってリユウキドラグレッターになりディケイドを乗せソレワターセに向かって飛んでいく。

パッション「私達もピーチを!!!」

ベリー、パイン「うん!!!」

ベリーはベリーソード、パインはパインフルート、パッションはパッションハーブを構える。

「アタックライド!!!ストライクベント!!!」

ディケイドの手にドラグレッターの頭部の形をした物が装着される、ディケイドはそれを突き出すと火球が放たれる、同時にリユウキドラグレッターも火球を放ちソレワターセを応戦する。

ディケイド「今だ3人共!!!」

ベリー「プリキュア!!!エスパワールシャワー……」

パイン「プリキュア!! ヒーリングプリアー……」

パッション「プリキュア!! ハピネス!!」

ベリー、パイン「フレエエエエツシュ!!!!!!!!!!」

パッション「ハリケエエエエエン!!!!!!!!!!」

3人の技がソレワターセを浄化していくがまだパワーが足りない。

ベリー「ピーチ!!」

パイン「あなたが決めて!!」

パッション「お願い!!」

ピーチ「みんな……うん!!」

ピーチは多くのハート型のエネルギーを放つ、ソレワターセはそれをくらしい段々弱まる、そしてピーチがソレワターセに突っ込む。

ピーチ「プリキュア!! ピーチダイバダー!!」

ピーチの最後の飛び膝蹴りがソレワターセに炸裂、プリキュアのエネルギーがソレワターセに流れる。

ソレワターセ「シュワアアアシュワアアア……」

ソレワターセは浄化され消滅した。

.....

数時間後、光写真館

美希「すいませくん。」

士「お前達か、ラブならいきなり来たと思ったら空を眺めて動かないぞ。」

ラブは椅子に座り空を眺めて黄昏ていた。

せつな「佐野さんの事が相当ショックだったのかしら？」

真司「ちよつと不安だなあ。」

祈里「思い切つて聞いてみよう、ラブちゃん!!」

ラブ「.....」

ラブは祈里の言葉にまったく反応しない。

士「おいラブ!!仲間が来て.....」

「ZZZZZZZZ」

一同「えっ!?!」

士「お前?」

祈里「違います!!美希ちゃん?」

士は夢の事を気にしていた。

士「死ぬなよ。」

真司「あ、ああ。」

士「じゃあな。」

真司「？」

真司はバイクを走らせ去った。

.....

翌日

えりか「似合ああう!!!」

ミライ「そ、そうですか？」

士「だから何でいつもここに集まるんだよ!？」

つぼみ「まあまあ、士さん(汗)。」

ハートキャッチ組は平成ウルトラ兄弟組を集めファッションショーを勝手に開催していた。

UNU

第17話 インペラーの力(後書き)

次回はハートキャッチ組と平成ウルトラ兄弟組!!!

第18話 ウルトラファッション

えりかはミライに色々な服を着せていた。

ダイゴ「ミライ遊ばれてるなあ。」

アスカ「まあ本人は楽しそうだし大丈夫だろ？」

我夢「そうだね。」

士「しかし妙だな。」

士は何か疑問を抱いていた。

つぼみ「何が妙なんですか？」

士「えりかって言えば可愛いファッション専門だろ？なのにさっきからミライに着せているのは……」

いつき「あっ、本当だ……」

ゆり「何かのコスプレかしら？鎧やら剣やらを着せているわね。」

するとえりかは

えりか「あれ？言わなかったっけ？」

ミライ「何を……ですか？」

ダイゴ「なんで勝手に!？」

えりか「だって4人共イケメンだからさ。」

我夢「イケメンは嬉しいけど勝手に……」

アスカ「ていうかマスクかぶるからイケメンとか関係ないだろ。」

ミライ「困りましたね。」

すると

ダイゴ「仕方ない、適当にオーディション受けて落ちれば大丈夫だよ。」

士「何気にせこいな。」

ゆり「まあ得策ね。」

いつき「応援は……しなくて良いかな。」

つぼみ「そうですね。」

そしてオーディションから数日後

『合格』

平成ウルトラ兄弟組「受かったあああああああああああ!？」

エターナル「まだ俺達が戦う時ではない。」

シャドウ「そうよ。」

しかしブラッディが辺りを見渡すとグローザムがいない事に気づいた。

ブラッディ「グローザムがいない。」

ガイザーベリアル「なに!?!」

王蛇「抜け駆けか・・・イライラする・・・」

エターナル「まあ良い、奴がウルトラ兄弟を倒す事を願おう。」

・・・

舞台当日

舞台はかなり広い公園で行われるようだ、しかもかなり大規模なセットだった。

つぼみ「かなり大がかりですね。」

いつき「こういう所でファッションショーってのも良いかもね。」

えりか「でしょでしょ!?!」

ゆり「威張らないの。」

そしてついに始まったヒーローショー、しかし4人はアフレコだけで姿を見せる事はなかった、一度も。

えりか「ファクション確かめたの意味ないじゃん!？」

ミライ「そんな事いわれても(汗)」

アスカ「俺達もアフレコだけって言われて驚いたんだよ。」

えりか「とほほ、努力むなしく散りました(涙)。」

すると突然舞台のセットが爆発を起こした。

いつき「なっ!?!？」

我夢「爆発した!?!？」

そして黒い渦巻きが現れグローザムが出てきた。

ミライ「グローザム!?!？」

グローザム「ははは!?!久しぶりだなウルトラマンメビウス!?!」

つぼみ「メガショットの怪獣!?!？」

アスカ「よし、行くぜ!?!」

ゆり「私達も行くわよ!?!」

ダイゴはスパークレンス、アスカはリーフラッシュャー、我夢はエスプレンダー、ミライはメビウスブレスを構える。
つぼみ、えりか、いつきはパヒューム、ゆりはココロポットを構える。

ダイゴ「ティガアアアア!!」

アスカ「ダイナアアアア!!」

我夢「ガイアアアア!!」

ミライ「メビウウウウス!!」

つぼみ、えりか、いつき、ゆり「プリキュア!!オープンマイハート!!」

一同は変身し戦闘体勢に入る。

ブロッサム「大地に咲く一輪の花!!キュアブロッサム!!」

マリン「海風に揺れる一輪の花!!キュアマリン!!」

サンシャイン「陽の光浴びる一輪の花!!キュアサンシャイン!!」

ムーンライト「月光に冴える一輪の花!!キュアムーンライト!!」

「ハートキャッチプリキュア!!」

グローザムは4体の怪獣・ザケンナー、コワイナー、リフレクト星人、スカイドンを出現させた。

グローザム「ウルトラ兄弟は俺が相手をしよう。」

ダイナ（4対1で勝てると思ってんのか！？見下しやがって！！）

しかしメビウスはかなり警戒している。

ティガ（ミライ？）

メビウス（皆さん気をつけてください・・・奴は僕達が力を合わせても倒せるかどうかわかりません！！）

ガイア（そうなのか！？）

グローザム「無駄話は終わりだ、来い！！」

ザケンナー「ザケンナー！！」

ムーンライト「たあ！！」

一方プリキュアは4体の怪獣を相手にしていた、ムーンライトはザケンナーを蹴り倒す。

コワイナー「コワイナー！！」

コワイナーはマシンガンのような弾を連射する。

ブロッサム「ブロッサム・シャワー！！」

しかしブロッサムはブロッサム・シャワーで弾を打ち消した。

リフレクト星人「ふふふ、かかってきなさい。」

マリリン「何よ偉そうに!! おりゃあ!!」

マリリンはリフレクト星人を殴りつけるが

マリリン「いったああい!?!」

リフレクト星人はかなりかたい体をしておりちよつとやそつとな攻撃ではびくともしない。

リフレクト星人「ふふふ、その程度ですか?」

リフレクト星人は剣を振り下ろしマリリンを襲う、間髪マリリンはそれをかわす。

マリリン「うわあ!?! 危ないわね!! おりゃあ!!」

そしてサンシャインはというと

サンシャイン「……………」

スカイドン「……………」

サンシャイン「……………」

スカイドン「……………?」

サンシャインはスカイドンと睨み合っているのか、少なくともスカ

イドンは「何だ？」としか思っていないだろう。

サンシャイン「攻撃・・・しないの？」

スカイドン「・・・・・・・・ZZZZZZZZZZ」

サンシャイン「寝るな!？」

そんなこんなでウルトラ兄弟とグローザムは攻防を繰り返していた。

グローザム「そんなものか!？ウルトラ兄弟!！」

ダイナ（なんだよこいつ!！）

ティガ（ここは4人で合体光線だ!！）

ティガはゼペリオン光線、ダイナはソルジェント光線、ガイアはク
アンタムストリーム、メビウスはメビュームシールドを放ち合体さ
せ、それはグローザムに直撃した。

グローザム「ぐあああああ!？」

グローザムは粉々に砕け散った。

ブロッサム「ウルトラ兄弟が勝ちました!！」

ムーンライト「私達も決めるわよ!！」

4人のプリキュアはそれぞれ武器をかまえる。

「プリキュア!!! フローラルパワー・フォルテッシモ!!!」

フローラルパワーフォルテッシモによりザケンナー、コワイナーは
浄化された。

ザケンナー、コワイナー「アアアアアアアア・・・」

そしてリフレクト星人はその攻撃を耐えきる。

リフレクト星人「くっ! やりますね。」

スカイドン爆睡!!!

スカイドン「ZZZZZZZZZZZZ・・・」

サンシャイン「寝るな!？」

ムーンライト「リフレクト星人、しぶといわね。」

ブロッサム「考えがあります!!! マリン!!! サンシャイン!!!」

マリン「あれだね!!!」

サンシャイン「うん!!!」

ブロッサム、マリンはタクトを使う。

ブロッサム、マリン「プリキュア!!! フローラルパワー・フォルテ
ッシモ!!!」

そしてサンシャインはシャイニータンバリンを使う。

サンシャイン「プリキュア!!!ゴールドフォルテバースト!!!」

さらにゴールドフォルテバーストにより作られたひまわり型のエネルギーをフローラルパワーフォルテツシモを使った2人がぐぐり抜けると2人の体は金色に輝く。

サンシャイン「プリキュア!!!シャイニング!!!」

ブロッサム、マリ「フォルテツシモオオオオ!!!」

3人の合体技・シャイニングフォルテツシモが放たれリフレクト星人の体を貫いた。

リフレクト星人「ぐあああああ!!!」

リフレクト星人は爆散、一同は安心するが何故かメビウスは警戒していた。

マリ「どうしたのミライ?もう終わって・・・」

メビウス(まだです!!!)

すると突然冷凍ガスがダイナ、マリを包み込んだ。

ダイナ(ぐあああ!!!)

マリ「きゃあああ!!!」

ガイア（アスカ!?!）

ブロッサム「マリリン!?!」

2人は完全に凍りつき固まっていた。

ティガ（どういう・・・事だ?）

すると

???「ははは!!! 我の力を忘れたかウルトラマンメビウス!!!」

メビウス（グローザム!?!）

なんと目の前には倒したはずのグローザムがいた。

サンシャイン「グローザム!?! どうして!?!」

ティガ（まさか復活するのか!?!）

グローザム「我は不死身のグローザム!!! 貴様らの敵ではない!!!」

グローザムはティガを押し倒し冷凍ガスを放つ。

ティガ（しまった!?!）

そこにサンシャインがなんとかサンフラワー・イージスで防ぐがそれは瞬間的に凍り砕け散った。

サンシャイン「そん・・・」

言葉を全て発する間もなくティガとサンシャインも凍りついてしまった。

ムーンライト「サンシャインまでもが・・・」

ガイア（そんな・・・）

グローザム「はははははは！これくらいにしておいてやる、こいつらを助けたければ我を倒すんだな。」

グローザムはそう言って消えた。

ブロッサム「そんな・・・」

一同は変身を解く。

ゆり「ひとまず引き上げましょう、作戦を立てるの。」

ミライ「すいません、僕がちゃんと説明していれば・・・」

我夢「ミライのせいじゃない、元気出して。」

つぼみ「必ず・・・みんなを助けます!!」

残った4人はひとまず写真館に戻った。

۲۲۲

第18話 ウルトラファクション(後書き)

次回、やっとグリッターミラクルライトの定番、妖精とスカイドンも活躍!!

第19話 救出作戦

4人は写真館に戻った、そして事情を話したが

士「大体わかったが・・・ああああうるさい!!」

ポプリ「うわあああんでしゅー!!いちゅきいい!!いちゅき
いいい!!」

コフレ「えりかあああ!!ええええりいいいいかあああです
うー!!」

シプレ「よしよしです。」

サンシャインとマリンの妖精のポプリとコフレは泣きじゃくって
いた。

夏海「仕方ないですよ、大切な人が大変なめにあってるんですから。」

我夢「どうにかして助けられない?」

ミライ「僕の際はG U Y Sの人達のおかげで助かりましたけど・・・」

するとココとナッツが

ココ「もしかしたらグリッターミラクルライトが使えるかもしれな
い!」

ゆり「それって確かあなた達がメガシヨッカーに襲われた時のための武器よね？」

ナツツ「そうナツ、ティガの光に似たこのミラクルライトの光なら助けられるかもしれないナツ。」

つぼみ「でも確か使えるのは3回まで……ですよね？」

ナツツ「そうナツ、しかもプリキュアとウルトラマンを復活させるにはかなりの光を使う必要があるナツ、もしかしたら1回でダメになるかもしれないナツ。」

ゆり「困ったわね。」

夏海「いつ妖精が襲われるかわかりませんし……1人につき一つですか？」

ナツツ「そうなるナツ、ナツツの分を使うナツ、仲間を助けるためなら大丈夫ナツ。」

つぼみ「でも……」

するとポプリが

ポプリ「ちゅぼみ！！何を迷ってるでしゅか！？」

つぼみ「！？」

ポプリ「いちゅきのためなら何でもしゅるでしゅー！！」

コフレ「コフレも大丈夫ですう!!」

シプレ「シプレもですう!!」

ゆり「つぼみ、引き受けましょう・・・みんなの思いは無駄にはできないわ。」

つぼみ「ゆりさん・・・はい!!」

4人は妖精達と共に凍りついた仲間の所に向かった。

・・・

シプレ「みんな力チ力チですう。」

ミライ「でもどう使えば・・・」

その時何かの影が4人にかぶさった。

つぼみ「なっ、なんです・・・か？」

ミライ「あっ、スカイドン。」

それは爆睡していたスカイドンだった、スカイドンは4人をじっと見つめる。

ゆり「?、敵視はしてないわね。」

我夢「何でだ？」

ミライ「スカイドンはおとなしい怪獣なんです。」

つぼみ「へえ、こつとしてみると可愛いですね。」

しかし

ポプリ「ちゅぼみ!!」

つぼみ「あつ、はい!!」

4人はグリッターミラクルライトを持ってプリキュアには胸の宝石、ウルトラマンにはカラータイマーにグリッターミラクルライトの光を浴びせる。

ゆり「上手くいくかしら?」

ミライ「きつと大丈夫です!!」

すると凍りついていたプリキュアの宝石とウルトラマンのカラータイマーが輝きを取り戻した。

つぼみ「良かった!!」

我夢「しばらくすれば多分・・・」

しかしその時黒い渦巻きが現れた。

ゆり「グローザム!?!」

ミライ「みなさん！！スカイドンの影に隠れてください！！」

4人はグローザムが姿を現す前にスカイドンの影に身を潜める。

グローザム「？、何かいたような気がしたが？」

我夢「良かった、気づいてない。」

するとゆりはある事に気づいた。

ゆり「あら？ポプリは？」

つぼみ「えっ!?!」

シプレ「い、いないですう!?!」

コフレ「どこ行ったですか!?!」

そしてミライはポプリを見つけ出した、グローザムの目の前で

つぼみ、ゆり、ミライ、我夢「あいつやりやがった!?!」

ポプリ「早くここから離れるでしゅ!?!」

グローザム「ほう、いせいの良い妖精だな。」

ポプリ「こっちはミラクルライトで4人を助けられるでしゅ!?!わかったら早くここから離れるでしゅ!?!」

つぼみ、ゆり、ミライ、我夢「あいつ言いやがった!?!」

グローザム「ほう。」

ポプリ「ポプリ達はスカイドンの影に隠れてるからすぐに助けられるでしゅー!!」

つぼみ、ゆり、ミライ、我夢「もうダメだちくしょおおおお!!」

ミライ「メビウウウウス（涙）」

我夢「ガイアアアア（涙）」

つぼみ、ゆり「プリキュア!!! オープンマイハート!!!（涙）」

4人は涙目で変身した。

ポプリ「何で出て来たでしゅか!?!」

シプレ、コフレ「お前のせいですううう!!」

ガイア（僕達がグローザムを引きつける!!!）

メビウス（その隙にみんなにミラクルライトを!!!）

ブロッサム「はい!!!」

ムーンライト「やるわよ!!!」

ブロッサムは両手にミラクルライトを持ちマリンとサンシャインに光を浴びせ、ムーンライトはティガとダイナに光を浴びせる。

グローザム「そうはさせん!!」

グローザムが2人を邪魔しようとするがメビウスとガイアがグローザムを羽交い締めにする。

ガイア（それはこっちの台詞だ!!）

メビウス（邪魔はさせない!!）

シプレ「頑張れですう!!」

コフレ「時間を稼ぐですう!!」

ポプリ「でしゆう!!」

徐々にプリキュアとウルトラマンは元に戻っていく。

ブロッサム「もう少しです!!」

ムーンライト「2人共頑張つて!!」

グローザム「おのれえ!!」

グローザムはガイアとメビウスを押し倒し、冷凍ガスをブロッサムに向けて放った。

ムーンライト「ブロッサム!!」

ブロッサム「!?!」

しかしムーンライトはブロッサムを押し倒し冷凍ガスを浴びてしまった。

ブロッサム「ムーンライト!？」

ムーンライト「くっ・・・」

ムーンライトは間一髪ガスをかわしたのだが足に浴びてしまい足から徐々に凍りついていく。

メビウス（このぉ!!）

ガイア（よくも!!）

ガイアとメビウスはグローザムを投げ飛ばした。

ブロッサム「ムーンライト!!今助けます!!」

しかしムーンライトはブロッサムの手を掴む。

ムーンライト「いいえ、私は大丈夫・・・マリン達を!!」

ブロッサム「でもミラクルライトの数が!？」

ムーンライト「見なさい!!せつかく戻りかけた4人の体がまた凍り始めてるわ!!」

マリン、サンシャイン、ティガ、ダイナの戻りかけた体は再び凍りつき始めた。

ムーンライト「私を信じなさい、早く4人を助けて!!」

ブロッサム「・・・わかりました、でも絶対に助けます!!」

ブロッサムはシプレを呼びかけた。

ブロッサム「シプレ!!プリキュアの種をお願いします!!」

シプレ「わかったですう!!」

シプレは赤いプリキュアの種をブロッサムに渡しブロッサムはパヒュームに入れ香水のように光を自信の体に香水のようにかけると体が赤く光る。

ブロッサム「いきます!!」

ブロッサムは片手の指にミラクルライトを2本持ち高く飛び上がり目に追えないほどの速さで回転します。

ブロッサム「はあああああ!!」

ミラクルライトの光は回転の勢いで円状に広がり一気に凍りついた仲間に光を浴びせる。

グローザム「なんだと!？」

メビウス（よし!!）

ガイア（そのまま行けば!!）

しかしグローザムが妨害をしようとする。

グローザム「させるかああ!!」

グローザムはブロッサムに襲いかかる。

ブロッサム「!?!」

その時

「サンフラワー・イージス!!」

ひまわり型のバリアーがグローザムの攻撃を防いだ。

グローザム「なに!?!」

メビウス（あれは!?!）

ブロッサム「サンシャイン!!」

そう、凍りついたサンシャインが元に戻ったのだ。

サンシャイン「遅れてごめんなさい!!」

「おりゃああああ!!」

さらにグローザムに青い花のエネルギーが放たれる。

グローザム「うぐっ!?!」

グローザムに攻撃したのはマリンだった。

マリン「寒いし冷たいし死ぬかと思ったよ!!」

ブロッサム「マリン!!」

「まだだ!!」

「僕達を忘れるな!!」

それは姿を赤くしたティガとダイナだった、スカイドンを持ち上げている。

ダイナ（おっ・・・重い・・・）

ティガ（頑張つてアスカ・・・でもスカイドンなんか怒ってるようにみえる？）

ダイナ（んな事良い!!いくぜ!!）

2人はスカイドンをグローザムに向けて投げ飛ばした、グローザムはスカイドンの下敷きにされさらにスカイドンは怒ったようにグローザムの上で暴れだす。

グローザム「おのれえ!？」

グローザムはスカイドンを投げ飛ばし冷凍ガスを一同に向けて放つ。

ダイナはミラクルライトの光を浴びて本来一度しかタイプチェンジ

出来ないが今だけでもう一度タイプチェンジできるようになっていた。ダイナはミラクルタイプに変わり超能力で冷凍ガスをグローザムに跳ね返す。

グローザム「ぐおおおおお！？」

グローザムは凍りついた。

そして一同は必殺技を放ちグローザムを粉々を砕いた。

サンシャイン「やったー！」

メビウス（いやー！まだですー！）

そう、グローザムのかげらは集まりだし姿を複製しだした。

ブロッサム「どうすれば良いんですか！？」

するとガイアはある事を思いついた。

ガイア（奴が不完全体の状態でしかも悪の存在なら・・・浄化すれば消滅させられるかもしれない！！）

マリ「本当に！？」

ティガ（考えてる暇はない！！やろう！！）

ティガはゼペリオン光線を放つ体勢をとるが光線を放つ前にカラータイマーに両手を当てL字に組むと柔らかなゼペリオン光線が放たれた、これは浄化作用を持つゼペリオン光線だ。

メビウス（僕達も！！）

ダイナ（俺達もやるぜ我夢！！）

ガイア（ああ！！）

メビウスとダイナとガイアは両手をカラータイマーに当て右手を突き出して浄化光線・ウルトラパリティを放つ。

ブロッサム「マリリン！！サンシャイン！！」

マリリン「OK！！」

サンシャイン「わかったわ！！」

ブロッサムとマリリンはタクトを構える。

ブロッサム、マリリン「プリキュア！！フローラルパワーフォルテッ
シモー！！」

サンシャインはシャイニータンバリンを構える。

サンシャイン「プリキュア！！ゴールドフォルテバースト！！」

そして3人の必殺技は合体し

サンシャイン「プリキュア！！シャイニング！！」

ブロッサム、マリリン「フォルテッシモオオオ！！」

7人の浄化技が不完全体のグローザムを襲う。

グローザム「ばっ、馬鹿な！？回復機能が追いつかない！？ぐああああああ……」

グローザムは光の粒子となり消滅した。

ティガ（やった！！）

ウルトラマンは変身を解いた、しかしブロッサムは安心する間もなくムーンライトを助けにいくが

マリン「ブロッサム！！……！！？」

ミライ「そんな……」

ムーンライトは完全に凍りついていた。

ブロッサム「もう一度ミラクルライトを！！」

ブロッサムはミラクルライトのスイッチを押すが光が放たれる事になかった。

シプレ「ナッツとシプレ達のグリッターミラクルライトが力を失ったですう……」

ブロッサム「そんな……じゃあムーンライトは……二度と……」

ブロッサムは膝をつき泣き崩れてしまった。

マリィ「そんな・・・」

アスカ「くそお!!」

その時、何かの雄叫びが響いた。

「ウオオオオオン!!」

我夢「!?!」

サンシャイン「何!?!」

その雄叫びはスカイドンのものだった。

ダイゴ「スカイドン?」

スカイドンの目には大粒の涙が流れていた。

ミライ「悲しんでる?」

アスカ「そんな事が・・・」

スカイドンは凍りついたムーンライトに寄り添う、流れた涙が凍りついたムーンライトに触れた、その時凍りついた部分から元の姿に戻り始めた。

ブロッサム「えっ!?!」

マリィ「か、怪獣の涙が・・・ムーンライトを?」

サンシャイン「まさか!？」

そしてついにムーンライトは元の姿に戻った。

ムーンライト「!!!・・・これは一体？」

ミライ「ゆりさんが凍りついてしまった事に悲しんで涙を？」

アスカ「その涙がゆりを助けた?という事だ？」

再びスカイドンを見ると目を閉じ気持ち良さそうに眠っていた。

マリ「なんか謎が多い怪獣だね。」

サンシャイン「でもムーンライトが元に戻って良かった・・・ブロッサム？」

ブロッサム「・・・」

ブロッサムはムーンライトに向かって倒れ込んだ、ムーンライトがブロッサムを受け止める。

ムーンライト「眠ってるわ・・・」

ダイゴ「ゆりちゃんが元に戻って安心して一気に疲れが出たんだね。」

我夢「一見落着けど・・・スカイドンどうする?」

ミライ「僕達4人で宇宙に運びましょう。」

アスカ「また持ち上げるのか!？」

ダイゴ「仕方ないさ、一足先に戻ってて。」

ムーンライト「わかったわ。」

ダイゴ達は再び変身しスカイドンを4人がかりで持ち上げて宇宙に運んで行った。

つづく

第19話 救出作戦（後書き）

裏話

本当はティガが力を使ってムーンライトを助けるが力を失いティガ
ダークになってしまうという設定も考えましたがスカイドンが結構
気に入っていたのでこっちの設定を使いました。

二十之巻 現れる妖怪

メロディ「リズム!!!必殺技だよ!!!」

リズム「OK!!!メロディ!!!」

メロディとリズムは街に現れたネガトーンと戦っていた。

ネガトーン「ネガトーン!!!」

メロディ、リズム「プリキュア!!!パッションナートハーモニー!!!」

パッションナートハーモニーがネガトーンを包み込み浄化させた。

メロディ「やったあ!!!私達息ぴったりだね!!!」

リズム「当たり前じゃない!!!」

するとそこにハミイが慌ててやってきた。

ハミイ「助けてニャア!!!」

メロディ「ハミイ?」

リズム「なっ、何あれ!?!」

ハミイは巨大なカニに追いかけていた。

メロディ「何あのカニ!?!」

リズム「とりあえずハミイを助けよう!!」

リズムはハミイを抱きかかえメロディーは巨大なカニを攻撃する。

メロディー「だめ!!こつらが堅すぎる!!」

巨大なカニはハサミでメロディーを挟んだ。

メロディー「きゃああ!?!」

リズム「メロディー!!!」

しかしリズムもハサミの餌食になってしまつ。

リズム「きゃあ!!」

リズムはハミイをはなしてしまつ。

ハミイ「プリキュアがピンチニヤア!?!」

2人はなんとかハサミから逃れ反撃にでる。

メロディー「だあ!!」

メロディーはカニを正面から殴りつけ、そしてカニの攻撃を全て受け止める。

メロディー「はっ!!!ぐっ!!!」

その隙にリズムがカニの後ろに回り込んでいた。

リズム「たああああ!!」

しかしリズムは何かに体を巻きつけられ投げ飛ばされた。

リズム「えっ!? きゃあ!!」

メロディ「リズム!？」

そしてメロディはカニの攻撃を直撃し吹き飛ばされた。

メロディ「きゃあ!!」

リズムを襲ったのは伸縮自在の体をもつ怪人だった。

リズム「そんな・・・もう1体いるなんて!？」

メロディ「まずいよこの状況!？」

2人はカニのハサミに挟まれ思い切り投げ飛ばされた。

メロディ、リズム「きゃあああああ!？」

.....

メガシヨッカー

エターナル「今回はダークディケイドお前が送り込んだしかくか？」

ダークデイケイド「ああ、魔化猛だ・・・奴らは清めの音という物
でしか死なないからな。」

シャドウ「プリキュアを倒すには最高の相手ね。」

メロディとリズムを倒したのは魔化猛だった。

.....

その頃変身が解けた響と奏は川に流されていたがなんとか川から上
がった。

響「ハミイは大丈夫かな・・・痛っ!？」

奏「響怪我してる!？」

奏は何も持っていないかったため手で響の傷を押さえた。

響「ごめん奏・・・。」

奏「良いのよ・・・あら？」

奏はある物を発見した、テントだ。

奏「テントだわ、あそこに人がいるかも!！」

響「行こう!！」

2人は互いに体を支え合いながらテントに向かった、しかしそこには誰もいなかった。

響「誰もいない・・・焚き火はしてあるのに。」

奏「とりあえず体が落ち着くまでここで休みましょう。」

2人は焚き火で温まりながらいつの間にか眠ってしまった。

・・・

奏「・・・ん・・・ん？」

奏は目を覚ました、辺りはすっかり暗くなっていた。

奏「いけない・・・寝ちゃった。」

すると

????「別に大丈夫だよ。」

奏「えっ!？」

焚き火の向こうには30代の男が焚き火に枝を入れていた。

????「やあ少女、お目覚めかい？」

奏「あ、あなたは？」

響も目を覚ました。

響「あれ?寝ちゃったの?・・・ん？」

「????」おはよう少女達、シュツ!!

「????」は親指と人差し指、中指を立て顔の辺りで振った。

奏「あの・・・あなたは?」

奏は????に問いだした。

「????」俺はヒビキ、よろしく。」

響「ええ!?私とおんなじ名前!?!」

奏「そうみたいね、私は・・・」

しかしヒビキは奏の言葉をさえぎるように言った。

ヒビキ「プリキュアの北条響に南野奏だろ?」

2人は一瞬目を点にして驚いた。

響「何で私達の事を!?!」

ヒビキ「何でだと思っ?」

奏「返された。」

ヒビキ「まあ冗談はさておいて、土から聞いたんだ、世界が融合したから今の仲間のリストを送っておくって言われてね、びっくりしたよテントに戻ったら怪我した2人が眠ってたからね。」

奏「士さんが？」

響「じゃああなたも・・・仮面ライダー？」

ヒビキ「そうだよ、怪我も少しだけど治療しておいたし濡れた服も乾いてるだろう？後は士の迎えを待つだけ。」

どうやら士がこちらに向かってきているようだ。
すると

奏「あの・・・ヒビキさん。」

ヒビキ「どうした？少女よ。」

奏「私達、大きなカニの怪物と体が伸びる怪人に襲われたんです。」

響「知ってますか？」

ヒビキ「多分魔化猛だな、俺達鬼・・・君達でいう仮面ライダーが倒す妖怪、戦って負けたのは仕方ないさ、魔化猛は鬼が持つ清めの音と士以外倒せないから。」

響は突然立ち上がりヒビキに言った。

響「仕方ないじゃだめなんです！！」

奏「響！？」

ヒビキ「？」

響「私達まだプリキュアとして経験も浅いし、力もみんなと比べて無い・・・正直足手まといになるって不安なんです！！だから私達を鍛えてください！！」

ヒビキ「良いよ。」

響「あれ軽い！？」

響は予想外のあっさりさにずっこけた。

奏「良いんですかヒビキ！？」

ヒビキ「良いよ、とりあえず今日は泊まっていきな、テント使って良いからさ。」

奏「ヒビキさんは？」

ヒビキ「寝袋で寝るよ。」

響「良く平気ですね？」

ヒビキ「鍛えてますから。」

そんなこんなで2人は一夜明けまずはヒビキと一戦交える事にした。

UNU

二十之巻 現れる妖怪（後書き）

魔化もうの「もう」

魂みたいなのに網みたいなので「ボウ」と読むのもわかってるのに
携帯で出ないのでひらがなにしました、ご了承ください。

僕は響鬼大好きです

二十一之巻 鍛えられる戦士

ヒビキは変身音叉を取り出し指ではじき額に持っていくと額に鬼の印が浮かびヒビキの体は紫色の炎に包まれる。

奏「きゃあ!？」

響「もっ、燃えてる!？」

そしてヒビキは炎を振り払うと紫色の体に太鼓のようなベルト、顔には赤い模様がある姿になった、これが魔化猛を清めの音で倒す音撃戦士・仮面ライダー響鬼だ。

響鬼「さあて、お手並み拝見だな。」

奏「あっ、はい!！」

響「行くよ!！」

2人はプリキュアに変身し身構える。

響鬼「音撃棒・烈火!！」

響鬼は音撃棒・烈火を振るい襲いかかる。

メロディ「リズム!！」

リズム「うん!！」

リズムはメロディから離れメロディは響鬼の攻撃を受け止める。

響鬼「ほらほらどうした？」

響鬼は烈火でメロディを襲いメロディはそれを全て受け止める。

リズム（隙あり！！）

リズムは後ろから響鬼を襲おうとするがその時

「音撃管・疾風一閃！！」

謎の突風がリズムを吹き飛ばした。

リズム「きゃあ！！」

メロディ「リズム！？」

響鬼「ほいさ！！」

響鬼はメロディを烈火で叩き飛ばした。

メロディ「くっ・・・リズムがどうして！？」

さらに地面からメロディの体に何かの重たい振動が流れた。

「音撃斬・雷電撃沈！！」

メロディ「きゃあああ！？」

メロディとリズムは倒れ込み変身が解けた、そのまま気を失ってしまった。

.....

響「う・・・うん・・・」

奏「あれ？・・・私達・・・」

ヒビキ「ごめんごめん、やりすぎたよ。」

ヒビキの横には2人の男がいた。

響「あなた達は？」

????「はじめまして、僕はイブキ、さっき君に突風を放ったのは僕さ、いきなりごめんね。」

????「自分はトドロキって言うっす！！さっき地面に振動与えたのは自分っす！！本当にごめんなさいっす！！」

響「あっ、はあ（なんか鬱陶しいなあ）。」

すると

奏「初めから3人で？」

イブキ「うん、ヒビキさんから連絡を受けてね。」

トドロキ「自分もっす、それより・・・」

響「それより？」

ヒビキ「さっきの手合わせ、予想外だった？」

奏「そりゃあ最初から1人だと思ってましたし・・・」

イブキ「それが君達の欠点だね。」

響「えっ!？」

トドロキ「戦いは悪くなかったす、作戦も1人に敵を引きつけておいて不意につく。」

ヒビキ「悪くはないけど、それだったら敵に仲間がいたら行えないし、引きつけているほうは体力をかなり削るぞ？」

イブキ「2人は周りが見えなくなる癖があるね。」

響と奏は何かしっくりきた。

トドロキ「じゃあヒビキさん!!」

イブキ「特訓初めですか？」

ヒビキ「よし、あれ士はまだ？」

イブキ「特訓をするって言ったらなら2人で帰ってこさせろって言ってました。」

響、奏（帰っちゃったの！？）

トドロキ「というわけで修行開始っす！！」

.....

トドロキは響を、イブキは奏を、ヒビキは2人がトドロキとイブキに認められてから担当するという事になった。

トドロキ& amp ;響side

響「これは？」

トドロキ「干す前ののりっす！！それをこの沢山かかっている紐にかけていってほしいっす。」

響「あ.....修行ですよね？」

トドロキ「修行っす！！はやくやるっす！！」

響は頭に？マークを浮かべたままのりを干し始めた。

響「なかなかきついなあ.....これ。」

何本もの紐をぐくり抜けながらのりを干していく。

響「終わったあああ！！」

トドロキ「よくやったっす！！ついてくるっす！！」

響はトドロキについていくと次は先ほどのように紐が何本もかかっている所に行き着いた。

響「まさかまた・・・のり？」

トドロキ「そうつす！！次は時間制限つきつす！！」

響はかなり戸惑りながらのりを干していく。

・・・

イブキ& amp ;奏side

イブキは何やらボタンが沢山ついた板を奏の周りに置く。

奏「イブキさん、これは？」

イブキ「ボタンが光るから押す、それだけ。」

奏は「これが修行？」と思っていたがとりあえず光るボタンを押していく。

奏「・・・あつ！？消えた！！」

イブキ「光が消える前に押してね。」

奏は光るボタンに遊ばれるようにボタンを押していく。

奏「あの・・・これいつまでやれば？」

イブキ「30分かな？」

奏は目を点にしたがしぶしぶボタンを押していく。

.....

その頃ハミイは

ハミイ「ニヤア!!」

魔化猛「ぎゃあ!？」

ハミイはグリッターミラクルライトで魔化猛を退けながら森の中を逃げていた、しかし既にミラクルライトを制限回数3回を使ってしまった。

ハミイ「ニヤア・・・響、奏・・・どこいるニヤア・・・」

.....

響「終わった!!」

トドロキ「余裕のタイムっす!!合格っす!!」

響は心に溜め込んだ気持ちをトドロキに伝えた。

響「トドロキさん・・・のりなんか干して何になるんですか？」

するとトドロキはいきなり響に拳を放った。

響「うわあ!？」

響は慣れたように拳をかわす、トドロキは何発か拳を放ったが響はそれを全て慣れたようにかわしきった。

響「あれ?何でこんな・・・いつも受け止めてたのに・・・」

トドロキ「完璧っす!!!」

・・・

イブキ「はい終わり、ご苦労様。」

腕がつりそうになる奏。

奏「うう・・・」

イブキ「奏ちゃん、これ吹いてみて。」

イブキは突然ピアノと楽譜を奏に渡す。

奏「ピアノニカ?」

奏は楽譜を見ながらピアノを吹き始める、イブキはその横で何か言い出した。

イブキ「1 2 3 + 3 6 + 5 0 × 2 0 0 ÷ 5 は?」

奏「8 3 6 0・・・?」

奏はピアノカを吹きながら答えた、空に鳥が5匹飛んでいった。

イブキ「今飛んでいった鳥は何匹？」

奏「5匹・・・!？」

奏は何か気づき始めていた。

イブキ「じゃあ最後。」

イブキはタカ、ゴリラ、カエルのディスクアニマルを使った、ディスクアニマルは鳴き声でそれぞれ違うメロディーを歌った。

イブキ「さあ、3匹のディスクアニマルは何を歌った？」

奏はピアノカを吹き終わると同時に答えた。

奏「タカはネコ踏んじやった、ゴリラはカノン、カエルはカエルの歌!！」

イブキ「正解、合格だよ。」

奏「イブキさん、さっきの修行って!！」

イブキは頷いた。

イブキ「でも僕も予想外、周りを見る感覚を鍛えたつもりだけどまさか聴力も鍛えられるなんてね。」

奏「耳はいつも響とピアノを演奏してたから・・・」

イブキ「君の成長は僕の予想以上、さあヒビキさんの所に行こう。」

.....

ハミィ「はなすニヤアー!!」

ハミィはついに魔化猛に捕まってしまった、そこにダークデイケイドが現れ

ダークデイケイド「良くやった、さて・・・この音符と化け蟹を組
合せて・・・」

ダークデイケイドは音符をネガトーンにし、魔化猛の化け蟹と合体
させた。

ダークデイケイド「お前はその猫を人質・・・いや猫質か、にして
おけ、そしてプリキュアを倒せ。」

.....

ヒビキ「・・・おっ？来たな。」

響と奏はイブキ、トドロキと共にヒビキのもとに来た。

ヒビキ「最後の修行だ。」

響、奏「よろしくお願いします!!」

ヒビキは大きな太鼓を用意していた、響と奏を反対の場所に立たせ

鉢を与える。

ヒビキ「俺が良いと言っまで叩き続けるんだ。」

響、奏「は、はい！！（太鼓ってどう叩くんだろっ？）」

2人はとりあえず太鼓を叩く。

イブキ「ヒビキさん考えましたね。」

トドロキ「さすがヒビキさんっす！！」

ヒビキ「よおし、後は2人次第だな。」

.....

その頃ハミイはグリッターミラクルライトを奪われ捕らわれの身となっていた。

ハミイ「返すニヤア！？」

魔化猛「うるさい！！」

ネガトーン魔化猛「ネガア！！」

.....

修行をする2人は太鼓を叩き続ける。

響「はあ.....はあ.....くう！！」

奏「ぐっ……うつ!？」

奏は腕の疲労に耐えられず鉢を落としてしまった。

響「奏!大丈夫!？」

奏「うん、これくらい……平気……」

しかし奏の手は痙攣を起こし出来たマメも潰れていた。

響「奏……なんでこんな無理ばかり……」

ヒビキ「……」

奏「無理じゃないよ……あなた言ったでしょ？」

響「えっ?」

奏は鉢を握り直す、手に激痛が走った。

奏「うう!?!……私達は仲間、私が響で響が私……って、だから響が頑張ってるのに私だけ楽しんでられないの!?!」

響「奏……」

イブキ「……」

トドロキ「……」

奏「太鼓・・・叩こう!!」

響「・・・うん!!」

2人は再び太鼓を叩き始めた。

響（私達は喧嘩してばかりだけど!!）

奏（悲しい時や、苦しい時はいつも支え合ってきた!!）

響、奏（私達はいつも一緒よ!!）

2人が同時に太鼓を叩いた瞬間、何か違う感覚が2人に響いた。

奏（えっ・・・何今の？）

響（さっきまでとは全く違う太鼓の振動!？）

そこにヒビキが

ヒビキ「そこまで!!」

2人は太鼓を叩くのを止めた。

ヒビキ「おめでとう、合格だ・・・シュッ!!」

イブキ「ご苦労様。」

トドロキ「ご苦労っす!!」

響「あ、ありがとございますー!!」

奏「お世話になりました!!」

すると5人のもとにタカのディスクアニマルが飛んできた、イブキはそれをディスク型にもどし、変身鬼笛で読み取った。

イブキ「魔化猛です。」

トドロキ「本当っすか!？」

響「もしかしたらハミイも!？」

奏「多分いるわ!！」

ヒビキ「よし、乗ってきな。」

響と奏はヒビキ達のバイクに乗り魔化猛のもとへ向かった。

じじく

二十二之巻 重なる音

ハミイ「響、奏……」

魔化猛「安心しろ、奴らは死にくる。」

するとハミイは何かを感じとった。

ハミイ「この感じは……響と奏と……誰ニヤ？」

そして目の前にバイクが止まる、響と奏も一緒だ。

響「ハミイ!!」

奏「今助けるからね!!」

魔化猛は驚いていた。

魔化猛「おっ鬼!?!」

ヒビキ「また卑怯くさい事してるな。」

イブキ「人質……いや猫質かな？」

トドロキ「戦うっす!!」

響「奏!」

奏「うん!!」

響と奏はキュアモジューレを構える。

響、奏「レッツプレイ！！プリキュア・モジューレーション！！」

2人は光に包まれて姿を変えた。

メロディ「爪弾くは荒ぶる調べ！キュアメロディ！！！」

リズム「爪弾くはたおやかな調べ！！キュアリズム！！」

メロディ、リズム「届け！！2人の組曲！！スイートプリキュア！！」

ヒビキは音叉を響かせ額に、イブキは鬼笛を吹き額に、トドロキは鬼弦を鳴らし額に、ヒビキは炎に包まれ、イブキは鬼笛を振り旋風に包まれ、トドロキは腕を空に突き出すと雷が落ち包まれ3人が振り払うと同時に、鬼に変身した。

響鬼「さてと、いきますか。」

威吹鬼「よし。」

轟鬼「やるっす！」

すると魔化猛とネガトーン化け蟹の他に様々な魔化猛が姿を現した。

メロディ「リズム！！ハミィを助けるよ！！」

リズム「うん！！」

轟鬼「援護するっす!!」

メロディとリズムはハミイを助けに走り抜ける、響鬼達はそれを援護する、威吹鬼は音撃管・烈風で弾丸を魔化猛に打ち込み

威吹鬼「音撃管・疾風一閃!!」

音撃管・烈風が放つ清めの音で魔化猛を倒していく。

轟鬼「せい!!せやあ!!」

轟鬼は音撃弦・烈雷を魔化猛に突き刺し変身鬼弦を外し烈雷に取り付ける。

轟鬼「音撃斬・雷電撃沈!!」

轟鬼は軽快なロック調の音楽を演奏し清めの音を放ち魔化猛を倒す。

響鬼「通してもらっぞ。」

響鬼は音撃棒・烈火から火炎弾を放ち魔化猛を倒す。

メロディ「ハミイ!!」

リズム「今助けるからね!!」

魔化猛「させるか!!」

魔化猛はハミイを投げ捨て2人に飛びつくが何かが懐に当たった、

太鼓の印だ。

魔化猛「!?!」

響鬼「音撃弾・爆裂強打!!」

響鬼は魔化猛を烈火で叩きつけ倒した。

リズム「ハミイ!!」

ハミイ「メロディ!リズム!!」

ハミイはメロディに飛びついた。

メロディ「もう大丈夫!!」

リズム「行くよメロディ!」

残ったのはネガトーン化け蟹だった。

メロディ「奏でましょう、奇跡のメロディー!!ミラクルベルティエ!!」
エ!!」

リズム「刻みましょう、大いなるリズム!!ファンタスティックベルティエ!!」

メロディはミラクルベルティエにミリーを、リズムはファンタスティックベルティエにファリーを取り付ける。

メロディ、リズム「駆け巡れ、ト音のリング!!プリキュア・ミュ

ージッククロンドー!!」

2人が放った2つの輪はネガトーン化け蟹を包み込んだ。

メロディ、リズム「三拍子!!!1、2、3!!!ファイナー・・・」

しかしネガトーン化け蟹はその輪を破壊し2人を叩き飛ばした。

メロディ、リズム「きゃああ!?!」

ハミィ「プ、プリキュアのベルティエが効かないニヤア!?!」

威吹鬼「轟鬼さん!!」

轟鬼「響鬼さん!!」

響鬼「よおし!!」

3人の鬼はネガトーン化け蟹に向かっていく。

響鬼「いくぞ!音撃弾・火炎連打の型!!」

威吹鬼「音撃管・疾風一閃!!」

轟鬼「音撃斬・雷電撃沈!!」

3人は一斉に清めの鬼を奏でるがネガトーン化け蟹に投げ飛ばされた。

響鬼「うわあ!?!」

威吹鬼「一斉音撃も効かない!?!」

轟鬼「どうするっす!?!」

するとメロディとリズムが

メロディ「響鬼さん、私達にも清めの音って出せますか?」

響鬼「えっ!?!」

リズム「私達も協力すればきっと!?!」

威吹鬼「そうか、プリキュアの音楽の力と清めの音を組合せれば!?!」

轟鬼「じゃあこれを!?!」

威吹鬼と轟鬼は音撃棒を使用する時に使う太鼓の印を渡した。

リズム「メロディ、ベルティエで!?!」

メロディ「わかった!?!」

響鬼「俺達ももう一回だ!?!はあああああ・・・」

響鬼は赤い炎に包まれていく。

響鬼「はあ!?!」

炎を振り払うと響鬼は真紅の姿、紅に変わった。

メロディ「おいで、ドリー……」

リズム「おいで、レリー……」

メロディとリズムはドリーとレリーをベルティエに取り付けベルティエを2つに分けネガトーン化け蟹に太鼓の印を付けた。

メロディ「行くよ……はあ……」

リズム「わかったわ……やあ……」

メロディとリズムはベルティエで印を叩き始めた、あの修行を思いだしながら。

メロディ「はあ……はあ……」

響

リズム「たあ……はあ……」

奏

響鬼「いくぞ……」

響鬼は烈火を叩きつける。

響鬼「爆裂真紅の型……はあ……はあ……」

紅

威吹鬼「疾風一閃!!」

疾

轟鬼「雷電撃沈!!」

雷

5人は同時に清めの音をネガトーン化け蟹に与えていく。

メロディ「はああああ!!」

音

リズム「たああああ!!」

撃

響鬼「やああああ!!」

道

威吹鬼「!!!」

重

合

轟鬼「セイ!!セヤア!!」

2人はハミイを抱きしめる。

ハミイ「くっ……苦しいニャ……」

ヒビキ「よし、修行は終わりだな。」

響「ヒビキさん、ありがとうございました!」

奏「イブキさんにトドロキさんも、無事にハミイを助けられました。」

イブキ「礼には及ばないよ。」

トドロキ「当然の事をしたまでです!」

そして

響「じゃあ私達はこれで。」

奏「また会いましょう。」

ヒビキ「またな少女達、シュツ!」

2人もヒビキと同じ仕草をし去って行ったが

奏「ねえ響……」

響「どうしたの?」

奏「私達どうやってかえるの?」

へい

響「あ……」

第23話 永遠と四色怪人

ある日の事、のぞみがはしゃいでいた。

のぞみ「やったやったやったああああ!!」

りん「ど、どうしたののぞみ!？」

士「うるさい!!」

士は勢いに任せてのぞみにげんこつを与える。

のぞみ「いった〜い!!」

ダイゴ「士、いくらなんでも・・・」

士「しばらくここに来てなかったり空飛んで響達むかえに行ってたお前にはわからないだろ!？」

数日前

のぞみ「あれ? 士先生は?」

コージ「のぞみが怖いって部屋に閉じこもってるよ。」

のぞみ「あつ、あたしが怖い!? 何で!？」

シロー「そりゃ来るたびにツボおされて笑ったりネガティブになったりしてたら嫌になるだろ。」

のぞみはまだ士の笑いのツボを探していたらしい。

夏「自業自得だろ。」

.....

夏海「それはそれで、何ではしゃいでたんですか？」

のぞみ「見て見て見て！！！」

コージ「ん？」

英語テスト 61点

のぞみ「60点取ったのはじめてだよ、努力したかいがあったあ〜！！！」

士「そんな微妙な点数で喜ぶな、一流学校なら赤点だぞ。」

りん「うん、それ喜べない。」

ダイゴ「否定できない。」

のぞみはひどく落ち込んだ。

くるみ「そんなんで落ち込まないの！！！」

そこにづらら、こまち、かれんが写真館に来た。

かれん「こっ、この空気・・・」

こまち「入り込みづらいわね」

うすら「こもつともです。」

コージ「の、のぞみ！！ほら落ち込まないで遊園地にも行こうよ
！！（汗）」

コージは困った時は遊園地作戦を発動した。

のぞみ「・・・行こう！！行こう！！」

士「立ち直りの早い奴だ。」

のぞみ「先生達も行くの！！」

のぞみは士とダイゴの手を強引に引っ張り遊園地に連れて行く。

士「まつ、待て！？」

ダイゴ「僕達もお！？」

コージ「はあ・・・仕方ない、行くか。」

りん「まったくのぞみは・・・」

遊園地

プリキュア5メンバーと士とダイゴは遊園地の門にたどり着いたが

そこにダンボールに入れられた犬を見つけた。

つらら「『拾ってください。』・・・ひどい。」

かれん「無責任な人ね。」

こまち「可愛そうに・・・よしよし。」

こまちは犬を抱きかかえる。

くるみ「どうするの?」

りん「このまま放っておくわけにはいかないしね・・・」

のぞみ「よしよし」

すると犬はこまちからダイゴに飛び移った。

ダイゴ「あれ?」

こまち「私・・・嫌われたのかしら?」

士「違うだろ、ていうか何でこんなになつてるんだ?」

ダイゴ「さあ?でも・・・この犬を見たのはじめてじゃない気がする。」

かれん「どういつ事?」

ダイゴ「わからない、とりあえずこの子は僕が見ておくからみんな

は遊園地に。」

のぞみ「じゃあそつさせてもらつね、行くつみんな!」

士「引つ張るな!」

.....

その頃遊園地には大道克己がいた。

克己「なるほど人ごみに逃げたか、まあ良い・・・奴は必ず探し出す。」

克己はホシイナーのボールを観覧車に投げつけさらに数々のシヨッカー戦闘員を呼び出した。

ホシイナー「ホシイナー!!」

遊園地は大パニックに陥つた。

克己「さあ、地獄を楽しみな!!」

その時

????「ちよつと克己ちゃん、せつかく復活したんだから私達にもやらせて!」

????「良いでしょ?」

克己「好きにしろ。」

????「ホワアアア!!」

????「ゲームスタート。」

.....

ダイゴ「あれは!？」

「ダイゴさん!!」

のぞみ達がダイゴのもとに戻ってきた。

士「面倒な事になったな。」

くるみ「私達は大丈夫だけどダイゴその犬どうするの?」

ダイゴ「確かにこのままじゃ危ないし・・・」

すると犬はダイゴの腕から飛び出し遊園地に入ってしまった。

ダイゴ「あっ!？」

こまち「危ないわ!？」

かれん「とにかく何とかしましょう!?!」

くるみ「正門は私とかれんで!!」

こまち「私はりんさんと西門を!!」

うちら「私は1人で東門を何とかします!!」

士「入り口は3つか、じゃあのぞみと俺とダイゴは遊園地の中央に行くぞ。」

のぞみ「わかった!!」

ダイゴ「行こう!!」

一同はそれぞれ別れた。

.....

くるみ「うわぁ、うじゃうじゃいる。」

かれん「いくわよ!!」

くるみ「スカイローズ・トランスレイト!!」

かれん「プリキュア!!メタモルフォーゼ!!」

2人はプリキュアに変身した。

アクア「知性の青き泉、キュアアクア!!」

ローズ「青い薔薇は秘密のしるし、ミルキイローズ!!」

2人はドーパントを次々に倒していく。

ローズ「ふっ！あれ？人がいる！？」

アクア「何でドーパントの中に！？」

その男は2人を睨みつけ青いメモリを取り出した。

アクア「あれはガイアメモリ！？」

ローズ「まさかあの人も！？」

???「ゲームスタート。」

「トリガー！！」

???はメモリを手のひらに差し込み青い姿に大きなライフルがついたトリガードーパントに変身した。

アクア「なんだか他のドーパントより・・・」

ローズ「オーラが違う・・・」

トリガー「ふん。」

トリガーはライフルを2人に向ける。

ローズ「アクア来るわよ！！」

アクア「ええ！！」

.....

りん「遊園地は楽しむ所でしょ!!」

こまち「人々を恐怖にさせないで!!」

「プリキュア!!メタモルフォーゼ!!」

りんとこまちはプリキュアに変身した。

ルージュ「情熱の赤い炎、キュアルージュ!!」

ミント「安らぎの緑の大地、キュアミント!!」

そこに後ろから

???「ねえちょっとあなた達がプリキュア？」

ミント「えっ、はいそうですけど・・・」

???「なかなか可愛い格好してるわね、まあ私の方が可愛いけど

」

ルージュ「ていうかあんた男でしょ!?!おかま!?!」

すると???は黄色いメモリを取り出した。

???「むきいい!!おかまなんて言わないで!!」

「ルナ!!」

「????がメモリを額に差すと黄色い姿で腕が長い怪人のルナドーナントに変身した。」

ルナ「さあて女を抱きしめる趣味は無いけど苦しめてあ・げ・る」

ルージュ「ぎゃあぁ!?!気持ち悪い!?!」

ミント「ルージュ落ち着いて!?!」

.....

うすら「こんなにたくさん・・・」

「????」ちよつとあんだ。「」

うすら「え?」

1人の女が現れ赤いメモリを取り出した。

「????」あたし達の邪魔・・・しないでくれる?」

「ヒート!?!」

「????はメモリを差し赤い炎のような姿のヒートドーナントになった。」

うすら「ドーナント!?!」

ヒート「だったら何?」

うらら「プリキュア！！メタモルフォーゼ！！」

うららはプリキュアに変身した。

レモネード「はじけるレモンの香り、キュアレモネード！！」

ヒート「へえ、面白いじゃない。」

????「ホワアアア！！」

するといきなり鉄の棒を持った男が現れレモネードを攻撃する、レモネードは何とかそれを受け止める。

レモネード「くっ！（生身なのになんて力！？）」

男は灰色のメモリを取り出した。

「メタル！！」

レモネード「ま、まさか！？」

男はメモリを背中に差し鋼鉄のような体のメタルドーパントに変身した。

メタル「ハアアアア！！！！」

レモネード「くっ！！」

.....

のぞみ「ここが中央？」

ダイゴ「あの犬無事なら良いけど・・・」

「ホシイナー!!!」

その時ホシイナーが攻撃をしてきた。

士「くっ！ダイゴはホシイナーを頼む!!!」

ダイゴ「わかった・・・ん？」

のぞみ「ん？」

ホシイナーの前に克己が立っていた。

士「なんだお前は？」

克己「死人に名前を聞くな。」

ダイゴ「死人？」

克己は白いメモリを取り出した。

のぞみ「ガイアメモリ・・・だっけ？」

士「って事はお前はドーパントか。」

しかし克己は否定した。

克己「違う、俺は・・・」

克己はロストドライバーを取り出した。

克己「仮面ライダーだ!!」

ダイゴ「なに!？」

克己はロストドライバーを装着し白いメモリを差し込んだ。

「エターナル!!」

軽快なサウンドと共に克己は仮面ライダーエターナルに変身した。

エターナル「仮面ライダーエターナル!!」

士「面倒くせえ・・・ん?あれさっきの犬じゃないか?」

ダイゴ「えっ!？」

士は犬を見つけた、ホシイナーに威嚇をしていた。

のぞみ「危ない!!」

すると犬は眩い光に包まれた。

エターナル「なんだ?」

ダイゴ「まさか!？」

その犬はウルトラマンのカラータイマーがついた怪獣になった。

士「怪獣？」

ダイゴ「ガーディー！？」

ガーディーはホシイナーに襲いかかった。

エターナル「面白い、見ものだな。」

ダイゴ「ふざけるな！！」

ダイゴはスパークレンスでティガに変身した。

士「変身！！」

「カメンライド！！ダイケイド！！」

のぞみ「プリキュア！！メタモルフォーゼ！！」

士はダイケイドに、のぞみはドリームになった。

ドリーム「大いなる希望の力、キュアドリーム！！」

ダイケイド「行くぞ！！！！」

UJU<

第23話 永遠と四色怪人（後書き）

次回串田ボイス炸裂！！

第24話 助太刀4人のライダー

アクア&ローズ対トリガードーパント

トリガー「はっ!！」

トリガードーパントはライフルで2人を攻撃する、2人はそれをかわしつつトリガードーパントに近づこうとするが他のドーパントに邪魔をされてしまう。

アクア「くっ!なかなか近づけない!？」

ローズ「邪魔しないで!！」

トリガー「はあ!！」

トリガードーパントはアクアの肩を撃ち抜いた。

アクア「ああ!？」

ローズ「アクア!！」

トリガー「貴様もだ!！」

トリガードーパントはローズも撃ち抜いた。

ローズ「きゃあ!？」

ライフルを連射され苦戦する2人。

ローズ「このままじゃ・・・ああ!？」

アクア「くっ!プリキュア!!サファイアアロー!!」

アクアは水の矢を連射するがトリガードパントの弾丸で打ち消されてしまう。

アクア「そんな・・・きゃあ!？」

ローズ「必殺技を出せる隙がない・・・ぐっ!？」

トリガー「死ね!!プリキュア!!」

その時

???「おい。」

トリガー「ん？」

トリガードパントは連射を止めて声のする方を見た。

アクア「はあ・・・はあ・・・」

ローズ「だ・・・誰？」

そこには1人の男が立っていた。

???「女相手にやりすぎじゃねえか？」

トリガー「何だ貴様？」

????はベルトをを装着し携帯電話を取り出した。

????「つたく、面倒くせえ。」

????は携帯電話の番号555を入力した。

「standing by」

そして携帯電話を閉じ真上に掲げた。

????「変身!!」

携帯電話をベルトにはめ込んだ。

「Complete」

すると????の体は赤い閃光に包まれた。

.....

ミント&ルージュ対ルナドーパント

ルージュ「プリキュア!!ファイヤーストライク!!」

ルージュはファイヤーストライクを放ちルナドーパントを攻撃する。

ルナ「ああ!？」

ルージュ「ミント……！すぐに片づけるわよ……！」

ミント「え、ええ（汗）」

ルナドーパントは立ち上がったが

ミント「プリキュア……！エメラルドソーサー……！」

ミントはエメラルドソーサーを放ちさらにルナドーパントを苦しめる。

ルナ「うう……？私程じゃなあけど可愛くて強い……可愛くて強い……」

ルージュ「えっ、ちょっと……！」

ルナドーパントは立ち上がりそして

ルナ「嫌いじゃないわ……！」

伸縮自在な腕を伸ばし2人に巻きつける。

ミント「きゃあ……？」

ルージュ「うわあ……？は、放せ……！」

ルナ「私が抱きしめて苦しむがいいわ。」

ルナドーパントは2人を徐々に引き寄せる。

ルージュ「ぎゃああ!?!嫌だああああ!?!」

ミント「すごい力!?!!ほどけない!?!」

ルナ「おほほほ!?!」

ルナはついに2人を抱きしめ、締め殺そうとする。

ミント「く、苦しい・・・」

ルージュ「ああ・・・助け・・・て・・・」

ルナ「さあ最後よ!?!」

その時

「タカ!?!トラ!?!バツタ!?!」

ルナ「えっ!?!」

「タ・ト・バ!?!タトバ!?!タ・ト・バ!?!」

????「セイヤアア!?!」

妙なサウンドと共に現れた者によりルナドーパントは斬りつけられルージュとミントを救出した。

.....

レモネード「はあ・・・はあ・・・」

メタル「ホアチャアアアア!!!」

ヒート「もう疲れたの?」

レモネードはヒートドーパント、メタルドーパント、その他のドーパントに苦戦していた。

レモネード「くっ、プリキュア!!!プリズムチェーン!!!」

レモネードは光の鎖でメタルドーパントとヒートドーパントを拘束するが簡単に引きちぎられ攻撃をくらう。

レモネード「きゃああああ!?!」

ヒート「弱いわね。」

メタル「ハアアアアア!!!」

2人がレモネードにとどめをさそうとしたその時

????「待て!?!」

ヒート「ん?」

1人の男がバイクに乗りやって来た。

????「多勢に無勢とは卑怯な奴らだな。」

ヒート「何よあんた?」

さらに

「貴様らは死の道を選んだ。」

ヒート、メタル「!?!」

別の男が現れた。

????「結城じゃないか。」

結城「風見もいたか。」

どうやら面識があるようだ。

ヒート「あんたら何なの?」

すると結城はヘルメットを取り出しかぶった、そして風見は両手を右側に伸ばしゆっくりと左側に回す。

風見「変身……」

そして右腕を引き突き出すと共に左腕を腰までひく。

風見「ブイスリアア!!!」

すると結城はたちまち姿を変え、風見は装着しているベルトの2つの風車が回り強大なエネルギーが発せられ姿を変えた。

.....

アクア「あれは・・・」

ローズ「ライ・・・ダー？」

トリガー「何だ貴様!？」

????「俺は・・・仮面ライダー555だ!!」

.....

ルージュ「あ、ありがとう・・・」

ミント「あなたは・・・」

ルナ「まさかあの時のイケメン!？」

????「その呼び方やめてくれる?俺は仮面ライダーオーズ。」

.....

メタル「!？」

ヒート「何!？」

レモネード「仮面ライダー・・・ですか？」

風見「俺は仮面ライダーV3!!」

結城「ライダーマン!!」

.....

アクア「まさか乾巧さん？」

555「よく覚えてたな。」

ローズ「助けにきてくれたのね。」

トリガー「仮面ライダー555？」

トリガードーパントは555を知らないようだ。

555「たてるか？」

ローズ「当たり前でしょ？」

アクア「でもまずこの大量のドーパントを何とかしたいと・・・」

すると555はブレスのパーツをベルトにつけアクセルフォームになった。

555「はっ！..」

「start up」

555はサウンドと共に高速移動をはじめ高速クリムゾン・スマッシュで大量のドーパントを一掃した。

トリガー「なっ！..？」

「reformation」

555は元の姿に戻った。

555「悪い、全滅は無理だった。」

ローズ「いや、大分楽になったわ!!」

ローズは必殺技の体勢に入った。

ローズ「邪悪な力を包み込む煌めく薔薇を咲かせましょう!!ミルキイローズ・メタルブリザード!!」

ローズはメタルブリザードでドーパントを一掃し

アクア「プリキュア!!サファイアアロー!!」

アクアはサファイアアローをトリガードーパントに何発も連射した。

トリガー「ハアアアア!!」

トリガードーパントはサファイアアローを打ち抜くがアクアも負けじとサファイアアローを連射する。

555「たかつ。」

555は空高く飛び上がり回転し足を向けると赤い円錐型のポイントがトリガードーパントを拘束する。

トリガー「!?!」

555「やああああ!?!」

555はポインター目掛けてキックを繰り出しトリガードーパントを貫く。

トリガー「ぐああ!?!」

トリガードーパントは爆散し消滅した、555は着地し右手を癖のようにひねった。

アクア「ありがとうございます。」

ローズ「助かったわ。」

555「ああ、とりあえずさっさと土の所行くぞ。」

.....

ルナ「嫌いじゃないわ!?!」

ルナドーパントは腕を伸ばしオーズを巻きつけ地面に叩きつける。

オーズ「うわあ!?!」

ルージュ「このお!?!」

ミント「たあ!?!」

ルージュとミントがルナドーパントに攻撃を仕掛ける。

ルナ「私と楽しみましょう!!」

ルナドーパントはルージュを腕で襲うがルージュはそれを蹴りかわす。

ルージュ「あんたみたいな奴と楽しみたいわ!!」

ルージュはファイヤーストライクを放つ、ルナドーパントはそれかわす。

ルナ「やったわね!」

ルナはルージュを締め上げる。

ルージュ「うわあ!?! 放してええ!?!」

ミント「プリキュア!! エメラルドソーサー!!」

ミントはエメラルドソーサーでルナドーパントの腕を斬りつける。

ルナ「ああ!?! 斬れちゃった!?!」

オーズ「よし!!」

オーズはトラのメダルをカマキリに変えた。

「タカ!! カマキリ!! バッタ!!」

トラメダル（なんでこんな扱いばかり・・・）

オーズはスキヤナーでメダルを読み込ませた。

「スキヤニングチャージ！！」

カマキリソードにエネルギーがたまる。

オーズ「セイヤアアアアアア！！」

オーズはルナドーパントを斬り捨てた。

ルナ「克己ちゃん！？」

ルナドーパントは爆散し消滅した。

オーズ「よし、はやく土の所に行こう！！」

ルージュ「ああ、地獄だった。」

ミント「急ぎましよう！！」

.....

ヒート「仮面ライダーV3に・・・ライダーマンだと？」

メタル「？」

レモネード「お2人はあの時の・・・」

レモネードは前回の戦いを思い出した。

V3「もう大丈夫だ。」

ライダーマン「奴らを倒し・・・土のもとへ急ぐぞ!!」

ヒート「私達を手っ取り早く片付ける気?・・・なめないで!!」

メタル「うおおお!!」

ヒートドーパントは拳を燃え上がらせV3に殴りかかる。

ヒート「死ね!!」

V3「させるか!!」

V3はそれをかわし攻撃を仕掛ける、ヒートドーパントはそれをかわす。

V3「はあ!!せい!!」

ヒート「ふっ!はっ!!」

メタル「うおおお!!」

メタルドーパントは鉄の棒を振り回しライダーマンを襲う。

ライダーマン「当たったらひとたまりもない!?!」

するこ

レモネード「プリキュア！！プリズムチェーン！！」

レモネードがプリズムチェーンでメタルドーパントを拘束する。

ライダーマン「助かる！！ロープアーム！！」

ライダーマンはロープアームを放ちメタルドーパントを拘束する。

ヒート「こしゃくなマネを！！」

V3「隙あり！！とお！！」

V3は空高く飛び上がり回転しキックを放つ。

ヒート「これぐらい！！」

ヒートドーパントはキックを受けとめるがその反動でV3は反転し再びキックを放った。

V3「V3きりもみ反転キック！！」

ヒート「ぐああー！？」

ヒートドーパントはメタルドーパントに向かって吹き飛びメタルドーパントごと鎖とロープを引きちぎり吹き飛んでいった。

レモネード「今です！！」

ライダーマン「よし！！」

レモネードはシャイニングフルーレ、ライダーマンはドリルアームを装備し数々のドーパントを倒しながらヒートドーパントとメタルドーパントに接近する。

ヒート「おのれ・・・!？」

メタル「!？」

レモネード「シャイニングフルーレ!!」

ライダーマン「ドリルアーム!!」

2人はヒートドーパントとメタルドーパントを貫いた。

ヒート、メタル「ぐああああ!？」

2体は爆散し消滅した。

レモネード「はぁ・・・はぁ・・・」

ライダーマン「大丈夫か？」

ライダーマンがレモネードを支える。

レモネード「はい、何とか・・・」

V3「よし、行くぞ。」

それぞれ戦いを終えた戦士達は土の所へ向かった。

UJU<

第25話 破壊と永遠そして別れ（前書き）

ガーディー、お前は最高に良い怪獣だったよ。

第25話 破壊と永遠そして別れ

エターナル「地獄を楽しみなあ。」

デイケイド「お前が楽しめ!!」

ドリーム「行くよ先生!!」

デイケイドとドリームはエターナルに攻撃を仕掛けるがエターナルはそれを軽々とかわす。
そしてコンバットナイフ型の武器・エターナルエッジで2人を斬りつける。

デイケイド「ぐっ!?!」

ドリーム「うっ!?!」

エターナル「そんなものか、お前たちの力は?」

デイケイドはブッカーからカードを取り出した。

デイケイド「まだだよ……のぞみ!!」

ドリーム「うん!!」

デイケイドはカードをバツクルに差し込んだ。

「ファイナルフォームライド!!ドドドドドリーム!!」

ドリームは七色の翼がはえ、まばゆい光に包まれた姿になった。

「ファイナルアタックライド!!!ドドドドリーム!!!ディディディ
ディケイド!!!」

ディケイドはディメンションキックを繰り出す。

ドリーム「プリキュア!!!ディメンションスター!!!」

ドリームはディメンションスターを繰り出すが

エターナル「まるでなっていないな。」

エターナルはメモリをドライバーから外す。

.....

一方ガーディーがホシイナーと戦っていた、ティガはそれを援護する。

ティガ（今度こそ守ってみせる!!!）

ティガはホシイナーにつかみかかるがガーディーがティガを投げ飛ばした。

ティガ（うわっ!?!ガーディー!?!）

ガーディーは弱々しい声を発する。

ティガ（なんだ・・・何を伝えたいんだ!?!）

ティガは目を凝らしてホシイナーを見た、すると観覧車には人が入っていたのだ。

ティガ（まさかガーディー・・・中の人を助けるために！？）

その時

「エターナル！！マキシマムドライブ！！」

ティガ（！！！！、ぐああああ！！？）

・・・

ディケイド「なっ！？ぐああああ！！？」

ドリーム「きゃああああ！！？」

ディケイド、ドリームは突如苦しみだし必殺技が打ち消され変身が解けてしまった、ティガも同様に苦しみだし変身が解けてしまった。

のぞみ「なっ、なんで・・・」

エターナル「なるほど、俺のメモリを改良した結果か。」

士「どういう・・・事だ？」

エターナル「エターナルメモリの本来の能力はT2以外のメモリを永続的に活動不能にする事・・・ふん！！」

エターナルはダイゴを蹴り飛ばした。

ダイゴ「ぐああ!?!」

士「ダイゴ!?!」

エターナル「しかし改良した結果、T2とエターナル以外の変身能力を永続的に停止させるようだ。」

ダイゴ「なっ・・・何!?!」

エターナルは次に士を殴りつける。

士「ぐああ!?!」

のぞみ「先生!?!・・・!?!」

エターナルはのぞみの首を掴み持ち上げた。

のぞみ「くっ!?!・・・うう・・・」

士「やめろ!?!」

・・・

その頃、助太刀に来たライダー、他のプリキュア5は合流するも変身が解けていた。

巧「やばいな・・・」

うらら「私達生身の人間じゃ・・・」

風見「とりあえず先に行こう。」

かれん「そうですね。」

一同は士達のもとへ向かった。

.....

エターナルはのぞみから手を放し士を蹴りつける。

士「ぐっ!?!?」

のぞみ「やめて!?!?」

エターナル「ふん。」

ダイゴ「やめろ!?!?」

ダイゴはエターナルにつかみかかるが簡単に引き離され殴りとばされた。

ダイゴ「がはっ!?!?」

のぞみ「ダイゴさん!?!?」

エターナル「ははは!?!?弱いな.....」

「誰が弱いつて?」

エターナル「？」

そこには巧達がいた。

士「巧！？お前ら！？」

のぞみ「みんな・・・無事だった・・・」

ダイゴ「良かった・・・」

かれん「もうやめなさい！！」

風見「貴様の野望もここまでだ！！」

しかし

エターナル「ふん、変身もできない貴様らに何ができる？」

エターナルはユニコーンのガイアメモリを取り出しエターナルエッジに差し込んだ。

「ユニコーン！！マキシマムドライブ！！」

エターナル「はあ！！」

エターナルはエネルギーを帯びたエターナルエッジでガーディを斬りつけた。

一同「！？」

ダイゴ「ガーディー!!」

ガーディーは静かに倒れ込み胸のカラータイマーが点滅しだす。

映司「なんで怪獣を？」

こまち「あの怪獣・・・まさかあの子犬!？」

士「・・・そうだ。」

りん「そんな・・・」

うらら「あんまりですよ!？仲間ならなおさら・・・」

するとエターナルは笑い出した。

エターナル「はははははは!!」

結城「何がおかしい?」

エターナル「仲間?・・・死人にそんな物は必要ない、ガーディーはメガシヨツカーの怪獣だ、だが奴は組織を裏切った、死んで当然だ。」

エターナルはコワイナーの仮面を取り出した。

くるみ「まつ、まさか!？」

エターナル「感謝しなガーディー、死にそうなお前を助けてやる。」
エターナルは仮面をガーディーに投げつけコワイナーにしてしまっ

た。

ダイゴ「ガーディー!?」

ガーディー「コワイナー!!!」

ガーディーはホシイナーと共に暴れ遊園地を破壊していった。

エターナル「ははは!!!そうだ、破壊しろ!!!」

ダイゴ「やめろおお!!!」

その時スパークレンスが黒く輝きダイゴは黒い姿をしたティガダークへと変身した。

士「く・・・黒い・・・」

のぞみ「ティガ・・・」

エターナル「面白い、エターナルの効果を受け付けなとは。」

ティガダークはガーディーとホシイナーをおさえつける。

ティガダーク（やめろ!!!ガーディー!!!）

しかし本来の力を出し切れないティガはガーディーとホシイナーに押し返されてしまった。

ティガ（くっ・・・力が出せない!!!）

エターナル「やれ!! ガーディー!!」

するとのぞみが

のぞみ「土先生、これ。」

土「これは・・・グリッターミラクルライト？」

のぞみ「ココが私に貸してくれたの、危ない時は使ってっ。」

のぞみはココから借りたグリッターミラクルライトを土に渡す。

風見「土、これをライドブッカーに使えば!!」

土「そうか・・・よし!!」

土はライドブッカーをガンモードにしミラクルライトを取り付ける。

エターナル「させるか!!」

しかしエターナルの周りにカンドロイドが現れエターナルを妨害する。

映司「土!今のうちに!!」

土「ああ!!」

土はミラクルライトの光をつけティガダークに向けて放った、ミラクルライトはティガダークのカラータイマーに当たりティガダークは光に包まれマルチタイプに戻った。

ティガ（!!!）

エターナル「おのれ・・・!?」

するとミラクルライトの光はティガだけではなく士達の体も包み込む。

のぞみ「ミラクルライトが!!」

結城「今なら変身できる。」

士「よし、行くぞ！変身!!」

「プリキュア!!メタモルフォーゼ!!」

風見「変身・・・ブイスリアア!!」

結城「ヤア!!」

巧「変身!!」

映司「変身!!」

「カメンライド!!ディケイド!!」

「complete」

「タカ!!トラ!!バッタ!!タ・ト・バ!!タトバ!!タ・ト・バ!!」

一同はミラクルライトの力でエターナルの力に妨害される事なく変身した。

エターナル「まとめて地獄行きだ!!」

エターナルはあらゆる怪人を呼び出しディケイド達を襲う。

.....

ティガ（ガーディー!!目を覚ませ!!）

ティガはガーディーに付けられたコワイナーの仮面を殴りつけた、仮面に亀裂が走る。

ガーディー「コワ・・・イナー!?!」

コワイナーの仮面は碎け散りガーディーは元の姿に戻った。

ティガ（良かった。）

するとガーディーはホシイナーにつかみかかり人が乗ったゴンドラを取り外し地面に置いた、そこから人が逃げて行った。

ドリーム「凄い!!」

エターナル「ちっ、ホシイナー!!」

ホシイナーはガーディーのカラータイマーを殴りつけた。

デイケイド「!？」

ドリーム「!？」

ティガ（ガーディー!？）

ガーディーのカラータイマーは光を失いガーディーは静かにまぶたを閉じた。

555「なっ・・・」

レモネード「そんな・・・」

アクア「なんて事を・・・」

ティガは膝をついた、またガーディーを守る事が出来なかったという後悔が自分を襲っているのだ。

エターナル「力無き者は死ぬ、当然の事・・・」

その時

「ファイナルアタックライド!! デイデイデイケイド!!!」

デイケイドはディメンションシユートを放ち怪人を全滅させた。

エターナル「なん・・・だと?」

ティガは拳を握りしめながら立ち上がりホシイナーを睨みつける。

ホシイナー「ホシイナー!!」

ティガ（!!!）

ティガはホシイナーに攻撃を仕掛ける、怒りと悲しみを込めて。

エターナル「死んだ者にむきになるとは、馬鹿な。」

すると

ディケイド「違うな。」

エターナル「なに？」

ディケイド「人は大切な物を奪われた時、悲しみに暮れ、さらにはそれを奪った者を恨む、そして復讐しようとする、だが・・・人はその復讐の心を再び何かを失わないようにする力に変える事が出来る・・・その時人は次こそ大切な物を守ると誓えるんだ。」

エターナル「馬鹿馬鹿しい、そんな物はただの思い込みだ。」

ディケイド「それでも人はその誓いを信じている・・・人は誓いを捨てた死人のお前より強い、お前は死という現実と向き合う事が出来ない・・・ただの動いている人形にすぎない!!」

エターナル「貴様・・・何者だ？」

ディケイド「通りすがりの仮面ライダーだ、覚えておけ!」

^UJ U

第26話 仇

エターナル「通りすがりの仮面ライダーだと？」

ディケイド「そうだ、覚えておけ。」

するとブツカーからドリームのライドカードと何も書かれていないカードが飛び出しドリームのカードは絵柄がかわり他のカードにはスパークレンスの書かれたカードになった。

ディケイド「なるほどな。」

ディケイドは2枚のカードをドライバーに差し込んだ。

「ファイナルフォームライド!!! ププププリキュア5!!! テイティティティガ!!!」

すると今までドリームだけだったファイナルフォームライドがローズを含むプリキュア5メンバーまでもが姿を変えた。

アクア「わ、私達も!?!」

ミント「これは凄いわ!!!」

レモネード「凄い力です!!!」

ローズ「これなら勝てるかもしれない!!!」

ルージュ「ドリーム、準備は良い?」

ドリーム「もちろん!!」

そしてティガは体がマゼンタ色に輝く姿に変わった。

ティガ（これはディケイドの力?・・・よし!!）

エターナルは拳を握りしめる。

エターナル「だからどうした・・・地獄を楽しみなあ!!」

エターナルはホシイナーの他にザケンナー、ウザイナー、ナキワメーケ、ソレワターセ、オルフェノク、テレビバエ、カマキリヤミーを呼び出した。

ドリーム「いくよ、みんな!!」

「YES!!」

ルージュ、アクアはザケンナーにとびかかる。

ザケンナー「ザケンナー!!」

ザケンナーは攻撃を仕掛けるがルージュとアクアは翼を広げてかわし同時に蹴りを叩き込んだ。

ルージュ、アクア「はああ!!」

ザケンナーは勢い良く倒れ込んだ。

ルージュ「プリキュア！！ディメンションストライク！！」

アクア「プリキュア！！ディメンションアロー！！」

ルージュは目の前に赤い薔薇がいくつも現れ足下に現れたマゼンタ色のエネルギー球を蹴り出した、エネルギー球は薔薇を貫きながらザケンナーを襲い、アクアは目の前に現れた青い薔薇に向かってマゼンタ色の水の矢を放つ、矢は薔薇貫きながらザケンナーを襲い消滅させた。

ウザイナー「ウザイナー！！」

ウザイナーは見た目のわりに俊敏な動きで走り回りミントとレモネードを錯乱させる。

ミント「速い！？」

レモネード「私の出番です！！」

レモネードの腕が黄色く輝きだす。

レモネード「プリキュア！！ディメンションチェーン！！」

すると追尾性を持った黄色い薔薇がウザイナーを追いかけ追いつくとマゼンタ色の鎖が薔薇を貫きながらウザイナーを拘束する。

ウザイナー「ウツ、ウザイナー！？」

レモネード「今です！！！！」

ミント「ええー!!」

ミントはいくつもの緑色の薔薇を出現させる。

ミント「プリキュア!!デイモンションソーサー!!」

緑色の薔薇はマゼンタ色の円盤となりウザイナーを切り裂き消滅させた。

ソレワターセ「ソレワターセ!!」

ローズ「あんに渡す物なんて・・・」

ローズはソレワターセの攻撃をかわすと何かを思いだした。

ローズ「あっ、ひとつだけあったわ。」

ローズは紫色の薔薇を出現させ構える。

ローズ「邪悪な力を破壊する、輝く薔薇を咲かせましょう!!ミルキイローズ・デイモンションブリザード!!」

ローズが紫色の薔薇を破壊するとその破片はマゼンタ色のブリザードとなりソレワターセを消滅させた。

ナキワメーケ「ナキワメーケ!!」

ドリーム「はぁあ!!」

ドリームは飛び膝蹴りでナキワメーケを上空に蹴り飛ばしさらにか

かと落として地面に叩き落とした。

ドリーム「最後よ!!」

ドリームが高く飛び上がりクリスタルフルーレを取り出すと目の前に七色の薔薇が現れた。

ドリーム「プリキュア!! デイメンション! アタック!」

ドリームはクリスタルフルーレを突き出すとマゼンタ色の光線が放たれ薔薇を貫きながらナキワメーケを消滅させた。

オルフェノク「555、倒す!!」

テレビバエ「さあかかってこい!!」

カマキリヤミー「よせ!! これ以上オーズの力を使うな!!」

555「面倒くせえなあ・・・」

V3「手短に終わらせるぞ。」

ライダーマン「賛成だ。」

オーズ「暴走なんて覚悟のうえだよ!!」

555はある四角い機械を取り出すとファイズフォンをそれに装着し番号を入力すると555は赤く輝きだし赤い姿のブラスターフォームに変わった、オーズは青いメダルを三枚入れスキャナーで読み込ませた。

「シャチ！ーウナギ！ータコ！ー！シャシャシャウタ！ー！シャシャシヤウタ！ー！」

オーズはシャチ、ウナギ、タコのメダルでシャウタコンボに変わった。

テレビバエ「行くぞお！ー！」

テレビバエは飛び上がりV3とライダーマンに襲いかかるが

ライダーマン「ネットアーム！ー！」

ライダーマンはネットアームでネットを出しテレビバエに絡みつける。

テレビバエ「うお！？うお！？」

V3「とぉー！」

V3は高く飛び上がり回転しながらテレビバエに向かっていく。

V3「V3キック！ー！」

そしてV3はテレビバエを勢い良く蹴り飛ばした。

テレビバエ「フラアアアイ！？」

テレビバエは消滅した、一方プラスターフォームになった555にオルフェノクが攻撃を仕掛ける。

オルフェノク「はああ……!?」

しかしフォトンブラッドに満ちている555の体に触れたオルフェノクの腕は灰となった。

555「たくつ、行くぜ。」

555は右足にエネルギーを溜め背中のジェット装置で空高く飛行しブラスタークリムゾンスマッシュを繰り出した。

555「やああああ!!」

ブラスタークリムゾンスマッシュが炸裂しオルフェノクは青い炎と共に灰となり消滅した。

オーズ「はあ!! たあ!!」

カマキリヤミー「くつ!?!? くそお!!」

オーズは腕の鞭でカマキリヤミーを攻撃する。

オーズ「行くぞ!」

オーズはスキヤナーでメダルを読み込ませた。

「スキヤニングチャージ!!」

オーズは鞭でカマキリヤミーを拘束し高く飛び上がる、そして足のタコの装甲がドリル状になりカマキリヤミーを貫いた。

オーズ「セイヤアアア!!」

カマキリヤミー「ぐああああ!!」

カマキリヤミーは爆散した。

ティガ（たああ!!）

ティガは渾身の力でホシイナーを蹴り倒す。

ティガ（ガーディー・・・絶対にお前の仇をうつ!!）

さらにティガはホシイナーを持ち上げて投げ飛ばした。

ホシイナー「ホシイナー!？」

ティガ（とどめだ!!）

ティガは腕をクロスして突き出し横に大きく広げると光の層が目の前に現れ腕をL字に組み光の層を貫きながら発せられるディメンションゼペリオン光線を放つ。

ホシイナー「ホシイナー!？」

ホシイナーはディメンションゼペリオン光線により消滅した。

.....

エターナル「驚いたな、まさかあの軍勢を一掃するとは・・・」

ディケイド「当然だ、俺は全てを破壊するからな。」

エターナル「ほざけ!!」

エターナルはエターナルエッジを構えディケイドに攻撃を仕掛ける、ディケイドはカードを取り出す。

ディケイド「ナイフにはナイフってな？」

「アタックライド!!コピーベント!!」

ディケイドはコピーベントでエターナルエッジをコピーし手で華麗に回し構える。

エターナル「なめるなあ!!」

ディケイド「そんなつもりはないぜ!!」

エターナルとディケイドのナイフでの攻防が繰り広げられる。

エターナル「くっ・・・なかなかやるな、だが!!」

エターナルはディケイドを押しつけて距離をとりZのガイアメモリを取り出す。

アクア「ガイアメモリ？」

ドリーム「何をするつもりなの!？」

エターナルは腰のマキシマムスロットにメモリを差し込んだ。

「ゾーン!!!マキシマムドライブ!!!」

するとどこからか大量のガイアメモリが現れた。

ティガ(全部ガイアメモリ!?)

ローズ「まさか!?!」

大量のガイアメモリはエターナルが身に付けている全てのマキシマムスロットに差し込まれた。

「アクセル!!!バード!!!サイクロン!!!ダミー!!!フアング!!!
ジーン!!!ヒート!!!アイスエイジ!!!ジョーカー!!!キー!!!ル
ナ!!!メタル!!!ナスカ!!!オーシャン!!!パピティアー!!!クイ
ーン!!!ロケット!!!スカル!!!トリガー!!!ユニコーン!!!バイ
オレンス!!!ウエザー!!!エクストリーム!!!イエスタデー!!!ゾ
ーン!!!マキシマムドライブ!!!」

そしてエターナルはエターナルメモリをエターナルエッジに差し込
んだ。

「エターナル!!!マキシマムドライブ!!!」

するとエターナルの体は緑色のエネルギーに包まれ凄まじい波動が
放たれた。

ディケイド「うお!?!」

ライダーマン「なんて力だ!？」

ミント「吹き飛ばされるわ!？」

ティガ（くう!）

エターナル「はははは!このメモリの力・・・味わえ!」

エターナルはエターナルエッジで空を切り裂きそれにより起こった
かまいたちで一同を襲う。

「ぐあああああ!？」

「きゃあああああ!？」

エターナル「終わりだあ!」

ディケイドは再び攻撃を受ける前にカードを取り出した。

ディケイド「最終手段だな・・・頼むぞ!」

「アタックライド!!!コンファインメント!」

するとエターナルの体を包む緑色のエネルギーが消えた。

エターナル「なっ、何!？」

ルージュ「今なら!」

ディケイド「だが保つてあと30秒だ、一気に決める!」

ディケイドはカードを差し込んだ。

「ファイナルアタックライド！！ディディディディケイド！！」

ディケイドはディメンションキックを放つ。

エターナル「させるかあ！！」

エターナルは抵抗し自力でコンファインメントを打ち消しガイアメモリの力を込めたネバーエンディングヘルを放った。

そのエネルギーはディメンションキックでは到底押し切れない力だった。

エターナル「終わり・・・何！？」

気づけばエターナルはライダーマンのロープアームで拘束されていた。

ライダーマン「今だ！！」

V3「V3逆ダブルタイフーン！！」

オーズは赤いメダルを三枚読み込ませた。

「タカ！！クジャク！！コンドル！！タアアアジャアアドルウウウ！！」

そしていくつものメダルをタジャスピナーに入れスキャナーに読み込ませた。

「タカ!!!クジャク!!!コンドル!!!シャチ!!!ウナギ!!!タコ!!!ギン!!!!!!ギガスキャン!!!」

オーズ「セイヤアアアアアア!!!」

「exceed charge」

555はファイズブラスターをブラスターモードにしエネルギーを溜める。

555「はああああ!!!」

V3は強力な竜巻のエネルギーを、オーズはタジャドルコンボのギガスキャンによりタジャスピナーから強力なコンボのエネルギーを、555はファイズブラスターからフォトンバスターをエターナルの必殺技に向けて放つ。

ドリーム「みんな!!!私達も!!!」

「YES!!!」

プリキュアはキュアフルーレを構える。

「プリキュア!!!ミルキイローズ・フローラル・エクスプロージョン!!!」

ミルキイローズ・フローラル・エクスプロージョンが放たれ仮面ライダーの必殺技と共にエターナルの必殺技を押し返す。

エターナル「くうう！？バカな！？」

そしてついにネバーエンディングヘルは打ち消されその先にはデイケイドのカードが並んでいた。

デイケイド「はああああああああああああ！！！！！！」

ディメンションキックはエターナルに直撃した。

エターナル「ぐああああ！？し・・・死ぬのか・・・また死ぬのか！？」

デイケイド「違う、お前はもう死んでるんだ！！」

エターナル「そうか・・・はははははははは！！」

エターナルは笑いながら爆発し消滅、装着されたガイアメモリは全て破壊された。

・・・

ティガはガーディイを抱きかかえる。

ドリーム「ダイゴさん・・・」

そしてティガはガーディイを持ち上げて空高く飛んでいき見えなくなった。

555「どこに行ったんだ？」

ディケイド「前にミライが言ってた怪獣墓場だろっな。」

アクア「残念だったわね・・・」

ディケイド「だがこれでひとつあいつは強くなった。」

オーズ「え？」

レモネード「どっという事ですか？」

ディケイド「あいつは大切なものを守る力をまたひとつ手に入れたって事だ。」

つづく

第26話 仇（後書き）

何でもディメンションつけちゃった。

ここでなんですが他のウルトラ兄弟の出演依頼きてるのですが第1弾の時は主役ウルトラ兄弟を全てだしました、題名をウルトラ8兄弟からウルトラ兄弟に変えるべきでしょうか？

第27話 集結！悪のウルトラマン！！（前書き）

高熱のためなかなか更新できませんでしたがやっとの事で更新です。

第27話 集結！悪のウルトラマン！！

メガシヨツカー本部・・・

ブラッディ「エターナルが死んだか。」

ダークデイケイド「貴重な戦力がまた減ったな。」

すると

「うおおおおおおおお！！！」

王蛇が暴れていた、戦えない事のイライラが頂点に達していたのだ。

シャドウ「ちょっと、あいつどつするのよ。」

ダークデイケイド「あいつは俺の手には負えない、どこかに閉じ込めておけ。」

シャドウ「そうね、それよりついに完成したわよ、カオスロイド。」

ダークデイケイド「ほう。」

.....

写真真館

えりか「さあ次いつてみよー！！！」

祈里「ちよつとえりかちゃん・・・（汗）」

のぞみ「いくら何でもやりすぎじゃ・・・」

ミライ「全然大丈夫ですよ!!」

アスカ「さあどんなもんでもかかってきやがれ!!」

ひかり「のってる（汗）」

えりかの手によってまたまたファッションショーをやらされている
ミライとアスカである。

えりか「今度は学生服だよ!!」

ミライ「僕は学生服着慣れてるからもってこいですよ!!」

アスカ「微妙に役者ネタ使ってないか？」

・・・

その頃平和な風が吹く上空

「本日は」 「飛行機をご利用いただき誠にありがとうございます。」

飛行機が空を飛んでいた。

「楽しみだなあ。」

「旅行初めてだよねえ。」

そんな平和な会話が溢れる飛行機に何かが飛んでくる。

パイロット1「ん？・・・何だあれは!？」

パイロット2「こっ、こっちに向かってくる!？」

パイロット1「ぶつかろぞ!!!うわああああ!？」

何かと飛行機が衝突、飛行機は墜落した、その何かは4つあり動きを止め墜落した飛行機を見届けた。

そして何かは黒い閃光となりとびさった。

.....

ダイゴ「おい。」

我夢「まだやってんの?」

ダイゴと我夢がミライとアスカを迎えにきた。

ミライ「ダイゴさん!!!」

アスカ「どうだこのアロハシャツ、似合うだろ?」

えりか「似合う似合う!!!」

ダイゴと我夢はため息をついた。
すると

ミライ「ん？あれは！？」

ダイゴ「ミライ？」

ミライは空を見上げていた、一同も空を見上げるとそこには不可思議な文字が浮かんでいた。

祈里「何あれ？」

えりか「？」

アスカ「あれはウルトラサインか！？」

ミライ「『今日は貴様らがこの地球を拝む最後の日だ。』・・・まさか！？」

すると黒い閃光が地面に4つ降り注いだ。

ダイゴ「うわっ！？」

えりか「なななんだあ！？」

その4つの閃光は巨人へと姿を変えた。

我夢「あれはハヤタさんが言っていた！？」

ミライ「カオスロイドです！！」

アスカ「しかもあれ俺達じゃねえか！？」

そう、そのカオスロイドはTH、D、G、Mというティガ、ダイナ、ガイア、メビウスをモチーフに作られたカオスロイドだった。

TH（ツイニデアエタナウルトラキョウダイ。）

ダイゴ「!!!」

D（アラタニツクラレタワレラカオスロイド・・・）

ワレラノチカラナマエニ・・・

G

M（シヌガイイ。）

するとアスカが

アスカ「黙って聞いてりゃ偉そうな事言いやがって!!!倒されるのはお前達なんだよ!!!」

ダイゴ「行くぞ!」

ダイゴ達はウルトラマンに変身した。

えりか「ちよつとあんた達だけで話進めないでよ!?!」

祈里「私達も加勢しよう!!!」

のぞみ「よおおし!!!」

ひかり「行きましよう!!!」

えりか達もプリキュアに変身しウルトラマンに加勢する。

マリ「あんた達なんかダイゴ達を倒せるわけないじゃん!!」

ダイナ（その通りだぜ!!）

プリキュアとウルトラマンはカオスロイドに立ち向かった。

マリ「マリンシュート!!」

マリはマリンシュートをTHに放つがTHはビクともしない、続いてティガがつかみかかり投げ飛ばそうとしたがその寸前で腕を掴まれ逆に投げ飛ばされてしまった。

ティガ（うわあああ!?!）

マリ「ダイゴ!?!」

さらにTHはマリンに光弾を放つ。

マリ「きゃあああ!?!」

マリは吹き飛ばされた。

パイ「てええい!!」

パイはDの後ろに回り込みパインフルートを構える。

パイ「プリキュア!!ヒーリングプレアーフレッシュ!!」

ヒーリングプリアーフレッシュはDを包むがすぐさまDはそれを振り払った。

パイン「きかない!?!」

そしてDはパインを殴り飛ばした。

パイン「きゃああああ!?!」

ダイナ（んなろおおお!?!）

ダイナはソルジェント光線を放ちDを押し倒す。

ドリーム「プリキュア!?!シューティングスター!?!」

ドリームはシューティングスターでGを襲う、Gはそれを受けとめるがドリームはさらに力をこめる。

ドリーム「はああああああ!?!」

ガイア（はあ!?!）

ガイアはGの後ろからクアンタムストリームを放ちGを苦しめる。

ルミナス「ルミナス!?!ハーティエルアンクション!?!」

ルミナスはハーティエルアンクションでMを拘束するがMはそれを払いのけ光線を放つ。

ルミナス「!?!」

メビウス（あぶない！！）

メビウスはメビウムシートで対抗するが押し返されるルミナスと共に吹き飛ばされた。

メビウス（ぐああああ！？）

ルミナス「きゃああああ！？」

するとカオスロイドはしゃべりだした。

TH（ウルトラキョウダイ、プリキュア、ナカナカヤルヨウダナ。）

D（シカシワレラハナカマトトモニキサマラウルトラキョウダイノカケガエノナイバシヨヘイク。）

G（ソコデタノシミにシテイルゾ。）

M（ユウキガアレバクルガイイ。）

そう言うとカオスロイドは黒い閃光となり消えた。

つづく

第27話 集結！悪のウルトラマン！！（後書き）

次回、眩しい世界へ

第28話 M78星雲

ダイゴ達はメンバーを全員呼び出した。

ハヤタ「そうか、ついにカオスロイドが生まれたか……」

夏海「悪のウルトラ8兄弟ですか……」

士「厄介だな。」

祈里「そういえば……」

祈里が何かを思いだした。

のぞみ「どうしたの？」

祈里「カオスロイドはウルトラ兄弟のかけがえのない場所に行くつて言ってたから何かなって。」

ダン「我々のかけがえのない場所？」

そこに

ミライ「まさか……光の国!？」

北斗「我々の故郷か!？」

なぎさ「それが本当なら大変じゃん!？」

満「助けたいけど、ウルトラマンじゃない私達は光の国には行けないんじゃない？」

ゆり「たしかにそうかもしれないわね。」

士「どうなんだ？ミライ。」

ミライは言った。

ミライ「行けなくはないです、でも人間には行ける範囲が限られています。」

咲「そんな・・・」

奏「どうにもならないの？」

そこに妖精達が

ココ「手はあるココ。」

アスカ「なんだって!？」

メップル「これメポ。」

メップルはグリッターミラクルライトを取り出した。

ダイゴ「グリッターミラクルライト？」

士「そのライトの光を浴びれば大丈夫なのか？」

ナッツ「ミラクルライトは奇跡を起こすナツ、大丈夫ナツ。」

しかし一同は困っていた、これを使えば光の国に行けるが同時に妖精達の護衛力が大幅に減るからだ。

くるみ「それを使ったらココ様達が危ない……」

夏海「でもそれ以外に方法は……」

シロップ「何を困ってるロプー!!」

一同「!?!」

タルト「自分の身くらい自分で守れるがな行ってきいや。」

ハミィ「ハミィ達を信じるニヤ!!」

響「ハミィ……みんな……」

ほのか「ありがとう。」

夏海「土君、私も連れて行ってください!!」

土「はあ?」

ダイゴ「夏海ちゃんも!」

夏海「私もキバーラといれば戦えます、お願いします!!」

夏海は頭を下げた。

士「・・・足引つ張るなよ。」

夏海「ありがとうございます!」

キバーラ「良かったわね夏海。」

ココ「準備が出来たならさっそく光を浴びるココ。」

妖精達はウルトラ兄弟以外の者にグリッターミラクルライトの光を浴びせた。

ハヤタ「よし、ウルトラの国へ出発だ。」

ハヤタ達はウルトラマンに変身し士達と共に宇宙へ飛び立った。

・・・

その頃

???「行けゴモラ!」

ゴモラ「グオオオ!」

謎の青年の命令に従う怪獣ゴモラ、その相手は

???「おつと危ない、怪獣を操るとは・・・たいしたお宝だ。」

???「お前、いきなりバトルナイザーを渡せだなんて・・・何者だ!」

「????」通りすがりの仮面ライダーってどこかな?」

「????」は拳銃を取り出しカードを使った。

「カメンライド!! デイエンド!!」

.....

ウルトラマン達は宇宙を飛んでいた、途中ワープを使い光の国の近くまで移動した。

のぞみ「宇宙かぁ・・・星がいっぱい。」

士「ダイゴ、あとどれくらいで着くんか?」

ティガ（もう少しだ。）

しばらく飛んでいると異様に強い光を放つ星が見えた。

響「す、凄い光・・・まさかあれが?」

ウルトラマン（そう、あれが私達兄弟の故郷だ。）

メビウス（M78星雲光の国、通称ウルトラの国です。）

そして一同はついに光の国に到着した。

なぎさ「うわぁ、ウルトラマンがたくさんいる。」

メビウス（彼らはまだ正式なウルトラマンではないんです。）

士「なるほど、だからカラータイマーがついて無いのか。」

ラブ「本当だ。」

そこにはカラータイマーを持たない赤い体や青い体の巨人が地球の人間のようにたくさんいた。

ダイナ（まだカオスロイドは来てないみたいだな。）

ガイア（前みたいに畏じゃないよね？）

エース（おそらくそれは無いと思うが・・・）

ジャック（まずウルトラの父の所へ行こう、事情を説明しないと。）

ウルトラマン（そうだな。）

再びウルトラマン達は士達を乗せウルトラの父がいるウルトラ警備隊本部へ飛んだ。

ウルトラ警備隊本部

父（おう、8人揃ってしかも地球人まで連れてここへ来るとは・・・何かあったか？）

メビウス（はい、実は地球にある悪の組織・メガシヨッカーがかつて光の国を襲ったカオスロイドを復活させたんです。）

母（それは本当ですか！？）

ダイナ（本当だ、しかも俺達のカオスロイドまで作りやがった。）

ジャック（つまり我々8兄弟のカオスロイドがこの光の国に向かっているわけです。）

カオスロイドが・・・

父

すると

士「良い手がある。」

ティガ（えっ！？）

のぞみ「何！？教えて先生！！！」

士は指をならし答えた。

士「来る前につぶす。」

「・・・・・・・・」

やはり父と母以外は「あんたらしいよ。」という目をした、しかし

父（だが確かにそれが有力かもしれん。）

夏海「えっ！？」

かれん「あっさり受け入れたわね。」

士「心が広くて助かるぜ。」

母（しかしカオスロイドは今どこに・・・）

そこに

????「彼がK76星で食い止めてるよ？」

一同「!？」

隅に一人の青年が立っていた。

士「海東・・・またお宝か。」

それは数々の世界であらゆる本人曰わくお宝を手に入れるために旅をしているトレジャーハンター海東大樹だった。

父（何者だ？）

海東「まあまあ落ち着いて、カオスロイドの居場所を詳しく教えてあげるからさ。」

ウルトラマン（K76星と言えば無人の・・・）

海東「そう、僕はその星にいた怪獣使いの青年の持つバトルナイザーを貰いにきた。」

ウルトラ兄弟達は驚愕した。

メビウス（怪獣使いにバトルナイザー！？まさか！？）

夏海「知っているんですか？」

セブン（もしかしたら以前戦った仲間かもしれん。）

ダイナ（じゃあ早く助けねえと！）

海東「ウルトラマン君達はここにいるのが得策だと思うよ？もしか
ら空きの光の国を狙われたらまずいしさ。」

すると士が

士「ちよつと待て海東、事情は大体わかった・・・が、話をまとめ
てみるとお前はお宝を手に入れていない、お宝を盗むはずのお前が
何故ここにいる？」

海東（ぎくっ）

舞「確かに可笑しいわね。」

かれん「まさか・・・」

夏海「逃げてきたんですか？」

海東「・・・」

士「あながちそのお宝の持ち主の怪獣使いと戦い途中カオスロイド
が星に到着、手も足もでず怪獣使いを残し逃げ、俺達を戦いに行か
せてお宝を手に入れるために利用するとかだろ。」

海東「これ以上言わないでくれ!!」

見事に凶星のようだ。

士「ウルトラの父、まずはウルトラ8兄弟と俺達の誰かを助っ人と
して連れてK76星に行かせカオスロイドと戦う際に怪獣使いと合
流、他に下っ端が来ないとは限らない、怪獣使いをここにワープさ
せ光の国の護衛力補充としないか？」

父（うむ、レイブラッドの血をひく彼なら光の国に来れる、そうし
よう。）

海東「待ちたまえ、僕はどうなる？」

士「ウルトラ兄弟と行くに決まってるだろ!？」

士は先ほどのプリキュアメンバーに加え海東、いつき、かれん、こ
まち、響、奏、満、薫を8兄弟の助っ人として決めた。

ウルトラマン（よし、K76星に急ぐぞ!!）

のぞみ「私達も準備をしよう!!」

ウルトラ兄弟は助っ人達を連れてK76星に向かった。

UJU<

第28話 M78星雲(後書き)

次回はK76星side

第29話 怪獣使いとカオスロイド

ウルトラ兄弟は助っ人達と共にK76星に向かっていた。

エース（しかしわからん、大樹君は何故光の国に入れたんだい？）

そう、光の国は特別な方法が無い限り通常の人間は入れる場所が決まっているのだ。

海東「特別に教えてあげよう、世界が融合したと聞き再びここに来て怪獣使いの事を聞いてね・・・」

・・・

海東は融合した世界に来た時怪獣使いの事を聞きつけた、そして情報を集めていると

海東「何だい君は？」

????「それはこっちの台詞よ？いきなり植物園の園長に会いたって聞いて来たらいきなり怪獣使いの居場所を教えるだなんて・・・」

海東「それは失礼した、僕は海東大樹、あらゆる世界のお宝を集めているんだ。」

????「・・・もしかして仮面ライダーかしら？」

海東は少し驚いた顔をした。

海東「仮面ライダーを知ってるのかな？」

????「ええ、孫のつぼみから聞いてるわ。」

海東「なるほど、ところであなたの名前は？」

????「花咲薰子よ。」

その人物はつぼみの祖母、花咲薰子だった。

彼女は50年前最強のプリキュア・キュアフラワーとして戦っていたが今は変身能力を失っている。

海東「では薰子さん、50年前プリキュアだったあなたは怪獣使いの情報を持っているかい？」

薰子「いいえ、残念だけど怪獣使いについては知らないわ。」

海東「なるほど・・・」

すると

薰子「海東さん、ひとつ質問するわ。」

海東「何かな？」

薰子「最近カオスロイドという闇の巨人が現れたのを知ってる？」

海東「もちろん、それがどうしたのかな？」

薰子はある宝石を取り出した。

薰子「怪獣使いの情報とは関係ないけど・・・私の孫でプリキュアのつばみとその仲間達がウルトラ兄弟と呼ばれる巨人と宇宙に行ったの。」

海東「ようするに宇宙に行ったつばみ君達を助けてほしいと？」

薰子「この宝石を持てばどんな場所の環境にも耐えられるわ、つばみに渡しそこねただけねどこれをあなたに渡すかわりにお願いできるか？」

海東は少し考え宝石を手にした。

・・・

海東「そんなわけで宇宙に来たら偶然怪獣使いに出会ってね。」

ジャック（薰子さんのお願いは後回しか？）

海東「悪い言い方はよしてくれ、こうして来たんだから。」

いつき（いやいや優先順位が・・・）（汗）。

そんな会話をしているとK76星が見えてきた。

ウルトラマン（見えたぞ！！）

かれん「あれがK76星。」

響「ウルトラの星とのギャップが激しいなあ。」

一同はK76星に降り立った、そこには生物どころか植物すらなかった。

満「ここにカオスロイドが来たのよね？」

薫「まさかもつウルトラの国に？」

メビウス（いや、まだ悪の気配を感じます、まだいます。）

奏「怪獣使いは？」

ウルトラ兄弟は変身を解き当たりを見渡すとそこには石化した怪獣ゴモラがいた。

ダイゴ「あれはゴモラ？」

ダン「という事は怪獣使いというのは……」

ミライ「レイさんですね。」

奏「レイ？」

奏達プリキュアはレイの事を知らなかった。

ハヤタ「レイは宇宙を支配するレイブラッド星人の血をひいている怪獣使いだ。」

薫「つまり・・・宇宙支配の後継者？」

ダン「だが彼は宇宙支配を拒み我々と協力しウルトラマンベリアルから光の国を救ったんだ。」

満「そのレイさんもこの星に？」

郷「その可能性が高い。」

アスカ「とりあえず探してみようぜ、カオスロイドもまだこの星にいるみたいだしよ!!」

我夢「そうだね。」

一同はレイを探すためK76星を散策する。

海東「助けるのは良いけど報酬はあるんだろうね。」

海東はいきなりそんな言葉を一同にぶつけてきた。

北斗「こんな状況でよくそんな事をいえるな。」

海東「こうみえてトレジャーハンターだからね。」

いつき「報酬は何がいいんだい？」

海東「じゃあウルトラの国のお宝をもらおうかな？」

すると

ハヤタ「ふざけるな!!」

ハヤタが怒鳴った、一同は驚愕した、それもそのはずウルトラの国のお宝と言えばプラズマスパークの事だ、それが無くなればウルトラの国はたちまち滅んでしまう。

ハヤタ「君は自分の目的を果たせれば他はどうでもいいのか!？」

ダン「ハヤタ、少し落ち着け。」

海東「じ、冗談に決まっているじゃないか、まったく。」

海東は少し慌てていた。

薫「自分の発言に責任を持ったほうがいいわねあなたは。」

満「まったくね。」

.....

しばらく散策しているとこまちが

こまち「あれは洞窟かしら?」

かれん「.....そうみたいね。」

我夢「何かあるかもしれない、行ってみよう。」

一同は洞窟の中に入った、そこは真っ暗であまり視界が良くない。

ダイゴ「何も見えないな。」

しばらくすると響の足に何かがぶつかった。

響「ん？」

郷「どうした？」

響「何かが足に……」

響はよく目を凝らした、するとそこには人がいたのだ。

響「うわあ！？人！？」

北斗「何だって！？」

一同はようやく目が暗闇になれた、確かに人が倒れていた。

ミライ「顔が上手く見えないですね。」

奏「外まで運びましょう。」

倒れていた人をダイゴとハヤタが担ぎ外に運び出した。

ミライ「レ、レイさん！！」

その倒れていた人は怪獣使いのレイだった。

海東「怪獣使い君、ボロボロじゃないか。」

かれん「手当てしないと!?!」

.....

レイ「.....ん?」

奏「気がついた!?!」

レイ「君たちは.....しかも怪盗に、ウルトラ兄弟!?!」

ダン「安心したよ、彼女が手当てしてくれたんだ。」

かれん「応急処置だけどなんとか歩けますよ。」

レイ「すまない.....それより一体この状況は.....」

ミライはレイに今までの経緯を話した。

レイ「カオスロイド.....奴らは俺を探しているはずだ。」

アスカ「レイを?」

レイ「俺があいつと戦ってた時突然カオスロイドが現れたんだ、俺は邪魔になるから先に始末するって言つてな。」

満「相手の戦力は先に消すって事ね。」

レイ「ああ、俺はゴモラで対抗したが8対3じゃ手も足も出なかった。」

かれん「3?ゴモラだけじゃ無いんですか?」

レイは指をさした、その方向には2体の怪獣が石化していた。

レイ「リトラにエレキング、俺の仲間だ。」

こまち「そうなんですか・・・」

その時

「ミツケタゾ」

一同「!?!」

黒い閃光が4つ落下してきた、カオスロイドU、S、J、Aだった。

ダン「4体だと?他の4体は!?!」

U「ステニヒカリノクニニムカッテイル。」

我夢「何だつて!?!」

ハヤタ「いかん、レイ!!!ミライ達と共に光の国に!!!」

しかし

レイ「仲間を放つてはおけない!!!」

海東「怪獣使い君も怪獣がいなきゃただの足手まといじゃないかな

？」

響「あんたそんな言い方・・・」

レイ「良いんだ、あなた8兄弟はこのカオスロイドを頼む、仲間を助け次第他のカオスロイドを追う。」

郷「手はあるのか？」

レイ「心当たりがある、プリキュアと怪盗も来てくれ!!」

奏「わかりました!!」

海東「仕方ない、高くつくからね？」

ハヤタ達はウルトラマンに変身、レイはプリキュアメンバーと海東と共に石化した仲間の怪獣のもとに向かった。

第30話 仲間の復活（前書き）

満と薫に名乗りが欲しいと思いました。

第30話 仲間の復活

レイ達はまずゴモラのもとに向かった。

レイ「ゴモラ……」

かれん「レイさん、どうするんですか？」

レイはバトルナイザーを取り出した。

レイ「おい怪盗、変身して力を貸せ。」

海東「僕に命令しないでくれたまえ。」

海東はディエンドライバーを取り出しカードを差しこみ引き金をひいた。

海東「変身……！」

「カメンライド……！ディエンド……！」

海東はディエンドに変身した。

レイ「よし、はあああ……！」

レイは力を込めると不思議なエネルギーに包まれウルトラマンを想像させる姿に変わった。

満「えっ!?!」

こまち「もしかしてそれが・・・」

いつき「レイさんの本当の姿？」

レイ「ああ、レイブラッド星人・・・これが俺の本当の姿だ。」

奏「どうするんですか？」

レイ「怪盗とレイブラッドの力を怪獣に送る。」

デイエンド「なるほど。」

すると

「グギヤアアアア！！！」

上空からバードンの大群がこちらに迫っていた。

薫「怪獣！？」

響「あんなに沢山！？」

デイエンド「プリキュア達、時間をかせいでもらっしょ？」

いつき「仕方ない！！行こう！！！」

かれん、こまち「プリキュア！！メタモルフォーゼ！！！」

満「月の光よ！！！」

薫「天空の風よ!!」

いつき「プリキュア!!オープンマイハート!!」

響、奏「レッツプレイ!!プリキュア・モジュレーション!!」

いつき達はプリキュアに変身した。

アクア「知性の青き泉、キュアアクア!!」

ミント「安らぎの緑の大地、キュアミント!!」

サンシャイン「陽の光浴びる一輪の花、キュアサンシャイン!!」

メロディー「爪弾くは荒ぶる調べ!!キュアメロディー!!」

リズム「爪弾くはたおやかな調べ!!キュアリズム!!」

「届け!!!2人の組曲!!!スイートプリキュア!!」

プリキュアは個別の必殺技でバードン大群を倒していく。

「ファイナルアタックライド!!ディディディエンド!!」

レイ「ゴモラ、蘇ってくれ!!」

レイは力を込めるとバトルナイザーからエネルギーが発せられリングを作った、ディエンドはディメンションシュートをリングに向かって放つとディメンションシュートは金色の粒子状の光になりゴモ

ラを包み込む。

ディエンド「なるほど、ディエンドの力とレイブラッド星人の力が融合したか。」

レイ「はああああ!!！」

ついにゴモラは石化から解かれバトルナイザーに吸収された。

アクア「やったみたいよ!!！」

レイ「後はリトラとエレキングを・・・ぐっ!?!？」

レイは急に膝をついた、バードンの大群を倒し終えたプリキュアが駆け寄る。

レイ「ぐっ・・・力を使いすぎたようだ・・・」

満「無理しちゃいけません!!！」

アクア「少し休まないと・・・」

しかし

レイ「そんな時間は無い!!！早くリトラとエレキングを・・・」

するとディエンドがいきなりレイの懐を殴りつけ気絶させた。

ミント「海東さん!?!？」

サンシャイン「何を・・・」

ディエンド「・・・体力を回復させないと足手まといになるからね・・・それに・・・」

メロディー「それに？」

ディエンドは何かを言いかけた。

ディエンド「いや、何でもない、少し休もう。」

リズム「レイもだけどハヤタさん達は大丈夫かな？」

ディエンド「大丈夫だとも、本物が偽物にかなうはずないからね。」

アクア「・・・」

・・・

その頃ディエンドの言う通りウルトラ兄弟はカオスロイドに押し勝っていた。

ティガ（はあ！！）

ダイナ（おるあ！！）

ティガはゼペリオン光線をUに放ち、ダイナはソルジェント光線をSに放ち、さらにウルトラマンがスペシウム光線をUに放ち、セブロンがワイドショットをSに放ち2体のカオスロイドを倒した。

ウルトラマン（よし！！）

ティガ（やった！！）

セブン（やったな！！）

ダイナ（よっしゃあ！！）

そしてガイアとジャックはJにフォトンエッジ、シネラマショットを放ちJを倒した、さらにメビウスはメビウムシユート、エースはスペースQを放ちAを倒した。

ジャック（ついにやったぞ！！）

メビウス（よし！！）

ガイア（やりましたね）

エース（ああ。）

しかしよく見るとカオスロイドを倒した際に生じた紫色の粒子が集まりだした。

ダイナ（なっ、なんだ！？）

ウルトラマン（まさか！？）

その粒子は集まり一つの姿になった。

メビウス（あれは、ダークロプスゼロ！？）

セブン（まずい！！）

ダークロプスゼロは光線を放ち8兄弟を苦しめる。

ティガ（ぐああああ！！）

ダイナ（なんて奴だ！？）

メビウス（どうにか・・・しないと！！）

ダークロプスゼロが再び腕をL字に組もうとした時

????「超振動波だあ！！」

凄まじい振動波によりダークロプスゼロは吹き飛ばされた。

ウルトラマン（今は、レイ！？）

そこにはゴモラを引き連れたレイ、ディエンド、プリキュアがいた。

メビウス（助けられたんですね！！）

レイ「ああエレキングもリトラも無事だ！！ゴモラ！！行け！！」

ゴモラがダークロプスゼロに飛びかかり蹴り倒す。

しかしダークロプスゼロはゴモラを投げかえし光線を放つ。

ゴモラ「グギヤアアア！！」

レイ「ぐああああ!?!」

レイとゴモラは一心同体、ゴモラが傷つけばレイも傷ついてしまう。

アクア「まずいわ!?!」

メロディー「私達も!?!」

しかしダークロプスゼロは光線で猛攻を続ける。

プリキュア「きゃああああ!?!」

ディエンド「はっ!?!」

「アタックライド!?!ブラスト!?!」

ディエンドはブラストは放つがダークロプスゼロにはビクともしない。

ディエンド「このままではまずいな……」

ミント「くっ……どうすれば……」

ウルトラ兄弟もプリキュアも傷ついてしまった、ダークロプスゼロがとどめをさそうとしたその時

????（俺の真似とは良い度胸じゃねえか。）

ダークロプス（?）

ガイア（な、なんだ！？）

セブン（今の声・・・まさか！？）

そして赤と青の2色の閃光が星に降り立った。

ウルトラマン（来てくれたのか！！）

???（おいレイオニクス、早く光の国に行け。）

レイ「・・・わかった！！」

アクア「えっ、え」と・・・」

リズム「レイさん、あれもウルトラマンなんですか！？」

レイ「そうにしか見えなйдらる？」

赤と青の体、頭には2つのカッター、そのウルトラマンは・・・

ディエンド「君、何者だい？」

???「・・・ゼロ、ウルトラマンゼロ！・・・セブンの息子だ！・・・」

UNU

第31話 息子・ゼロ

突如現れたのはウルトラセブンの息子・ウルトラマンゼロだった。

セブン（ゼロ！！）

ゼロ（早く光の国に行け！！カオスロイドはまだ到着してないがあらゆる怪獣がすでに光の国を襲撃してる！！）

メビウス（でもゼロが一人に！！）

ゼロ（俺がこんな奴に負けるとでも思ってたのか？いいからさっさと行け！！）

ディエンド「随分荒っぽい性格だね、ならお言葉に甘えてここはまかせようか。」

セブン（よし、行くぞ！）

プリキュア「はい！！！」

ウルトラ兄弟はプリキュアとディエンド、レイを手に乗せ光の国に飛び立った。

ゼロ（さあて、さっさとぶっ潰してやるぜ。）

ダークロブスゼロはゼロに向かって飛びかかってきたがゼロはそれをかわし背中を蹴り飛ばした。

ゼロ（おるあー！！）

ダークロプスゼロは地面に叩きつけられる、しかしダークロプスゼロもゼロの懐を蹴り反撃にでる。

ゼロ（ちっ！やるじゃねえか。）

するとゼロの頭の2つのゼロスラッガーが外れブーメランのように宙を旋回しゼロの手に渡る、ダークロプスゼロも対抗しゼロと同じくスラッガーを構える。

ゼロ（はあー！！）

ゼロはダークロプスゼロに斬りかかる、ダークロプスゼロはそれかわし斬りかえすがゼロはそれをかわししばらく攻防が続いた。

.....

その頃

ミント「ゼロは1人で大丈夫なのかしら？」

メビウス（大丈夫です、彼は光の国の希望ですから。）

レイ「今は彼にまかせよう。」

ディエンド「そうだね。」

すると4つの紫色の光線がどこからか放たれた。

ジャック（何！？）

ディエンド「はっ！！！」

「アタックライド！！バリア！！」

ディエンドはバリアを張り光線を防ぐ。

リズム「今のはもしかして！？」

レイ「・・・そのまさかのようだ。」

光線が放たれた方向には4体のカオスロイドがいた。

TH（ヒカリノクニニイクテマガハブケタ。）

M（マズハキサマラヲサキニシマツスル。）

ウルトラマン（みんな！！構える！！）

・・・

ゼロ（はあああー！！）

ゼロとダークロプスゼロはゼロスラッガーを念力で操作し攻防を繰り広げていた。

ゼロ（ぐっ・・・このやるっ！！）

ゼロはスラッガーの操作を急停止させダークロプスゼロに飛び膝蹴

りをあたえさらに飛び上がりかかと落としを繰り返す、ダークロプスゼロはそれを受け止めるがゼロの力を止めきれず地面に叩きつけられた、ゼロはダークロプスゼロから一旦離れる。

ゼロ（・・・まだやる気が。）

ダークロプスゼロはふらつきながらも立ち上がり腕をL字に組み光線を放つ。

ゼロ（デヤッ！！）

ゼロはワイドゼロショットを放ち対抗する、しかしダークロプスゼロの光線はワイドゼロショットを押し返す。

ゼロ（はああ！！）

ゼロは負けじと力を込めるがついにワイドゼロショットは完全に押し返されてしまった、あたりに爆風が起こる。

ダークロプスゼロ（・・・！？）

しかしそこにゼロの姿は無かった。

ゼロ（デヤアアアアアアア！！）

ダークロプス（！？）

ダークロプスゼロは頭に衝撃が走った、ゼロは光線を直撃する寸前に飛び上がりゼロキックを繰り出したのだ、ダークロプスゼロはゆっくりと倒れ爆散した。

ゼロ)さて・・・後はあいつらの手伝いな。(

ゼロは飛び立ちK76星を後にした。

つづく

第31話 息子・ゼロ（後書き）

先ほど気づきました、ウルトラマンメビウスでサコミズ隊長を演じた田中実さんが4月下旬にお亡くなりになりました、サコミズ隊長は僕にとって非常に好きな隊長でした、田中実さんのご冥福をお祈りします。

第32話 決着！カオスロイド！！

宇宙ではカオスロイドとウルトラ8兄弟、プリキュア、ディエンド、レイはリトラを出して激戦を繰り広げていた。

レイ「行け！！リトラ！！」

リトラがカオスロイド達を攻撃するウルトラ兄弟を援護していく。

リトラ「キイイイイ！！」

しかしリトラはカオスロイドMに投げ飛ばされてしまった。

レイ「リトラ！？」

アクア「プリキュア！！サファイアアロー！！」

サンシャイン「プリキュア！！ゴールドフォルテバースト！！」

「アタックライド！！ブラスト！！」

ディエンド「はあ！！」

3人が連続で連射系攻撃をはなつがTHがバリアーで防ぎきる。

ディエンド「まったく、骨が折れるね。」

アクア「でも攻撃あるのみよ！！」

ウルトラマン（みんな！！合体光線だ！！）

ウルトラ兄弟はそれぞれ光線を放ち合体させカオスロイドに放つ。

メロディー「私達もいこう！！」

アキラ「わかったわ！！」

メロディー、リズムはベルティエを取り出した。

メロディー「おいで！！ドリー！！」

リズム「おいで！！レリー！！」

メロディーはベルティエにドリー、ミリーを、リズムはベルティエにレリー、ファリーを取り付ける。

メロディー「ミラクルベルティエ！！セパレーション！！」

リズム「ファンタスティックベルティエ！！セパレーション！！」

サンシャインはシャイニータンバリンを構える。

サンシャイン「花よ、舞い踊れ！！プリキュア・ゴールドフォルテバースト！！」

無数のひまわりのエネルギー弾が放たれた。

満「私達にできるかしら・・・」

薫「大丈夫よ！！やるしかない！！」

満「・・・そうね！！」

満と薫の体にエネルギーがたまる。

薫「聖霊の光よ！！命の輝きよ！！」

満「希望へ導け！！2つの心！！」

満、薫「プリキュア！！スパイラルハート・スプラッシュ！！」

満と薫はスパイラルハートスプラッシュを放つ。

アクア「プリキュア！！サファイアアロー！！」

ミント「プリキュア！！エメラルドソーサー！！」

アクアとミントは必殺技を放つ。

メロディー「溢れるメロディーのミラクルセッション！！」

リズム「弾けるリズムのファンタスティックセッション！！」

メロディー「プリキュア！！ミラクルハートアルペジオ！！」

リズム「プリキュア！！ファンタスティックピアチェーレ！！」

2つの2色のハート型のエネルギーが放たれた。

「ファイナルアタックライド！！ディディディディエンド！！」

「ディエンド」はっ！！」

ディエンドはディメンションシユートを放つ。

それぞれの必殺技が放たれカオスロイドに向かっていく、しかし突如必殺技は謎の光線で全て消滅した。

ティガ（何っ！？）

メロディー「なっ、なんで！？」

するとウルトラ兄弟は目を疑った。

ダイナ（あっ、あいつは！？）

セブン（何故・・・奴が！？）

目の前にはウルトラ兄弟を震え上がらせる姿がカオスロイドと共にあった。

???（この俺様に震え上がってるようだな、ウルトラ兄弟。）

黒い体、赤いマント、おぞましい目と爪、そうそれはかつてウルトラマンゼロに倒されたはずのガイザーベリアルだった。

ベリアル（久しぶりだなあ、ウルトラ兄弟。）

そこに

(ベリアル!!)

セブン(ゼロ!!)

ゼロが駆けつけた。

ゼロ(貴様、生きてたのか!?)

ベリアル(当たり前だ!!全宇宙を支配するまで俺様は死なん!!)

ゼロ(このやろう!!)

ゼロはゼロスラッガーを構える。

ベリアル(ふん、お前と戦うつもりはない、カオスロイド・・・光の国に転送してやる。)

メビウス(何だって!?)

ベリアルは次元を切り開きカオスロイドを光の国に転送した。

ガイア(しまった!!)

ジャック(光の国に急ぐぞ!!)

ウルトラ兄弟達は光の国に向かう。

ベリアル(ははは、長々と光の国で戦ってるんだな。)

.....

光の国

「ファイナルアタックライド！！ファファファファイズ！！」

ディケイド「はあああ！！」

ディケイドは555にカメンライドしクリームゾンスマッシュを放ちバードンを倒す。

フレッシュ組「ラッキークローバー！！グランドファイナーレ！！」

ドリーム「プリキュア！！シューティングスター！！」

マックスハート組「エキストリーム・ルミナリオ！！」

プリキュア達や光の国の様々なウルトラ戦士達も総力をあげてバードンを撃退していく。

キバーラ「はあ！！やあ！！」

ディケイド「たくつ、何匹来るんだ！？」

「ファイナルカメンライド！！ディケイド！！」

ディケイドはコンプリートフォームになりファイズ・プラスターを呼び出した。

「ファイナルアタックライド！！ファファファファイズ！！」

ディケイド「はあ!!」

ディケイドのライドブッカーとファイズのファイズブラスターから膨大なエネルギー放ちバードンを一掃する。

キバーラ「まだ来ますよ!?!」

ブルーム「・・・あれ、怪獣?」

ディケイド「いや、あれは!?!」

それはバードンではなくベリアルにより光の国の目の前にまで転送されたカオスロイドだった。

ブロッサム「カオスロイドです!?!」

マリリン「そんな!?!」

ディケイド「ひるむな!?!」

ディケイド達はカオスロイドに攻撃を繰り返すがビクともしない、カオスロイドは光の国の建造物を破壊していく。

ブラック「まずい!?!」

ピーチ「どうにかしないと!?!」

すると

(待て!?!)

キバーラ「!?!」

ディケイド「やっと来たか。」

それはゼロを含むウルトラ兄弟達だった。

レイ「行け!!!ゴモラ!!!」

レイはゴモラを呼び出した。

ゴモラ「グガアアアアア!!!」

ゼロ（調子にのりやがって!!!）

ディエンド「やあ士、苦戦しているようだね。」

ディケイド「うるさい、早く手伝え。」

メロディー「プリキュア全員集合!!!みんな行くよ!!!」

プリキュア「うん!!!」

カオスロイドの他に次々と他の怪獣が押し寄せてくる。

ゼロ（雑魚は俺がやってやる!!!）

ゼロは怪獣に立ち向かう。

ブラック「だああ!!!」

ウルトラマン（ふん！！）

ティガ（たあ！！）

ブルーム「はあ！！」

セブン（だあ！！！！）

ブロッサム「てえい！！！」

キバーラ「はっ！！！」

一同は総攻撃を仕掛けるがカオスロイドは強化されたのかウルトラマンの攻撃さえも受け付けない。

エース「なんて奴だ！？」

パイン「明らかに強化されてるよ！！！」

カオスロイドは光線を放つ。

ウルトラ兄弟（ぐあああああ！？）

ディケイド、ディエンド、レイ「うわあああああ！？」

キバーラ、プリキュア「きゃあああああ！？」

全く歯がたたない一同、するとディエンドがカードを取り出した。

「デイエンド「仕方がない。」

「カメンライド!!!」!!!」

「デイエンドは仮面ライダー」を呼び出した、さらに

「ファイナルフォームライド!!! ジェジェジェ」!!!」

「Jはファイナルフォームライドで巨大化したのだ。」

「レモネード」か、仮面ライダーが大きくなりました!?!」

しかしJ1人ではカオスロイドに苦戦するのは目に見えている、すると

「デイエンド「痛みは一瞬だ。」

「ファイナルフォームライド!!! デイデイデイデイケイド!!!」

「デイケイド「うおっ!?!」

「デイケイドはファイナルフォームライドになりジャンボデイケイドライバーに変形、」の腰に巻かれジャンボデイケイドが誕生した。

「ドリーム」っ、土先生が大きくなったああああ!?!」

「ティガ（心強いよ土!）」

「デイケイド「行くぞ。」

ディケイドはライドブツカーをガンモードにしカオスロイドのカラータイマー目掛けて弾丸を放つ。
するとカオスロイドは苦しみ始めた。

ダイナ（何だいきなり！？）

ガイア（カラータイマーが弱点、ウルトラマンと同じって事なのかな？）

ウルトラマン（今ならいけるぞ！！）

ウルトラ兄弟は必殺技の体勢に入った。

ドリーム「私達も・・・」

しかしどこからかショットカー怪人が現れた。

マリ「うわわわ！？何でどこから！？」

ムーンライト「恐らく転送されてきたのね。」

ディエンド「怪人君は何でもありのようだね、じゃあ僕も。」

ディエンドはタッチパネルのついた青い機械を取り出した。

「G4！！リュウガ！！オーガ！！グレイブ！！カブキ！！コーカサス！！アーク！！スカル！！ファイナルカメンライド・ディエンド！！」

なんとディエンドもディケイドと同じコンプリートフォームになっ

ただ。

ドリーム「ええ！？海東さんも！？」

ディエンド「じゃあ、痛みは一瞬だ。」

プリキュア「えっ！？」

ディエンドはカードを銃に差し込んだ。

「ファイナルフォームライド！！ププププリキュア！！」

ブラック「・・・あれ？なんともないよ？」

ディエンド「続いて・・・」

「ファイナルアタックライド！！ププププリキュア！！」

するとプリキュア達はディエンドライダーに吸い込まれた。

プリキュア「きゃあああああ！？」

ディエンド「はっ！！」

ディエンドはディエンドライダーの引き金を引くとプリキュア達が光を帯びながら弾丸のように飛び出しショットカー怪人を襲った。

ショットカー怪人「ぎゃああああ・・・」

ショットカー怪人は全滅したがプリキュア達はのびていた。

メロディー「ひ……ひどい……がくっ。」

デイエンド「悪いね。」

一方ウルトラ兄弟は必殺技を放った、ウルトラマンはスペシウム光線、セブンはワイドショット、ジャックはシネラマショット、エースはメタリウム光線、ティガはゼペリオン光線、ダイナはソルジェント光線、ガイアはフォトンエッジ、メビウスはメビュームシュートを放つ。

カオスロイドも負けじと光線で対抗する。

レイ「ゴモラ！！超振動波だあ！！！」

「アタックライド！！イリユージョン！！」

ジャンボディケイドは4人に分身した、さらに

「ファイナルアタックライド！！ディディディディケイド！！」

ジャンボディケイドはディメンションシュート、ゴモラは超振動波をカオスロイドに放ちを放つ、ウルトラ兄弟の光線とディメンションシュート、ゴモラの超振動波が同時にカオスロイドを襲う。

レイ、ウルトラ兄弟「はあああああ！！！！！！！！」

そしてついにカオスロイドは押し負け光線を直撃し消滅した。

プリキュア「やったあああ！！！！」

デイエンド「お見事。」

デイケイド「やっとけりがついたぜ。」

ゼロも怪獣を倒し終え戻ってきた。

.....

再び光の国に平和が訪れた。

父「8兄弟、仮面ライダーにプリキュア、レイ、感謝する。」

士「そんなたいそうな事してはいない。」

のぞみ「士先生照れてる。」

するとレイは海東にバトルナイザーを差し出した。

レイ「約束だ怪盗。」

しかし

海東「いや、もうお宝は手に入れたよ？」

レイ「なに？」

海東はあれだけ欲しがっていたバトルナイザーを受け取らなかった。

海東「光の国の光、何だか浴びてるだけで満足してしまっただけ、しかもバトルナイザーよりずっと価値があると思うし。」

りん「んな無理やりな(汗)。」

海東「それじゃ僕には新しいお宝が待ってるんでね。」

海東はそう言い残しその場を去った。

ダイゴ「僕達も地球へ帰ろう。」

夏海「そうですね。」

つぼみ「帰りましょう。」

レイ「俺はここでお別れだ、仲間を探すからな。」

アスカ「はぐれたのか？」

レイ「ちょっとな、じゃあまた会おう。」

レイはその場を去った。

士「やっとこの眩しい国からおさらばだ。」

のぞみ「楽しかったなあ。」

なぎさ「ずっと戦ってたのにそんなに楽しかった？」

一同「ははははははっ!!!!!!」

しかし一同はまだ知らなかった、地球が地獄と化しているのを……

つづく

第32話 決着！カオスロイド！！（後書き）

次回、地球に緊急事態が

第33話 絶望の地球（前書き）

今回はあの2人が登場！！

第33話 絶望の地球

つぼみ「ええ！？おばあちゃんが!？」

いつき「そうらしいんだ。」

ダイナ（にしてもよくわかんない奴だったな。）

士「あいつはこそ泥だ、それには変わらない。」

士達は地球へ向かっていた。

ウルトラマン（見る、地球だ。）

ティガ（？）

夏海「何だか・・・変ですね。」

のぞみ「急いっしょー!」

ウルトラ兄弟は急いで地球に戻り変身を解いた。

ダイゴ「なっ・・・何だこれは・・・」

のぞみ「どうして・・・」

士「なるほど・・・やられたな。」

目の前には破壊された建物、燃やされた植物、そして無惨に殺され

た人々があつた。

響「どういう事？」

士「カオスロイドは囷だつたんだろう、そしてがら空きになった地球を一齐にメガシヨッカーが襲つたんだ。」

祈里「そんな・・・でも仮面ライダーは他にいるんじゃない・・・」

士「確かにそれが気がかりだ・・・ん？」

士は何かに気づいた、誰かが倒れていた。

夏海「あれは・・・誰でしょうか？」

えりか「行ってみよう!!」

一同は倒れている人物に駆け寄つた。

士「え、映司!？」

それは仮面ライダーオーズ・火野映司だつた。

映司「・・・つ、士・・・」

士「おい、何があつた？」

映司「シヨッカーがせめてきて・・・ライダーが何とか立ち向かつただけど・・・ライダーが全滅した・・・。」

一同は驚愕した。

ラブ「仮面ライダーが・・・全滅!？」

映司「それに・・・プリキュア、君達の妖精も・・・メガシヨツカ
ーに・・・さらわれた。」

くるみ「ココ様達が!？」

なぎさ「メツプル達は何とか助かったけど・・・」

咲「他の妖精が・・・でも何で？」

映司「くっ・・・」

映司は気を失ってしまった。

夏海「映司さん!？」

士「のぞみ、まずナッツハウスに戻るぞ、他の奴らは自分の街の様
子を見にいけ。」

つばみ「わかりました!!」

夏海「映司さんをナッツハウスに運びましょう!!」

のぞみ達以外は自分の街に戻り、のぞみ達はナッツハウスもとい光
写真館に戻った。

・・・

士「しかしライダー全滅とはな・・・」

夏海「かなり荒らされてますね。」

うらら「シロップ達かなり抵抗したんですね。」

かれん「とりあえず私達も一旦家に戻った方が・・・」

すると気がついた映司が

映司「いや、ダメだ・・・この街は完全に破壊された・・・」

りん「そんな・・・じゃあお父さんもお母さんも・・・」

映司「・・・ごめん。」

くるみ「映司は悪くないわよ!」

のぞみ「でもこれからどうしよう・・・」

すると

????「全滅は・・・言い過ぎじゃないか?」

一同「!?!?」

キバーラ「あらら?お客様?」

そこには見た事のない2人の青年がいた。

士「誰だお前？」

????「俺達は……」

????「仮面ライダーだ。」

と2人の男は2つのベルトを取り出した。

夏海「えっ!?!でも全滅したって……」

????「俺は武藤蒼牙、別世界の仮面ライダーだ。」

????「僕は夢原信者、別のプリキュアの世界の仮面ライダーだ。」

のぞみ「べっ、別のプリキュアの世界!?!」

かれん「パラレルワールドって事？」

すると

士「武藤蒼牙……ああ、あの時の……なるほど、大体分かった、
だがお前達2人が加わっただけじゃメガシヨッカーには……」

夢原「大丈夫、まだ仲間はあるしそれに……」

蒼牙「その仲間が全滅した仮面ライダーを復活させようとしてる。」

「うらら」本当ですか!?!」

蒼牙「ああ!?!」

.....

一方その頃つぼみ達が希望ヶ花に到着していた。

つづく

第33話 絶望の地球（後書き）

次回、メガシヨッカーには罪を数えてもらいます。

第34話 希望ヶ花の救世主

希望ヶ花

つぼみ達の住む街、しかしそこも無惨な風景が広がっていた。

つぼみ「そんな・・・うう・・・」

つぼみは涙目になり膝をつく、ゆりが駆け寄る。

ゆり「つぼみ、泣いてはられないわ・・・こうなった以上、これ以上の被害を出さないためにも私達は戦うしかないのよ。」

いつき「そうだよ！！僕達が泣いていたらダメだ！！」

えりか「つぼみ！！」

3人はつぼみを慰める。

つぼみ「みんな・・・はい！！」

すると

????「ここに来ていたかプリキュア！！」

4人「！？」

そこにはシヨッカー戦闘員を率いる毒サソリ男がいた。

ゆり「メガシヨツカー!!」

つぼみ「希望ヶ花をこんな状態にするなんて・・・私、堪忍袋の緒が切れましたあ!!」

いつき「僕もお前達を許さない!!」

えりか「よっしゃあ!!行くぞお!!」

シプレ、コフレ、ポプリ「プリキュアの種!!行くですう!!」

シプレ、コフレ、ポプリがプリキュアの種を出そうとした瞬間何か黒い影が目の前を通り過ぎ、シプレ達は消えていた。

いつき「ポ、ポプリ!？」

つぼみ「どういう事ですか!？」

????「こついう事だ。」

声のする方を見るとそこにはつぼみ達を苦しめた仮面ライダー王蛇、そしてブラッディがいた。

ブラッディ「妖精さえいなければこつちのものだ。」

王蛇「俺は戦うぜ、帰るならお前一人で帰りなあ。」

ブラッディ「そうさせてもらう。」

シプレ「つ、つぼみ!？」

コフレ「うわわわ!? えりかあ!?!」

ポプリ「いちゅきい!?!」

ブラッディはシプレ達を連れ消えた。

つぼみ「そんな・・・シプレ達が・・・」

ゆり「あなた達は下がって!?!」

ゆりは唯一妖精無しで変身出来るのだ、ゆりはプリキュアの種を取り出した。

ゆり「プリキュア!?! オープンマイハート!?!」

ゆりは光に身を包む。

ムーンライト「月光に冴える一輪の花、キュアムーンライト!?!」

王蛇「ほう、面白い・・・」

「ソードベント」

王蛇は剣を構えムーンライトに襲いかかる、ムーンライトはそれかわし反撃にでる。

王蛇「はあ!?!」

ムーンライト「たあ!?!」

さすがはムーンライトと言ったところか、王蛇とほぼ互角の戦いをしている。
しかし

毒サソリ男「今だ！！奴らを襲え！！」

戦闘員「イイイイ！！」

毒サソリ男達は変身出来ないつぼみ達を襲い始める。

えりか「ええ！？ちょっと卑怯だよ！！」

いつき「2人とも下がって！！はあ！！」

格闘技を得意とするいつきは戦闘員程度なら相手にすることができ
るが数が多く対応しきれない。

いつき「くっ、うわあ！？」

いつきは戦闘員に押さえつけられてしまった。

つぼみ「いつき！？きゃあ！！」

えりか「ちよっ、離れて！？」

戦闘員はつぼみ達を襲う、いつきは背中を剣で斬られ、つぼみは何
発も殴り倒され、えりかは首を絞められる。

ムーンライト「みんな！？」

王蛇「よそ見るんじゃないよ。」

王蛇はムーンライトを斬りつけ腹を蹴り込む。

ムーンライト「ぐっ!?!」

ムーンライトは倒れ王蛇の足に踏みつけられる。

王蛇「どうした、前みたいに楽しませてくれよ。」

ムーンライト「くっ……私はあなたを楽しませるつもりなんて……
あああ!?!」

王蛇は足に力を込めムーンライトを苦しませる。

いつき「ゆ……ゆりさん……」

つぼみ「みんな……」

えりか「うう……うう……」

つぼみ、えりか、いつき（お願い……誰か助けて!!）

3人がそう願った瞬間数々のショッカー戦闘員が突然何かを打ち込まれ消滅する。

王蛇「!?!」

毒サソリ男「な、なんだ!?!」

ムーンライト「今は・・・一体・・・」

毒サソリ男「何者だ!!」

すると声が響く。

????「レディだった4人にそんな大勢でかかって恥ずかしくないのか？」

王蛇「あそこかあ。」

一同「!!!!」

そこには黒い体と装甲、複眼に銀色のラインと仮面、白いマフラーをなびかせながら帽子を手で押さえている者の姿があった。

えりか「ま・・・まさか・・・」

いつき「仮面・・・ライダー・・・？」

つぼみ「でも・・・どうして・・・」

ムーンライト「えっ・・・？」

しかしムーンライトにはその仮面ライダーを初めて見る感覚がなかった。

毒サソリ男「仮面ライダーだと!？」

王蛇「何でもいい、俺と戦え。」

そのライダーはゆっくりと歩き片手のマグナムを撃ち戦闘員達を倒していき全滅させた。

つぼみ「す、すごい……」

えりか「ていうか……骸骨!？」

いつき「骸骨の仮面ライダー?」

そのライダーはゆっくりと手を王蛇、毒サソリ男に向けて言った。

???「俺は仮面ライダースカル……さあ、お前の罪を……」

スカルは手をひっくり返した。

スカル「数えろ。」

毒サソリ男「余裕こきやがって、死ねえ!!!」

毒サソリ男はスカルに攻撃を仕掛けるがスカルは帽子を押さえながら攻撃をかわし反撃をする。

スカル「男なら正々堂々勝負したらどうだ?」

スカルがつぶやく。

毒サソリ男「おのれ黙れ!!!」

毒サソリ男が回し蹴りを仕掛けるがスカルは帽子から手を放ししゃがんでかわす、帽子が宙に浮いている間にベルトのメモリを腰のマキシマムスロットに差し込む。

「スカル！！マキシマムドライブ！！」

スカル「ふん！！」

スカルはエネルギーを帯びた拳を毒サソリ男の腹に叩き込んだ。

毒サソリ男「がつ……はっ！？」

宙に浮いていた帽子は頭にかぶさる、スカルは帽子を手で押さえながら立ち上がる。

スカル「お前は半熟なままだったな……今度は煮えきってからまた来な。」

毒サソリ男は爆散した。

王蛇「ほう、面白い。」

ムーンライト「シルバーインパクト！！」

ムーンライトはシルバーインパクトで王蛇を吹き飛ばした。

ムーンライト「くっ……？」

スカルがムーンライトに寄り添う。

スカル「大丈夫かい、嬢ちゃん。」

スカルが手を差し伸べる、ムーンライトはスカルの手を握り立ち上がる。

ムーンライト「あなたは何者？何故か初めて出会った気がしないの。」

スカル「？・・・なるほど、君はあの時とは違う嬢ちゃんかい。」

ムーンライト「え？」

スカル「いや、何でもない・・・嬢ちゃんとそっくりな娘と一回出会っていてな。」

すると王蛇が立ち上がる。

王蛇「いつまでおしゃべりしてる気だ、イライラする・・・早く戦おうぜ。」

スカル「なるほど、お前は半熟玉子じゃなく生玉子のようだな。」

王蛇「おしゃべりは終わりだ。」

「アドベント」

アドベントによりベノスニーカーが召喚されつぼみ達を襲つ。

つぼみ「きゃああ！？」

ムーンライト「つぼみ!？」

スカル「なに!？」

王蛇「よそ見をするな!！」

スカル「ぬっ!」

スカルは王蛇の猛攻を受ける。

スカル「嬢ちゃん!！あの娘達を助けに行くんだ!！」

ムーンライト「え、ええ!！」

しかし

「アドベント」

「アドベント」

王蛇はメタルグラス、エビルダイバーを召喚、ムーンライトを襲う。

ムーンライト「くっ、そんな・・・つぼみ!？」

つぼみ達は恐怖のあまり座り込んでしまう。

つぼみ「あ・・・ああ・・・」

えりか「そんな・・・」

いつき「くっ……」

ベノスニーカーがつぼみ達を襲おうとしたその時

「アクセル!!」

つぼみ「!?!」

????「はああああ!!」

赤い装甲の戦士がベノスニーカーを剣で斬りつける。

えりか「えっ……」

いつき「仮面ライダー!?!」

それは仮面ライダーアクセルだった。

アクセル「大丈夫か?」

つぼみ「あ……はい。」

するとベノスニーカーがアクセルに標的を変える。

アクセルはメモリを取り出した。

「トリアル!!」

アクセルは青いメモリをベルトに差し込むと高速戦士・アクセルトリアルになった。

アクセル「振り切るぜ!!」

アクセルはメモリを外しメモリについているタイマー起動させ上空に投げ高く飛び上がった。

いつき「速い!?!」

アクセル「はあああああああああああああ!!」

アクセルは空中で落下しながらベノスネーカーを蹴り続ける、ベノスネーカーにはTのような青いエネルギーが浮かび上がる、そして着地しメモリのタイマーを止める。

「トリアル!!マキシマムドライブ!!」

アクセル「9・8秒、それがお前の絶望までのタイムだ。」

ベノスネーカーは爆散した。

王蛇「なに?」

スカル「よそ見しないんじゃないのかなかったのか?」

スカルは王蛇の懐にスカルマグナムを打ち込んだ。

王蛇「くっ!?!」

さらにスカルはスカルマグナムでメタルガラスを狙撃する。

スカル「嬢ちゃん、奴を頼む。」

ムーンライト「分かったわ!!」

スカル「アクセル、赤い奴を頼めるか？」

アクセル「俺に質問するな。」

アクセルはアクセルメモリを取り出しさらに何か装置を取り付ける。

「アクセル!!アップグレード!!」

アクセル「さあ思い切り・・・振り切るぜ!!」

「ブースター!!」

アクセルは黄色い装甲のアクセルブースターになり飛行を開始する。

アクセル「はあ!!」

アクセルはエビルダイバーを斬りつけていく。

スカル「さあ、お前の罪を数えろ。」

スカルはスカルマグナムにメモリを差し込む。

「スカル!!マキシマムドライブ!!」

スカル「はっ!!」

スカルはメタルグラスにマグナムを打ち込み消滅させた。

「エンジン！！マキシマムドライブ！！」

アクセルはエンジンブレードにメモリを差し込んだ。

アクセル「絶望がお前の！！」

アクセルは急降下しながらエビルダイバーを斬りつける。

アクセル「ゴールだあああああ！！」

エビルダイバーは消滅し王蛇は力を失ったブランク体になった。

王蛇「なんだと・・・この俺が・・・」

ムーンライト「最後よ！！」

ムーンライトはタクトを構える。

ムーンライト「プリキュア！！シルバーフォルテウェーブ！！」

シルバーフォルテウェーブが王蛇に向かっていく。

王蛇「ぐっ！？」

王蛇は間一髪シルバーフォルテウェーブをかわしその場を去った。

ムーンライト「はあはあ・・・ふう。」

ゆりは変身を解くと疲れが襲い座り込んでしまう。

スカル「大丈夫かい、嬢ちゃん。」

アクセル「やったな。」

ゆり「ええ、助けてくれてありがとう、それより……」

ゆりが立ち上がる。

ゆり「あなた達は一体？」

つぼみ達もゆりに駆け寄る。

スカル「そうかやはり知らないか。」

アクセル「教えてやろう。」

2人のライダーはメモリをベルトから取り外し変身を解除した。

???「俺は照井竜、仮面ライダーアクセルだ。」

つぼみ「竜さんですね。」

???「俺は仮面ライダースカル、鳴海荘吉……あの世から戻ってきた。」

いつき「あの世？」

竜「亜樹子の父親がライダー復活のために転生したか。」

莊吉「そついう事になるな。」

えりか「ううなんかよくわかんないけど助けてくれてありがとう！
」

莊吉「気にするな、それより嬢ちゃん。」

ゆり「？」

莊吉はゆりの頭に手を乗せる。

莊吉「あんまり一人で無理するんじゃないぞ・・・良いな？」

ゆり「あ・・・ええ。／＼／＼／」

ゆりは莊吉のなんというのか、ハードボイルドな感じに少しひかれ
てしまった。

竜「しかし左とフィリップがやられ、なんとか残った俺達に2人を
復活させられるのか？」

えりか「確かに映司君しか今メインで残ってのいないしねえ。」

すると

莊吉「一つだけ方法がある・・・あの2人を探す。」

つばみ「あの2人？」

莊吉「ライダーには唯一2人だけ体に聖なる石が入っている奴がい

る、その2人はその石を無くさぬ限り死なない。」

いつき「じゃあとりあえずつぼみの植物園に行こう。」

つぼみ「そうですね、家族も心配ですし。」

竜「では案内してくれ。」

つぼみ「はい！」

つぼみは一同を植物園に案内した。

つづく

第34話 希望ヶ花の救世主（後書き）

体に入っている石、わかる人にはわかるはず！
さて次回舞台は横浜へ

第35話 横浜大決戦！！

横浜

そこはかつてウルトラ8兄弟が大決戦を繰り広げた場所、またプリキュア達が大決戦を繰り広げた場所でもある。

ハヤタ「ひどい状況だ・・・」

ダイゴ「レナ・・・大丈夫かな・・・」

アスカ「何言ってるんだよ、大丈夫だよ！！」

ダン「不安は大きなあやまちを生む、落ち着く事が必要だ。」

ダイゴ「はい。」

・・・

建物は倒壊しているが人々の姿は見えない。

我夢「逃げたのかもね。」

北斗「それなら安心だな。」

しかしメガシヨッカーの姿は見えない。

ミライ「何もいませんね・・・」

郷「どういう事だ？」

すると

????『ガラスだ!!』

一同「!？」

その瞬間建物のガラスから巨大な体中鏡のようなモンスターが現れた。

ダイゴ「土が言ったミラーモンスターか!？」

ハヤタ「しかし今の声は・・・」

するとまた

????『気をつけてくれ、奴は凶暴だ。』

アスカ「誰だ!？」

????『私はミラーマン、鏡の世界の戦士だ。』

声の主はミラーマンという戦士だった。

ダン「今どこにいるんだ？」

ミラーマン『鏡の世界から君たちの頭に直接語りかけている、訳あって今この世界から私は出る事が出来ない、だがこれは言うておく。』

北斗「何だ？」

ミラーマン『奴には普通の攻撃は効かない、奴の体を逆に利用するんだ。』

ダイゴ「逆に？」

ミラーマン『健闘を祈る。』

ミラーマンの声が途絶えた。

郷「声が消えた。」

ミライ「とりあえずあの怪獣を！！」

ダイゴ「よし！！」

ダイゴ達はウルトラマンに変身した。

ダイナ（まじかよ、俺達より断然でかいじゃねえか！！）

セブン（骨が折れるな。）

その怪獣はウルトラ兄弟をも上回る程巨大だった。

ガイア（早く片付けよう！！）

エース（行くぞ！）

ウルトラ兄弟はそれぞれ光線を放つ。

モンスター「キシヤアアア!!」

しかし光線は怪獣の体に当たった瞬間跳ね返されてしまった、ウルトラ兄弟はそれを避ける。

メビウス（跳ね返された!?!）

ウルトラマン（スペルゲン反射鏡か!）

怪獣はミラーモンスターにかつてウルトラマンが戦ったバルタン星人のスペルゲン反射鏡を身にまとった姿なのだ。

ダイナ（光線がダメなら力ずくで行くぜえ!!）

ダイナはストロングタイプに変わり怪獣を殴りつけるが

ダイナ（かつてえ!?!）

ダイナは怪獣に反撃を受けた。

ダイナ（ぐあ!?!）

メビウス（あの強度はリフレクト星人!?!）

ティガ（色んな怪獣を融合させるなんて・・・）

ダイナはその場を離れて体制を整える。

ダイナ（じゃあどうすりゃ良いんだよ!?!）

ジャック（落ち着けアスカ!?!ミラーマンの言葉を思い出せ!?!）

『奴の体を利用するんだ。』

一同は怪獣の攻撃をかわしながらミラーマンの言葉を思い出した。

ガイア（利用って一体どうすれば・・・うわあ!?!）

ジャック（我夢!?!ぐあ!?!）

ウルトラ兄弟は次々と怪獣の攻撃を受ける。

ウルトラマン（切断技だ!?!）

するとウルトラマンは八つ裂き光輪、ティガはティガスライサーを放つがこれも跳ね返されてしまう。

エース（我々の技全てに対応しているとは!?!）

メビウス（セヤア!?!）

メビウスはメビウスブレードを構え怪獣を斬りつけるがメビウスブレードは碎けてしまった。

メビウス（そんな!?!うわあ!?!）

ガイア（ミライ!?!）

ダイナ（どうすりゃ良いんだよ!?!）

怪獣は攻撃を仕掛けウルトラ兄弟を苦しめる。

ウルトラ兄弟（ぐあああああ!?!）

絶体絶命とはこの事だ、ウルトラ兄弟は手も足も出せない。

ティガ（一体……どうすれば……）

メビウス（こうなったら……ハッ!）

メビウスは空高く飛び上がる。

ウルトラマン（何をする気だ!?!）

メビウスは空中でドリル回転をし炎に身を包み怪獣を蹴りつけた。

セブン（メビウスピンククか!?!）

怪獣の体の鏡は一部が砕け散った、メビウスは怪獣と距離をおく。

メビウス（これでも一部か……）

すると

ティガ（……そうか、奴の体を利用する……やっと理解出来た
!?!）

ティガは空高く飛び上がり露出した部分にゼペリオン光線を放つ、

怪獣はそれを手で防ぎ光線を跳ね返す。

ダイナ（やっぱり防がれるか！？）

しかしティガは

ティガ（ハヤタさん！！バリアーを！！）

ウルトラマン（・・・そうか！！）

ティガはバリアーを張り跳ね返った光線をウルトラマンに向けて跳ね返した、ウルトラマンはバリアーを張りさらに光線を跳ね返し怪獣に放つ。

ジャック（なるほど。）

ガイア（それなら行ける！！）

怪獣の体により跳ね返った光線はウルトラマンに放たれるが次にウルトラマンはダイナに向けて光線を跳ね返した。

ダイナ（面倒な作業だぜ！！）

ウルトラ兄弟は自分のバリアーと怪獣の体を利用し光線を跳ね返し続ける、怪獣は光線を跳ね返すがエースが頭上でエネルギーをためているのに気づかなかつた。

エース（もう少しだ！！）

メビウス（セヤア！！）

メビウスはメビウスピンキックを再び放ち鏡を砕けく、怪獣はメビウスを腕で捕まえ地面に押し付けた。

メビウス（しまった！？ぐあああ！？）

ティガ（ハヤタさん！！）

ウルトラマンが跳ね返した光線はティガに向かっていく、ティガはバリアーでメビウスが二度目に砕いた部分に光線を跳ね返しついに直撃させた。

怪獣は倒れ込む。

ジャック（エース！！）

エース（行くぞ！）

エースはスペースQを露出した部分に放った。

怪獣「グガアアア！？」

怪獣の体の鏡が砕け散り怪獣は崩れ落ちた。

ティガ（やった・・・のか？）

ウルトラマン（そのようだ。）

.....

アスカ「とんでもない相手だったぜ。」

ダン「しばらく横浜の調査を続けよう。」

我夢「そうですね。」

ウルトラ兄弟一同は横浜の調査を続ける事になった。

つづく

第35話 横浜大決戦！！（後書き）

次回はクローバータウンズストーリー

第36話 四つ葉町の笑顔

クローバータウンズストリート

フレッシュ組のラブ、美希、祈里、せつなが暮らす町、そこも無惨な姿になっていた。

ラブ「よ、四つ葉町が・・・」

祈里「こんなのって・・・」

美希「ひどい・・・」

するとせつなは何かを感じとった。

せつな「・・・誰かいる!？」

一同「!？」

辺りを見渡すと壊れかけた建物に人影が見えた。

美希「町の人?・・・まさかメガシヨッカー!？」

ラブ「行ってみよう。」

ラブ達は建物の中に入る、今にも崩れそうだ。

せつな「あそこよ。」

祈里「誰かいるの？」

そこには誰かが力無く座り込んでいる男がいた。

????「うつ……君たちは……」

ラブ「ゆ、雄介さん!？」

そう、その男は仮面ライダークウガ・五代雄介だった。

ラブ「大丈夫ですか!? 傷だらけですよ!？」

ラブ達が雄介に駆け寄る。

雄介「ごめん……君達の町……守れなかった……」

せつな「雄介さんのせいじゃないですよ。」

美希「やはりメガシヨツカーが？」

雄介「うん……まだ近くにいないかもしれない……君達は早く……」

しかしその時

????「早く逃げないとまずいわねえ。」

一同「!？」

そこにはおぞましいオーラを放つ女がいた。

祈里「まさかのぞみちゃんが戦ったって言うってたシャドウ!？」

シャドウ「あらあら知ってるなんて光栄ね。」

雄介「まだ何か用か!？」

シャドウは雄介に指を指す。

シャドウ「あんた体にアマダムだかなんだかって石が入ってるのよね、それがあ限りあなたは死なない・・・だからそれを奪いに来た。」

シャドウは雄介のアマダムを奪いに来たのだ、するとラブ達が雄介の前に立つ。

ラブ「そんな事させない!!」

せつな「雄介さんは下がっててください!!!」

シャドウ「あらプリキュアね?そこをどきなさい。」

美希「誰がどくもんですか!？」

祈里「シフォンちゃんとタルトちゃんも返してもらおうわ!!!」

4人はリンクルンを取り出した。

「チェインジ!!プリキュア・ビートアップ!!!」

ピーチ「ピンクのハートは愛ある印!!もぎたてフレッシュ!!キ
ユアピーチ!!」

ベリー「ブルーのハートは希望の印!!摘みたてフレッシュ!!キ
ユアベリー!!」

パイン「イエローハートは祈りの印!!とれたてフレッシュ!!キ
ユアパイン!!」

パッション「真っ赤なハートは幸せの証!!熟れたてフレッシュ!
!キユアパッション!!」

ピーチ「レッツ!!」

「プリキュア!!」

ラブ達はプリキュアになりシャドウに飛びかかる。

ラブ「やあ!!」

パイン「はあ!!」

ベリー「たあ!!」

パッション「てえい!!」

しかしシャドウは全ての攻撃を受けとめ反撃する。

ピーチ、ベリー、パイン、パッション「きゃあああ!!?」

シャドウ「あはは！！弱いわね。」

シャドウは手から光弾を放ちプリキュアを苦しめる。

ピーチ「くっ！？プリキュア！！ラブサンシャインフレッシュ！！」

ピーチはラブサンシャインフレッシュで光弾を全て打ち消した。

シャドウ「へえ、やるわね。」

ベリー「ナイスよピーチ！！」

ピーチ「一気に決め・・・」

しかし突如背後からザケンナー、ジラス、シヨッカー戦闘員が現れプリキュアの邪魔をする。

パイン「なっ！？」

パッション「邪魔しないで！？」

プリキュアは数におされ苦しめられる。

シャドウ「ははははは！！死になさい！！」

その時

「変身！！」

シャドウ「！？」

クウガだった、雄介はクウガに変身しシャドウを殴りつけた。

クウガ「おりゃああああ!!」

シャドウはクウガの攻撃に後退した。

シャドウ「うっ……クウガか、面白い……前みたいにボロボロにしてあげるわ!!」

以前四つ葉町を襲いクウガと戦ったのはシャドウだった。

クウガ「これ以上誰にも涙は流させない!!」

シャドウ「ふん、この町には泣く人間すらいないよ!!」

シャドウはクウガを殴りつける、さらにシャドウはクウガの頭を掴み蹴りつけた。

クウガ「ぐあ!？」

シャドウ「そんなボロボロな体で私に勝てると思ってるのかい?」

クウガの体は以前の戦いでボロボロだった、しかしクウガはシャドウに必死の猛攻を仕掛ける。

ピーチ「はあ!!」

ピーチ達プリキュアはショッカー戦闘員を倒していきゼンナー、ジラーズに攻撃を仕掛ける。

ベリー「一気に決めましょう!!」

パイン「賛成!!」

パッション「ピーチ!!」

ピーチ「うん!!」

ピーチ達はクローバーボックスの力を借りた。

「ラッキークローバー!! グランドファイナー!!」

ザケンナー、ジラーズを倒したプリキュアはシャドウに標的を変える。

ピーチ「雄介さん!! 今助けます!!」

しかしシャドウは4体のマスカレードドーパントを呼び出しプリキュアを襲う。

ベリー「なっ! また敵!？」

パッション「ゆ、雄介さん!？」

クウガ「ぐう!?! うあ!?!」

クウガはシャドウの猛攻を仕掛けられ既に立ち上がるのがやっとだった。

シャドウ「馬鹿だねえ、さあ・・・殺してやるわ!!」

シャドウはクウガを踏みつける。

クウガ「くっ!?!うおおお!!」

しかしクウガの体に金の電気がほとばしった、それに驚いたシャドウは距離をとる。

シャドウ「なっ、何だ!?!」

クウガは変身の際の構えをとると両足に金のマイティアンクレットが装備され体は黒になった、これはクウガのライジングフォームの最終形態・アメイジングマイティフォームだ。

クウガ「うりゃあああ!!」

クウガはシャドウを殴りつける。

シャドウ「ぐあ!?!パ、パワーが格段に上がっている!?!」

そして気づけばプリキュアはマスカレードドーパントを倒していた。

ピーチ「シャドウ!! 終わりよ!!」

するとシャドウは高々と笑い出した。

シャドウ「ははははは!! なかなか面白い・・・が、終わりよ。」

シャドウが拳を突き上げると腕にダークブレスレットが装備されシ

ヤドウの体に黒い装甲が装備された。

クウガ「す、凄いパワーだ……」

パッション「こんなのって……」

シャドウ「これが私の最強の姿、さあ……死ねえ!!」

ピーチ「み、みんな!!」

ベリー、パイン、パッション「うん!!」

ピーチ「プリキュア!!ラブサンシャインフレッシュ!!」

ベリー「プリキュア!!エスポワールシャワーフレッシュ!!」

パイン「プリキュア!!ヒーリングプレアーフレッシュ!!」

パッション「プリキュア!!ハピネスハリケーン!!」

プリキュアはそれぞれ必殺技を放つがシャドウはそれを片手で打ち消してしまった。

ピーチ「ええ!?!」

パイン「私達の必殺技が……」

シャドウ「だあ!!」

シャドウは瞬間的にプリキュアの背後に回り込み殴り飛ばした。

「きゃああああ!?!」

クウガ「みんな!?!」

シャドウ「後はあなただけよ。」

シャドウがクウガを標的にする。

クウガ「・・・ふっ!」

クウガの両足に雷がほとばしる。

シャドウ「蹴り技? 良いわね。」

シャドウは片足に闇のエネルギーを注ぎ込む。

ピーチ「ゆ、雄介さん・・・」

クウガ「はっ!?!」

シャドウ「ふっ!?!」

クウガとシャドウは高く飛び上がる、クウガは一回転し両足を、シヤドウは片足を突き出した。

クウガ「おりゃああああああ!?!」

シャドウ「死ねええ!?!」

両者は衝撃により地面に落ちる、動く気配が無い。

パイン「ど、どうなったの？」

するとシャドウはよろけながらも立ち上がった。

ベリー「!?!」

パッション「そ、そんな・・・雄介さんが・・・」

クウガは動く気配が無い、シャドウは拳にエネルギーを注ぎ込みクウガに近づく。

シャドウ「散々手こずらせて・・・地獄を味わうが良いわ。」

ピーチ「な、何で!?!雄介さんは動けないのに!?!」

シャドウ「この男の体を消してやるわ。」

シャドウはクウガに拳を振り下ろそうとする。

シャドウ「死ねええええ!!」

プリキュア「!?!」

するとシャドウは体の違和感を感じ腹を押さえて苦しみます。

シャドウ「ぐっ!?!な・・・何よ、何よこれは!?!」

シャドウが手を放すと腹には2つの紋章が雷を出しながら浮かび上

がっていた、そして同時にクウガはよろけながら立ち上がった。

クウガ「はぁ・・・はぁ・・・う、打ち込めた・・・。」

シャドウは苦しみがく。

シャドウ「ぐっ、ぐう！！こんなもの・・・！？」

シャドウは紋章を消そうとしたが紋章の雷がさらに激しさを増す。

シャドウ「馬鹿な！？この私が・・・私があああああああああああああああああ！！？」

シャドウはとてつもなく巨大な火柱と共に爆散した。

ピーチ「うわぁ！？」

ベリー「凄い爆発！？」

しかしプリキュア達は何とか無事だった。

クウガ「はぁ・・・はぁ・・・」

爆発はおさまった、クウガは変身を解いた、息をきらしていたが喜びはしなかった、ただシャドウのいた場所を見つめ悲しそうな顔していた。

.....

雄介「ライダーの復活か・・・」

せつな「方法がありますか？」

戦いが終わり落ち着いたところでラブ達は全滅したライダーの復活方法を考えていた。

雄介「俺にはわからないけど・・・」

祈里「けど？」

雄介「俺の先輩、俺と同じように聖なる石を持つあの人ならわかるかもしれない。」

美希「その人は今どこに？」

雄介「わからないけど探してみよう。」

ラブ「行こう！！全てを元通りにするために！！」

ラブ達は聖なる石を持つあの青年を雄介と共に探す事にした。

つづく

第36話 四つ葉町の笑顔（後書き）

次回は加音町

第37話 地獄の町・加音町

加音町

響「不思議・・・加音町全然何でもないじゃん。」

奏「どうして？」

加音町出身の響、奏は加音町に来たがメガシヨッカーに襲われた形跡がなかった。

響「でも・・・人がいないね。」

奏「どういう事かしら?・・・!?!?」

すると奏は何かに足を掴まれ転倒、引きずられてしまった。

奏「きゃああああ!?!?」

響「か、かな・・・!?!?」

すると響は何かに体を縛り付けられた。

響「なっ、何なの!?!?奏!?!?」

そして奏は足に何がついているかわかった、舌のような物だった。建物をドアから舌のような物が伸び足を掴まれていた、その建物の扉から口を大きく開いたモンスターが出てきた、奏を食らうつもりだ。

奏「い、いやだ!？」

響「奏!?!?ていうかこれって蜘蛛の糸!？」

響は糸が伸びている所を見ると糸は建物のガラスから伸びていた、ガラスには蜘蛛のミラーモンスターがうつっていた、響も奏もモンスターに引き寄せられる。

響「は、放して!！」

奏「きゃあああ!？」

すると謎の閃光が奏を掴む舌を切り裂いた。

奏「!？」

さらに響に巻きつく蜘蛛の糸も雷の閃光が切り裂いた。

響「なつ、何!？」

???「話は後!！」

???「逃げるわよ!！」

突如閃光と共に現れた2人の女は響と奏を連れその場を離れた。

.....

???「ここまで来れば安心ね。」

「????」「油断は禁物よ。」

響と奏は目を丸くしていた、2人の女は紛れもなくプリキュアだったからだ。

響「あの・・・助けに来てくれてありがとうございます。」

「????」「え？ああ、気にしないで。」

奏「あなた達は？」

「????」「そうね、今教えるわ。」

2人のプリキュアは変身を解いた。

「????」「私は光明寺御子、異世界のプリキュア・キュアエルスよ。」

「????」「私は星川勇奈、同じく異世界のプリキュア・キュアコスミツクよ。」

響「キュアエルスに・・・」

奏「キュアコスミツク・・・」

御子「にしても間一髪だったわね、もう少しで食べられてた。」

勇奈「間に合って良かったあ〜。」

奏「あの・・・加音町はどうなってしまったんですか？」

御子、勇奈「……………」

2人は少し口ごもったが勇奈が切り出した。

勇奈「加音町はメガシヨツカーによってモンスターの巣になってしまったの。」

響「そ、そんな……………」

御子「ここは私達が作った結界で守られているけど他はもうモンスターだらけね。」

響「どうすれば……………」

????「手はあるフィ。」

突如どこからか声が聞こえた。

御子「エルフィ?」

御子のポケットから妖精が現れた。

エルフィ「はじめましてフィ、僕はエルフィだフィ。」

奏「妖精?」

響「何かわかるの?」

エルフィ「ライダーを復活させるフィ、ライダーの復活はプリキュアの力があれば何とかなるフィ。」

奏「本当に!？」

エルフィ「ファイ」

二人は手を合わせて喜んだ。

勇奈「後はこの町をどうするかが問題ね。」

御子「結界も長く張れるわけじゃないから……この町は二人の方が詳しいのよね、どこかに案内できる?」

奏「あつ、はい。」

……

4人はモンスターの死角をかくぐり2人がよく行く教会に来た。

響「……大丈夫、何もいないわ。」

響達は教会の椅子に腰をかける。

御子「加音町も音楽の町から地獄の町に変わってしまったわね。」

奏「音楽で幸せいっぱいな加音町をあんなにするなんて……絶対に許さない。」

響「それは私も同じだよ奏。」

響が奏の手を握る、すると

御子「……?」

勇奈「誰!?!」

御子と勇奈が邪悪な気配を感じた。

響「ど、どうしたの!?!」

御子「何か……何かいる!?!」

4人が警戒していると突如壁に寄りかかっている緑色の仮面ライダーが現れた。

奏「えっ!?!」

響「さっきまで何もいなかったのに……」

御子「まさかあれは……」

勇奈「仮面ライダー……ベルデ!?!」

そう、その仮面ライダーはカメレオンの力を使える仮面ライダー・ベルデだった。

ベルデ「ほほう、俺の事を知っているのか。」

勇奈「あなたはメガシヨッカーの一員かしら?」

ベルデ「まあそうなるな。」

御子「だっいたら倒すわ!!!みんな!!!」

響、奏、御子、勇奈は変身をした。

響、奏「レッツプレイ!!!プリキュア・モジュレーション!!!」

御子「プリキュア!!!ライトニングトランス!!!」

勇奈「プリキュア!!!コズミックチャージ!!!」

メロディー「爪弾くは荒ぶる調べ!キュアメロディー!!!」

リズム「爪弾くはたおやかな調べ!!!キュアリズム!!!」

「届け!!!2人の組曲!!!スイートプリキュア!!!」

コズミック「平和を守護する星の輝き!!!キュアコズミック!!!」

エルス「救済と新生を司りし閃光!!!キュアエルス!!!」

プリキュアはベルデに向かって戦闘体勢にはいる。

エルス「4対1よ?諦めたら?」

しかし

ベルデ「なめられたものだな。」

「???」「俺を忘れないでくれよ。」

プリキュア「!?!」

突如響いた声の方を見るとそこには黄色いラインの入った仮面ライダー・カイザがいた。

コズミック「また仮面ライダー!?!」

「???」「こつちにもいるぞ。」

エルス「あそこにも!?!」

Aの文字が入った黄色い仮面ライダー・グレイブ。

「???」「悪の組織は不滅だ。」

紫色でおぞましい模様の入った仮面ライダー・ネガ電王。

コズミック「向こうも4人なのね。」

メロディー「加音町のために!?!」

リズム「あなた達を倒すわ!?!」

エルス「いくわよ!?!」

エルスはベルデ、コズミックはネガ電王、メロディーはカイザ、リズムはグレイブを相手に教会内を散らばる。

エルス「はっ！！たあ！！」

ベルデ「やるな、だが・・・」

ベルデはカードを使った。

「アドベント」

エルス「えっ！？きゃあ！！」

エルスは突如現れたベルデの契約モンスター・バイオグリーザの舌に足を巻きつけられ天井と床に叩きつけられた。

エルス「がはっ！？」

コズミック「エルス！！」

ネガ「よそ見をするな。」

ネガ電王は剣を振り回す、コズミックはネガ電王の腕を掴み攻撃を止める。

コズミック「あんたらになんか世界は渡さないわ！！」

ネガ電王「ふん、お前らはただの前座だ。」

ネガ電王はコズミックの腕を掴み力を込める。

コズミック「ああああ！！？」

コズミックの腕から何かが碎ける音が聞こえた、コズミックは骨を碎かれてしまったのだ。

メロディー「このお!!」

カイザ「はあ!!」

メロディーはベルティエでカイザを攻撃するが全て受け止められる、そしてメロディーはカイザに首を絞められ壁に押し付けられる。

メロディー「ぐっ!!? あんたら仮面ライダーでしょ!!? 何でこんな事すんのよ!?!」

カイザ「邪魔なんだよ、俺の事を好きにならない奴らは全て!!」

リズム「プリキュア!!ミュージッククロンド!!」

リズムはベルティエでミュージッククロンドを放つ、グレイブはカードを剣で読み込ませた。

「マイティ」

グレイブ「ふっ!!」

グレイブの剣はミュージッククロンドを打ち砕いた。

リズム「そ、そんな!?!」

グレイブ「音楽の力か、良い攻撃だ、なかなかの物だな、だが無意

味だ。」

悪の4ライダーはプリキュアを傷つける。

コズミック「くっ・・・ぐっ!？」

エルス「大丈夫コズミック!？」

メロディー「あいつ・・・」

リズム「攻撃が効かないなんて・・・」

ベルデ「さあて最後だな。」

ネガ「貴様らには死んでもらう。」

カイザ「全ての人間は俺を好きにならないといけないんだよ。」

グレイブ「さて、任務遂行だ。」

悪の4ライダーがプリキュア達にとどめをさそうとする。

カイザ「はあ!！」

カイザが剣をメロディーに振り下ろした。

リズム「メロディー!？」

しかし

メロディー「てえい!!」

カイザ「なっ!?!」

メロディーはカイザの剣を両手で受け止めた。

メロディー「何が自分の事を好きにならない奴は邪魔よ!!馬鹿じゃないの!?!」

メロディーは手から血を流しながらカイザに怒鳴りつけた。

メロディー「みんながみんな自分を好きになってくれるなんてそんな事あるはずない!!」

カイザ「なん・・・だと?」

メロディー「私達プリキュアだっでどこで嫌われてるかわからない!!でも私達は自分達を嫌ってる人達を消そうなんて思わない!!好きになつたり嫌いになつたりするのは人がちゃんと心を持つてる素晴らしい事だから!!」

リズム「その通りよ!!」

リズムはグレイブに反撃する。

グレイブ「ぐっ!?!」

リズム「音楽はみんなの心を幸せでいっぱいにする力!!無意味なんかじゃない!!」

リズムはグレイブの顔を殴りつけた。

エルス「そうよね、私達はこんな所じゃ終わらない!!」

エルスは雷を拳に集めてベルデを殴りつける。

ベルデ「ぐはっ!?!」

コズミック「それに私達はこんな所じゃ死なない!!」

コズミックの折られた腕が星のように輝きその腕でネガ電王を殴りつけた。

ネガ「ぐっ!?!腕が回復したのか!?!」

コズミック「ええ・・・くっ、完全ではないけどね。」

プリキュア達の猛攻によりライダー達は苦しめられる。

ベルデ「何だ!いきなり強くなったぞ!?!」

エルス「みんな!!一気にいくよ!!」

プリキュアは必殺技体勢に入る。

メロディー「溢れるメロディーのミラクルセッション!!」

リズム「弾けるリズムのファンタスティックセッション!!」

エルス「はああああ!!」

コズミック「いくわよ!!」

メロディー「プリキュア!!!ミラクルハートアルペジオ!!」

リズム「プリキュア!!!ファンタスティックピアチェーレ!!」

エルス「プリキュア!!!ライジングクラッシュ!!」

コズミック「プリキュア!!!コズモブレイカー!!」

4人の必殺技がライダーを襲う。

ライダー「ぐあああ!!?」

ライダー達は膨大な光と共に消滅した。

メロディー「やった!!」

リズム「でもまだ加音町が元に戻ったわけじゃない。」

コズミック「そうね、安心はできないわ。」

エルス「ねえエルフィ、ライダーを復活させるにはどうすればいいの?」

エルフィ「それはプリキュアの力と聖なる石のアマダムとキン・・・

」

すると突然床が割れ中から触手が伸び4人を巻きつけた。

エルス「きゃあああ！？」

エルフィ「エルス！？みんな！？」

コズミック「何！？何なの！？」

割れた床からおぞましい声が聞こえる。

リズム「このままじゃ引きずり込まれる！！」

メロディー「どうすればいいのよ！？」

エルス「エルフィ！！あなたはその聖なる石を探して！！」

エルフィ「だ、ダメフィ！！エルス達を見捨てられないフィ！！」

エルス「見捨てるんじゃない！！私達を助けるの！！！！だから・・・早く行きなさい！！」

エルフィ「フィ・・・フィィィィィ！！！！！！」

エルフィは涙目になりながらもその場を去った。

エルス「お願い・・・エルフィ。」

そしてプリキュア達は床の穴に引きずり込まれた。

「きゃあああ！？」

.....

エルフィ「フィ……ぐすん……無理フィ……広くて怖くなつたこの世界から……探すなんて……」

エルフィは加音町から遠くにある木の影で泣いていた。

すると白い服を着た1人の青年が近くに寄ってきた、青年はエルフィを両手で優しく持ち上げる。

エルフィ「フィ？」

????「ここは危ないよ。」

つづく

第37話 地獄の町・加音町（後書き）

メロデー達を襲った触手の正体はダイナを一度倒したあの巨大怪獣です。

次回、エルフィと青年のお話

第38話 太陽の子

青年はエルフィと共に壊れかけた廃虚に入った。

「????」「ここなら何とかなるよ。」

エルフィ「君は・・・何者フィ？」

「????」「俺は南光太郎、全滅したライダーの数少ない生き残りだ。」

南光太郎、仮面ライダーblackに変身する青年、ゴルゴムとの戦いの後blackRXにパワーアップしクライシスと戦った戦士だ。

光太郎「俺はキングストーンのおかげで生き残る事が出来たんだ、後は雄介ぐらいしか生き残りはわからない。」

エルフィ「大丈夫フィ、映司はなんとか生きてるって聞いたフィ。」

光太郎「本当かい、良かった。」

光太郎はまだ仲間が生きてると知り安心した。

光太郎「君は確かプリキュアの妖精だったよね？」

エルフィ「そうフィ、でも・・・4人は怪物に連れ去られてしまったフィ・・・エルフィは聖なる石の戦士を探しに逃げてしまったフィ。」

しかし光太郎は言った。

光太郎「それは逃げたとは言わないよ。」

エルフィ「フィ？」

光太郎「君は友達を助けるために俺を探しに来た・・・そうだろ？」

エルフィ「光太郎を・・・まさか光太郎は!？」

光太郎「そう、聖なる石キングストーンを持つ戦士は僕だ、そしてアマダムをもつ雄介。」

エルフィは気づかぬうちに聖なる石の戦士を見つけた。

光太郎「まずはここを離れて雄介を探しに行こう。」

エルフィ「フィ!!」

するとその時

????「そうはさせないのだ!!」

光太郎、エルフィ「!？」

後ろから突然何かか襲いかかってきた、光太郎はエルフィを抱きかかえてそれをよけた。

????「南光太郎!!キングストーンを渡してもらおう!!」

光太郎「お前は・・・アポロガイスト!?」

それはアポロガイストだった。

アポロガイスト「南光太郎!!死んでもらう!!」

光太郎「エルフィ、下がるんだ。」

エルフィは廃虚にある机に隠れた。

光太郎「俺はここで死ぬわけにはいかない!!」

光太郎は右手を掲げゆっくりと下ろす。

光太郎「変身!!」

そしてその腕を振り払うように構えるとベルトが現れ光に包まれ姿を変えた。

RX「俺は太陽の子!仮面ライダーblack!!RX!!」

アポロガイスト「決着をつけてやるのだ!!」

アポロガイストはショットガンと鋭い刃がついた盾を構えRXを襲う。

RX「とお!!」

RXはショットガンの弾丸をジャンプでかわしアポロガイストの後ろに回り込んだと同時に回し蹴りを叩き込んだ。

アポロガイスト「おのれ!!」

アポロガイストは盾を武器にし振り回す、それをかわすRX。

RX「くっ!!」

アポロガイスト「やはり戦いの疲れは癒えてないか!!」

アポロガイストはショットガンでRXの懐を撃ち抜く。

RX「ぐああ!?!」

アポロガイスト「ははは!!良い気味なのだ!!」

アポロガイストはショットガンを撃ち続ける。

エルフィ「あつ、危ないファイ!!」

RX「ぐっ!!!ぐあ!?!?.....くっ、ふう!!」

するとベルトが光りRXは姿を変えた。

アポロガイスト「なんだと!?!」

エルフィ「変わったファイ!!」

RX「俺は悲しみの王子!!RX・ロボライダー!!」

RXはロボライダーになりボルティックシューターを撃ち出す。

R X「ボルテイツクシューター!!」

アポロガイスト「くっ!?!」

アポロガイストは苦しむがR Xに盾を投げつける。

R X「ぐああ!?!」

盾はR Xに直撃、ロボライダーの強度な装甲も傷をつけられてしま
い元のR Xに戻ってしまった。

アポロガイスト「はははははは!!私の勝ちなのだ。」

R X「黙れ!!俺は太陽の王子!!生きる者全てに希望を与える!
!悪に生きる道は無いと思ひ知れ!!」

すると再びR Xのベルトが光りだし姿を変えた。

アポロガイスト「無駄なのだ!!」

アポロガイストはショットガンを撃ち続けるが弾丸はR Xの体をす
り抜ける。

エルファイ「ファイ!?!」

アポロガイスト「ばっ、馬鹿な!?!」

R X「俺は怒りの王子！！R X・バイオリダー！！」

バイオリダーはあらゆる攻撃、状態を無効化する言わば最強のライダーと言っても過言ではない。

R X「行くぞ！！バイオブレード！！」

バイオリダーはバイオリダーでアポロガイストを斬り捨てる。

アポロガイスト「がはっ！？」

バイオリダーは元のR Xに戻りベルトに手をかざすと光の剣が現れた。

R X「リボルケイン！！とお！！」

R Xはリボルケインをふるいショットガンを切断した。

アポロガイスト「わ、私の武器が！？」

R X「とどめだ！！」

R Xは高く飛び上がりリボルケインを突き出しアポロガイストに突き刺した。

アポロガイスト「ぐあああああ！？」

R X「うおおおお！！」

R Xはリボルケインを引き抜くと同時に後ろを向きリボルケインを

華麗に回し振り下ろした、これがRXの必殺技・リボルクラッシュだ。

アポロガイスト「あああ……わ、私は……ライダーの一番の……迷惑な奴……なのだ……あ……」

アポロガイストは爆散した。

RX「はあ……はあ……くう……」

RXは膝をつき変身が解けた。

エルフィ「光太郎!!」

エルフィが廃虚から出てきた。

光太郎「大丈夫かい?……エルフィ?」

エルフィは涙目になっていた。

エルフィ「どうして……どうしてエルフィみたいな弱虫を助けてくれるフィ?」

光太郎はエルフィの頭をなでる。

光太郎「俺は太陽の王子、生きる者全てに希望を与える……それに君は弱くなんかない、仲間を助けるために恐ろしくなったこの世界で俺を見つかけようとしたんだから。」

エルフィ「光太郎……ありがとうフィ。」

そして光太郎はエルフィと共に雄介を探しに出発した。

つづく

第38話 太陽の子(後書き)

最近テスト勉強疲れがとれない、さてはゴルゴム!?

今回はマックスハート組side

第39話 偽物注意・ペローネ学院

なぎさ達は街の様子を見にきたが強大な力を持つモンスターに苦戦し一時ペローネ学院に逃げ込んだ。

ブラック「くっ・・・」

ホワイト「大丈夫？ブラック。」

ルミナス「手当てします！！」

ブラック「だ、大丈夫だよ！！心配しないし！！」

二人はわかっていたブラックが無理に元気を出している事を。

ルミナス「学校に逃げ込んだは良いですけど・・・」

ホワイト「逆にピンチかも、袋のネズミみたいなものだし。」

ブラック「とにかくいつまでも教室いちゃいけないよ、いつまたモンスターが来るかわからないし。」

ホワイト「そうね、とりあえず教室から出ましょう。」

3人は教室から出ようとするがブラックがいきなり足を押さえて膝をついた。

ブラック「くっ！？」

ホワイト「ブラック!?」

ルミナス「やっぱりまだ足が・・・ああ!?!」

ブラックの足からは大量の血が流れていた。

ブラック「はぁ・・・はぁ・・・大丈夫だよ・・・」

ホワイト「大丈夫じゃない!!変な強がりは止めて!!」

ルミナス「とにかく保健室に行きましょう!!」

ルミナスとホワイトはブラックを支えて保健室まで運ぶ、邪悪な存在が近づいているとも知らずに。

・・・

ブラック「ご、ごめん・・・迷惑ばかり・・・」

ホワイト「迷惑じゃない、それより無理して倒れる方が迷惑よ。」

ルミナス「困ったら言ってください、仲間なんですから。」

ブラックの手当てが終わり窓のカーテンを開け外の様子を見るが異常はない。

ホワイト「これからどうする?」

ルミナス「学校から出たらまだ危険ですし・・・ちょっと様子を見られます。」

ブラック「気をつけてね。」

ルミナスは保健室から出た。

.....

ルミナス「どうしよう・・・まずは体育館かな？」

ルミナスは体育館に向かう、すると自分の足音と重なる別の足音が聞こえた。

ルミナス「!？」

ルミナスは体育館まで走ったがやはり自分の足音と重なる別の足音が聞こえた。

ルミナス「誰!? 誰なの!？」

するとルミナスは急に走れなくなった。

ルミナス「あ・・・足が・・・動かない・・・!？」

そしてルミナスの足は影に飲み込まれていくと同時に影が段々立体になっていく。

????「あんた楽しそうねえ、ちよつと変わってよ。」

ルミナス「なっ・・・私!？」

立体になっていく影に色がついていく、明らかにルミナスそのものだった。

「????」今から私がルミナスね、あなたは私の影よ・・・わかった？」

ルミナス「きゃあああ・・・」

ルミナスの体は完全に影に飲み込まれ立体になった影だけが残った。

・・・

ブラック「ルミナス、遅いね。」

ホワイト「私様子を見てくるわ、ブラックはおとなしくしててね。」

ホワイトは保健室を出て行った。

ブラック「こんな所に一人だなんて・・・ありえないよお・・・」

ブラックは足を引きずりながら窓を見た。

ブラック「何もいな・・・!？」

窓にはブラックの後ろに何かが映っていた、ブラックは後ろを振り向くが何もいない。

ブラック「き、気のせい・・・よね。」

その時

「????」どっかしら??」

ブラック「!?!」

既に遅かった、窓から出てきた白い手がブラックを掴む。

ブラック「きゃあ!?!」

「????」鏡の中でずっと私の真似をしてれば良いわ。」

ブラックは手によって窓に押しつけられ窓の中に入っていく。

ブラック「い、いや!?!ホワイト!?!ホワ・・・」

そしてブラックは窓の中入ってしまった、そして変わりにブラックと同じ姿をした謎の女が出てきた。

「????」いつも無理やり動かされる私達の気持ち、思い知るが良いわ。」

.....

ブラックは手によって窓に押しつけられ窓の中に入っていく。

ブラック「い、いや!?!ホワイト!?!ホワ・・・」

そしてブラックは窓の中入ってしまった、そして変わりにブラックと同じ姿をした謎の女が出てきた。

????「いつも無理やり動かされる私達の気持ち、思い知るが良いわ。」

.....

ホワイト「ルミナス?どこにいるの?」

ホワイトはルミナスを探すがどこにも見当たらない。

ホワイト「まさかモンスターが・・・?」

すると向こうから何かが歩いてきた、ルミナスだった。

ホワイト「ルミナス!!」

ルミナス「すいません!!迷惑かけて!!」

ルミナスがホワイトに駆け寄る。

ホワイト「何かあった?」

ルミナス「いえ、何も・・・ただ・・・」

ホワイト「ただ?」

ルミナス「3階に行っただんですけど窓から保健室に近づくと不気味な影が見えたんです。」

ホワイト「本当に!?!なら急がないと!?!」

ルミナス「行きましょう!!」

二人は保健室に急いだ。

.....

ホワイト「ブラック!?.....ああ良かった。」

ブラックは先ほどと変わらずおとなしくしていた。

ブラック「な、何かあったの?」

ホワイト「いや、ルミナスが保健室に何か向かってるって聞いて慌てたの。」

ブラック「そうだったんだ、ありがとう心配してくれて!!」

ブラックがホワイトに駆け寄り手を握る。

ホワイト「あら?ブラック足は大丈夫なの?」

ブラック「えっ!?!いや.....だ、大丈夫だよ!!痛くも何ともなくなっただよ!!」

ホワイト「そ、そう.....(?!、何を慌てるんだろう)。」

ホワイトは疑問を抱いていた、すると窓が割れ十面鬼が現れた。

十面鬼「プリキュア!!!追い詰めたぞ!!!」

ホワイト「メガシヨツカーの怪人!!」

十面鬼（ほう、あの二人か・・・なら狙うは白いのみ!!）

十面鬼はホワイトを集中的に狙う、3人は保健室から出て学院中を走り回る。

ホワイト「何とかしないと!!ルミナス!!技は使えない!？」

ルミナス「えっ!？」

いつもなら「はい!!」とすぐ答えるルミナスだが今は何故か戸惑っている。

ホワイト「ルミナス!？」

ルミナス「ご、ごめんなさい!!さっき技を使えなくなって・・・」

ホワイト「えっ!？さっき何も無かったって・・・」

十面鬼「随分と余裕だな!!」

十面鬼は衝撃波を放ち3人を吹き飛ばした。

「きゃあああ!!？」

十面鬼「ははははは!!」

ホワイト「ブラック!!こうなったらマーブルスクリューを!!」

ブラック「ひ、必殺技!? えつと・・・」

ホワイト「もう二人共どうしちゃったのよ!!! いつもと違うわよ!」

ブラック「いつもと違う・・・」

ルミナス「・・・」

すると

十面鬼「本当の事を言ってしまったらどうだ?」

ホワイト「本当の事?・・・二人共どういう・・・」

その時突然ブラックとルミナスがホワイトを殴りつけた。

ホワイト「っ!!!・・・ブラック、ルミナス・・・あなた達なんで・・・」

ブラック「残念ねえ、あなたの相棒は今ごろ鏡の中で私の真似ばかりしてるわよ。」

ホワイト「えっ!?!?」

ルミナス「あなたの仲間もただ黒く実体のない姿で私の真似をしてるわよ。」

ホワイト「もしかして・・・あなた達は!?!?」

十面鬼「今さら気づいても遅いがな！！この二人はお前の知っている二人ではない！！」

ホワイトは愕然とした。

ホワイト「二人を・・・二人を返して！！」

すると床が砕け触手が伸びホワイトは巻きつけられる。

ホワイト「きゃあ！？」

十面鬼「成長しているようだなモネラ、クイーンを超えるのも長くはない。」

偽ブラック「そういうわけだから・・・」

偽ルミナス「さっさと落ちちゃって。」

ルミナスはホワイトを軽く蹴りバランスを崩させる、ホワイトは穴に引きずり込まれた。

ホワイト「きゃあああ！？」

十面鬼「さて、本部に戻るか。」

偽ブラック「そうだな。」

偽ルミナス「行きますか。」

これで敗北したプリキュアが増えてしまった、果たしてどうなるの

か。

「????」たく!!映司の奴どこ行きやがった!?プリキュアも3人共やられるしよお!!それに信吾とかいう奴の体もどこ行きやがった!!・・・はあ、にしてもこのメダル・・・何だ?」

つづく

第39話 偽物注意・ペロ―ネ学院（後書き）

次回はスプラッシュスター組

第40話 花鳥風月？（前書き）

最近忙しくなってきたので今回は2話完結です

第40話 花鳥風月？

ブルーム「きゃあああ！？」

イーグレット「ブルーム！？」

満「数が多すぎるわよ！！！」

薫「このお！！！」

4人は街に戻って来たがそこは怪獣軍団によって完全に壊滅させられていた。

イーグレット「怪獣にウザイナー達までいるなんて！？」

薫「一旦引きましょー！！！」

.....

4人はこのままでは全滅しかねないと判断し一旦身を引いた。

ブルーム「はあ、はあ・・・ここなら安全？」

イーグレット「はあ、はあ・・・なんとかね。」

4人は力が無くなったかのように座り込んだ。

薫「まさかこんな事になってるなんてね・・・」

満「怪獣を倒しても街が・・・」

すると4人は突然何かを感じ取った。

イーグレット「なっ、何!？」

ブルーム「こつちに向かって・・・!？」

そして4人の体に衝撃がはしる。

ブルーム（なっ、何・・・今の!？）

イーグレット（体が動かせない!？）

満^{ていつか}・・・

薫（何かが入り込んだような・・・）

4人・・・

ブルーム「くああ!! やつとだぜえ!!」（えっ、私何言ってるの!？）

イーグレット「まさかこんな事になるなんて僕は予想外だったよ。

（私まで!？）」

満「せやけどこれからどうすんねん?（私何で関西弁なんかしゃべってるの!？）」

薫「こんな暗い空気嫌だあ、まず踊ろうよ!!」（か、体が勝手に!

「？」

気づけばブルームの目と髪の一部が赤、イーグレットは青、満は黄色、薫は紫になりまるで別人のようになっていた。

ブルーム「(つてあんた達まさか！？)ん？騒ぐな！！」

イーグレット「少し我慢しててね、僕達追われてるんだ。(いやいや我慢出来ない！！)」

満「(私の体から出て行って！！)頼むわ！！協力したってや！！」

薫「お姉ちゃんの絵描いてあげるから我慢しててね！！(出来るか！！)」

するとショッカー戦闘員が

戦闘員「いたぞ！！！」

ブルーム「げっ！？見つかった！！(ちょっと人の話聞いてんの！？)」

満「ひとまず撤退や！！(なんのデジャブよこれ！？)」

性格が変わった4人は何かに追われ撤退する。

.....

薫「ここなら大丈夫じゃない？(思いつきりデジャブ.....)」

咲「前に一回とりついたじゃん。」

キンタロス「思い出したで！！あの時の嬢ちゃん達か！！」

薫「敵では無さそうね。」

満「ねえ、一体何があったの？」

モモタロス達は事情を説明した。

.....

舞「じゃあさつき追われてたのは・・・」

ウラタロス「僕達を消すため、ってわけ。」

咲「思ったんだけどさ、良太郎さんはどうなったの？」

モモタロス達は口ごもった、モモタロスが切り出した。

モモタロス「俺達を体から無理やり出して怪人野郎共に・・・殺されたよ。」

一同は驚愕した。

舞「り、良太郎さんが・・・」

リュウタロス「だから僕達！！良太郎を生き返らせる方法を探してたんだ！！」

キンタロス「せやけど見つからなくてな、結局怪人に見つかって隠れるために嬢ちゃん達の体を借りたっちゆうわけや。」

ウラタロス「思いつきりバレてたけどね。」

キンタロス「この街を守れなかったワイらの責任や!!頼む!!今だけは体貸してや!!この通りや!!」

キンタロスは土下座をして咲達に協力してくれるよう頼み込んだ。

モモタロス「おい熊!!俺達と良太郎でもこの街守れなかったんだぞ!?!こいつらを傷つけるわけにはいかねえ!!」

すると

咲「・・・良いよ。」

一同「えっ!?!」

咲「私達同じ世界を守る戦士、仲間でしょ?協力しないとイケないでしょ。」

キンタロス「・・・おおきに!!」

キンタロスは咲の体に入った。

咲「さっきと違うの?」(さっきは急いでだから適当やったんや。)

すると舞が

舞「仕方ないな、私も協力するよ。」

リュウタロス「本当に!? わーい!!」

リュウタロスは舞の体に入った。

満「まあ悪くないかな?」

薫「じゃ、よろしく。」

ウラタロス「一生感謝するよ!!」

モモタロス「仕方ねえな。」

ウラタロスは薫、モモタロスは満に入った。

.....

????「たく、まだ見つからんのか!？」

戦闘員「す、すいません・・・今すぐにでも・・・!？」

????は剣を振り下ろし戦闘員を殺した。

????「やつらは必ずしも見つけ出す、この・・・オーガがな!!」

.....

4人(イマジン付き)が壊滅した街を見渡していると咲キントロスが何かに気

づいた。

咲「ん？あれは・・・（どうしたの？）」

咲が何かを見つけた、それは電王のベルトとパスだった。

咲「やったで！！これで変身できる！！（本当に！？）」

すると後ろから何かの気配を感じ取った咲は振り返った、そこにはライオトルーパーの大群がいた。

咲「（いつ、いつのまに！？）あかんでこれは！！！」

咲はベルトを装着した。

咲「嬢ちゃん！！一発かましてもええか！！（もちろん！！）」

咲はベルトのボタンを押してパスをバツクルにかざした。

咲「おおきに！！（変身！！）」

「アックスフォーム！！」

咲は装甲に身を包み電王アックスフォームに変身した。

電王A「俺の強さにお前が泣いた、涙はこれで拭いとき！！」

電王Aは斧を構える。

電王A「俺の強さは泣けるでえ！！！」

電王Aは斧を振るライオトルーパーを次々と斬り倒していく、そして舞達も駆けつけた。

満「（咲が仮面ライダーに！？）勝手に盛り上がりやがって！！」

薫「（私達は変身出来ないの！？）僕達は個人で常にベルトを持っているわけじゃないから・・・」

電王Aはライオトルーパーを斬り倒していくが突如後ろから何かの衝撃を受けた。

電王A「ぐあ！？（なっ、何！？）」

後ろを振り返るとそこには帝王をほうふつとさせる黒いライダーがいた。

つづく

第40話 花鳥風月？（後書き）

よく考えたら満と薫ってウラタロスとモモタロス付いても変わんな
いなくてついでさっき気づきました。

第41話 帝王と新たなる戦士

電王A「な、なんやいきなり!? (あれは・・・仮面ライダー!?)」

電王Aを攻撃したのは帝王の姿をほつふつとさせる黒いライダー・オーガだった。
その後ろには怪獣軍団がいた。

オーガ「ベリアル様から授かったこの怪獣を操る力・・・貴様らは私がここで葬る。」

すると

満「へっ!何勝手な言ってやがる!!葬られるのはためえだぜ!!おい熊、ベルトよこせ!!」

電王A「ああ!!モモの字!? (そんな強引に・・・)」

電王Aは変身が解け咲の姿に戻った。

満「行くぜ!! (変身!!)」

舞「モモタロスだけじゃ危ないよ!! (無茶はやめて!!)」

「ソードフォーム」

満は電王ソードフォームに変身し剣を構える。

電王S「おるあー!!」

オーガ「ふん。」

オーガは剣を受け止め電王Sを殴りつけた。

電王S「うおっ!? まだまだ!!」

薫「先輩危ないって!! (助けないと!!)」

しかしどこからかショットカー戦闘員の大群が現れ邪魔をする。

舞「邪魔しないでよ!! (満!!)」

咲「くそ!! このままじゃあかん!! (どうにかしないと!!)」

しかし電王Sはオーガの攻撃を受け続ける、スペックがオーガの方が遙かに上なのだ。

電王S「ちくしょう・・・良太郎を・・・生き返らせられないまま・・・終わっちまうのかよおお!! (ちよっとモモタロス!?)」

電王Sは剣をがむしゃらに振り回す、オーガはミッションメモリーを剣にセットする。

「イクシードチャージ」

オーガ「終わりだ。」

オーガは剣を振り下ろした。

電王S「良太郎おおおお!!」

するとオーガの剣はいきなり砕け散った。

オーガ「なに!？」

???「大した攻撃じゃないね。」

電王S「だ、だれだありゃあ・・・」

そこには拳銃を構えるライダーの姿があった。

オーガ「何だ貴様は!？」

???「人呼んで宝という名の平和を守る通りすがりの仮面ライダー・・・サージエス!!」

それは仮面ライダーディエンド・海東大樹の親戚の海東暁・仮面ライダーサージエスだった。

サージエス「大丈夫かい?電王。」

咲「まだライダーが生き残ったんかいな!?(良かった!!)」

オーガ「一人増えたところで何も変わらん!!」

サージエス「そうかな?いくよ。」

サージエスはサージエスドライバーを構えオーガに攻撃を仕掛ける。

オーガ「少しはやるようだな！！だが・・・行け！怪獣軍団！！」
オーガは怪獣軍団を呼び出した。

薫「ちょっとそれは無いって！？（卑怯よ！！）」

その時白い羽が舞の目の前に落ちてきた。

舞「あれ？この羽つてもしかして！！）ど、どうしたの・・・）」

????「家臣達よ良く働いているな。」

そこには白い鳥のようなイメージがいた。

電王S「てめえは手羽野郎！？（仲間？）」

薫「ジーク！！無事だったんだね？（仲間みたいね。）」

ジーク「ははは、家臣達よ、受け取るがいい。」

ジークは赤い携帯電話を電王Sに投げ渡した。

電王S「なっ、何でてめえが持ってんだよ！？（とりあえず使ってみよう！！）」とりあえずって・・・」

電王Sは携帯のボタンを押しベルトにつけた。

「クライマックスフォーム」

するとベルトから七色の線路のような物が伸び電王Sを包む、そして舞達からイマジジンが抜け電王Sに集まる。

電王「俺達!!!」（参上）「!!!」

電王はスーパークライマックスフォームに姿を変えた。

咲「す、すごい!!!」

舞「咲、感動してないで私達も変身!!!」

薫「行くわよ!!!」

「デュアルスピリチュアルパワー!!!」

ブルーム「輝く金の花!!!キュアブルーム!!!」

イーグレット「煌めく銀の翼!!!キュアイーグレット!!!」

「2人はプリキュア!!!」

イーグレット「聖なる泉を汚す者よ!!!」

ブルーム「阿漕な真似は!!!お止めなさい!!!」

3人は変身、電王と共に怪獣軍団に攻撃を仕掛ける。

電王「おるあ!!!」

ブルーム「たあ!!!」

イーグレット「はあ!!」

薫「やあ!!」

電王「（良い感じだよな?）（モモの字!）（一気に決めちゃおう!!）（家臣その1、やるのだ!!）（だあごちやごちやうるせえ!!）」

電王はパスをベルトにかざす。

「チャージアンドアップ!!」

電王は翼を広げ飛び上がり剣に七色のエネルギーを貯める。

電王「必殺!俺達の必殺技あ!!」

そして怪獣軍団を斬り捨てた。

電王「スーパークライマックスバージョン!!」

怪獣軍団は消滅した。

電王「（モモタロス!!私も咲達と戦わなくちゃ!!）わかったわかった!!」

イマジンは満から離れた、いつの間にか満は既に変身した姿だった。

ブルーム「満!!」

満「お待たせ!!」

4人はエネルギーを集める。

イーグレット「精霊の光よ!!」

薫「命の輝きよ!!」

ブルーム「希望へ導け!!」

満「全ての心!!」

「プリキュア!!スパイラルハートスプラッシュスター!!」

スパイラルハートスプラッシュスターが放たれ戦闘員軍団は全て消滅した。

.....

サージエス「なかなかしぶといなあ。」

オーガ「私の邪魔をする者は・・・消す!!」

オーガはサージエスに殴りかかる、サージエスはそれをかわしサージエスザンバーを構える。

サージエス「行くよ?」

サージエスはザンバーでオーガを斬りつける。

オーガ「ふん、その程度か!!」

オーガはサージエスを殴りつけた。

サージエス「ぐっ!一筋縄じゃいかないか、じゃ。」

サージエスはカードを使った。

「レンジャーライド!!デカ!!」

サージエスは何とライダーではなく特捜戦隊デカレンジャーのデカレッドのような姿になった。

オーガ「な、何だその姿は!」

サージエス「デカレンジャー知らないのか、じゃ・・・ラッキー」

サージエスは二丁の拳銃を合体させる。

サージエス「ハイブリッドマグナム!!うりゃあ!!」

ハイブリッドマグナムから放たれたエネルギー弾はオーガを直撃した。

オーガ「ぐああ!」

サージエス「さあて最後最後。」

「ファイナルアタックライド!!ササササージエス!!」

サージエスはサージエスザンバーを構えオーガに向かって飛びかかる。

サージエス「サージエスライジングスラッシュュ！」

サージエスはオーガを斬り捨てた。

オーガ「ぎゃあああああああああ！？」

オーガは青い炎を発し灰となり消滅した。

サージエス「ふう。」

.....

一同は変身を解いた。

咲「暁さんでしたっけ？」

暁「うん。」

キンタロス「助かった！！感謝するで！！」

暁「礼には及ばないよ、にしてもひどいなこの状況。」

舞「あの・・・良太郎さんを復活させる方法って無いんですか？」

暁「そうだね・・・まずはあの2人を探さないと。」

満「あの2人？」

暁「そ、ライダーの数少ない生き残り、その2人とプリキュアがいれば何とかなるよ。」

リュウタロス「じゃあその2人を探そうよ!!」

暁「当然、そのために君達の所に来たんだから。」

一同は暁と共に2人のライダーを探しに街を後にした。

く
く
く

第42話 デイクイドとOOOと最終形態

光写真館

映司の傷は大分癒え、戦えるまでに回復していた。

オーズ「セイヤアアアアアア！！」

デイクイド「はあああああああ！！」

ドリーム「プリキュア！！シューティングスター！！！」

キバーラ「たあ！！！」

光写真館は怪人軍団に襲撃された、デイクイド達がそれを食い止める。

キバーラ「まさか襲撃しに来るなんて！？」

ヤイバ「焦るな、ただの雑魚だ。」

ルージュ「でも多い気が・・・」

レモネード「！！！！、何か来ます！？？」

突如上空から何かが落ちてきた。

オーズ「なっ！？？」

キラー「何だあれは!？」

ドリーム「か、仮面ライダー!？」

????「その通り!!私の名は仮面ライダー・・・コア!!」

そう、それは全身炎で出来た巨大な悪の仮面ライダー・コアだった。

デイケイド「メガシヨッカーもいよいよ本気ってわけか、上等だ。」

オーズ「よし、このメダルだ!!」

オーズは三枚の赤いメダルをスキャンした。

「タカ!!クジャク!!コンドル!!タアアアジアアアドルウウウ
!!」

オーズはタジャドルコンボになりタジャスピナーから炎を放つ。

コア「前の私と同じだと思っな!!」

コアは炎を軽く受け止めデイケイドを掴もうとする、デイケイドはジャンプしてかわしコアを剣で斬りつける。

デイケイド「たあ!!」

コア「無駄だ!!」

コアはデイケイドを殴り飛ばした。

デイケイド「ぐああ!？」

ドリーム「先生!！」

ヤイバ「炎には炎だ!！」

「change SUN!！」

ヤイバはサンモードになりコアに攻撃を仕掛ける。

ヤイバ「はあ!！」

キラ「僕を忘れるな!！」

「キラ!！マキシマムドライブ!！」

キラ「キラヘルグランド!！」

ヤイバとキラが同時にキックを繰り出す、しかしコアはそれを片手で受け止めた。

コア「こんなものか!？」

コアは2人を掴みだし握りつぶそうとする。

ヤイバ「ぐあああああ!？」

キラ「うあああああ!？」

ローズ「こつちも攻撃するわよ!！」

プリキュア達は一斉に必殺技を放つ。

ドリーム「プリキュア!!! シューティングスター!!!」

ルージュ「プリキュア!!! ファイヤーストライク!!!」

レモネード「プリキュア!!! プリズムチェーン!!!」

ミント「プリキュア!!! エメラルドソーサー!!!」

アクア「プリキュア!!! サファイアアロー!!!」

ローズ「ミルクイローズ!!! プリザード!!!」

プリキュアの必殺技はコアに直撃、コアは2人を離れた。

ヤイバ「くそっ、強いな。」

キラ「倒す手はあるのか?」

ディケイドはあるカードを取り出した。

ディケイド「オーズ、ちょっとくすぐりたいぞ?」

オーズ「へっ?」

コア「何をやる気だ!?!」

「ファイナルフォームライド!!! オオオオーズ!!!」

ディケイドはオーズの背中を叩くとオーズは大きなカンに変形した。

オーズ「うおお！？なんだあ！？」

ディケイド「ついでにお前達もだ。」

ディケイドは二枚のカードをベルトに差し込んだ。

「ファイナルフォームライド！！ヤヤヤイバ！！キキキキラー！！」

ヤイバ「うおお！？」

キラー「わあ！？」

ヤイバは変形しバイクに、キラーはボウガンに変形した。

ディケイド「行くぞ！」

カンに変形したオーズはさらに変形し赤いタカになった。

オーズ「なんかすごいけどこれなら！！」

ヤイバ「ディケイド！？乗るのか！？」

ディケイド「当たり前だ。」

キラー「仕方ない。」

コア「ええい！！怪人軍団よ行け！！」

コアは怪人軍団を呼び出すがオーズはタカの姿で怪人軍団に突っ込みなぎ倒していく、ディケイドはバイクになったヤイバに乗りボウガンになったキラアを手に走り出した。

ドリーム「私達も見られないよ！！士先生お願い！！」

ディケイド「たく。」

ディケイドはカードをベルトに差し込んだ。

「ファイナルフォームライド！！ププププリキュア5！！」

するとプリキュア5とローズは眩い光に包まれ姿を変えた。

オーズ「はああ！！！」

オーズは一旦カンに戻り再び変形するとタカからトラの形に変形し怪人達を襲う。

ディケイド「たああ！！！」

ディケイドはバイクで怪人達をなぎ倒していきボウガンを放ち怪人達を倒していく。

ドリーム「プリキュア！！ディメンションアタック！！」

ルージュ「プリキュア！！ディメンションストライク！！」

レモネード「プリキュア！！ディメンションチェーン！！」

ミント「プリキュア！！ディメンションソーサー！！」

アクア「プリキュア！！ディメンションアロー！！」

ローズ「プリキュア！！ディメンションブリザード！！」

プリキュアはディケイドの力をまとった必殺技で怪人を倒す。

キバーラ「はあ！！やあ！！・・・きゃあ！？」

キバーラは怪人達を剣で切り倒して行くが鳥の怪人につかまれ空中に引き上げあれ落とされた。

キバーラ「きゃあ！？」

ディケイド「夏海！？」

オーズ「たああ！！」

オーズはトラからバッタの形に変形し高くジャンプしてキバーラを受け止めた。

オーズ「夏海ちゃん！！」

キバーラ「ありがとございます！！はあ！！」

キバーラは光の翼を羽ばたかせ鳥の怪人を斬りつけ倒した、オーズとキバーラは上手く着地する。

ディケイド「怪人軍団も大体減つたな。」

ヤイバ、キラー、オーズの姿は元に戻る。

オーズ「一気に決めよう!!」

ドリーム「やつちやおう!!」

「ファイナルアタックライド!!ディディディディケイド!!」

「Y A I B A c h a r g e!!」

「キラー!!マキシマムドライブ!!」

キバーラ「はああ・・・」

「スキャンニングチャージ!!」

ディケイド達は必殺技の体勢に入る。

ディケイド「はあああああ!!」

ヤイバ「ライダーキック!!」

キラー「キラールングランド!!」

オーズ「セイヤアアア!!」

キバーラ「たああああ!!」

「プリキュア！！ディメンションエクスペロージョン！！」

必殺技により怪人軍団は全滅した。

ヤイバ「やったな。」

レモネード「やったやった！！」

コア「くっ……？」

コアは何かに気づいた、ディケイドも何かに警戒していた。

ディケイド「……！？、みんな！！散れ！！」

しかしその瞬間地面から無数の触手が突き出し一同を襲う。

キバラー「きゃあ！？」

オーズ「な、なんだ！？」

アクア「まさか怪獣！？」

そして地面が砕けそこから巨大な怪獣が現れた。

コア「そうか……ついに復活をとげたか……クイーンモネラ！！」

それは巨大以上と言って良い程の怪獣・クイーンモネラだった。

۲۳۲

第43話 女王覚醒

デイケイド「なっ……」

ヤイバ「なんてデカさだ!？」

クイーンモネラ、かつてウルトラマンダイナを倒した巨大な怪獣である、そしてドリームは気づいた。

ドリーム「あっ!?!?見て!!！」

ドリームが指差した所にはなんとクイーンモネラの腹部の檻のような物の中にホワイト、メロディー、リズム、エルス、そしてコスミックが閉じ込められていた、しかしその5人は白眼をむきピクリとも動かない。

ルージュ「あれはプリキュア？」

キラ「ああ、僕の世界で一緒に戦ってるプリキュアだ、でもまさかやられてるなんて……」

するとコアが

コア「クイーンモネラよ!! 奴らを葬るのだ!!！」

しかしクイーンモネラはコアに触手を伸ばす。

コア「なっ!?!?クイーンモネラ!?!？」

それは黒い体に血が塗られたような姿だった、実は数時間前・・・

・・・

王蛇「はぁ・・・はぁ・・・」

ブラッディ「王蛇、良い姿だな。」

王蛇「黙れ!!」

ブランク体となった王蛇は困惑していた、この姿では奴らには勝てないと。

ブラッディ「困っているな、これを使え。」

ブラッディは少し変わった契約のカードを王蛇に渡した。

王蛇「あ?」

ブラッディ「それを使えばカードにモンスターを閉じ込めその力を使う事ができる。」

王蛇「ほう、強制契約か。」

王蛇はゆっくりと立ち上がった。

ブラッディ「協力的な怪人を用意してある、それと契約を・・・!?」

ブラッディは何かを感じた、王蛇がブラッディの体にカードを当て

ていた。

王蛇「俺の契約モンスターは・・・お前だ。」

ブラッディ「ぐっ!? 貴様・・・」

ブラッディは抵抗するがむなしく王蛇と強制的に契約されカードに閉じ込められた。

.....

ミント「ブラッディと契約!?!」

王蛇「ああ、凄い力だ、ちよつと気を抜けばすぐ暴走だ。」

ベリアル「やめろよ、面倒だからな。」

ダークデイケイド「だがクイーンモネラが復活した以上奴らはもう敗北決定だ。」

その時

????「待て!?!」

一同「!?!」

黒い戦士が妖精と共にバイクに乗ってやって来た。

????「士!?!?!」

デイケイド「RX！？光太郎か！！」

オーズ「良かった、まだライダーの生き残りがいたんだ！！」

キラー「エルフィー！！」

エルフィー「フィー！！」

エルフィーはキラーに飛びつく。

エルフィー「ごめんフィー！！エルフィーはエルスを助けられなかったフィー！！」

キラー「いや、良く頑張ったよ、礼を言つよRX！！」

RX「ああ！！」

さらに

????「おりやああああ！！」

バイクに乗った赤い戦士と4人のフレッシュプリキュアがダークデイケイド達に突っ込んだ、ダークデイケイド達はそれをかわした。

ダークデイケイド「クウガ！？」

クウガ「お前達の好きにはさせない！！」

ピーチ「メロディー達が！？」

パイン「何て事を!!」

デイケイド「集まってきたな。」

???「俺達を忘れるなあ!!」

???「まっただぞ!!」

一同は声のする方を見るとアクセル、スカル、サージエス、ハート
キャッチプリキュア、スプラッシュスターがいた。

スカル「遅くなった。」

キバーラ「こんなに仲間が!!」

レモネード「心強いです!!」

するとダークデイケイドが高々と笑った。

ダークデイケイド「はははは!!仲間が集まったから何だ?行け、
最強の怪人よ!!」

ダークデイケイドは灰色のオーロラを出し、そこからン・ダクバ・
ゼバ、地のエル、仮面ライダーオーディン、アークオルフェノク、
ジョーカー、火焰大将、グリラスワーム、デスイマジン、バットフ
アンガイア・リボン、そしてユートピアドーパントが現れた。

オーズ「す、凄い数!?!」

RX「しかも全員強大な力を放っている!!」

ヤイバ「みんな!!一瞬の油断が命取りになるぞ!!」

ディケイド「行くぞ!」

一同は攻撃を仕掛けようとするがクイーンモネラが触手を伸ばし一同を叩き飛ばした。

プリキュア「きゃあああああ!?!」

ライダー「ぐあああああ!?!」

十面鬼「はははは!!良い気味だ!!」

すると

ダークディケイド「十面鬼、消える。」

十面鬼「!?!」

十面鬼が驚いた瞬間クイーンモネラは十面鬼を触手で拘束し体に取り込んだ。

十面鬼「ぎゃあああああああ!?!」

偽ブラック、偽ルミナスがガイザーベリアルの肩に乗り移った。

偽ブラック「何で結構戦力になる奴消してんの?」

偽ルミナス「こっち結構不利になんない?」

ベリアル「あれはクイーンモネラをさらにパワーアップさせるための作戦だ。」

偽ルミナス「って事はまさか・・・」

そのまさかだった、クイーンモネラはダークデイケイドが呼び出した最強怪人を次々に体内に取り込んでいく。

王蛇「おいおい食わせすぎじゃないか？」

ダークデイケイド「問題ない。」

するとクイーンモネラの様子がおかしくなった。

ドリーム「なっ、何!？」

ルージュ「か、怪物の姿が・・・」

レモネード「変わっていきます!？」

クイーンモネラは突然変異を起こしエンプレスモネラとなった。

ダークデイケイド「どうだ!!これぞエンプレスモネラ!!」

ミント「エンプレスモネラ・・・」

アクア「何て力なの・・・」

ローズ「くっ・・・震えが・・・」

プリキュアは気づかぬうちに震えていた。

ヤイバ「何怖がってんの!!」

満「仕方ないでしょ!？」

ベリー「あんな怪物見た事ないのよ!!」

つぼみ「震えが・・・震えが止まりません!？」

すると

キラ「仲間助けたいんだろ!？」

プリキュア「!？」

スカル「奴には罪を数えてもらわないとな。」

アクセル「お前達、振り切れるか？」

RX「あのような悪の好きにはさせん!!」

クウガ「行こう!!」

サージエス「どうするんだい？」

プリキュアはいつの間にか震えが止まり決意した目をしていた。

オーズ「よし、行こうみんな!!」

ディケイド「お前がしきるな、行くぞ！！！」

プリキュア、仮面ライダーはエンプレスモネラ、
ダークディケイド達に立ち向かった。

つづく

第43話 女王覚醒（後書き）

クイーンとエンプレス意味同じだけど気にせず。
最強怪人がませになっちゃった。

第44話 決戦！！

ディケイド達はダークディケイド達に攻撃を仕掛けるがエンプレスモネラがそれを妨害する。

ディケイド「邪魔だ！！」

「アタックライド！！ブラスト！！」

ダークディケイド「させるか！！」

「アタックライド！！ブラスト！！」

ダークディケイドはブラストでディケイドに対抗する。

ヤイバ「はああ！！」

ヤイバは剣でダークディケイドに斬りかかるが簡単に受け止められた。

ダークディケイド「ヤイバか、面白い！！」

ダークディケイドはヤイバを殴り飛ばした。

ヤイバ「ぐあ！？」

ディケイド「たく、面倒な奴だ。」

ヤイバ「まったくだな。」

オーズ「ふたり共どいて!!」

キバーラ「危ないですよ!!」

「トリプル!! スキャニングチャージ!!」

オーズはメダジャリバーを構える。

オーズ「セイヤアアアア!!」

ディケイドとヤイバは伏せ斬撃をかわすがダークディケイドも斬撃をかわす。

キラ「あれをかわした!? うわあ!？」

するとエンプレスモネラが5人に攻撃を仕掛け苦しめる。

「ぐあああああ!？」

.....

アクセル「なんておぞましい姿だ。」

スカル「一筋縄じゃないかもな。」

サージエス「とりあえず倒そう。」

王蛇「随分と余裕だなあ、イライラする!!」

王蛇は三人に襲いかかる。

アクセル「はあ！！」

アクセルはエンジンブレードを構え振り下ろす。

「ソードベント」

王蛇は血塗られた剣を取り出しそれを防ぐ。

王蛇「本気なのかあ？」

アクセル「俺に質問をするな！！」

「スカル！！マキシマムドライブ！！」

スカル「とお！！」

スカルは高く飛び上がり空中に出来た骸骨のエネルギーを蹴り飛ばし王蛇を狙う。

アクセル「はあ！！！」

アクセルはバイクモードに変形しその場を離れる、骸骨のエネルギーが王蛇を直撃、しかし王蛇は無傷だった。

スカル「ほお。」

王蛇「それが限界か？」

「レンジャーライド！！ゲキレン！！！」

サージエス「ゲキ技！！砲砲弾！！」

サージエスは砲砲弾を放つが王蛇はそれをも防ぐ。

サージエス「なんて奴だ！？」

王蛇「祭はここからだ。」

「アドベント」

するとブラッディが現れ赤い光線を放った。

スカル「ぐう！？」

アクセル「ぐあああああ！？」

サージエス「うわあ！？」

.....

ベリアル「ぎゃはははははは！！さあ来い！！」

偽ルミナス「私達の花、見せてあげるわ。」

偽ブラック「かかって来なさい！！」

プリキュアはカイザーベリアル、偽ブラック、偽ルミナスを攻撃する。

いつき「僕達は下がるう!!」

つぼみ「私達・・・」

えりか「何も出来ない・・・」

すると

モモタロス「俺達を忘れてもらっちゃ困るぜ。」

えりか「モモタロス？」

いつき「そうか!!」

ウラタロス「そういう事!!」

モモタロスはつぼみに、ウラタロスはえりかに、キンタロスはいつきに憑依した。

リュウタロス「ええ!？」

ジーク「我はどうするのだ!？」

つぼみ「うるせえ!!自分で考えろ!!(変身!!)」

「ソードフォーム」

つぼみは電王Sに変身、いつきは斧、えりかは槍を構える。

えりか「お前、僕に釣られてみる?(やるっしゅ!!)」

いつき「俺の強さにお前が泣いた、涙はこれで拭いとぎ!!」(その紙どこから出したの?)

RX「揃ったようだな!!」

クウガ「行きましょう!!」

リュウタロス、ジーク「あつ。」

RX、クウガ「えっ?」

リュウタロスはRX、ジークはクウガに無理やり憑依した。

RX「うわぁい!!」(お、おい!!)」

クウガ「少しの間借りる、感謝するがいい。(なんの感謝!?)」

イマジンに憑依された者達はクイーンモネラに立ち向かった。

.....

ディケイド「ぐあ!？」

オーズ「うわぁ!？」

キバーラ「土君!？」

ヤイバ「くそ、歯がたたない!!」

デイケイド「さて・・・どうするかだな。」

ダークデイケイド「今さら何をしても無駄だ、前にも言ったが俺は過去のお前だ、俺はお前自身・・・過去に持っていた究極の力を捨てたお前は俺に勝つ事は出来ない。」

デイケイド「無駄か・・・昔の俺が言う言葉だな、確かにお前は過去の俺だ、だが俺はもう過去を断ち切った・・・お前はもう俺ではない、俺はお前が過去に手に入れる事が出来なかった者を手に入れた、お前は俺には勝てない!!」

・・・

王蛇「ははあ、まだかあ・・・まだ俺のイライラをおさまらない。」

アクセル「お前は自分の自己満足のために戦っているのか!？」

アクセルは王蛇を押さえつけ問いただした。

王蛇「当たり前だろ?だから俺はライダーになったんだ。」

スカルは帽子を手で押さえる。

スカル「自分の感情に体をも食われている・・・」

サージエス「スカル?」

スカルは呟きだした。

スカル「一つ、俺は死んだ事でまだ若い弟子を戦いに駆り出してし

まった、二つ、ここに来るのに少々時間がかかった、三つ、そのせいで弟子を失った。」

王蛇「何をブツブツと・・・」

スカル「俺は自分の罪を数えたぜ・・・」

一瞬スカルの目が紫色に輝いた。

スカル「さあ、お前の罪を数える。」

スカルは王蛇に指を指しそう言った。

・・・

カイザーベリアル「ほらほら避けてるだけかあ!？」

カイザーベリアルは手を十字に組み赤黒い光線を放つ、プリキュアはただ避ける事が精一杯、さらに偽ルミナスと偽ブラックの攻撃を受け苦戦する。

ピーチ「どうすれば良いの!?!攻撃できないよ!?!」

ムーンライト「一瞬の隙さえ無いとは厄介ね。」

偽ブラック「あははは!?!」

偽ルミナス「どうするのどうするの?」

プリキュア「きゃあああああ!?!」

プリキュアは吹き飛ばされてしまった。

ドリーム「くっ……どうすれば……」

ブルーム「せめて……ブラックとルミナスがいてくれたら……」

とドリームが何かを思い出し何かを取り出した。

ドリーム「最後の一本……」

それはプリキュアが光の国に行く前に一つだけ託されたグリッターミラクルライト、最後の一つだった。

ドリーム「これでどうにか……でもどうしたら……」

その時

????「私の出番ね。」

偽ブラック「誰だ!?!」

声のする方を向くとそこに見た事のないプリキュアがいた。

????「穢れなき光映すは純真なる心!!キュアミラージュ!!」

それは異世界のプリキュア・キュアミラージュだった。

ドリーム「キュアミラージュ?」

満「あなたも・・・」

パッション「プリキュアなの？」

ミラージュ「ええ、異世界のだけどね。」

偽ブラック「一人増えたところで何も変わらん!!」

ミラージュ「どうかしら？」

ミラージュは偽ブラックの正面鏡を作った。

偽ブラック「なに？」

偽ルミナス「何をする気!？」

偽ルミナスはミラージュを妨害しようとするが

レモネード「プリキュア!!プリズムチェーン!!」

レモネードはプリズムチェーンで偽ルミナスを拘束する。

ミラージュ「ドリーム!!ミラクルライトを!!」

ドリームは困惑しながら偽ブラックの後ろに回り込みグリッターミラクルライトを偽ブラックに浴びせようとする。

偽ブラック「無駄よ。」

偽ブラックはそれをかわすが鏡に光が反射し偽ブラックは光を浴び

る。

偽ブラック「なっ!?!」

偽ブラックは少しずつ鏡に吸い込まれていく。

偽ブラック「そ、そんな・・・私はまだ!?!」

偽ブラックは抵抗するが、ついに完全に鏡に吸い込まれ鏡から本物のブラックが出てきた。

パイン「本物のブラックね!?!」

ブラック「・・・あああああ!?!本当に苦しかった!?!」

偽ルミナス「そ、そんな・・・」

ベリー「もう諦めたら?」

偽ルミナス「だ、誰が諦めるか!?!」

偽ルミナスはプリズムチェーンを引きちぎった。

ブラック「ここは私がやるわ。」

ミラージュ「ブラック・・・まかせたわ。」

カイザーベリアル「ほう、面白い。」

.....

電王S「てりやあああ!!」

電王Sはエンプレスモネラに攻撃するが巨大なエンプレスモネラには傷一つつけられない。

いつき「どうすりやええねん!!斧持つとるけど生身は危険やろし!!(僕の体の事は気にしないで!!)」

えりか「そんな事できるわけないでしょう!!(じゃあどうすんの!?!つばみ達だけに戦わせるわけには!!)」

RX「はっ!!(ライダーキック!!)」

クウガ「やあ!!(おりやああああ!!)」

RXとクウガはライダーキックを繰り出すがエンプレスモネラに簡単に触手で叩き落とされた。

RX、クウガ「ぐあああああ!?!」

電王S「このやろっ!!」

「フルチャージ」

電王Sは剣にエネルギーを溜めエンプレスモネラに飛びかかるが触手を巻きつけられ締め上げられる。

電王SF「ぐああああ!!(きゃあああああ!?!)」

えりか「先輩！！（つばみ！）」

電王S「ちくしょう・・・どうすりゃ良いんだ・・・」

エンプレスモネラの圧倒的な力の前に絶望する電王達、その時エンプレスモネラに8つの光線が放たれた。

いつき「なんや！？（まさか！？）」

そこにはウルトラ8兄弟がいた。

ウルトラマン（奴からプリキュアと妖精の力を感じるぞ。）

ダイナ（それだけじゃない、強大な闇の力も感じるぜ。）

エンプレスモネラは数々の強敵、プリキュア、そして妖精も取り込んでいた。

ティガ「僕達の力をおくろっ！！」

ウルトラ兄弟はカラータイマーに手を当てエンプレスモネラに向けてエネルギーを送る。

するとエンプレスモネラは突如暴れ出す、そして取り込まれていたプリキュアが目の輝きを取り戻しエンプレスモネラから脱出した、ブラックが駆けつけた。

ブラック「ホワイト！！」

ホワイト「ブ、ブラック・・・ごめんなさい。」

ブラック「ホワイトは謝る必要なんてない!! また一緒に戦おう!!」

ホワイト「ブラック・・・ありがとう!!」

ブラックはホワイトに手を伸ばし立ち上がらせる。

エルス「よくもやってくれたわね!!」

コズミック「今度はこっちの番よ!!」

メロディ、リズム「絶対許さない!!」

電王S「お?(シプレ!!)」

プリキュアと共に取り込まれた妖精も全て脱出した。

シプレ「その声はつぼみですか!?!」

つぼみ達に憑依したイマジンは空気を読みつぼみ達の体から出た。

シプレ「つぼみい!!」

コフレ「えりかあ!!」

ポプリ「いちゅきい!!」

つぼみ「無事だったんですね!!」

えりか「よし!! これでなんとか行ける!!」

いつき「他のみんなは下がって!!」

ココ「まかせたココ!!」

ココ達は下がった。

つぼみ「みなさん!!変身です!!」

シプレ、コフレ、ポプリ「プリキュアの種!!行くですう!!」

シプレ達はプリキュアの種を出す。

「プリキュア!!オープンマイハート!!」

ブロッサム「大地に咲く一輪の花!!キュアブロッサム!!」

マリ「海風に揺れる一輪の花!!キュアマリン!!」

サンシャイン「陽の光浴びる一輪の花!!キュアサンシャイン!!」

これでハートキャッチプリキュアが揃った、そして反撃が始まる。

つづく

第44話 決戦!! (後書き)

次回!! 決着!!

最終話？ 決着

偽ルミナス「きゃあああああ！？」

ブラックとホワイトは偽ルミナスをマーブルスクリーで浄化、偽ルミナスは力尽き影に吸収され本物のルミナスが現れた。

ブラック「ルミナス！！大丈夫！？」

ルミナス「す、すみません・・・」

ホワイト「謝らなくていいのよ、戦える？」

ルミナス「はい！！」

・・・

ダークデイケイド「俺が手に入れられなかった物・・・だと？」

デイケイド「そうだ、俺は様々な世界を巡り仲間を作る事が出来た・・・」

オーズ「それ俺も入ってる？」

デイケイド「仮面ライダーは兄弟とか言ってた奴がいたから入るんじゃないか？」

ヤイバ「面白いな。」

キラー「まあ確かに奴には仲間がいないな。」

キバーラ「私達とは違いますね。」

ダークデイケイドは拳を握り締める。

ダークデイケイド「下らん・・・貴様はもう俺ではない・・・何者だ!?!」

デイケイド「通りすがりの仮面ライダーだ、その心にしっかり刻んでおけ!」

デイケイドはケータッチにカードを差し込んだ。

「ファイナルカメンライド!!! デイケイド!!!」

デイケイドはコンプリートフォームになった。

ダークデイケイド「貴様が持っている物は既に俺が持っている事を知りながらまだ抵抗するのか!?!」

「ファイナルカメンライド!!! デイケイド!!!」

ダークデイケイドもコンプリートフォームになった。

デイケイド「ならこれは持つてるか?」

「ファイナルアタックライド!!! ヤヤヤヤイバ!!!」

ダークデイケイド「何!?!」

ヤイバはバイクに変型、デイケイドが乗りダークデイケイドに向かつて走り出す、デイケイドとヤイバは雷に包まれダークデイケイドを襲い吹き飛ばした。

ダークデイケイド「ぐあああああ!?!くそ・・・調子にのるな!?!」

「クウガ!?!カメンライドライド!?!アルティメット!?!」

するとダークデイケイドと同じ動きをするアルティメットクウガ・ブラックアイが現れた。

「ファイナルアタックライド!?!ククククウガ」

ダークデイケイドがクウガと共に爆発を起こしデイケイドとヤイバを吹き飛ばした。

ヤイバ「うわあ!?!」

デイケイド「ぐあ!?!くそ・・・」

キラ「デイケイド!?!頼む!?!」

デイケイド「ああ!?!」

デイケイドはカードを差し込んだ。

「ファイナルアタックライド!?!キキキキラ!?!」

キラはボウガンに変型しデイケイドはダークデイケイドに向かっ

て矢を放つがその矢はスピードがあまりなかった。

ダークデイケイド「そんな物で俺が・・・」

デイケイド「はっ!!」

ダークデイケイド「!?!」

デイケイドはその矢に向かって蹴りを繰り出す。

デイケイド「はああああ!!」

デイケイドの蹴りは矢のエネルギーを帯びダークデイケイドを襲った。

ダークデイケイド「くっ・・・なんだ、なんだこの力は!?!」

「スキヤニングチャージ!!」

ダークデイケイド「!?!」

キバーラ「はああああ・・・」

オーズ「セイヤアアア!!」

キバーラ「たああああ!!」

オーズとキバーラの攻撃を受けるダークデイケイド。

ダークデイケイド「ぐう!?!おのれ・・・おのれ!?!」

デイケイド「無駄だ、仲間のいないお前には俺達は倒せない!!」

「ファイナルアタックライド!! デイデイデイケイド!!」

デイケイドはディメンションキックを繰り返した。

ダークデイケイド「させるか!!」

「ファイナルアタックライド!! デイデイデイケイド!!」

ダークデイケイドはディメンションブラストを放ちディメンションキックに対抗する。

デイケイド「くう・・・はああああああ!!」

しかしディメンションキックはディメンションブラストを打ち消しダークデイケイドに直撃した。

ダークデイケイド「ばっ、馬鹿な・・・」

・・・

「シュートベント」

王蛇は杖から毒液を放つ、3人はそれをかわす。

アクセル「当たればひとたまりもないぞ!!」

スカル「ならば当たらなければいい。」

サージェス「言うねえ、ほんじゃ。」

サージェスはカードをサージェスドライバーに差し込んだ。

「レンジャーライド！！ゴーオン！！」

アクセル「なら俺も・・・振り切るぜ！！」

アクセルはトリアルメモリをドライバーに差し込んだ。

「トリアル！！」

「スカル！！マキシマムドライブ！！」

スカルはスカルメモリをスカルマグナムに差し込みみスカルパニッシャーを放ち毒液を撃ち落とす。

王蛇「イライラする・・・これで終わりだ。」

「ファイナルベント」

王蛇はブラッディを呼び出しブラッディは赤黒い光線を放つ、王蛇はその勢いにのり蹴りを繰り返した。

王蛇「はああああ！！」

アクセル「悪いな、すぐに終わらせる。」

アクセルはトリアルメモリのスイッチを押し空中に投げブラッデ

イに向かって走り出した。

サージエス「それじゃあこっちも。」

サージエスはサージエスザンパーを取り出した。

サージエス「サーベルストレート!!」

サージエスはサーベルストレートを繰り出し王蛇の技を受け止める。

王蛇「このお!!」

しかしその間にアクセルはブラッディに連続蹴りを放っていた。

アクセル「はあああああああ!!」

アクセルは蹴りを止め落下するトリアルメモリを掴みスイッチを押す。

「トリアル!!マキシマムドライブ!!」

アクセル「9.9秒、それがお前の絶望までのタイムだ。」

ブラッディは青いT字のエネルギーと共に消滅、同時に王蛇はブランク状態に戻った。

王蛇「なっ!?!」

サージエス「おりゃあ!!」

サージエスは力を失った王蛇を押し返す。

王蛇「ぐあ！？くっ、このお・・・」

スカル「罪を数えなかった事、それがお前の敗因だ。」

「スカル！！マキシマムドライブ！！」

スカルは高く飛び上がり骸骨のエネルギーを蹴る。

スカル「とお！！」

王蛇「ぐああああ！？」

・・・

カイザーベリアル「プリキュアが一斉に相手か、良いだろう。」

ドリーム「絶対にあんたを倒す！！」

RX「俺達を忘れてもらっては困る。」

クウガ「絶対に倒す！！」

モモタロス「おいおい俺達どうする？」

リュウタロス「なんか追い出されちゃったよ！？」

キンタロス「良い手があるで！！」

ウラタロス「本当!？」

ジーク「隠さず言え。」

するとキンタロスはモモタロスにベルトをつける。

モモタロス「な、なんだよ……ってまさかお前!？」

キンタロス「今や!！」

ウラタロス「なるほど!！」

リュウタロス「それ!！」

ジーク「はっ!！」

モモタロス「ぎゃああああ!?!入ってくんなああああ!?!」

「クライマックスフォーム!！」

キンタロス達はモモタロスに無理やり憑依し無理やりクライマックスフォームに変身した。

ルミナス「イメージンにイメージンが入っちゃいました!！」

イーグレット「あらら(汗)」

パイン「モモタロス、かわいそう。」

エルス「ドンマイ。」

電王C「ドンマイじゃねええ!! あああムズムズするううう!？」

コズミック「なんか暴れそうね。」

エルフィ「すぐに片付けるフィー!!」

その言葉を聞いたカイザーベリアルは

カイザーベリアル「すぐに片付ける? ほざけ!!! 今ぶっ倒してやるからなあ!!!」

カイザーベリアルは腕を十字に組み赤黒い光線を放つ、プリキュア、ライダーはそれをかわす、カイザーベリアルはそれを追いかけるように光線を向ける。

メロディ「プリキュア!!! ミラクルハートアルペジオ!!!」

リズム「プリキュア!!! ファンタスティックピアチエーレ!!!」

スイートプリキュアの2人はそれに対抗するが必殺技は5秒も保たず打ち消された。

フレッシュ「ラッキークローバー・グランドフィナーレ!!!」

フレッシュプリキュアはグランドフィナーレでカイザーベリアルを水晶に閉じこめるがそれも打ち消されてしまう。

RX「まだまだ!!! キングストーンフラッシュ!!!」

クウガはアルティメットフォームになり炎を飛ばす。

クウガ「おりゃあ!!」

カイザーベリアル「そんな技で俺が止められるか!!」

ドリーム「みんな!!」

ルージュ、レモネード、ミント、アクア「YES!!」

ローズ「やってやるわ!!」

gogo「プリキュア!!ミルキイローズフローラルエクスプロージョン!!」

MAXheart「エキストリーム・ルミナリオ!!」

スプラッシュユスター「プリキュア!!スパイラルハートスプラッシュユスター!!」

カイザーベリアル「無駄だ無駄だあ!!」

放たれた必殺技もことごとく打ち砕かれていく、しかし攻撃は終わらない。

ハートキャッチ「プリキュア!!ハートキャッチオーケストラ!!」

スーパーシルエットになったハートキャッチプリキュアは最強の必殺技を放つ、そしてついにカイザーベリアルを相殺した。

カイザーベリアル「馬鹿め！！また放つまでだ！！」

????「馬鹿はてめえだコノヤロオオオオオ！！」

カイザーベリアル「！？」

カイザーベリアルが振り返るとそこには眩い翼を広げた電王、そして高く飛び上がったエルスとコズミックがいた。

コズミック「エルス！！光に乗って！！！」

エルス「うん！！」

コズミックは光を作り出しエルスはそれを足にまとう。

エルス「プリキュア！！コズモクラッシュ！！」

流星のごとく繰り出されたエルスのキックはベリアルのカラータイマーに直撃、カラータイマーに亀裂が走る。

カイザーベリアル「なっ！？」

電王C「とどめだおらあああああ！！」

「チャージアンドアップ！！」

電王C「必殺！俺達の必殺技！！超てんこ盛りバージョン！！」

電王もカイザーベリアルのカラータイマー目掛けキックを放った、キックはカラータイマーに直撃し砕け散った。

カイザーベリアル「俺は！！俺は死なんぞおお！！？」

.....

エンプレスモネラはウルトラ8兄弟を襲う。

ダイナ（前みたいにはいかないぜ！！！）

セブン（よし！！！）

セブンとダイナは切断技でエンプレスモネラの触手を切り裂く。

メビウス（はああああ！！！！）

メビウスはメビウスピンキックでエンプレスモネラを攻撃、さらに
エースはパンチレーザーで応戦する。

ジャック（兄さん！！！）

ウルトラマン（わかった！！！）

ジャックとウルトラマンは互いにスペシウム光線を放ち合体させエ
ンプレスモネラを攻撃する。

ガイア（うわぁ！？）

ガイアはエンプレスモネラの触手に拘束された。

ティガ（我夢！！！）

ガイア（うおおお！！）

しかしガイアはスプリームバージョンになり触手を引きちぎった、そしてエンプレスモネラにフォトンエッジを浴びせる。

ティガ（はあ！！）

ティガはゼペリオン光線を放つ、エンプレスモネラは苦しみます。

メビウス（！？、何か来ます！！）

エンプレスモネラは頭部から巨大な光線を放つ、しかし8兄弟は合体バリアを張り光線を跳ね返した。

ウルトラマン（とどめだ！！）

ティガ（はい！！）

8兄弟は合体光線を放ちエンプレスモネラに浴びせた、エンプレスモネラは苦しみ光の粒子となり消滅した。

．．．．．

ダークデイケイド「ば．．．馬鹿な．．．メガシヨッカーが．．．」

デイケイド「仲間を持たなかった事、それがお前達の敗因だ。」

王蛇「ははは．．．下らん．．．仲間なんか．．．」

王蛇は消滅した。

カイザーベリアル「皇帝になった・・・俺様が・・・」

ウルトラマン（偽りの力を手に入れようとした時点でお前の敗北は決まっていたんだ。）

カイザーベリアル（へっ、うるせえ・・・いつか復活して・・・また俺様の世界を・・・）

カイザーベリアルは消滅した。

ダークディケイド「これで終わりと思うなよ・・・」

ディケイド「？」

ドリーム「どういう事？」

ダークディケイド「さあな・・・メガシヨッカーは・・・不滅だ・・・」

ダークディケイドはそう言い残し消滅した。

ブラック「今のどいう事？」

ピーチ「わかんない。」

ブロッサム「まさかメガシヨッカーにはアジトが？」

オーズ「そうだとしたらそこを破壊しないと終わらないな。」

スカル「行くしかないようだな。」

ブルーム「でも・・・どうやって?」

サージエス「僕にまかせて、アジトならメガシヨッカーの力をたどれば何とかわかるから、というわけで巨人達運んでもらうよ。」

ダイナ（図々しい奴だぜ。）

ウルトラマンに乗りメガシヨッカーのアジトを探す一同、そしてついにそのアジトを見つけ出した。

ディケイド「あれか。」

ドリーム「私達でやろう!」

ティガ（よし!）

三人は必殺技を放ちメガシヨッカーのアジトを破壊した。

ディケイド「なんだかあっさり終わったな。」

ティガ（ああ。）

ドリーム「とりあえず終わったんだから喜ぼうよ!」

.....

アジトを破壊し光太郎のキングストーン、雄介のアマダム力でラ

イダーは復活、全てを終わらせた一同は別れの時をむかえていた。

士「やっと終わったな。」

夏海「そうですね。」

のぞみ「もうお別れかあ。」

ダイゴ「まあ妖精達も助けられたし良かったね。」

ココ「お世話になったココ。」

ナッツ「迷惑かけてしまったナッツ。」

我夢「気にしないでいいよ。」

映司「俺達は先に失礼するよ。」

竜「莊吉、これからどうなる?」

莊吉「俺は一度死んだ人間だ、あの世に戻るだろう・・・娘を頼んだ。」

竜「ああ、彼女は俺が守り抜く。」

暁「それじゃお先に。」

光太郎「士、お前には俺達がついている。」

雄介「みんなの笑顔、守ってな。」

御子「じゃあ作者さん、帰りましょう。」

夢原「ああ、じゃあな土。」

勇奈「いつでも駆けつけるから。」

蒼牙「さあて帰ってアイリの手料理でも食べるか、またな。」

助っ人メンバーは元の世界に戻った。

ハヤタ「我々も元の世界に戻らねばならないな。」

かれん「またお世話になってしまったわね。」

土「全くだ。」

夏海「土君！」

キバーラ「もつとのぞみとお話したかったなあ。」

のぞみ「また会えるよ、その時にね。」

ダイゴ「よし・・・またね。」

.....

プリキュア、ディケイド、ウルトラマンはそれぞれの世界に戻った、そして融合した世界は元に戻った、しかし・・・

士「何だ・・・何だこの違和感は・・・」

のぞみ「何か大切な事を忘れてるような・・・」

ダイゴ「とても大切な・・・何かを・・・」

「????」はははは・・・プリキュア、仮面ライダー、ウルトラマン、
貴様らは自分の世界を自ら滅ぼす事になる・・・楽しみにしている。

「
まだ戦いは終わっていなかった・・・」

つづく

最終話？ 決着（後書き）

次回ついに最終幕突入！！

最終幕・第1話 災厄

世界が元に戻り数日後・・・

のぞみは目覚まし時計の音で目が覚めた。

のぞみ「ん？・・・もう朝かあ・・・ふあゝ。」

大きなあくびをし身支度を済ませて家を出るのぞみ、なんの変哲のない通学路、しかし何故か人がいない。

のぞみ「あれ？誰もいない・・・」

辺りを見渡すが誰もいない、いつも乗るバスも何分たつても来ない。

のぞみ「遅いなあゝ、遅刻しちゃうよ。」

仕方なく学校まで歩く、数十分後学校に到着、明らかに遅刻している時刻、しかし学校には先生どころか生徒一人すらいない。

のぞみ「ど、どどういう事・・・!?!?」

その時のぞみの目の前で爆発が起こる。

のぞみ「きゃあ!?!?」

のぞみは間一髪爆発をかわしていた、辺りを見渡すとそこにはルーシユがいた。

のぞみ「り、りんちゃん!?!?なんで・・・」

ルージュ「のぞみ・・・許して!!」

ルージュは再びファイヤーストライクを放つ、のぞみは逃げ出した。
のぞみ「りんちゃん!!どうして!?!」

????「逃がしません!!」

光の鎖がのぞみを拘束する、レモネードだった。

のぞみ「うららまで!?!なんでこんな事・・・」

????「覚悟しなさい!!」

ミントだ、ミントがのぞみに襲いかかってきた。

のぞみ「こまちさ・・・」

????「プリキュア!!サファイアアロー!!」

突如現れたアクアがサファイアアローでミントを貫いた。

ミント「きゃあああああ!?!」

ミントは倒れ動かなくなった。

のぞみ「か、かれんさん・・・」

アクア「のぞみ、これは宿命なの・・・わかつ・・・」

ルージュ「きゃあああああ!?!」

すると突然ルージュが吹き飛んできた。

アクア「なに!?!」

のぞみ「ひ……響……奏……」

それはメロディーとリズムだった。

メロディー「やるしか……ないんだよね……」

リズム「私達2人だけになるまで協力しよう。」

メロディーとリズムは手を繋ぐ。

のぞみ「い、いやあ!?!」

レモネードの鎖から何とか逃れたのぞみは窓ガラスを割り飛び出した。

アクア「逃がさない!?!」

メロディー「待ちなさい!?!」

……

のぞみ「そ……そんな……」

気づけば辺りには戦いを繰り広げるプリキュアがいた。

のぞみ「ラブ・・・ゆりさん・・・えりか・・・」

「のぞみさん!！」

のぞみを追いかけてレモネードがきた。

のぞみ「うらら・・・まさか他のみんなは・・・」

レモネード「私が倒しました・・・あなたも倒します!！」

レモネードはプリズムチェーンを放つ、しかしのぞみは変身し鎖を払う。

ドリーム「やめてよ・・・私は戦いたくない!！」

レモネード「甘えないください!・・・今私があなを・・・」

????「残念ね。」

レモネード「!？」

気づけばレモネードは青い剣で背中を貫かれていた、ローズだった。

レモネード「そ・・・そんな・・・」

ローズ「許して!！」

ローズは剣を引き抜く、レモネードは力無く倒れる。

ドリーム「ローズ・・・なんで・・・なんでこんな事を！」

ムーンライト「プリキュア！！シルバーフォルテウエーブ！！」

ピーチ、パッション「きゃあああああ！？」

ブラック「ドリーム忘れたの！？」

ホワイト「土さん達と別れた後妖精達が消えたのを！！」

ドリーム「ココ達が・・・！？」

ドリームの頭には昨日普通に学校に行きナッツハウスで一同と食事をし家で体を休めたと日常の記憶しかなかった。

ブラック「メップルやミップルは私達に変身の力を残して消えた！！」

ホワイト「しかもこのままじゃ世界は滅んでしまう！！」

ルミナス「きゃあああああ！？」

マリン「よし！！」

ブルーム、イーグレット「プリキュア！！ツインストリームスプラッシュュー！！」

サンシャイン、パイン「きゃあああああ！？」

ドリーム「みんな・・・やめてよ・・・やめて!!」

ローズ「世界を救うために最後の一人になるまで戦う!!それがこのプリキュア大戦だったじゃない!!」

プリキュア・・・大戦?

ドリーム(夢と・・・同じ!?)

ドリームはようやく忘れていた大切な事を思い出した。

ローズ「ドリーム!!死になさい!!」

ローズはドリームに襲いかかった。

ドリーム「!?!」

.....

(私達が戦うなんて世界がひっくり返ってもないよ!!)

(夢ですよ夢!!)

(のぞみさん、落ち着いて羊羹ご飯よ。)

(ちょっとダメよこまち!?)

(全く。)

.....

۲۲۲

最終幕・第1話 災厄（後書き）

次回、デイケイドside

最終幕・第2話 破壊

士はカメラのシャッターを押した。

士「なんだ・・・この世界は？」

そこは崖が広がっている風景しかない場所だった。

????「ぐあああああ!?!」

士「!?!」

士は何かの悲鳴を聞き振り向いた、そこには力無く倒れる仮面ライダーアギトがいた。

士「翔一!?!」

アギト「・・・・」

士は再び辺りを見渡した、そこには死闘を繰り広げる仮面ライダーの姿があった。

1号「ライダーキック!」

オーズ「うわああああ!?!」

555「やあああああ!?!」

V3「ぐあああああ!?!」

士「何だか危ないな。」

その時

????「ディケイド!! 覚悟しろ!!」

ブレイドが士に襲いかかってきた。

士「おっと、一真か・・・変身。」

「カメンライド!! ディケイド!!」

士はディケイドに変身、ブレイドの剣を受け止める。

ディケイド「何のつもりだ、融合した世界は救われたんじゃないのか?」

ブレイド「お前こそ何言ってるんだ!!」

「サンダー」

ブレイド「はあー!!」

ディケイドはブレイドの剣をかわす。

「ファイナルアタックライド!! ディディディディケイド!!」

ディケイド「はあああああ!!」

ブレイド「ぐあああああ!?!」

ブレイドはディメンションキックを受け倒れた。

ディケイド「たく、ワケわからん。」

????「おりやあああああ!?!」

すると突如クウガがディケイドを殴りつけた。

ディケイド「くっ、雄介!?!」

クウガ「これも世界のためだ・・・覚悟しろ!?!」

ディケイドはクウガの攻撃を受け止める。

ディケイド「一体何が起こっているのか説明してくれないか?」

クウガ「忘れたのか!?!」

クウガはディケイドと距離をとる。

クウガ「融合した世界は救われたがそれぞれの世界は滅びはじめた、それを回避するにはその世界の戦士たちが一人にならなければならぬ!?!それがライダー大戦だつたる!?!」

ディケイド「!?!」

ディケイドは夢と手紙の文章を思い出した。

『戦士は全て滅びる。』

ディケイド「手紙の内容と夢の現象が・・・現実に・・・」

クウガ「土！覚悟しろ！！」

クウガはディケイドに襲いかかったが

「ジョーカー！！マキシマムドライブ！！」

???「ジョーカー・エクストリーム！！」

クウガ「なっ！？ぐあああああ！？」

ディケイド「W！？」

仮面ライダーWがクウガを倒した。

「サイクロン！！トリガー！！」

Wはディケイドにトリガーマグナムを向ける。

W「悪いなディケイド。（これも世界のためなんだ。）」

ディケイド「・・・」

「サイクロン！！マキシマムドライブ！！」

W「許してくれよ、ディケイド。」

ディケイド「なるほど。」

龍騎「何でライダー同士戦わなくちゃいけないだよ!？」

カブト「それが定めだ、ライダーキック。」

「R i d e r K i c k !」

龍騎「ぐあああああ!？」

キバット「ウエイク・アップ!！」

キバ「はあああああ!！」

スカイライダー「うわああああ!？」

W「トリガー!！エアロバスター!！（トリガー!！エアロバスター!！!）」

風の弾丸がディケイドに直撃、しかし

W「な、何!？（ビクともしない!？）」

ディケイド「ライダー大戦か・・・なら・・・」

ディケイドの目が青く光り形を変えていく。

ディケイド「全てを破壊してやる!！」

ディケイドは激情体になった。

W「フィリップ！！検索を・・・」

デイケイド「遅い！！！」

「アタックライド！！ギガント！！」

デイケイド「はあああああ！！！」

デイケイドはギガントを放った。

W「ぐあああああ！？」

Wは吹き飛んだ、デイケイドはライダー達に猛攻を仕掛ける。

「アタックライド！！サイドバッシャー！！！」

デイケイドのバイクは変形しロボットのような形になりミサイルを辺りに撒き散らす。

black「ぐあああああ！！？」

555「うわあああああ！？」

デイケイド「まだまだだ！！！」

1号「とお！！！」

1号がデイケイドに殴りかかる、デイケイドはそれをかわし2人は攻防を繰り返した。

1号「ふっ！とお！！」

デイケイド「さすがは初代仮面ライダー、大先輩と手合わせとは光栄だな。」

1号「ふざけるな！！とお！！」

1号は高く飛び上がった。

1号「ライダーキック！！」

ライダーキックはデイケイドに直撃、デイケイドは吹き飛んだ。

デイケイド「ぐあ！？・・・！！？」

気づくと1号の後ろ、デイケイドの後ろからライダーが向かってくる。

デイケイド「チッ、邪魔をするなあ！！」

「アタックライド！！デンライナー！！キャッスルドラン！！」

するとデンライナーとキャッスルドランが現れミサイルや火炎弾などで吹き飛ばすライダー達。

X、アマゾン「ぐあああああ！！？」

電王、キバ「うわああああ！！？」

デイケイド「これで俺とあんたの2人だけだ。」

1号「世界を救うため・・・行くぞ！」

ディケイドは1号の猛攻を簡単にかわし言った。

ディケイド「おいおいそんな程度か？」

1号「くっ！なんて奴だ！？」

ディケイドはライドブッカーをガンモードにし1号を撃ち抜いた。

1号「ぐう！？」

ディケイド「はあ！！」

「アタックライド！！ブラスト！！」

連射される弾丸が1号を襲う。

1号「ぐあ！？・・・とお！！」

ディケイド「！？」

1号は高く飛び上がった。

1号「ライダーダブルクラッシュヤーチョップ！！」

1号はダブルクラッシュヤーチョップを繰り返すがディケイドはそれをも受け止める。

1号「何!?!」

ディケイド「そんな程度かあ!?!」

ディケイドは1号の懐を殴りつけた。

1号「ぐあああ!?!」

「ファイナルアタックライド!! ディディディディケイド!!」

ディケイド「はあああああ!!」

1号「ぐあああああ!?!」

ディケイドはついに全てのライダーを倒してしまった。

ディケイド「一体・・・なぜまたライダー大戦が・・・」

世界に存在するライダーはディケイドただ1人となった、世界の破壊者ディケイド、全てのライダーを倒しその瞳は何を見る?

つづく

最終幕・第2話 破壊(後書き)

次回ウルトラマン side

最終幕・第3話 闇

ダイゴはふと気づくと街の中心にいた、まわりには誰もいない。

ダイゴ「あ、あれ？ここは・・・どこだ？」

すると後ろから不気味な地響きを感じられた、ダイゴはゆっくり後ろを見る。

ダイゴ「あれは!?!」

そこにはお互いに闘いあうウルトラ戦士の姿があった。

タロウ（ストリーム光線!?!）

ゼアス（うわああああ!?!）

ダイゴ「ゼアス!?!タロウやめろ!?!」

ダイゴはティガに変身した、そしてまわりを見ると数々のウルトラ戦士同士が戦っていた。

ティガ（こ、これは・・・どうして・・・）

ダイナ（ダイゴ!?!許せ!?!）

ダイナがソルジェント光線を放つ、ティガはそれをよける。

ティガ（やめろ!?!何でこんな・・・）

ダイナ（？、何言つてんだ！！俺達は・・・！？）

するとダイナは後ろから放たれた光線を直撃した。

ダイナ（ぐあああああ！？）

その光線を放つたのはウルトラマンだった。

ティガ（ハヤタさん！？何でこんなことを！？）

ウルトラマン（我々の使命を忘れたか！？）

ウルトラマンはティガを殴りつけ羽交い締めにする。

ティガ（くっ・・・！？）

ティガはウルトラ戦士が次々倒されていく光景を見た。

セブン（ダァー！！）

コスモス（うわああああ！？）

ガイア（ダァァァァァ！！）

80（ぐあああああ！？）

ウルトラマン（世界を救うために最後の1人になるまで闘う、それがこのウルトラ大戦だったろ！！）

ティガ（なっ・・・まさか!?!）

ダイゴはようやく忘れていた何かを思い出した。
ウルトラマンはティガを引き離す。

ウルトラマン（終わりだダイゴ!?!）

ウルトラマンはティガに向かってスペシウム光線を放つ。

ティガ（ウルトラ大戦・・・そんなの・・・そんなの!?!）

すると突如ティガのカラータイマーから黒い光が放たれた。

ティガ（なっ!?!）

ウルトラマン（ぐああああ!?!）

メビウス（うわああああ!?!）

・・・

ティガ（これは・・・そんな・・・）

ティガはいつの間にか体が黒に染まったティガダークになりました。
で闘いを繰り広げていたウルトラ戦士はいつの間にか消えていた。

UNU

最終幕・第3話 闇（後書き）

次回、主人公組集結、さらについて首領が登場

最終幕・第4話 首領

辺りは静まり返った、ドリームは魂が抜けたように動かない、ただ目の前の光景を信じられずにいた。

ドリーム「・・・どうして・・・どうして・・・」

すると

????「のぞみか？」

ドリーム「!？」

後ろを振り向くとそこには激情体になったディケイドがいた。

ドリーム「せ、先生・・・何で・・・」

ディケイド「さあな・・・だが状況は・・・」

????（同じみたいだね。）

ディケイド、ドリーム「!？」

上を見上げるとティガダークとなったティガがそこで膝をついていた。

ディケイド「お前までここに・・・しかも状況が同じという事はお前もか？」

ティガ（ああ、仲間を全て失った。）

ドリーム「ちょっと待って!! どうして世界は救われて世界は離れ離れになったのに2人はここにいるの!?! それに何で私達は仲間を倒さなくちゃいけなかったの!?!」

ドリームは頭の中を整理出来ずにいた、すると

????「それが狙いだ。」

ディケイド、ドリーム、ティガ「(?!?)」

ディケイド「誰だ!?!」

????「私はメガシヨッカーの首領・・・そして今お前達の近くにいるのだ。」

ティガ（僕達の近く!?! なら姿を現せ!?!）

首領「良いだろう。」

すると突如地響きかなりでした。

ドリーム「きゃあ!?!」

ディケイド「な、なんだ!?!」

ティガ（どんどん大きくなっていく!?!）

そして地面が割れると同時に巨大な巨人が現れた、それはウルトラ

マン、クイーンモネラよりもはるかに巨大なキングダークに酷似して赤いマントをつけている怪人だった。

ティガ（お前が元凶！？）

???? 『そうだ、お前達は私の声を聞いた事がないか？』

ディケイド「！！、鳴滝！？」

???? 『またの名を・・・』

ドリーム「エターナルの館長！？」

???? 『ある時は・・・』

ティガ（黒い影法師！？）

???? 『そうだ！！お前達によって倒された者共の戦士に対する憎しみの力が私を誕生させた。』

ディケイド「いわゆる怨念の集合体か。」

???? 『違う、元は私はショツカーの首領、そこにザケンナーからネガトーン、そしてあらゆる怪獣のデータを組み込み誕生したメガショツカーの首領・・・ウエルザード伯爵！！』

ティガ（ウエ・・・）

ドリーム「ウエルザード・・・」

ディケイド「伯爵だと？」

ウエルザード伯爵『そうだ、お前達、自分の姿をしてみる。』

ティガ以外は驚愕した。

ディケイド「これは……」

ドリーム「なんで……」

ディケイドは体のマゼンタの部分が灰色になり、ドリームも同様にレインボージュエルの力が失われた時のように衣装が灰色になっていた。

ウエルザード伯爵『戦士の力は常に繋がっている、だがお前達はプリキュア、仮面ライダー、そしてウルトラマンを消しその繋がりを自ら断ち切った、いずれは変身も解け二度と変身できなくなるだろう。』

三人は戸惑った。

ディケイド「全て失った……代償か。」

ティガ（どうすれば……）

しかし

ドリーム「私達は……」

ディケイド「のぞみ？」

ドリーム「私達はまだ戦える!!」

ドリームはウエルザード伯爵に向かって走り出した。

ティガ（なっ!?!）

ディケイド「馬鹿が!?! 無茶をするな!!」

ドリーム「はあああああ!!」

ウエルザード伯爵『ここまで愚かだとはな。』

ドリームがウエルザード伯爵に攻撃しようとした瞬間

ドリーム「あっ……」

ドリームの衣装は光の粒子となり消え変身前の姿に戻ってしまった。

ディケイド「のぞみ!!」

ウエルザード伯爵『はあああああ!!』

ウエルザード伯爵は手を振り下ろしディケイドを襲う。

ディケイド「うわああああ!!?」

ディケイドはついに変身が解けてしまった。

ティガ（くっ!）

ティガはゼペリオン光線を放とうとしたが何故か光線が出ない。

ウエルザード伯爵『無駄だ、光を失ったお前にはティガの力を使う事はできない、はあ!!。』

ウエルザード伯爵は指先から光線を放ちティガを吹き飛ばした。

ティガ（ぐあああああ!?!）

ティガは変身が解け倒れる。

のぞみ「先生!?!ダイゴさん!?!」

ウエルザード伯爵『つまらんな。』

ウエルザード伯爵は人間と同じくらいの大きさに縮んだ。

ウエルザード伯爵『シヨツカー戦闘員、奴らを捕らえろ!!。』

戦闘員『イイイイイ!!。』

ウエルザード伯爵は戦闘員を呼び出して三人を捕らえさせる。

ダイゴ「ぐっ!?!」

士「はなせ!?!」

のぞみ「やめて!?!はなして!?!」

ウエルザード伯爵『お前達の公開処刑を全世界、いや・・・全パラレルワールドに映し出す！！』

三人はメガシヨッカーに捕らえられ絶対絶命の状況に陥った、果たして世界はメガシヨッカーの物になってしまうのか？

つづく

最終幕・第5話 思い

夢原信者の世界

霧彦「大変だ!!」

コズミック「何よ騒がしい。」

夢原「どうしたんだ霧彦？」

霧彦「外を見るんだ!!」

エルス「外？」

夢原達は外に出た、そこには

夢原「なっ!?!」

エルス「これは・・・」

・・・

ヤイバの世界

アイリ「蒼牙・・・これって・・・あなたが前に言ってた!!」

蒼牙「ああ・・・まだ終わってなかったんだ!?!」

アイリ「すぐに助けに・・・って何で行けないの!?!」

アイリはディリーの力で世界を越えようとしたができなかった。

蒼牙「きつとメガシヨッカーが世界に壁を張ったんだ。」

アイリ「そんな・・・」

・・・

暁「おやおや、大変になつてゐるね。」

大樹「ちよつとそんな呑気でいいの？」

暁「世界を超えられないんだ、見守るしかないだろ？」

・・・

ミラージユ「世界を超えられないなんて・・・」

バースト「希望の三人が捕らえられたんじゃないかも・・・」

スピリット「大丈夫じゃない？あの三人を信じようよ。」

・・・

全パラレルワールドには土、のぞみ、ダイゴが十字架に縛り付けられている映像がうつさされていた。

ウエルザード伯爵「人間よ、我はメガシヨッカーの首領・ウエルザード伯爵！！今ここでこの愚かな反逆者共を処刑する！！！！」

士「こんな事になるとはな・・・」

ダイゴ「ダメだ、この鎖ビクともしない。」

のぞみ「・・・」

士「のぞみ？」

のぞみは涙を流していた。

のぞみ「死にたく・・・ないよお・・・まだ出会ってない人や食べた事のない美味しい食べ物や欲しい物がいっぱい・・・あるのに・・・死にたく・・・ないよお・・・」

士、ダイゴ（くっ、どうする事も出来ないのか・・・）

ウエルザード伯爵「ははははは！良い顔だその顔だ！もつと見せてやれ！そして未練をおおいに残し死んでいけ！！ははははははははははは！！」

ダイゴ「お前！！」

士「貴様もうしゃべるなあ！！」

ウエルザード伯爵「ならさっさと楽にしてやろう・・・やれ！！」

戦闘員数名が拳銃とたいまつ、槍を取り出し近づいてきた。

ウエルザード伯爵「死に方を選べ。」

.....

蒼牙「くそお!! ！どうする事も出来ないのか!?!」

アイリ「お願い神さま・・・三人を見捨てないで!」

.....

夢原「ダメだ何度やっても世界を越えられない!」

霧彦「地球の本棚にも打開策がない・・・」

エルス「ダメよ諦めちゃ!」

コズミック「私達はあの三人を信じるのよ!」

.....

暁「大樹、お前はと思う?」

大樹「大丈夫じゃない?あの三人に強い思いがあれば・・・それがあいつらのお宝みたいだし。」

暁「なるほど。」

.....

のぞみ（死にたくない・・・死にたくない・・・死にたく・・・）

「がんばれ!!」

のぞみ「……えっ？」

士「おい……今の……」

ダイゴ「ああ、僕にもかすかに……」

「がんばれ!! 負けるな!!」

「最後まで諦めるなあ!!」

「頑張つて!!」

「信じてるぜえ!!」

ウエルザード伯爵『?、何だお前達、死ぬ直前で平気な顔になりおつて。』

ダイゴ「奴らには聞こえていない?」

士「らしいな。」

のぞみ「心が……あたたかくなる。」

三人には確かに聞こえていた、あらゆる場所、世界からの声援が。

ダイゴ「色んな世界から声が……」

????「ダイゴ……」

ダイゴ「え……レナ!!」

その声はダイゴの妻・レナだった。

レナ「あなたなら出来るわ、頑張って!!」

ダイゴ「レナ……」

????「土君!!」

土「夏海か!?!」

土には夏海の声が聞こえた。

夏海「土君!お願いします、世界を救ってください!!」

土「……当然だ。」

????「のぞみ!!」

のぞみ「こ、ココ!?なんで……」

ココ「僕達は気づかないうちに別の空間に移動されたんだ、そしてプリキュアだけじゃない、仮面ライダーやウルトラマンに暗示をか

けていたんだ!!」

のぞみ「でも私達三人は何も変わってないよ？」

ココ「きつと三人にはみんなとは違う何かを持っていたんだよ、頼む死なないでくれ!!」

ウエルザード伯爵『何をブツブツとしゃべっている。』

ダイゴ「・・・信じよう、絶対に助かると!!」

士「俺達が世界を救うんだ!!」

のぞみ「絶対に諦めない!!みんなが応援してくれる限り!!」

その時三人の服から何かが輝きながら飛び出した。

士「あれは・・・」

それは三人が初めて出会った時に撮った写真だった、その写真が光の粒子となり遠くへ飛んでいった。

ウエルザード伯爵『なんだか知らんがこれで終わりだ、死ね!!』

士、ダイゴ、のぞみ「!?!」

戦闘員の拳銃から銃弾が放たれた瞬間、弾は何かにはじかれ戦闘員は何かに攻撃を受け倒れた。

ウエルザード伯爵『な、なに!?!?責様ら何故!?!』

ダイゴ「つ、士……まさか……」

士「あ、ああ。」

のぞみ「でも何で……」

????「言ったはずだ、シヨッカーを倒すまでは……仮面ライダーは死なん!!」

????「そうだ、そしてライダーがいるかぎり、メガシヨッカーの野望は遂げさせん!!」

それはディケイドが倒したはずの仮面ライダー・1号、2号だった。

士「お前達は何で復活した？」

1号「君達の思いが込められた写真と世界中の人々の思いが光となり我々を復活させたんだ。」

ウエルザード伯爵は戸惑った。

ウエルザード伯爵「だ、だが2人増えたところで状況は変わらん!!」

2号「愚かな……我々ライダーの思いは常に一つだ。」

1号「我々は常に繋がっている……絆があるかぎり我々仮面ライダーは消えん!!」

その瞬間戦闘員軍団が次々と爆発を起こしていく。

ウエルザード伯爵『何！？』

「トリガー！！マキシマムドライブ！！」

黄色と青の光弾がダイゴ、士、のぞみを解放した。

W「大丈夫か？（何とか間に合ったね。）」

士「間に合ってねえよ。」

W「それより、仮面ライダーが全員復活したぜ？」

士「なに！？」

カブト「おばあちゃんが言っていた、正義とは自分を信じる心ってな。」

555「しゃべってないで戦え！！」

V3「V3きりもみキック！！」

ZX「ZXキック！！」

ウエルザード伯爵『馬鹿な・・・くっ、だがまだだ！！』

ウエルザード伯爵はマントを広げて怪人と怪獣軍団を呼び出した。
士「変身！！」

「カメンライド！！ディケイド！！」

士はディケイドに変身し軍団に立ち向かう、ディケイドは本来のマゼンタの姿をしていた。

のぞみ「仮面ライダーが復活したならプリキュアのみんなも・・・」

戦闘員「イイイイイ！！」

するとのぞみの背後から戦闘員が襲いかかってきた。

のぞみ「しまっ・・・」

その時

????「プリキュア！！ファイヤーストライク！！」

火球が戦闘員を吹き飛ばした。

のぞみ「今のは・・・」

すると

????「お待たせのぞみ。」

のぞみ「りんちゃん！！」

それはキュアルージュだった。

????「ルージュだけじゃないわよ！！」

そして次々とプリキュアが現れ戦闘員と戦っていく。

ルージュー「のぞみ!! あんたも!!」

のぞみ「・・・うん!!」

のぞみはキュアモを構える。

のぞみ「プリキュア!! メタモルフォーゼ!!」

のぞみはキュアドリームに変身した、それはしっかりと力を取り戻した姿だった。

ドリーム「はあああああ!!」

ドリームは戦闘員を殴り飛ばす。

ダイゴ「僕も何とかしないと・・・あつ!?! あれは!!!!」

ダイゴが見上げた先には7つの影があった、それは姿を鮮明に現し怪獣軍団を押し倒す。

????(ダイゴ!!)

ダイゴ「ハヤタさん!!」

それはウルトラマン、セブン、ジャック、エース、ダイナガイア、メビウスだった。

ダイナ（待たせたなダイゴ！！）

メビウス（一緒に戦いましょう！！）

ダイゴ「ああ！！ティガアアア！！」

ダイゴはティガに変身した、その姿はティガダークではなく光を宿したティガの姿だった。

つづく

最終幕・第5話 思い(後書き)

次回、ヒーローVSメガシヨッカー

最終幕・第6話 英雄VSメガシヨツカー

ついに戦士達とメガシヨツカーの決戦が始まった。

1号「行くぞ一文字!!」

2号「ああ!!」

ブラック「私達もいくよホワイト!!」

ホワイト「ルミナス!!援護を!!」

ルミナス「はい!!ルミナス・ハーティエルアクション!!」

ルミナスは戦闘員達の動きを封じる。

1号「助かる!!とお!!」

2号「とお!!」

ブラック「行くよホワイト!!」

ホワイト「ええ!!」

1号、2号「ライダーダブルキック!!」

ブラック、ホワイト「プリキュア・マーブルスクリュー!!マックスウウ!!」

マーブルスクリュウとライダーダブルキックにより戦闘員達は爆散した。

V3「頼むライダーマン!!」

ライダーマン「よし!! ネットアーム!!」

ライダーマンのネットアームは怪人達にからみ動きを封じる。

メロディ「危ない!!」

V3、ライダーマン「!?!」

2人の背後からカメラズーカとテレビバエが襲いかかってきたが

メロディ、リズム「プリキュア!!ミュージッククロンド!!」

メロディとリズムのミュージッククロンドがテレビバエとカメラズーカを消滅させた。

リズム「大丈夫ですか!?!」

V3「すまない!!とお!!」

V3は空をひねらせ回転する。

V3「V3スクリュウムトリプルパンチ!!」

メロディ「リズム!!」

リズム「OK!!」

メロディーとリズムはお互いのベルティエを分解し交換する。

メロディー「ミラクルベルティエ!!クロスロッド!!」

リズム「ファンタスティックベルティエ!!クロスロッド!!」

メロディー、リズム「プリキュア!!ミュージッククロンド・スーパーカルテット!!」

無数のミュージッククロンドがV3のスクリウムトリプルパンチと共に戦闘員達を襲い消滅させた。

ウルトラマン（はぁ!!）

ダイナ（おらぁ!!）

ウルトラマンとダイナは八つ裂き光輪をはなち怪獣軍団を攪乱させる。

セブン（であ!!）

メビウス（セヤア!!）

そしてセブンはアイスラッガー、メビウスはメビュームブレードで怪獣を切り裂く。

「ふうん!!」

」は巨大化しウルトラマンを援護する。

ガイア（助かる！！はぁ！！）

」「とお！！」

ガイアは頭からフォトンエッジの体勢にはいる。

」「ライダーキック！！」

」は高く飛び上がりライダーキックを繰り出し怪獣軍団を消滅させた。

ガイア（デアアアア！！）

ガイアはフォトンエッジを繰り出し怪獣軍団を消滅させた。

ジャック（はっ！！）

ジャックは怪獣軍団をウルトラブレスレットの力で宙に浮かせる。

エース（はぁ！！）

そこにエースがメタリウム光線を放ち怪獣軍団を消滅させる。

X「ライドルスティック！！」

アマゾン「キキイ！！」

Xはライドルスティックで怪人をなぎ倒しそこにアマゾンが大切断

を繰り出す。

シン「はあああああ!!！」

響鬼「おいおい本当にライダーか？おっと、そりゃあ!!！」

響鬼はシンのえげつない攻撃に若干ひきながら怪人を攻撃する。

ブレイド「ウェイ!!！」

ブルーム「変わってないですねケンジャキさん!!！」

イーグレット「ブルーム!!！剣崎さんよ!!！」

満「ふざけてる場合!？」

薫「戦いに集中しなさい!!！」

クウガ「おりゃああああ!!！」

アギト「はあ!!！」

アクア「プリキュア!!！サファイアアロー!!！」

ミント「龍騎さん!!！」

龍騎「えっ？なに?！」

ミント「忘れたんですか!？あの協力技!!！」

龍騎「あつ、わかった!!」

ミントはエメラルドソーサーを放つ、そして龍騎はそれに乗り剣を構える。

龍騎「スカイライダー!!」

そしてスカイライダーをよび共に空中攻撃を繰り出す。

スカイライダー「ナイスだ龍騎!!」

龍騎「よっしゃ!!ありがとうございます!!」

555「面倒くせえなあ。」

ブロッサム「そう言わずに。」

カブト「いくぞ。」

オーズ「よおし!!」

ブロッサムはレッドの種をパヒュームに入れ使う。

「start up」

「clock up!!」

「タカ!!トラ!!チーター!!」

555はアクセル変わり、カブトはクロックアップ、オーズはタト

ライターに変わりブロッサムと共に高速攻撃を繰り返す。

ストロンガー「エレクトロファイヤー!!」

スーパー1「火炎放射!!」

ルージュ「プリキュア!!ファイヤーストライク!!」

3人は得意の炎系の技を繰り返す。

ZX「十字手裏剣!!」

マリン「さらにマリンシュート!!」

「サイクロン!!トリガー!!」

W「(ここではスピードのある弾丸を放てるサイクロントリガーが有効だね。)俺達もいくぜ!!」

手裏剣、マリンシュート、風の弾丸が怪人達を襲う。

電王「行くぜ行くぜ行くぜええ!!」

電王は剣で戦闘員を斬りつける、しかし後ろから怪人が不意打ちを狙う。

電王「うおっ!?!」

ピーチ「おりゃあああああ!!」

しかしピーチが怪人を殴り飛ばす。

ピーチ「大丈夫!?!」

電王「(あ、ありがとう。)(良太郎照れんなよ。(てっ、照れてないよー!!)」

キバ「キバット!?!」

キバット「ああ、ウエイクアップ!?!」

キバはキバットに赤い笛をふかせるとあたりは真夜中になり満月が浮かび上がる。

ムーンライト「月なら私の出番ね。」

ムーンライトはムーンタクトを構える。

キバの右足の鎖が解かれ赤いコウモリの羽が広がる、そしてキバは満月を背景に高く飛び上がりダークネスムーンブレイクを繰り出す。

ムーンライト「プリキュア!?!シルバーフォルテウエーブ!?!」

ムーンライトは同時にシルバーフォルテウエーブをはなちキバと共に怪人を倒す。

black「RX!?!行くぞ!?!」

RX「ああ!?!」

サンシャイン「私も!?!」

RXとblackは高く飛び上がり一回転する。

サンシャイン「花よ舞い踊れ!!」

サンシャインは大きな太陽のように輝くひまわりのエネルギーを作り出した。

サンシャイン「今です!!」

RX、black「サンシャインダブルキック!!」

RXとblackはエネルギーをくぐり抜け金色の姿となり戦闘員達をダブルキックで襲う。

ZO「Zブリンガーアタック!!」

ZOの強烈な技により戦闘員達は吹き飛ばされる。

レモネード「プリキュア!!プリズムチェーン!!」

レモネードは怪人軍団を拘束する。

ローズ「ナイスよ!!ミルキイローズ・ブリザード!!」

パッション「私もやるわ!!プリキュア・ハピネスハリケーン!!」

竜巻と吹雪が拘束した怪人軍団を襲い消滅させた。

ベリー「プリキュア!!エスポワールシャワー・フレッシュ!!」

パイン「プリキュア！！ヒーリングプレーヤー・フレッシュ！！」

2人の必殺技により怪人軍団は吹き飛ばされた。

ウエルザード伯爵「ええい！！情けない奴らだ！！」

ウエルザード伯爵は手から光弾を放つ。

「アタックライド！！ブラスト！！」

ディケイド「はあ！！！」

ディケイドはブラストを放ち光弾を全てうち消した。

ウエルザード伯爵「なっ……」

ドリーム「無駄だよ、あなたじゃ私達には勝てない！！」

ティガ（諦める！！）

ウエルザード伯爵「私がお前達に勝てない？ふざける、私は全宇宙を支配する力がある！！」

ディケイド「だから何だ！？」

ウエルザード伯爵「！？」

ディケイドはウエルザード伯爵の言葉に対して怒鳴りつけた。

デイケイド「俺は全ての破壊者だ、お前の野望も破壊する。」

ドリーム「じゃあ私は絶望を希望にかえる!!」

ティガ（僕は闇を光にかえる!!）

ウエルザード伯爵「笑わせるな・・・はああああ!!」

ウエルザード伯爵は悪のエネルギーを放ち巨大化する。

ウエルザード伯爵「貴様らなど私に勝てるはずかない!!」

デイケイド「いや、既にお前は俺達に負けた。」

ウエルザード伯爵「なに?」

デイケイド「お前は俺達の仲間を消し俺達を一人にした、だがそのおかげで仲間の大切さを改めてわかった、そしてそれは俺達の力となった!!」

ドリーム「仲間みんながいれば自分達はもっともっと強くなれるの!!」

ティガ（僕達は諦めない、お前のような悪を倒すまで!!）

ウエルザード伯爵「貴様ら・・・何者だ!？」

デイケイド「覚えておけ・・・」

ドリーム「私達は!!」

ティガ（通りすがりの！！）

プリキュア、仮面ライダー、ウルトラマン、（平和を守る戦士だ！）

つづく

最終幕・第6話 英雄VSメガシヨツカー（後書き）

次回、切り札発動！！

最終幕・第7話 切り札

ウエルザード伯爵は巨大化しがむしやらに辺りを攻撃する、自分の残りの怪獣・怪人軍団もろともディケイド達を攻撃する。

ライダー「うわあああああ！？」

プリキュア「きゃあああああ！？」

ウルトラマン（ぐあああああ！？）

ウエルザード伯爵「死ね死ね死ね！！！」

ウエルザード伯爵は攻撃を続ける。

オーズ「めちゃくちやすぎる、どうすれば・・・」

????「映司！！！」

そこに赤い腕だけのアंकが現れた。

ルージユ「ぎゃあああああ！？腕ええええ！？」

オーズ「アंक！？」

アंक「あいつが親玉かあ、ほら。」

アंकはオーズに黒いメダルを渡す。

アंक「前使ったヤバいやつだ、使えんのは3分だ。」

オーズ「わかった!!」

オーズは黒いメダルをベルトにはめ込みスキャナーで読み込ませる。

「キュウケツキ!!コウモリ!!アクマ!!キュ!!コー!!マア
!!キユコオオマ!!」

オーズはキュコマコンボになりコウモリの羽を広げウェルザード伯爵の攻撃を受け止める。

オーズ「うおお!!」

サンシャイン「土さん!!どうするんですか!?!」

ディケイド「・・・!!」

ディケイドはライドブッカーを開け一枚のカードを取り出した。

オーズ「うわぁ!?!」

オーズはウェルザード伯爵の攻撃を受け地面に叩きつけられた。

アंक「映司!!メダル変えろ!!」

オーズ「くっ・・・」

「タカ!!トラ!!バッタ!!タ・ト・バ!!タトバ!!タ・ト・
バ!!」

オーズはタトバコンボに変わる、それと同時にキュコーマコンボのメダルは砕け散った。

X「まずいぞ!！」

クウガ「このままだったら・・・」

すると

W「ディケイド、切り札は持ってるよね？」

ディケイド「ああ、おいプリキュア!！」

リズム「えっ？」

ピーチ「なに？」

ドリーム「どうしたの？」

ディケイド「ちょっとくすぐったいぞ!！」

ディケイドはカードをバツクルに差し込んだ。

「ファイナルフォームライド!!! オールスススターズ!!!」

すると美しい眩い光がプリキュアを包む、その光はグリッターミラクルライトから発せられる光そのものだった、マックスハート、スリート、プリキュア5はスーパープリキュア、ブルームはブライト

ブルーム、イーグレットはウィンディイーグレット、フレッシューはキュアエンジェル、ハートキャッチはスーパーシルエット、そしてドリームはシャイニングドリームに姿を変えた。

ブラック「す．．．凄い．．．」

ブライティブルーム「ただ強化されたんじゃない．．．さらにパワーアップしてる！」

ドリーム「力が．．．力が溢れる!!」

ピーチ「これなら勝てるよ!!」

ブロッサム「いきましよう!!」

メロディー「うん!!ここでやらなきゃ女がすたる!!」

アギト「俺達もやりましよう!!」

ディケイド「当然だ。」

ディケイドはケータッチを取り出した。

「クウガ!!アギト!!龍騎!!ファイズ!!ブレイド!!響鬼!!カブト!!電王!!キバ!!ファイナルカメンライド・ディケイド!!」

ディケイドはコンプリートフォームに姿をかえる。

クウガ「超変身!!」

アギト「はあああああ!!」

龍騎「よっしゃ!!」

「サバイブ」

555「面倒くせえなあ・・・」

「standing・by awaking」

ブレイド「キング、力を貸してくれ!!」

「アブゾーブクイーン・エボリューションキング!!」

響鬼「響鬼・装甲!!」

カブト「ハイパーキャストオフ。」

「Hyper cast off」

電王「（行くよ!!モモタロス!!）てんこ盛りだあ!!」

「クライマックスフォーム!!」

キバット「タツロット!!」

タツロット「テンションフォルテッシモ!!」

キバ「はっ!!」

W「行くぜフィリップ。(エクストリームで勝負だ。)」

「エクストリーム!!」

オーズ「アंक下がって!!」

アंक「死んだらただじゃおかねえぞ!!」

「プテラ!!トリケラ!!ティラノ!!プ・ト・ティラアアノザウルウウス!!!!」

クウガはアルティメットフォーム、アギトはシャイニングフォーム、龍騎は龍騎サバイブ、555はブラスタフォーム、ブレイドはキングフォーム、響鬼は装甲、カブトはハイパーフォーム、電王はスーパークライマックスフォーム、キバはエンペラーフォーム、Wはサイクロンジョーカーエクストリーム、オーズはプトティラコンボになった。

1号「我々も総力をあげてやつを倒すぞ!!」

V3「はい!!」

アマゾン「行くぞ!!」

スカイライダー「よし!!」

RX「俺は太陽の子、生きる者全てに希望を与える!!」

ウルトラマン(負けてられないな。)

セブン（今一度我々の力を合わせて！！）

ジャック（邪悪な存在を倒そう！！）

エース（この世界を守るために！！）

メビウス（戦いましょう！！）

ダイナ（当たり前だ！！）

ガイア（絶対に諦めない！！）

ティガ（みんな行くぞ！）

その時ウルトラ兄弟の体が金色に輝きだした。

ウエルザード伯爵「ば、馬鹿な・・・こんな事が・・・」

ディケイド「準備は万端らしいな。」

ドリーム「ウエルザード伯爵、覚悟しなさい！！」

ティガ（最後の戦いだ！！）

つづく

最終幕・第7話 切り札（後書き）

一時書けなくなった時は焦りました（汗）

では次回最終決戦

最終幕・第8話 最終決戦

ウエルザード伯爵は自分の前に立ちほだかる戦士たちの姿に戸惑っていた。

ドリーム「みんな・・・行くよ!!」

プリキュア「うん!!」

プリキュア達は必殺技の体勢に入った。

ブラック「漲る勇氣!!」

ホワイト「溢れる希望!!」

ルミナス「光り輝く絆と共に!!」

ブラック、ホワイト「エキストリーム!!」

ルミナス「ルミナリオオオオオ!!」

イーグレット「精霊の光よ!!」

薫「命の輝きよ!!」

満「希望へ導け!!」

ブルーム「全ての心!!」

「プリキュア！！スパイラルハート・スプラッシュユスタアアア！！」

ドリーム「希望の！！」

ルージュ、レモネード、ミント、アクア「赤い薔薇！！」

ローズ「奇跡の青い薔薇！！」

「伝説の力をひとつに！！プリキュア・ミルクイローズ・フローラルエクスプロージョン！！」

ピーチ、ベリー、パイン、パッション「思いよ届け！！プリキュア・ラビングトルーパー！！」

ブロッサム、マリン、サンシャイン、ムーンライト「花よ咲き誇れ！！プリキュア・ハートキャッチオーケストラアアア！！」

メロディ、リズム「駆け巡れ、トーンのリング！！プリキュア・ミュージッククロンド！！スーパーカルテット！！」

プリキュアの必殺技が一斉にウエルザード伯爵を襲う。

ウエルザード伯爵「馬鹿が！！・・・貴様らの力は無力だ！！」

ウエルザード伯爵はプリキュアの必殺技を片手で受け止める。

ウエルザード伯爵「ぐう！？」

しかしプリキュアの必殺技は予想以上に重たいものになっていた。

ディケイド「行くぞみんな!!」

仮面ライダー「とおおおおお!!」

仮面ライダー達はエネルギーを帯び全員飛び上がった。

仮面ライダー「オオオオルライダーアアキイイック!!」

オールライダーのキックがウエルザード伯爵を襲う。

ウエルザード伯爵「ぐおおお!!?」

ティガ(まだだ!!)

ウルトラ兄弟(はあ!!)

ウルトラ兄弟はそれぞれの光線を合体させスペリオルマイフラッシュを放つ。

ウエルザード伯爵「おお!!?おのれ・・・この程度で・・・消えるものかああ!!」

ウエルザード伯爵は全ての攻撃を弾き返した。

プリキュア「きゃああああ!!?」

仮面ライダー「ぐああああ!!?」

ウルトラ兄弟(うわああああ!!?)

ウエルザード伯爵「我は最強！！貴様らごときにやられはせん！！
貴様らは世界ごと滅ぶのだあ！！！」

ウエルザード伯爵は暗黒の光線を放つ。

ウルトラマン（みんな！！）

ウルトラ兄弟は両手をかざしバリアをはり光線を防ぐがバリアに亀裂がはしる。

ウエルザード伯爵「無駄だあ！！！」

セブン（みんな！なんとしても持ちこたえろ！！）

W「俺達もやるぞ！（マキシマムドライブ、行くよ！！）」

「サイクロン！！ヒート！！ルナ！！ジョーカー！！マキシマムドライブ！！！」

オーズ「うおお！！！」

オーズは地面からメダガブリューを取り出した。

「プ・ト・ティラ〜ノ・ヒツサ〜ツ！！！」

オーズ「セイヤアアアア！！！」

クウガ「はあ！！！」

クウガは手から炎を放つ。

アギト「はっ!!！」

龍騎「だああ!!！」

1号「とお!!！」

black「はあ!!！」

仮面ライダーはそれぞれの必殺技を駆使しウェルザード伯爵の技に
対抗する。

ブロッサム「みなさんばかりに頼ってではダメです!!！」

メロディ「私達も必殺技を!!！」

ムーンライト「待つて!! 私達はさっきので力を大幅に削ったわ、
また必殺技を放てば命に関わる。」

ルミナス「でもこうしてる間にも!!！」

ダイナ（ぐっ・・・このやろう!!！）

555「調子のんなよ・・・ぐっ!?!？」

ディケイド「くそ・・・仕方ねえ・・・一か八かだ!!！」

ディケイドはカードをバツクルに差し込んだ。

「ファイナルアタックライド！！ププププリズムフラワー！！」

プリキュアの背後になんとプリズムフラワーが現れた。

ブラック「プ、プリズムフラワー！？」

ブルーム「土さんこんな切り札まで！？」

プリズムフラワーの力によりプリキュアはさらに強化された。

ピーチ「これならできる！！」

ドリーム「みんな行くよ！！」

プリキュアは再び必殺技を放つ。

ウエルザード伯爵「ぐっ！？うおおお！？」

ウエルザード伯爵の光線は押し返されウエルザード伯爵は吹き飛ばされた。

ウエルザード伯爵「ばっ、馬鹿な・・・体も力も知能も貴様らより圧倒的に大きい我が何故？」

デイケイド「教えてやる、全てを超越したお前が何故俺達に勝てないのか。」

ウエルザード伯爵「？」

ディケイド「こいつらは・・・」

プリキュア「・・・」

ウルトラ兄弟

ディケイド「馬鹿だらだ。」

ディケイドの言葉に一同はずっこけた。

ドリーム「ば、馬鹿あ!?!」

ティガ(そ、それは・・・)

ディケイドは続ける。

ディケイド「馬鹿だから諦めるって言葉を知らないんだ、だから全てを破壊され絶望の中にのまれても希望を見つけ光にする事ができるんだよ。」

ドリーム「!!」

ティガ(土・・・)

ウエルザード伯爵「くだらん!!くだらなさすぎる!!ならば光が差し込まない程の闇を作り出すまでだ!!はああああああああああああああああ!!!!」

ウエルザード伯爵は巨大闇の球を作り出した。

メビウス（闇の球！？）

ウルトラマン（どんどん大きくなっていくぞ！）

オーズ「あれで世界を闇に包むのか！？」

1号「それだけは阻止せねばいかん！！」

ブラック「ドリーム！！私達プリキュアの力を全てあなたに集めるわ！！」

ドリーム「わ、私！？」

メロディー「デイケイドの力と一番合うのはあなたなのよ！！」

1号「デイケイド！！我々の力をお前に集める！！」

デイケイド「ああ、わかつてる！！」

ウルトラマン（みんな！！我々のウルトラ兄弟の力をダイゴに！！）

ティガ（お願いします！！）

プリキュア、仮面ライダー、ウルトラ兄弟はそれぞれドリーム、デイケイド、ティガに力を与えるために光の粒子となり3人の体内に入る。

ドリーム「みんなの力があれば！！」

ティガ（お前はもう！！）

ディケイド「終わりだ!!」

ウエルザード伯爵「黙れ!! 我は究極の力を持つウエルザード伯爵だ!! 負けるはずがない!!」

ウエルザード伯爵は闇の球を地上に落とす、ティガは手を掲げドリームとディケイドは高く飛び上がり手を掲げ球を受け止める。

ウエルザード伯爵「狂ったか!? 貴様らはすぐに闇にのまれ・・・何!?!」

ディケイド、ドリーム、ティガ「(はあああああ!!)」

ディケイド、ティガ、ドリームは闇の球にのみこまれる事なく受け止めていた。

ウエルザード伯爵「な、何故だ!? 何故たった3人に我の攻撃が防げる!?!」

ディケイド「3人じゃねえ!!」

ドリーム「私達にはみんながついているの!!」

ティガ(みんなの力!!)

ディケイド、ティガ、ドリーム「(受けてみる!!)」

そして闇の球は打ち消された。

ウエルザード伯爵「馬鹿なあ!？」

ドリーム「先生!!ダイゴさん!!みんな!!私に攻撃を放って!!
!わかるよね?」

ティガ(ああ!!)

デイケイド「どこまでもやってやる!!」

すると3人の体が金色に輝きだした。

ウエルザード伯爵「な、何だこの光は!？」

ティガ(はあ!!)

ティガは七色に輝くゼペリオン光線を放つ。

「ファイナルアタックライド!!デイデイデイケイド!!」

デイケイド「ヤアアア!!」

デイケイドはゼペリオン光線を身にまといディメンションキックを放つ。

ティガ(のぞみちゃん!!)

デイケイド「いけえええ!!」

ドリーム「うん!!」

ドリームはディケイドの蹴られその勢いで流星のように輝きウエルザード伯爵に突っ込む。

ドリーム「プリキュア&ヒーローズ!!」

ウエルザード伯爵「!?!」

ドリーム「ディメリアル・スタアアアアアア!!」

ドリームは金、マゼンタ、七色の光を散らしながらウエルザード伯爵に直撃した。

ウエルザード伯爵「ぐっ!?!」

ティガ（はあああああ!!）

ディケイド「ヤアアアアアアアアアア!!」

ティガはゼペリオン光線を止めず放ち続けウエルザード伯爵に直撃させ、ディケイドもディメンションキックを放ち続けウエルザード伯爵に直撃させる。

ウエルザード伯爵「なんだ!?!何だこの力は!?!」

ティガ（これが諦めないみんなの力だ!!）

ディケイド「この力は闇を照らす光となる!!」

ドリーム「私達の思い!!受けてみなさああああい!!」

本当の最終話 終結

3人から金色の光が消え力を与えた戦士たちも元に戻った、そして変身を解く。

猛「ついに・・・終わったな。」

巧「やっと終わったか・・・」

士「終わった・・・という事は・・・」

士はのぞみとダイゴを見る。

のぞみ「お別れ・・・だね。」

ダイゴ「うん。」

????「みんなあ!!」

むこうから妖精達が姿を見せる。

のぞみ「ココ!!」

えりか「あんた達どこ行ってたの?」

コフレ「ウエルザード伯爵に別空間に閉じ込められていたですう。」

タルト「あんさんがウエルザード伯爵を倒したようやけど別空間から抜け出せへんくてなあ。」

ハヤタ「ではどうやって？」

ナツ「全身が白くて頭がスペースシャトルのような戦士がここま
で送ってくれたナツ。」

映司「白くて頭が・・・スペースシャトル？」

アंक「なんだそりゃ？」

メップル「わからないけど9月を楽しみにしとけて言ってたメポ。」

アスカ「なんかワケわかんねえな。」

つぼみ「そうですね。」

士「そんな事どうでもいい・・・渡、時間は？」

渡「もうじき世界の修正作業が始まります。」

ダイゴ「そう・・・か。」

のぞみ「大丈夫！！また会えるよ！！こうやって再会出来たんだし
！！再会けていだよ。」

りん「前向きだねえ。」

ミライ「僕もまた再会できると思います。」

アスカ「お前も前向きだな。」

士「んじゃそういうわけだ、そろそろ帰る。」

一同の前に灰色のオーロラが現れる、3人はオーロラをくぐる前に言った。

のぞみ「じゃあね、みんな!!」

ダイゴ「また!!」

士「気長に待ってる。」

・・・

数日後

のぞみ「さあて今日も1日頑張るかな・・・ん？」

朝目覚めたのぞみのベッドの枕もとに一通の手紙があった。

のぞみ「なんだろ・・・!？」

手紙を開いた瞬間のぞみは不思議な空間に吸い込まれた、のぞみの新しい物語が始まるがそれはまた別の話・・・

完

本当の最終話 終結（後書き）

一作目を超える最終回がどうしても思いつかずこんな無理やりな展開にしてしまいました、申し訳ありません、では次回作ですが少し期間をおこうと思います。

特別編 後日談

のぞみ「こ、ここどこ!?!」

????「あれ!?!のぞみ!?!」

目の前には響がいた。

響「のぞみもへんな手紙のせいでこんなところ!?!」

のぞみ「うん……どこだろう……」

するといきなり目の前に光輝く天使が現れた。

天使「ちゃゝす、天使でゝす。」

響「かるっ!?!」

のぞみ「て、天使!?!天使が何のよう!?!」

天使「お二人さん……探偵やってください。」

のぞみ、響「へっ!?!」

天使「ここはいろんな世界に通じる空間です、ここに探偵事務所をおくので探偵してください。」

響「そんな事急に言われても!?!」

天使「ほら、チラシも配っちゃったし。」

のぞみ「はい!?!」

天使「ほら、護衛役。」

????「イライラするんだよお・・・」

のぞみ、響「いりません!!」

天使「んじゃよろしく!」

そう言つて天使は消えた。

のぞみ「急に探偵なんて言われても・・・」

響「せっかく感動に本編終わって一件落着だったのに・・・」

ひよんな事から探偵をやる事になった2人、それはまた次回作で。

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6306r/>

プリキュアオールスターズ×仮面ライダーディケイド×ウルトラ8兄弟second

2011年9月5日15時42分発行